パリ・モードから
アメリカン・ルックへ

From Paris Mode to American Look

アメリカ服飾社会史　近現代篇

濱田雅子





パリ・モードからアメリカン・ルックへ
アメリカ服飾社会史　近現代篇
濱田雅子著

パリ・モードから
アメリカン・ルックへ

アメリカ服飾社会史　近現代篇

濱田雅子

はじめに

本書は拙著『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009 年）の近現代篇である。とはいえ、本書を前著とは切り離して、単独の著作としてお読みいただくのは、読者の皆さんのご自由である。本書は二部構成であり、第一部では、19 世紀から 20 世紀中葉アメリカのドレス・リフォーム運動の実態とその衰退をテーマとしている。第二部では、「パリ・モード」から「アメリカン・ルック」への転換をテーマとしている。それぞれにおいて扱っている内容は、既刊の『アメリカ服飾社会史』とどのように関わりあっているのか。以下、本書の内容紹介を兼ねて、要点を述べる。

これはあくまでも筆者の試論であるが、アメリカ服飾史上のドレス・リフォーム運動には、2 つの大きな波がある。第一波は、1824 年から 1920 年に渡るドレス・リフォーム運動である。第二波は、1920 年から 1960 年の「パリ・モード」から「アメリカン・ルック」への転換期である。これらの波の特徴については、以下に概要を簡潔にまとめた。

このような幅広いドレス・リフォーム運動を扱った著作の誕生は、服飾研究者のみならず、アパレル産業の現場でファッションのお仕事に携わられている皆さん、大学・短大や専門学校でファッションを学ばれている学生の皆さんから、かねてから寄せられている要望である。類書がないため、このようなご要望にお応えできれば幸いである。

【第一部】

イギリスを初めとするヨーロッパの人々は、17 世紀にヨーロッパか

ら移住してきて、アメリカ大陸に植民地建設を行い始めて以来、ヨーロッパの貴族の服飾への強い憧憬の念をいだき続けてきた。フランス革命期のシュミーズ型ローブの登場は、ロココ調の拘束的な衣装様式に対する反目から生まれた、コルセットから解放された動きやすい衣装様式であった。アメリカでもこの自由で、動きやすいローブが取り入れられるのであるが、それも束の間、19 世紀前半に、再び拘束的な衣装が復活し、コルセットを装用したきつい紐締めによる拘束的な衣装は、女性の健康、生まれてくる乳児の健康を蝕んだ。

19 世紀のニューヨーク・ファッションは、基本的にはパリ・モードであった。ニューヨークでは、ヨーロッパから導入されたハイウエストのエンパイア・ドレスに始まり、ロマンチック衣装、クリノリン衣装、バッスル衣装といった拘束的な衣装が流行していた。

このようなパリ・モードの華やかなりし時代に、他方において、以上のような拘束的な衣装様式に抗して、1824 年から 1920 年にかけて、ニューヨークとその周辺においてドレス・リフォーム運動が興こされた。すなわち、インディアナ州のニュー・ハーモニー共同体、ニューヨーク州のオナイダ共同体、その他のユートピア共同体において、女性のドレス・リフォーム運動が興り、衰退していった。

今日では、女性がズボンを穿くのは、国際社会における当たり前の文化となっている。だが、このような文化が服飾の歴史において定着したのは、さほど昔のことではない。

さて、それでは女性はいつから、どこでズボンを穿きはじめたのか。19 世紀前半のアメリカに起きた「ブルーマー運動」と呼ばれるドレス・リフォーム運動は、よく知られている。ブルーマーは、我が国では、一時、女子生徒の体操服として普及した。19 世紀アメリカにおける女性のドレス・リフォーム研究を行っているアメリカの服飾研究者ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャー女史は、既存のブルーマーリズム

研究を再検討し、19 世紀アメリカにおける女性のドレス・リフォームを一期 1824~1851 年、二期 1851~1879 年、三期 1879~1920 年に区分して、新しい研究を行っている。

筆者は、前著では、二期の 1851 年のブルーマー・コスチューム誕生と挫折のみを扱った。本書では、フィッシャー女史の研究を踏まえて、第一期から第三期を対象に考察し、さらに価値高い第一次資料を発掘・解読し、新たな知見を加えた。本書は、前著には十分書ききれていない宗教、健康問題、女性の権利運動という視点から取り組んだストーリー性豊かな内容とした。

ドレス・リフォーム運動の第一波は、以下に述べる３つの時期に区分できる。

第一期 （1824~1851 年）はイギリス人の空想的社会主義者ロバート・オーウェン（Robert Owen, 1771~1858）が中心となり、インディアナ州のニュー・ハーモニーに、アメリカのユートピア共同体を結成し、平等主義のニュー・ハーモニー運動とドレス改革運動を興した時期である。

筆者は、ロバート・オーウェンが提案したショート・ドレスにズボンという、とても合理的で現代的なスタイルの貴重な挿絵を宝探しのごとくに探し当て、第 2 章に掲載し、わくわくしながら解説を加えた。挿絵に観るこのスタイルは、私達、現代女性のスタイルそのものであり、19 世紀初頭に、こんなにも先見の明がある人物が存命していたことには、驚きを禁じ得ない。だが、ニュー・ハーモニーの衣服は、コミュニティー解散後、すぐに改革衣服として存続できなくなる。本書では、その原因を探り当てる。

1830 年代から 1840 年代にはニューヨーク州北西部のオナイダにジョン・ハンフリー・ノイズ （John Humphrey Noyes, 1811~1886）を創

始者、指導者として新興宗教団体のオナイダ・コミュニティが結成され、ドレスの改革運動が興された。オナイダ共同体のジョン・ハンフリー・ノイズの衣服改革も我が国では、ほとんど知られていない。本書ではノイズ自身が書いた衣服改革思想に関する貴重な文書を紹介した。この文書に表されたノイズのジェンダー観は、現代の我々でも戸惑いを隠せないほど奇想天外である。ノイズは改革衣服として、子どもたちの衣服とパンタレッツを提案する。この衣服は一時的には受容される。だが、共同体の経済が安定し、人々の暮らしにゆとりが出てくると、審美的な衣装に憧れる女性たちは、改革衣服を着なくなる。本書では、改革衣服の誕生と普及のプロセス、晩年、ノイズがオナイダ共同体から追放され、共同体での衣服改革が、衰退に向かっていく様を描き出す。

第二期 （1851~1879 年）はドレスの改革運動が、一般大衆の注目を浴びるようになった時期である。1851 年に、ズボンをはいた女性たちとアメリア・ブルーマーの「ブルーマー・コスチューム」が登場するが､このブルーマー･コスチューム運動は挫折する｡「ブルーマー運動」は､我が国でも良く知られている｡この運動の誕生と衰退については､拙著『アメリカ服飾社会史』の第 3 章で扱った｡この運動は､その後､復活し、1879 年に消滅する。

本書第一部第 3 章では、前著『アメリカ服飾社会史』の第 3 章を加筆・修正した。この時期には、医師リディア・セイヤー・ハズブルック （Dr. Lydia Sayer Hasbrouck, 1827~1910）が編集した新聞『シビュラ』（*Sibyl*）に見るドレス・リフォーム運動が台頭する。この運動に参加した医師メアリー･エドワーズ･ウォーカー（Dr. Mary Edwards Walker, 1832~1919）は、おそらく 19 世紀アメリカの最も有名なドレス・リフォーム論者であろう。ドレス・リフォームの彼女の試練は、すべてのドレス・リフォーム論者の経験を表していると言われている。彼女は

アメリカ初の女性医師であり、南北戦争中の働きで勲章を授与され、医学生時代から結婚式とその後の生活の場でもパンツスタイルのリフォームドレスで過ごした。健康的な衣服の観点から女性の権利と関連して講演活動も行っている。本書の第4章で、メアリー・E・ウォーカー博士の思想と運動を扱う。本書のハイライトをなすであろう。ウォーカー博士については、アメリカでは、子ども向けの本も書かれている。本書では異性装をして逮捕に至ったウォーカー博士の衣服観や生き様、彼女の異性装に対する周りの人々の反応を浮き彫りにする。堅苦しい歴史書というよりむしろ、修辞的な読み物として、お楽しみいただきたい。

第三期（1879~1920 年）は、ドレス・リフォーム運動の衰退後に興った新たなドレス・リフォームの波、すなわち、新たに興ったサイクリングの衣装、オスカー・ワイルドの審美的なドレスのデザイン、フランシス・E・ラッセル、ミラーとジェンスの芸術的なドレスなどのドレス・デザインの様々な取り組みである。第三期については、本書では、紙幅の都合で、概要をまとめるにとどめた。

我が国ではブルーマー運動に関する研究は行われているが、その他の 19 世紀アメリカにおけるドレス･リフォーム運動に関する研究は皆無である。

筆者は、本書執筆に当たって、ドレス・リフォーム運動に携わったロバート・デール・オーウェンが、ザ・フリー・エンクワイラー（The Free Enquirer, August 5, 1829）に投稿した記事、水治療師のジェイムズ・C・ジャクソンが“American Womanhood”の第 5 章において、非生理的なドレスがいかに健康に良くないかについて書いた記事、リディア・セイヤー・ハズブルックの『シビュラ』の記事、およびメアリー・E・ウォーカーが“Hit”に書いた記事を紹介・分析した。これら

は第一次資料であり、4 人の人物の深遠な思想が綴られた価値高い歴史的資料である。筆者は服飾研究と歴史研究をドッキングさせて、長年、アメリカ服飾史研究に携わってきたが、モノであれ、文書であれ、第一次資料の歴史的価値を重視してきた。

上記の 4 人が残した文書には、とりわけヨーロッパからアメリカに導入されたファッショナブルで拘束的な衣装が、女性の健康に及ぼす生理的影響という視点から、また、医者の視点から、赤裸々に分析されている。ちなみに、拘束的な衣装が原因で、歩くことともままならない、病気の女性が、大勢、ジャクソン博士の温泉保養施設を訪れたという。ジェイムズ・C・ジャクソンは、5,000 人もの患者の治療に当たった経験に基づいて、"American Womanhood" を著している。

本書では、資料的価値の高いこれらの文書の紹介・分析を通じて、ドレス・リフォーム運動の本質に多少とも触れることができたところに、筆者のオリジナリティがあるものと確信する。ドレス・リフォーム運動は失敗したのではなく、衰退したのである。本書では、筆者として、この運動に対する忌憚のない評価を行う。

【第二部】

ポール・ポワレ（Paul Poiret, 1879~1944）、マドレーヌ・ヴィオネ（Madeleine Vionnet, 1876~1975）、ジャンヌ・パキャン（Jeanne Paquin, 1869~1936）、ココ・シャネル（Coco Chanel, 1883~1973）などのパリのデザイナーは、大変、知名度が高かった。現在でも、世界的に良く知られている。我が国でも、ファッションに疎い人でもココ・シャネルを知らない人は珍しいのではなかろうか。パリのデザイナーは、絶妙なデザインの優れたデザイナーとして称賛された。それに対して、アメリカのデザイナーは、皮肉なことに、パリのデザインをコピーするための技術的能力のために称賛されたのである。アメリカの女性デザイナーとして認知されるようになったのは、1930 年代から

1940年代である

前著『アメリカ服飾社会史』において、「パリ・モードからアメリカン・ルックへの転換がいかにしてはかられていったのか」（ドレス・リフォームの第二波）という問題を提起し、第８章において、アメリカン・ファッションの世界発信に目を向けた。だが、駆け足で考察しており、十分な答えを出せていない。

20世紀初頭にはドレス・リフォーム運動という言葉は使われなくなり、「アメリカ人女性のためのアメリカン・ファッション」への取り組みが推進されてゆく。そこで、本書の続編（近現代篇）の第二部では、ニューヨーク都市における商業およびファッションの発展を背景として、ドロシー・シェーバー（Dorothy Shaver, 1893~1959）の活躍ぶりを取り上げ、「パリ・モード」から「アメリカン・ルック」への転換をもたらした牽引力について、明確な答えを打ち出す。彼女は、我が国では馴染みがないが、実は1826年に設立された老舗の百貨店であるロード・アンド・テーラー（Lord＆Taylor）の副社長を1931年から1945年まで、社長を1945年から1959年まで務めた女性である。特に、1930年からアメリカ人女性デザイナーの認知の運動を推進し、「パリ・モード」から「アメリカン・ルック」への転換をはかるのに貢献した。

ドロシー・シェーバーに関する研究は、我が国では皆無である。アメリカにおける先行研究も大変、稀少である。筆者がドロシー・シェーバーに着眼した動機は、アメリカ服飾学会の学会誌“*Dress*”に掲載されたアメリカの服飾研究者ティファニー・ウェーバー・ハンシェット（Tiffany Webber-Hanchett）の論文[1]との出逢いである。ティファニー・ウェーバー・ハンシェットは、シェーバーの活躍について、この論文で、次のように述べている。

「マーチャンダイジング・ワールドのファースト・レディのドロシー・シェーバーは、ロード・アンド・テーラーの在職期間中（1924~1959）

に小売業の新しい基準を設定した。他の業界リーダーが同じことをする前に、特に、アメリカのデザイナーの店舗を宣伝していた。宣伝と販売促進、新しいマーチャンダイジング手法とアメリカ人デザイナーの認知に関するロード・アンド・テーラーにおける彼女の革新は、『シェーバー・タッチ』"The Shaver Touch"と総称されていた。シェーバーは、副社長（1931~1945）として、1930 年代初めにアメリカのデザイナー運動を開始し、1940 年代半ばに"The American Look"広告キャンペーンを開始した。彼女は、アメリカン・ファッションを促進するために、店舗のマーチャンダイジングとマーケティングのポリシーを拡張した。シェーバーは国内の才能に敬意を表する必要があることを知り、そうすることで、アメリカのファッション・デザイナーを業界の不毛から救うための道を切り開いた。」

拙著『アメリカ服飾社会史』第８章では、ごく簡単にドロシー・シェーバーに触れるにとどまったが、その後、サンドラ・リー・ブラウン（Sandra Lee Braun）の大変、実証的で造詣深い学位論文 [2] を入手し、熟読する機会を得た。そこで、本書において、これらのお二人のご研究に基づいて、ドロシー・シェーバーのマーチャンダイザーとしての活躍ぶりを、一般読者の皆様にもわかりやすく、興味深く紹介させていただく次第である。

本書を通じて、19 世紀から 20 世紀半ばにかけてのアメリカにおけるドレス・リフォームの二つの波を、いくらかでも身近かに感じ取っていただき、ファッションの研究、ファッションの現場で、21 世紀のファッションのあり方を追求して行かれる上で、役立てていただければ幸いである。

【注】

（１） Tiffany Webber-Hanchett, Dorothy Shaver: Promoter of "The

American Look", *Dress* Vol.30, 2003, pp.80~90.

（２） Sandra Lee Braun, *Forgotten First Lady: The Life, Rise, and Success of Dorothy Shaver, President of Lord & Taylor Department Store, and America's " First Lady of Retailing"*, UMI dissertation Publishing, 2009 （UMI Number: 3390537）

目次

第３章　ブルーマーリズムと衰退（第二期）

第４章　ドレス・リフォーム運動の復活から衰退へ（第二期）

第５章　新しいドレス・リフォームの波（第三期）と ドレス・リフォーム運動の意義

第二部　「パリ・モード」から「アメリカン・ルック」への転換

第１章　歴史的背景—1800年代から1950年代のニューヨーク・ファッション

第２章　アメリカン・ルックの推進者　ドローシー・シェーバーの生い立ちと活躍

第３章　「シェーバー・タッチ」とは

第一部

19 世紀から 20 世紀中葉アメリカのドレス・リフォーム運動の実態とその衰退



オナイダ共同体のコスチューム。典拠：Charles Nordhoff, *Communistic Societies of the United States Economic Social and Religious Utopias of the Nineteenth Century,* New York: Dover, 1966, 1875, p.283.

第1章

歴史的背景—ニューヨークのファッション

1　産業革命後のニューヨークにおける商業と文化の発展

19世紀のアメリカでは、知識、技術革新、機会が爆発的に到来した。産業革命はあらゆるレベルで人生を再構築し、新しい仕事、コミュニケーション、余暇、および、情報を育成した。女性世代の一般的な状況は劇的に変化していた。19世紀には、高等教育、一般の職業につく努力および専門職につく努力、身体活動における女性のための機会の拡大が始まった。しかし、女性の行動に対する重大な制限は依然として明白であった。

19世紀のニューヨーク市は、貿易・文化・ファッションの中心地であった。「19世紀半ばまでに、ニューヨークの店舗や初期のデパートは、実に目覚ましい発展を遂げていた。さまざまなスタイルが登場し、ファッションや贅沢を提供するヨーロッパの中心都市に引けを取らないと言われていた[1]。」「上昇傾向にある女性は、身分に応じた身なりをしていた。だが、その反面、生活面で、思いのままに自由に楽しんだ。アメリカの女性たちは外出を享受した。彼女たちは、街に出掛けて、ショッピングやランチを楽しんだ。また、講義に出席することも、博物館やギャラリーに出向くことも可能になったのである。彼女たちはアメリカ国内とヨーロッパ各地を旅して回った。女性の教養学校や

寄宿学校、神学校、さらには大学も創設され、教育の機会が増えた[2]。」
「19 世紀半ばまでに、女性は身体的により活動的になり、乗馬だけでなく、活発なウォーキング、水泳、美容、クロケットを楽しんでいた。また、家の外で、工場で、そして、オフィス、学校、自社の事業で働く女性、さらには医者、弁護士、閣僚などとして、社会の至る所で働いている女性も見られた[3]。」

ここには、中流階級の上・中層部の女性たちが、商業発展が劇的に進みつつあったニューヨークの街を賑わし、教養を身に付け、国内外の旅行を楽しみ、スポーツを享受し、また、中流階級の下層部の女性たちも含めて、仕事の世界で能力を発揮し始めた様子が、ありありと描かれている。

さて、彼女たちのファッションはどのようであったのか。当時、アメリカでは家庭裁縫、カスタムメイド、オーダーメイド、既製服生産、通信販売が並行して行われていた。いずれにせよ、19 世紀のニューヨーク・ファッションは、基本的にはパリ・モードであった。ニューヨークでは、ハイウエストのエンパイア・ドレスに始まり、ロマンチック衣装、クリノリン衣装、バッスル衣装といった拘束的な衣装が流行していた。だが、1880 年代にクリノリンやバッスルを用いた拘束的な衣装様式はウエスト（ブラウス）とスカートの二部式の実用的で、活動的な衣装様式に取って代わられるのである。また、スポーツが盛んになり、自転車に乗るためのデバイデッド・スカート、水着、テニスウェアーなどが開発された。

このようなパリ・モードの華やかなりし時代に、他方において、インディアナ州のニュー・ハーモニー共同体、ニューヨーク州のオナイダ共同体、その他のユートピア共同体において、女性のドレス・リフォーム運動が興り、衰退していったのである。その実態に目を向けるに当たって、ニューヨークを中心として、アメリカ全土で流行していた拘束的な衣装様式とは、どのような様式であったのか。その詳細に

立ち入ってみよう。

2　ファッションの発展

（1）古代調衣装とエンパイヤ・スタイル

アメリカのファッションの背景をなすフランスの状況[4]であるが、フランス革命はファッション史上にも新しい始まりを告げた。“Directories and Empire”と呼ばれる期間は、1790年から1815年頃まで続いた。ブルボン王朝（1589~1792）において権力の座を思いどうりに欧歌したフランス貴族たちは、1760年代からフランス革命前夜にかけて、華麗なロココ調衣装の中に、貴族社会の趣向を如実に表象していた。だが、上流のフランス女性の技巧的で流麗なワトー・プリーツが施されたローブは、フランス革命の期間、新旧衣装様式の対立の時期を経た末に、やがて古代調のシュミーズ型ローブへと取って代られた。自由・平等と自然復帰を標傍する革命派（ジャコバン派）の1793年憲法による勝利は、古代調衣装の勝利を決定づけたのである。ワトー・プリーツの施された細胴・太腰のローブと高く結い上げた髪型、ハイヒールに象徴されるロココ調の装いは、イギリスから導入された古代調衣装へと座を譲る。パリの婦人たちはイギリスのモードから実に裸に近い衣装様式を作り上げ、コルセットや腰枠が姿を消し、下着さえも不要とされ、脚全体が透けて見えるようなローブも現われたのである。



図1　デユポン婦人のシルク刺繍が施されたモスリンのドレス。

フランス革命はテルミドールの反動（1794年）により、政権が大ブルジョアジ

一の手に掌握されて終結をみる。その後、歴史の舞台は総裁政府時代（1795~99 年）から執政官政府時代（1799~1804 年）を経て、ナポレオン第一帝政時代（1804~14 年）へと移行し、古代調衣装を大胆にまとった新興ブルジョワジーの女性グループ「メルヴェイユーズ」のファッションが一世を風靡する。アメリカでのシュミーズ型ローブの流行について、ベティ・ブライト・P・ロー（Betty-Bright P. Low）は次のよう述べている [5]。

「透明なシュミーズを持つこれらの“近代のギリシア人達”はフランスだけに現れたわけではなかった。この無定型の様式は素早くアメリカ合衆国に伝播したのである（図 1）。この国では国家的同一に対する同時発生的な探求が進行中であった。ジョージ・C・ロジャーズ(George C. Rogers)は、最近の著作の中で次のように述べている。“1790 年代は、知性よりファッションが強調され、実質的なものより形が強く求められた。しかし、アメリカで見られたファッションと形はフランスのそれよりもずっと実質的なものであった [6]。”ところが一方、1800 年のパリの女性用ワードローブは、衣服を除き、靴と宝石で理想的には８オンスであった。アメリカ合衆国の最も国際的な東海岸においてすら、保守的な人々はフランスの模倣をした。」

「メルヴェイユーズ」のファッションのアメリカでの流行については、『アメリカ服飾社会史』第 4 章でフランス・ファッションのアメリカへの伝播のあり方という問題を通して、当時アメリカに住んでいたふたりのフランス人女性のアメリカ社会への融合、あるいはアメリカ社会における疎外という興味深い問題を考えてみた。

キャロライン・レンノルズ・ミルバンク（Caroline Rennolds Milbank）はこの時期のニューヨークの服飾について、次のように述べている [7]。

> 19 世紀は、胸のすぐ下に位置する著しくハイウエストラインのエンパイア・ドレスで始まった。ドレスはワンピースであ

> り、引き紐を締めて身体にぴったりフィットさせ、後ろ中心にギャザーが寄せられていた。1810 年頃には、襠を入れ、布地のパネルを一緒に縫い合わせて、身体に密着させられ始めた。ドレスは細かったが、アメリカやイギリスではフランスよりもゆとりをもって身に着けられていた。昼間は地面のちょうど上の丈であり、豪華な催しの場では、床に曳き裾を引いていた。

19 世紀初頭のアメリカで、エンパイア・ドレスやメルヴェイユーズのファッションがどの程度、流行したかは、階級や地域の違いがあったものと推察される。

キャスリーン・M・ トーレンス（Kathleen M. Torrens）は 19 世紀のアメリカ女性のファッションについて、服飾研究者の研究から引用しながら、以下のように、センセーショナルな特徴づけを行っている[8]。

> 19 世紀の女性のファッションは、衣装にあしらわれたフリルと凝った装飾りによって際立っていた。世紀の初めに、ドレスは古典的にインスパイアされ、エンパイヤ・スタイルのウエストと流れるスカートから成っていた。しかし、1825 年までに、砂時計の姿は目立つようになった。それにはいくつかのバリエーションがあり、世紀の残りの時間を支配していた [9]。

> フープスカートとクリノリンが 1850 年代頃に発明されるまで、当時のドレスに必要なペチコートと豊富な布地のために、女性の服装は 30 ポンド（13.6 キロ）または 40 ポンド（18 キロ）を超えた [10]。コルセットは、女性の衣装の本質的な特徴でもあり、「きつい紐締め」のために有害な影響をもたらした。

小さなウエストと一般的な身体の薄さは非常にスタイリッシュであると考えられていた。実際、「今世紀を通して、ファッショナブルなウエストの周長は、18 インチ（46 センチ）であった [11]。一部の女性のウエストは 13 インチ（33 センチ）まで縛られていた [12]。

実際、衣類は女性の健康と福利に重大な影響を与えた。C・E・ビーチャー（C. E. Beecher）は、「アメリカの女性は異常に病気にかかりやすい [13]」と指摘した。悲しいことに、顔が青白く、身体が華奢であることが、ファッションであり、女性に病気だと見せかけることを助長した。

キャスリーン・M・ トーレンスによる 19 世紀アメリカの女子服の特徴づけは、確かにセンセーショナルではあるが、服飾史の文献に良くみられる、ごく一般的な記述である。そこで、引き続き、以下において、10 年単位で部位毎に、具体的に表現された服飾研究者による描写を紹介する。

（2）ロマンチック衣装

1815 年から 1840 年頃は、通常、ファッションの「ロマンチックな」時代とみなされる。この時代のアメリカ・ファッションの特徴について、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャー（Gayle Veronica Fischer）は次のように述べている [14]。

1830 年代の女性衣装の特徴は、足首と足が見える程度に短いスカートを着用し、大きなベルト、明るい色で強調された細いウエストとバルーンスリーブが含まれていた。高い髪の毛の様式である「キリン」は、誇張された華やかな帽子で覆われて

> いたものと思われる。ウエストラインは「自然の」レベルに戻った 1836 年頃まで高い位置を維持していた。
>
> ロマン派時代のコルセットは以前のものとほとんど違いはなかったが、この時期にはきつい紐締めに関する噂が始まった。

ここでゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーが指摘している女性の衣服のきつい紐締めの問題は、空想的社会主義者のロバート・オーウェン（Robert Owen）の息子のロバート・デール・オーウェン（Robert Dale Owen, 1801~1877）や医者のジェイムズ・C・ジャクソン博士（James C. Jackson, 1811~1895）とメアリー・E・ウォーカー博士（Mary Edwards Walker, 1832~1919）が重大な健康問題として断罪した問題である。ここでは問題の重要性を指摘しておくに留め、第２章で取り上げることにする。

ウエストラインはいつ頃までに、自然なウエストラインに戻ったのか、説が分かれる。ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーによると 1836 年頃まで高い位置を維持していたとのことである(15)。それに対して、キャロライン・レンノルズ・ミルバンクによると 1818 年頃にウエストラインが落ち始め、1820 年代末までに、自然なウエストラインに戻った(16)という。階級差、地域差があったのではなかろうか。

引き続きゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーは、アメリカのファッションへの中東のファッションの影響について、以下のように述べている(17)。

> 19 世紀のファッショナブルなドレスにおける中東の要素の流行は、それが後の改革衣服に影響を与えた可能性があることを示唆している。外国的、あるいは珍しいモチーフである「エキゾチックなモチーフ」を西洋風に取り入れることは、おなじみのファッションとは違う「スリル」を加える方法であった。

ロングショール、特に「本物のインドのカシミア」ショールや模倣品は、1830 年代と 1840 年代にファッショナブルなガウンのアクセサリーの役割を果たした。中東から採用されたショールは西洋の女性の間で人気があることが判明した。実際のカシミヤショールの費用は、しばしば最も豊かなアメリカ人だけが購入する余裕があることを意味した。それ以前の世紀に、ドリー・マディソン（Dolly Madison）は女性のためのファッショナブルな帽子としてターバンを普及させた。「トルコの形」のターバンと、中東、近東、および極東のアパレルの他の記事に精通しており、最初は仮面衣装として、後にリフォームドレスとして「トルコのズボン」を導入する基礎を築いたのかもしれない。

ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーの指摘するとおり、第２章で論じるリフォームドレスの女性用ズボンのルーツは、果たして「トルコのズボン」であるのか、この点もここでは問題指摘に留めておく。

（3） クリノリン衣装

さて、その後の 1840 年代ファッションの特徴に進むとしよう。

ジョーン・セヴラ（Joan Severa, 1925~2014）は、1840 年代の女子服の特徴を次のように述べている。当時の女子服のシルエットや袖のデザインや下着（コルセット、コルセットの弊害、パンタレッツ、ペチコート）に関する詳細が描かれた実に貴重な記述である。少々、長くなるが、ドレス・リフォーム運動の背景を理解するために以下に引用する。

まず、女性の衣装のシルエット、極端に締め付ける衣装が身体に及ぼす影響について、実にリアルに描写されている[18]。

1840 年代の女性の流行は、着る者のしとやかさを映し出し

> ていただけではなく、当時人気があった、極端に身体全体を締めつけて自然な動きを抑制する傾向を反映していた。1840 年代の初頭、ファッションイラストには、かっちりとしてバストを押しつぶすようなきつい身頃と、ボリュームのあるペチコート（petticoat）を下に着用して膨らませた床丈のスカートが登場し始めた。このスタイルは、ひとつの基本的なシルエットへ向かって進んでいった。すなわち、首と肩からゆるやかに傾斜する丸みを帯びた三角形、厳格に締め上げた長い身頃と平らで上向きに広がるバスト、そして裾を引きずる、たっぷりとした釣鐘型のスカートというシルエットである。ウエスト位置や袖のスタイルには見てそれとわかるバリエーションがあるものの、普段の仕事着であろうと上等のドレスであろうと、女性の服のシルエットは 1840 年代を通じてどれもみなそっくりであった。

次に袖のスタイルについて、細くてぴったりとした袖の流行の様子が、ファッショ雑誌から引用して描かれている [19]。

> 手首に向かってギャザーが寄せられ、カフス（cuffs）が付けられ、肩にはギャザーがはいっていない細めのビショップ袖のスタイルは、1840 年代を通じて着用された。…「袖にはさまざまなバラエティがあります。非常によく見かけるのはぴったりした袖ですが、そうした袖には一般に、質素に見えすぎないようにある種の縁飾りが付いています」（『レディーズ・キャビネット（*The Ladies Cabinet*）』1844 年 12 月号）。

また、コルセットのスタイルと、その裁断のあり方、いかにして身体にフィットさせて、紐締めされていたかについて、次のように述べ

られている[20]。

> 1840 年代に流行した身頃のフィットは、極端なコルセットに全面的に依存していた。…この時代に採用された長いコルセットのスタイルの多くには、胴体の前側を腹部まで含めてしっかりと平らにし、胸部を肩の方へ向けて上外側へ持ち上げるという共通の傾向があった。すべてのコルセットは背中で締める方式だったので、手袋のようなフィットを得るために前と横をバイアスで裁断し、背中の部分は極端にきつく紐締めできるように、布目に対して真っ直ぐに裁断されていた。

引き続き、コルセットが下部胸郭をいかに減少させ、乳房を締め付けたか、それに対する医者の非難について書かれている[21]。

> 1840 年代にコルセットが原因で生じた下部胸郭の直径の減少幅は、体を動かす作業をする場合で 3~5 インチ（5~7.6 センチ）、フォーマルドレスの場合にはさらにそれより数インチ多い数字であった。それ以上に極端だったのは、乳房の締め付けである。特に、出産を念頭に置いた場合に、医師たちはこの習慣に対して強く非難の声を上げた。

引用が少々長くなるが、少女たちがシュミーズの下に穿いていたパンタレッツが、いつ頃からやめられ、ペチコートの重ね履きが、脚の露出を妨げていたか、次のように描かれている[22]。

> 少女たちは、シュミーズの下に長いパンタレッツをはいていた。14 歳頃に長いスカートをはくようになると（通常、女の子は 14 歳くらいで学校を卒業して働きに出た）、子ども時代に

はいていた足首までの長さのパンタレッツをやめる。…女の子がパンタレッツをやめると同時に長いスカートをはいたのは確かであるものの、それがいつかを文献からは明らかにするのは容易ではない。ただ、どうやら14歳から16歳くらいまでの間だったとみられ、おそらくその子が働きに出たかどうかや、どこで働いたかに左右された。女の子は、子どもの時からゆったりとしたペチコートをはくことには慣れていた。パンタレッツを卒業した少女たちは、丈の長いペチコートを何枚も重ねてはいて、決してスカートから脚が覗かないようにしなければならなかった。いったい何枚のペチコートを着用したのか、それによってどれくらいスカートが膨らんだのかは、1840 年代の中でも時期ごとにいくらか違っていたし、普段の生活では少なくとも2枚、正装時には最高6枚までといったふうに、場面によっても異なった。

1840 年代のファッションは 1850 年代に移行した。基本的なシルエットは変わらなかったが、1850 年代のガウンはより装飾的になった。引き続き、ジョーン・セヴラの記述に拠って、1850 年代の女性服（図2、3）の特徴を見ることにする。

まず、1850 年代の特有のシルエット（スカートの膨らみ）、下拵え、ウエストラインについて、次のように描かれている[23]。

それよりもファッショナブルなスタイルは、1850 年代には一目でわかる独特のシルエットを持っていた。スカートの膨らみは全体に均一で、スカートができるだけ膨らむように、しっかりとフープで支えられていた。ウエストラインはたいてい丸く（身頃前下端が尖っておらず、前下端が下がっている場合でも浅くて曲線になっている）、自然なウエストラインにかなり近



図2　クリノリン衣装を装い、散歩する女性たち。



図3　メアリー・ドーティ・フィッツジェラルドの肖像写真　1856~58年。

い位置にある。脇の下の縫い目は長い。

次に、袖の形の変化について、こう描かれている(24)。

袖は一般的に手首の部分が広がっていた。前腕のまん中あたりまでの長さで釣鐘状に開いた形の袖のスタイルは1850年よりも前に確立され、暖かい気候の時や改まった場面で着る服の袖として人気を保っていたが、日常着にはこの袖は使われなかった。

より手の込んだアプローチが流行するにつれて、袖の形のバリエーションも広がった。上腕部にスリーブキャップあるいはプリーツを配し、前腕部には白いアンダースリーブを引き立たせ

るためにパフやスラッシュや襞をつけたりし、さらにそうした飾り自体もだんだん凝ったものになっていった。

次に、ドレスがいかに装飾的に派手になったか、その様相が縁飾りやテキスタイルに着眼して、描写されている[25]。

> フリルやフラウンスやレースやフリンジによる縁飾りが、ほとんどのスタイルのドレスに付けられた。生地の色や織り方さえ、より派手になった。「昨年わが国の織物業者が、目立つ色の横縞だけでなく多様なサイズのチェック柄や格子縞（plaid）の生地を発売したのは、デザイン原理に対するまったき軽視をあらわすためです。（…）現在の流行の席捲は、流行が趣味の良さに勝利したことを示す、もうひとつの証拠です」(『ゴーディーズ』 1854 年 4 月号)。

さらに、クリノリンの流行について、アメリカ人女性の受け入れ方は、どうであったのか。こう書かれている[26]。

> 1850 年代に女性のドレスにもたらされた最大の革新は、「クリノリン（crinoline）」すなわちフープ〔張り輪〕スカ ートであった。

> パリの流行をほぼタイムラグなしに追っていたアメリカの女性たちは、間違いなく早い時期からクリノリンを着用していたはずだが、そうしたペチコートはあまりにも極端だとみなされたため、広く一般に受け入れられるまでには時間がかかった。

また、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーはクリノリンについて、

次のように述べている[27]。

> スカートは「床をきれいにし、実際に床に触れただけで」、女性の足はほとんど見えなくなった。しかし、クリノリンが揺れると、しばしば、フープが偶発的に揺れるのが垣間見えた。そのような場合には足だけが露出することはなく、脚や下着（着用した場合）も見えたかもしれない。ドレス・リフォーム論者は、女性が地面から腰を持ち上げて脚を露わにせざるをえなかった長いスカートの道徳的な違和感を指摘した。

ジョーン・セヴラによると、1860 年代半ばから、大幅にスカートのシルエットが変化してゆく[28]。

> 1860 年代に入ってもかなりのあいだ、ドレスのスカートは全体が膨らんだ形が一般的であり､膨らみを出すための方法としてはソフトプリーツが最もよく使われたが、1860 年代半ばになると､一番ファッショナブルとされるスカートの形が変わり､スカートの前側は平坦で幅が狭くなり､スカートの背側は新しい楕円形のフープに合わせて後方へ張り出すようになっていった。多くのドレスには短いトレーン〔引き裾〕が付き、歩く時に後方に余分な布を引きずるようになった。1864 年頃には襠の入ったスカートが登場した。…･前スカートにはなめらかさを損なうようなプリーツはまったく入れられず､サイドの襠には後側へ向かって幅の広いプリーツを取り､後ろのスカートは布をふんだんに使って深いボックスプリーツあるいはカートリッジプリーツ（cartridge pleats）で絞り、長いフープとペチコート（petticoat）の上にのせて垂らした。この新しい形は、少なくとも 1866 年には、キャラコの日常着にさえ取り

入れられた。

1860 年代には、スカートとブラウスを組み合わせて着る服装が登場する [29]。

> 1860 年代には、スカートとブラウスを組み合わせて着る服装が、ひとつの選択肢として成立した。新しい、膨らみの大きめな「ウエスト（waist）」と呼ばれたシャツブラウスが若い女性たちに人気を博し、無地やチェックのスカートと合わせてシンプルに着られた。

次に、1850 年代のコルセットと 1860 年代のコルセットを比較して、1860 年代のコルセットの快適さについて、述べている [30]。

> 1860 年代スタイルに合った形に胴体をこしらえるコルセットは、1850 年代末の流行の流れを汲んでおり、丈が短く、胸の部分は広く、胸郭は小さく、裾は大きく広がって、ウエストの下数インチまでだけを覆う形であった。上の方に襠が入っていて、1850 年代に比べてはるかに快適に着用者の胸を包むことができた。下半身は圧迫から解放された。ドレスは、よりしっかりと形を保つために、縫い目やダーツの部分だけでなくその中間にも張り骨が入れられ、前中心でホック留めされるようになったが、背中での紐締めもまだ調整のために使用されていた。

下着の着用順について、次のように述べている [31]。

> 下着の着用順序は、1850 年代と同じである。シュミーズの上

にコルセット、プレーンなペチコート（冬には、白いウールフランネルのペチコートも使われた）、何らかのクリノリンかフープの順に着て、最後にスカートをふんわりとさせるために上質のモスリンのペチコートを１枚か２枚重ねて、フープの針金を隠した。

1860 年代には、大人もパンタレッツを穿くように成ったという見逃せない記述が行なわれている [32]。

　パンタレッツ（pantalette）は 1850 年代末頃から、成人女性もはくようになっていたようである。これはおそらく、ある種の環境では大きなフープの信頼性がいまひとつだったからだろう。

次に、1860 年代の女性用ドレスの最大の特徴は、特有の楕円形のフープについて、具体的に描かれている [33]。

　1860 年代の女性用ドレスの最大の特徴は、特有の楕円形のフープである。このフープは通常、ケージ・クリノリン（cage crinoline）〔鳥かご状のクリノリン〕スタイルで作られ、前面には丸みをつけていない平らな被覆針金を使い、それらをテープで固定して、スカートの前面に平らなシルエットを作った。この形のフープはアメリカでは 1860 年代末まで存続し、年を追うごとにヒップの幅が狭くなっていった。

（4） バッスル衣装

1870 年代にはバッスルという腰当てが導入される。バッスルの導入に伴うシルエットの変化について、次のように描かれている [34]。

1870 年代のドレスの最大の特徴はバッスルの形で、スカートの外観において、単に後ろに突き出るだけにはとどまらない変化をもたらした。ドレスの後部を強調したため、スカートの両サイドは内側へ後方へといっそう引き寄せられ、必然的に前から見た時のシルエットが劇的に変化した。

引き続き、コルセットの材料の変化について、次のように述べられている[35]。

1870 年代には、コルセットの張り骨は鯨髭から次第にバッファローの角へ置き換えられ、後には籐や鋼鉄製の張り骨も使われた。1870 年代後半には、コルセットの素材は実際に使用される中で試練に耐えなければならなかった。コルセットをあまりにもきつく締めすぎてウエスト部分が頻繁にひび割れし、それに対処するために 1870 年代末に「壊れない」コルセットが開発された。

最後に、1870 年代に用いられたペチコートの色や素材、枚数について、言及されている[36]。

1870 年代初めのペチコートは、相変わらず何枚も重ねて使われ、ほとんどは 1860 年代後半と同様に白いコットン製で、裾にラッフルで飾りが施されていた（もっとも、1860 年代末にはドレスに合わせた色物やシルクのペチコートも人気があったが）。クリノリンは 1871 年には流行遅れとみなされていたが、軽んじられながらも 1870 年の最初の 2、3 年は、たくさん飾りのついたスカートを支えるために時折使われていた。1876

年になると、流行のスカートはとても横幅が狭くなったので、ペチコートは糊付けされず、一度に1枚だけ着用された。

3　まとめ

ここまで、1790年から1870年代のアメリカにおける女子服の特徴を服飾研究者のキャスリーン・M・トーレンス、キャロライン・レンノルズ・ミルバンク、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャー、およびジョーン・セヴラの叙述を引用しながら述べてきた。とりわけ、1840年代から1900年まで、10年間隔で、庶民服にまで照射したジョーン・セヴラの描写は圧巻である。ジョーン・セヴラの具体的で、実にリアルな服飾描写は、他に追随を許さない。

拙著『アメリカ植民地時代の服飾』（せせらぎ出版、1996年）においても述べたように、イギリスを初めとするヨーロッパの人々は、17世紀にヨーロッパから移住してきて、アメリカ大陸に植民地建設を行い始めて以来、祖国ヨーロッパの貴族の服飾への強い憧憬の念をいだき続けてきた。フランス革命期のシュミーズ型ローブの登場は、ロココ調の拘束的な衣装様式に対する反目から生まれたコルセットから解放された動きやすい衣装様式であった。アメリカでもこの自由で、動きやすいローブが取り入れられるが、それも束の間、再び拘束的な衣装が復活し、紐締めによる拘束的な衣装は女性の健康、生まれてくる乳児の健康を蝕んだのである。

そこで、以上のような拘束的な衣装様式に抗して、1824年から1920年にかけて、ニューヨークとその周辺においてドレス・リフォーム運動が興こされた。第2章から第5章において、その実態と衰退の要因

に迫っていく。

【注】

（１） Caroline Rennolds Milbank, *New York Fashion, The Evolution of American Style*, Harry N. Abrams, Inc., Publishers, New York, 1989, p.16.

（２） *Ibid.,* p.16.

（３） *Ibid.,* p.16.

（４） 濱田雅子『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009, p.120.

（５） Betty-Bright P. Low, Of Muslim and Merveilleuses: Excerpts from the Letters of Josephine du Pont and Margaret Manigault, *Winterthur Portfolio 9*, edited by Ian M.G. Quimby, 1974, p.30.

（６） George C. Rogers, Jr., *Charleston in the Age of the Pinkneys*, Norman:University of Oklahoma Press, 1969. p.109. （cited from Betty-Bright P. Low, *ibid*., p.30.

（７） Caroline Rennolds Milbank, *op. cit.,* p.35.

（８） Kathleen M. Torrens, All Dressed Up with No Place to Go: Rhetorical Dimensions of the Nineteenth Century Dress Reform Movement, *Women's Studies in Communication, 20:2,* 1997, pp.191-193.

（９） *Ibid.,* p.191.

（10） Jeanette C. Lauer, Robert H. Lauer, *and Fashion Power: The Meaning of Fashion in American Society*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, Inc., 1981, cited from Kathleen M. Torrens, *ibid*., p.192.（引用ページ未記載）。

（11） L. W. Banner, *American Beauty*, and Chicago: University of Chicago Press, 1983, p.48, cited from Kathleen M. Torrens, *ibid*., p.192.

（12） Jeanette C. Lauer, Robert H. Lauer, *op. cit*., cited from Kathleen M.

Torrens, *ibid*., p.192（引用ページ未記載）

（13） C. E. Beecher, *Treatise on Domestic Economy for the Use of Young Ladies at Home, and School*, New York: Harper & Brothers, 1848, p.41, cited from Kathleen M. Torrens, *ibid*., pp.192-193.

（14） Gayle Veronica Fischer, *Who Wears the Pants, Dress Reform, and Power in the Mid-Nineteenth-Century United States*, UMI, 1995, p.30.

（15） *Ibid.,* p.30.

（16） Caroline Rennolds Milbank, *op. cit.*, p.35.

（17） Gayle Veronica Fischer, *op.,cit.*, pp.30-34.

（18） Joan Severa, *Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashions, 1840-1900,* Kent State University Press, 1995, p.7.

（19） *Ibid.,* p.7.

（20） *Ibid.,* p.15.

（21） *Ibid.,* p.16.

（22） *Ibid.,* p.17.

（23） *Ibid.,* p.95.

（24） *Ibid.,* p.95.

（25） *Ibid.,* p.95.

（26） *Ibid.,* p.99.

（27） Gayle Veronica Fischer, *op. cit.,* p.41.

（28） Joan Severa., *op.cit.,* p.194.

（29） *Ibid.,* p.197.

（30） *Ibid.,* p.200.

（31） *Ibid.,* p.200.

（32） *Ibid.,* p.200.

（33） *Ibid.,* p.201.

（34） *Ibid.,* p.305.

（35）　*Ibid.*, p.309.

（36）　*Ibid.*, p.310.

図の所蔵先・典拠

図１　Betty-Bright P. Low, *op.cit.*, p.35.

図２　*Godey's Lady's Book*, May, 1850, Philadelphia, Pennsylvania, Accessible Archives , 5 Great Valley Parkway, Suite 216, Malvern, PA 19355, 866-296-1488.

図３　The Oshkosh Public Museum 提供。Joan Severa, *op.cit.*, p.155.

第２章

前奏曲
ユートピア思想とパンツをはいた女性たち

1　ズボンの発生

西洋服飾史上におけるズボンの歴史—ユーラシア大陸の騎馬民族の男のズボン—について、西洋服飾史および南蛮服飾研究の権威者であられた故丹野郁博士はこう述べられている[1]。

「ズボンは元来、砂漠地帯に住む民族に共通な衣服形態であったと考えられる。北はモンゴル高原から南はエジプトに至る間の、ユーラシア大陸を斜に横断する砂漠地帯と、その周辺を含む地域に住む民族が用いた衣服であった。ここは、際限なく広がる砂漠と原野の地で、厳しい自然環境に対応するため、また、動物に跨って移動する必然から、ズボンの発想があったに違いない。…南欧にズボンが導入されて、男子の衣服



図１　ブルーマー・スタイルのブルーマー婦人ほか。

として一般化したのは、中世紀になってからのことで、封建社会にあって乗馬の必要から男性が積極的に取り入れたのである。」

今日では、女性がズボンを穿くのは、国際社会における当たり前の文化となっている。だが、このような文化が服飾の歴史において定着したのは、さほど昔のことではない。

さて、それでは女性はいつから、どこでズボンを穿きはじめたのであろうか。19 世紀前半のアメリカに起きた「ブルーマー運動」（**図１**）と呼ばれるドレス・リフォーム運動は、よく知られている。

このドレス・リフォーム運動は、なぜ、「ブルーマー運動」や「ブルーマーリズム」と呼ばれたのであろうか。アメリカの服飾研究者、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーは、次のような見解を述べ、この運動について、新しい研究を行っている。

> 19 世紀の唯一のドレス・リフォームのエピソードとして、アメリカの女性にズボンを導入した「ブルーマー・コスチューム」は、アメリカで最も広く知られているドレス・リフォームである（ただし唯一ではない）。「ブルーマー・コスチューム」と「ブルーマー運動」の評判は、最近まで、歴史家が概して 19 世紀半ばの唯一のドレス・リフォーム運動であると結論づけ続けるほどにまで、他のドレス・リフォーム活動をすべて覆い隠したのである。 その結果、より大きな運動としてのドレス・リフォームは見過ごされ、その重要性は詳細に論議されないままであった [2]。

この問題は、1850 年代初めにニューヨークのセネカフォールズにおけるアメリア・ブルーマー（Amelia Jenks Bloomer,1818~1894）、エリザベス・キャディー・スタントン（Elizabeth Cady Stanton,

1815~1902）、およびエリザベス・スミス・ミラー（Elizabeth Smith Miller, 1822~1911）のドレス・リフォームの実験に関する報道に端を発している。ニューヨーク・トリビューン、ボストン・カーペット・バッグ、シカゴ・トリビューンを含むいくつかの新聞は、これらの女性の出現を報告し、冗談で彼女たちの衣装の名前を提案したのである。ブルーマー氏自身は「カミリア」という名前を提案したのであるが、プレスは「ブルーマー」を支持して、「カミリア」を拒否したのである。1851 年以前には、衣服を記述するための「ブルーマー」という言葉は存在しなかったのである[3]。

> ブルーマーは衣服を発明しなかったし、最初に着用したり唱えたりもしなかったが、彼女の名前は衣装の代名詞となったので、多くの人が彼女を創作者とみなしたのである[4]。

2　ドレス・リフォーム運動の時期区分

19 世紀アメリカにおける女性のドレス・リフォーム研究を行っているゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーは、既存のブルーマーリズム研究を再検討し、19 世紀アメリカにおける女性のドレス・リフォームを一期 1824~1851 年、二期 1851~1879 年、三期 1879~1920 年に区分して、新しい研究を行っている[5]。

一期（1824~1851 年）はイギリス人の空想的社会主義者ロバート・オーウェン（Robert Owen, 1771~1858）が中心となり、インディアナ州のニュー・ハーモニーに、アメリカのユートピア共同体を結成し、平等主義のニュー・ハーモニー運動とドレス改革運動を興した時期である。また、1830 年代から 1840 年代にはニューヨーク州北西部のオナイダにジョン・ハンフリー・ノイズ（John Humphrey Noyes, 1811~1886）

を創始者、指導者として新興宗教団体のオナイダ・コミュニティが結成され、ドレスの改革運動が興された。

二期（1851~1879 年）はドレスの改革運動が、一般大衆の注目を浴びるようになった時期である。1851 年に、ズボンをはいた女性たちとアメリア・ブルーマーの「ブルーマー・コスチューム」が登場するが、このブルーマー・コスチューム運動は挫折する。そして、その後、この運動は復活し、1879 年に消滅する。この時期には、医師リディア・セイヤー・ハズブルック（Dr. Lydia Sayer Hasbrouck, 1827~1910）が編集した新聞『シビュラ』に見るドレス・リフォーム運動が台頭する。

医師メアリー・E・ウォーカー（Dr. Mary Edwards Walker, 1832~1919 年）は、おそらく 19 世紀アメリカの最も有名なドレス・リフォーム論者であろう。ドレス・リフォームの彼女の試練は、すべてのドレス・リフォーム論者の経験を表していると言われている。彼女はアメリカ初の女性医師であり、南北戦争中の働きで勲章を授与され、医学生時代から結婚式とその後の生活の場でもパンツスタイルのリフォームドレスで過ごした。健康的な衣服の観点から女性の権利と関連して講演活動も行っている。彼女のドレス・リフォーム思想については、第 4 章で詳しく扱いたいと思う。三期（1879~1920 年）は、一期、二期のドレス・リフォーム運動の衰退後、新たに登場したドレス・リフォームの取り組みを扱っている。

我が国ではブルーマー運動に関する研究は行われているが、その他の 19 世紀アメリカにおけるドレス・リフォームに関する研究は皆無である。

3　ニュー・ハーモニー共同体での ドレス・リフォーム

第一期のドレス・リフォーム運動の特徴は、第一に、ニュー・ハー

モニーの閉鎖されたコミュニティ（図2）から始まったこと、第二に、この時期に行われたドレス・リフォームは、男性が女性のドレス・リフォームに挑んだことである。さて、ニュー・ハーモニーのコミュニティとは、どのような社会なのか[6]。イギリス人の空想的社会主義者、ロバート・オーウェン（Robert Owen, 1771~1858）（図3）は、1825年からアメリカのインディアナ州に自給自足を原則とした私有財産のない共同生活村（ニュー・ハーモニー村）を多額の資産を投入して創設した。



図2　ニューハーモニー・コミュニティハウス No. 2

ロバート・オーウェンのアメリカでの活躍について語るに当たって、ロバート・オーウェンの生い立ち、イギリスでの活動について、簡潔に述べておこう[7]。

ロバート・オーウェンは北ウェールズの手工業者の家に生まれ、商店に店員として奉公しながら各地を転々とした。産業革命が進行していたマンチェスターで紡績工場の経営に加わり、さまざまな技術改良を加えながら生産量を増やし、富を得た。

しかし若いころから労働者の状態には心を痛めていたので、資本家と労働者が共同経営する理想的な工場をつくろうと考え、1800年にスコットランドのニュー・ラナークに紡績工場をつくり、そこでも経営に成功して綿業王とも言われた。

紡績会社の経営に成功する一方、労働者の貧困という現実を見て、その救



図3　ロバート・オーウェン

済を目指した。はじめは資本家の努力による社会改良が可能と考え、自らもニュー・ラナークの紡績工場で法律と教育によって労働者の環境を改善できるという考えでいたが、1813 年頃から社会主義的改革に転じ、労働運動や協同組合運動を指導するようになった。

1819 年には紡績工場法（木綿工場法）の制定に尽力し、9 歳以下の労働の禁止と 16 歳以下の少年工の労働時間を 12 時間に制限するという規定を実現させた。ナポレオン戦争で繊維業界が不況の時にも 1 人も解雇せず機械の整備にあたらせた。従業員の教育が重要であるとして、性格形成学院を設立した。福利厚生では疾病共済基金制度を設立し、健康保険制度の基を試みた。ニュー・ハーモニーのメンバーは、地域社会の財政的健全性のために協力して、世俗的な救済が達成できると信じていた。だが、この共同体は 2 年後に解散を余儀なくされたのである。ニュー・ハーモニー村は、1827 年に内部分裂と経済的な行き詰まりから失敗してしまった[8]。



図４　左　女子服　　右　男子服
ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーによるイラスト

ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーによると、オーウェンが築いたユートピア社会は、私的ドレス・リフォーム実験[9]の最も一般的な場所となり、オーウェンはニュー・ハーモニーで女性用パンツとドレスのコンビネーション（図４）を初めて発表したという。

オーウェンは、贅沢な服装を批判して、平等主義社会へのコミッ

トメントを表明した。他の男性指導者も彼の例に従ったとのことである。少数の例外を除いて、共同社会とプライベート・スパとリゾートでは、女性は男性の励ましによってドレスのスタイルを変えたのである。しかし、女性は通常、公衆の中で彼らの“珍しい”服を身に着けないことを好み、コミューンやスパや家内の私的な世界に改革ドレスの使用を制限したとのことである。ヨーロッパからの訪問者であるカール・ベルンハール（Karl Bernhard）は、ニュー・ハーモニーの男性のためにオーウェンが選んだ「特定の衣装」について語った。この衣装には、「襟なしで、軽い素材で作られた男の子のジャケットの上から着用された幅広のパンタルーン」が含まれていた。「おそらく、ベルンハールは、男の子の独特のスタイルをスケルトンスーツに描き、このスーツは、少年が達成した特別な地位を反映していたのであろう[10]」とゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーは述べている。女性と男性の両方の服装は、子どものドレスに似ていたが、男性と女性は、同じ服装を着用することはなく、男性服の変化は、女性服の変更ほど劇的ではなかった。男性はパンツやジャケットの基本的な衣装を身に着けた。すでに着ていたズボン、シャツ、ジャケットに似ており、 彼らの指南書には、まったく新しいタイプのドレスの採用は含まれていなかったという。

なぜ男性は女性の衣服を改革することに関心を持ち、なぜこの特定のスタイルのショート・ドレスとズボンを選んだのであろうか?ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーによると、イギリスのミド・ウエストの改革衣服がニュー・ハーモニー共同体の女性用パンツとドレスのコンビネーションのモデルになっているという[11]。また、上田千秋によると「オウエンはニュー・ラナーク時代の先例にならって、共同体の内部では独特の衣服の着用を奨励した[12]」と述べている。



地図１　ニュー・ハーモニー

そこで、筆者はニュー・ラナーク時代の先例なる衣服について調べてみたところ、ユネスコ世界文化遺産委員会の 2001 年第 25 区セッションのレポートに、次のような図（**図 5**）が掲載され、解説されている。

これはロバート・オーウェンが 1814 年に、ニュー・ラナークに開設した学校のダンスの授業風景である。

「新学院と学校は急速に完成し、表現力豊かな芸術、踊り、歌と朗唱を重視したカリキュラムを提供しました。それらはまた、講義室やダイニングルーム、宗教施設などの共同体としての機能も果たしていました。彼らは、子どもから大人までの生徒が助手の先生によって教えられ、新しい機関は、オーウェンの環境と共産主義者のアイデアの一番早期の、具体的な表現であったように思われます[13]。」

『オウエン自叙伝』には、幼児教育のあり方とこの教室の様子が次にように描かれている。



図5　ニュー・ラナークのロバート・オーウェンが設立した学校のダンスの授業風景。

小児を書物でいじめるな。身のまわりにころがっている物の使い方や本性・性質を教えるものだ、小児の好奇心が刺激され、それらについて質問するようになった時に、うちとけた言葉で。

天気の悪い日の遊戯室は16フィートに20フィート、高さ16フィートあった

幼児教育の教室は同じ大きさで、いろいろな主に動物の絵や地図を備えつけ、庭や畑や森からの自然物がよくおいてあった。—それらの検査や説明はいつも彼らの好奇心を刺激し、小児といまや若き友を教えてみて自分も新知識をえつつあったその先生たちとの間に、生き生きとした会話を創造した、私がいつも彼らに、生徒をそういうものと考え、そう取扱えと教えたので(14)。

> その視察のみがこの地に生じた諸結果にふさわしい何らかの印象を与えうると知って、私は全設備を惜し気もなく公開して来訪者全部の精査に供した。私は世間に向かって言ったものだ―「来て、見て、ご自分で判断して下さい。」と。そして、世間の人は来た、―何百、ではない、年々何千人もの人が。学校で児童の早期の各課業に一度に七十人ぐらいの外来者を私は見た。この時期にはダンス・音楽・軍事教練・地理の課業が「ごく信心ぶかい」クリスチャンをのぞくすべての人の心を特にひいた。そのクリスチャンでさえも、こういう若ものたち―それも普通の紡績工場の子どもたち―の天真な悦ばしい幸福には、驚嘆讃美の声をあげるのを禁じえなかった (15)。

上記は、直接、当時の服装に関する記述ではないが、ロバート・オーウェンの教育思想の根幹をなす考えが窺える。教室の様子は図５と見事に対応している。

次に、この図における服装を分析してみよう。

少女たちは古代ローマのダルマティカ風のチュニックを着て、ダンスをしている。ズボンは穿いていない。窓際のベンチに腰掛けている女性たちは、エンパイヤ・スタイルのドレスを着ている。左手の端に男性と並んで立っている女性も、流行のエンパイア・ドレスの衣装を纏っている。オーウェンが『自叙伝』で回想している外来者の婦人たちであろうか。

ロバート・オーウェンが著した『ラナークへの報告』には、衣服に関する見解が、次のように述べられている。

「ところで、ローマ人とスコットランド高地人は、それを着用すれば実用的効果があるという理由から国民服を採用し、それでいて、これをめいめいによく似合ったもの、さらに装飾的なものにしていく工夫を無視しなかったたった二つの国民であると思われます。かれらは

国民服の形を、はじめは容姿に力強さと男性的な美しさをあたえるように、その後それをかざるようもくろみました。ところが、現代見られる各種各様の着物は、肉体の力を減退させ、人間の容姿をひとのあわれみと同情をさそうものにしてしまうのがおちであります。ですから、こんな着物をつくるために時間、費用、思考、労力をつかうのは、社会の全階級の低い知的水準を示すたしかな証拠であります。こういう粗野な人間能力の悪用がどんなになされようと、有益で合理的な仕事をするのに、何の役にも立ちません。反対に、それはすべての肉体と精神の力を大いに弱め、あらゆる点で社会にきわめて有害であります[16]。」

「いまの場合、私は新しい村の住民の男の子には、ローマやスコットランド高地人の服装に似たものを着させるように勧告いたします。それは、男の子の手足をきゅうくつな締めつけから自由にしてやり、身体のあらゆる部分の上に風通しをよくし、かれらが強健で、活動的で、四肢が十分発達し、健康になるように鍛えてやるためであります。

また、女子にもよく吟味した着物を着させて、上に述べたと同様な大利益を得させるべきであります[17]。」

「私が考えている制度のもとでは、これらの村の住人は、それと同数の現代中流生活者が被服のために必要とする労働とわずらわしさと経費との百関の一より少ないもので、一般にみとめられた着物の機能からみてずっと具合のよいものをきることができるでしょう。それでいて新しい着物の形と材料は、ふるいもののどれに比べても、ずっと優秀であることが認められるでしょう[18]。」

ここには、流行の衣装が身体に及ぼす悪影響とスコットランド高地人とローマの衣装がゆるやかで健康に良いということが述べられている。ズボンについては言及されていない。だが、女性にはそれ相当の健康に良い衣装を着るようにと述べ、衣服を特定はしていないが、婉

曲的にオーウェンが勧める衣装に言及している。ハイランドの衣装はタータンチェックの巻きスカートであり、ローマの衣装はチュニック形式で、衣服の原型をなすゆるやかで、機能的な衣服である。

前述のように、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーは、アメリカに渡ったロバート・オーウェンは、ニュー・ハーモニー共同体で女性用パンツとドレスのコンビネーションを初めて発表したと断定している。そして、**図４**の挿絵を学位論文に掲載している。その根拠として、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーはオーウェン自身の言葉では具体的に書いておらず、「オーウェンは、ロバート・ジェニング（Robert Jennings）が説教のなかで述べたニュー・ハーモニー・ガゼット紙（1825年 10 月 15 日）に見られる簡易な衣服のことを指している[19]」と書いている。筆者はこの新聞記事をネット上で探したが、議会図書館にマイクロフィルムが所蔵されていることが判明した。事実確認は今後の課題である。

ここで明記しておきたいのは、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーが書いている女性用ズボンの形態である。「足首のところで紐で縛られ、膝丈で、とてもたっぷりしていて、スリット状になったアンダートラウザー。時には足首を覆っている[20]」と表現されている。言わば、たっぷりとしたレギンスを想起させる表現である。ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーの論文や著作では「ニュー・ハーモニーにおけるドレス・リフォームの実験で用いられた女性用パンツとドレスのコンビネーション」に対する根拠づけは、実証性を欠いているように思われる。

そこで筆者は、ロバート・オーウェンがニュー・ハーモニー共同体で女性用パンツとドレスのコンビネーションを提案したことの裏付け資料を探し求めてきたが、Donald E. Pitzer 編集の“New Harmony Then & Now”の中に、次のような記述を発見した。

“New Harmony adopted a liberating costume for women. Loose-fitting,

ankle-length pantaloons under a knee-length or longer skirt gave increased freedom of movement."

（ニュー・ハーモニーは女性を解放する衣装を採用しました。膝の長さや長めのスカートの下にゆったりとフィットする足首丈のパンタルーンをはき、この衣服は動きの自由度を高めました[21]。）

そして、この記述の注に、Elliot, *Partnership for Posterity* の p.455 と p.584 のスケッチを見よ[22]と記されている。

そこで、本書を入手し、わくわくして、これらのページを開いてみた。以下に、これらのページに掲載された二枚のイラストを紹介しよう。



図 6　ニューハーモニー共同体で、コミュニティ・ドレスを着た先生が算数を教えているイラスト。

図 6 の作者はシャルル・アレクサンドル・ルゼール（Charles-Alexandre Lesueur）である。キャプションには、コミュニティ・ドレスを着た先生が算数を教えている、と記されている。

このイラストには、カフス付きの長袖のショート・ドレスにパンタルーンを穿いて立っている女性の先生が、指示棒を持って、算数を教えており、男の生徒（ひげをたくわえた大人も見られる）が 3 人、長椅子に座って、授業を受けている光景が描かれている。先生の向こう側にも生徒の姿が描かれている。鍔広の帽子を被っている女性の姿も見られる。先生のショート・ドレスにはサッシュが巻かれている。パンタルーンの足首にはカフスが付けられ、絞られている。足は素足のように見える。ヘアーはショートカットである。ボードにはフランス語で、

“Grosse bête, vous n’entendez pas.”（おばかさん。あなたがたは、私の話を聞いていませんね）と書かれている。この絵の作品番号と所蔵先は“No.46240 Muséum d’Histoire Naturelle, Le Havre”と記載されている。ル・アーヴル（Le Havre）はフランス北西部のノルマンディーの大西洋に臨む港湾都市である。余談だが、筆者も南フランスのお城巡りをする途上で、訪れたことがある。

この女性の先生は、フランス人なのであろうか。この衣装は、後述するフランシス・ライト（Frances Wright, 1795~1852）を描いた絵（**図9**）にも、非常に類似したものが見られる。果てしなく、興味を誘われる衣装である。



図７　ニューハーモニー・コミュニティー・コスチューム（1829）。

また、**図７**には、ニュー・ハーモニー・コミュニティ・コスチューム（1829）というキャプションが付けられ、ショート・ドレスにズボンを穿いた二人の女性が描かれている。左の女性は半袖で浅いＵ字型の襟ぐりのショート・ドレスにベルトを締め、筒型の柔らかいズボンを穿いている。手には細長い紙のようなものを広げて、スカートの下部に両手で持って垂らしている。髪は短く結って、ベレー帽を被っている。右の女性は、パフスリーブで、舟形にカットした衿ぐりのショート・ドレスにベルトを締め、やはり筒型の柔らかいズボンを穿いている。髪は短く結い上げている。2 人とも小さな先が尖ったフラットな靴を穿いている。

これらのイラストはアメリカのドレス・リフォーム運動の原点をなしていると言えるのではなかろうか。その意味で、非常に貴重なイラストである。誠に残念ながら、本書には、この衣服に関するロバート・オーウェンの解説は見られない。

また、**図 8** は、やはりシャルル・アレクサンドル・ルゼール作のイラストで、ニュー・ハーモニー共同体の建物の前で佇んでいる二人の女性たちである。右の女性はショート・ドレスにズボンを穿いている。左の女性はロングのドレスを着ている。ドレスの丈が長いため、ズボンを穿いているかどうかは、定かではない。この光景は、当時のニュー・ハーモニー共同体の生活感を漂わせている。いかにも今日の女性たちが好む楽な服装そのものである。第 1 章に掲載した**図 2** の 1850 年代のクリノリン衣装に装った婦人たちのコルセットで締め付けられた非常に細いウエストとは、好対照をなしている。

では、当時、ニュー・ハーモナイト共同体で提唱された衣服を着用していた女性には、どのような人がいたのであろうか。代表的な女性はフランシス・ライト（Francis Wright, 1795~1852）である。そこで、ここで、しばし、フランシス・ライトに目を向けよう。彼女は女性の権利運動、奴隷制廃止運動に携わった重要な歴史的人物である。フェミニズムやジェンダー研究、奴隷制廃止運動研究の対象として、大変、興味深い人物であるが、本書では紙幅の都合で、以下に簡潔に紹介することとする [23]。



図 8　ニューハーモニー共同体の建物の前で佇んでいる二人の女性たち。

フランシス・ライトは、1795 年

9 月 6 日、スコットランドのダンディーでカミーラ・カンプベル（Camilla Campbell）と裕福な麻の製造業者で政治家であるジェイムズ・ライト（James Wright）のもとに生まれた。彼らの子どもは 3 人であった。両親は若くして死亡し、ファニー（彼女は子ども時代にこう呼ばれた）は 3 歳で孤児になった。フランシス・ライトは講師、作家、フェミニスト、奴隷制廃止論者、社会改革者であり、1825 年にアメリカ市民になった。その年、テネシー州でナショバ・コミューン（Nashoba Commune）〔黒人たちの教育と地位向上をめざした運動〕をユートピアのコミュニティとして創設したが、3 年しか続かなかった。

彼女の『社会観とアメリカのマナー』（1821 年）は、新国家の批判として彼女に最も注目を集めた。叔母はフランシスと彼女の妹カミラの二人の子どもたちのための保護者として行動した。ライトは、スコットランドの学校のメンバーで、プログレッシブ哲学者のジェームス・ミルンを含む親戚の家で育った。ファニーが慣習的なアイデアに疑問を抱くように促したミルンは、彼女の成長に永続的な影響を与えることになる。16 歳でファニーはスコットランドに戻り、勉強と執筆の冬とスコットランドのハイランドを訪れる夏を過ごした。

彼女は大学の図書館で自分自身に教育をつけ、18 歳で彼女の最初の本を書いた。アメリカではロバート・オーウェンやオーウェンの息子のロバート・デール・オーウェン、トマス・ジェファソン、ジャクソン大統領と親交を深めた。

とりわけ、奴隷制廃止のためにハイチに奴隷を移住させた試みは有名である。

ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーはフランシス・ライトの服装について、次のように述べている。

「ニュー・ハーモニーの著名なメンバーであるフランシス・ライトは、平等のための衣装がどのように見えるかについて自分の考えを持っていたようである。ライトは、女性のための自分のドレスコードを開発

した。これには、胴着、足首の長さのパンタルーン、膝上の丈に裁断されたドレスが含まれていた。ライトは『ギリシャの像に装われた巻衣を思い起こさせる襞をとった白いモスリンの衣服を彼女の身体に吊り下げた。』（図 9）改革服姿のライトを描いたたった一枚の絵画は、他のハーモナイトの女性が着用するニュー・ハーモニーの衣装の記述とは無関係であり、彼女の衣装のユニークさを示唆している[24]。」

このスタイルは後にアメリア・ブルーマー、スーザン・アンソニー、エリザベス・キャディ・スタントンなどのフェミニストによって推進されたとのことである。



図 9　フランシス・ライトのリフォーム・ドレス姿。1825 年 **10 月。**

さて、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーは「改革服姿のライトを描いたたった一枚の絵画は、他のハーモナイトの女性が着用するニュー・ハーモニーの衣装の記述とは無関係であり、彼女の衣装のユニークさを示唆している。」と断定しているが、果たして、本当にそうであったのであろうか。

前掲の**図 6** に描かれた女性の先生の衣装は、**図 9** に描かれたライトの衣装と全く同じデザインである。

Donald E. Pitze "New Harmony Then & Now" に、**図 9** が掲載され、キャプションに "Francis Wright, wearing a version of the official liberating costume adopted for women in New Harmony's Community of Equality in 1826." とある。つまり、「1826 年にニュー・ハーモニーの平等コミュニティにおいて、女性に採用された公式の解放衣装のバージョンを着用しているフランシス・ライト」と記されている。

さらに、**図 10** はフランシス・ライトの肖像であり、キャプションに「はじめてパンツをはいた女性」とある。これらの図版のキャプションを根拠として、フランシス・ライトはニュー・ハーモニー共同体の女性の衣服改革の原案を立案し、ロバート・オーウェンが共同体の方針として提起したという考えも成り立つのではなかろうか。



図 10　はじめてパンツをはいた女性

ライトが考えた衣装の元はショート・ドレスにパンタルーンという子ども服（**写真１**）だったのではなかろうか。ちなみに、**写真 1** は国際児童年の 1979 年に、パリ服飾博物館で行われた 1750 年から 1950 年の時期の子ども服の展示の写真である。左は薄い白絹地の 1827 年頃の女児用ドレス、右は絹地で 1840 年頃の女児用ドレスである。展示の解説には「少女たちは母親たちと同じような服装と髪型をしていたが、大人の服よりもずっと短く、リネン製のズボンが少し見えており、ズボンは筒型であったり、ギャザーを寄せて足首にフィットするようになったりしていた[(25)]」とある。



写真 1　子ども服の展示。

ところで、ロバート・オーウェンの息子のロバート・デール・オーウェン（Robert Dale Owen, 1801~1877）は、彼とフランシス・ライトが編集した新聞、フリー・エンクワイラー（The Free Enquirer）紙（August 5, 1829, p.321）において、アメリカの拘束的な衣装様式、とくに、きつい紐締めが女性の身体や乳児に及ぼす影響に焦点を当て

て、実に厳格で、明確な見解を表明している。この新聞の元は、ニュー・ハーモニー・ガゼット（New Harmony Gazette）紙である。

この記事自体は父親のオーウェンがハーモナイト共同体を解散してから息子のロバート・デール・オーウェンが書いたものだが、当時のファッショナブルな衣装が、女性の健康、乳幼児の健康に及ぼす影響について、生理学者が発した警告が示された重要な資料であるため、ここに紹介する(26)。

> 「友人はラッガー医科大学の解剖生理学教授であり、いくつかの学問と学術社会のメンバーであるゴッドマン博士によって出版された作品を、私たちにフィラデルフィアから送ってきました。」

> 「この作品には、さまざまな機会に講演された、重要なテーマのいくつかの呼びかけが含まれています。私は現在、私たちの読者の注意を喚起したいと思っています。なぜなら、それは私たちの国全体で行われている非常に一般的な虐待を扱い、（すべての啓発された生理学者が同意するように）非常に悪性であることを扱うからです。私はこの国の半数の市民の間で、つまり、女性の間で、きつい紐締めが流行していることを指します。」

> 「これは私の意見ですが、きつい紐締めは、常に悪質な、時には "犯罪行為"です。世界は、その秘密の実践が何であれ、健康に有害であり、しばしば健康を破壊するような行き過ぎた行為を非難します。」

> 「きつい紐締めは常に悪質な行為、時には犯罪行為であると

私は言いました。それはいつも、（ブランデーを飲んだり、麻薬を噛んだり、または他の似たような服用品を用いて）体を傷つけ、その採用に惑わされた人々の健康を奪うので、常に悪質なことです。健康を傷つけるものは何でも悪事です。女性は時々それを実施して子孫を病気にするので、時には犯罪行為です。仲間に無償の傷害を与えるものは何でも犯罪です。これは非常に厳しいように聞こえるかもしれません。しかしそれはまぎれもない真実です。そして、私たちは瞬時の幸せのために生存しているのではありません。それゆえ、真実を拒否してはなりません。女性たちは、子孫に対して大きな愛情を告白し、一般的には子孫を楽しませます。彼らは病気を見守るために眠れない夜を過ごし、彼らが与えられた無力な小さな生き物の健康を保つために、不安の生活を送っていきます。」

「私は、彼らの健康は、自分自身を尊重する個々の問題ではなく、他の存在にも関係するものであると彼らに伝えます。私はファッションのモロクの祭壇[(27)]で彼らの健康を犠牲にする権利がないと彼らに伝えます。彼らは他人を喜ばせるほどの苦しみを自分自身にもたらすことは自由ですが、このような行為や他の不道徳な行為のいずれかによって、予めわかりながら、子どもたちに苦しみをもたらす権利はありません」

以上、ロバート・デール・オーウェンの書いた上記の記事には、きつい紐締めが女性の健康問題のみならず、乳児に及ぼす悪影響が、厳然と指摘されている。先に紹介した「ラナークへの報告」に見られる記述から明らかなように、彼の父ロバート・オーウェンの提案したドレス・リフォームの根底には、当然、流行のきつい紐締めに対する痛烈な批判があったものと思われる。ロバート・オーウェンが本国イギリスにおいて、幼児教育に心血を注いだ人物であることを忘れてはな

らないであろう。

ところで、オーウェンは、ハーモナイトの女性の間でファッションへの関心を一掃することに、全面的に成功はしなかった。その原因は、果たしてどこにあったのであろうか。ゲイル・ヴェロニカ・フィシャーはこの問題について、次のような分析を行っている。

> ニュー・ハーモニーの衣装は、「コミュニティの解散後すぐにファッションとして」続けられなくなったのである。また、ニュー・ハーモニー・ドレスの改革は、1827年以降、主流の社会で二股の服を着た女性の伝統を始めることもなかったのである。衣装がより大きなドレス・リフォーム運動を刺激しなかった理由の一つは、この衣装がニュー・ハーモニー村の境界内でしか着用されなかったという限定された使用のあり方に関連している可能性がある[29]。

また、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーは、次のような分析も行っている。

> ほとんどの共同体主義者は、たとえ閉じた社会の範囲内であっても、女性にズボンを着用することを認めても快適ではなかったことであろう。なぜなら、衣装は女性と男性のドレスについて受け入れられるアイデアからあまりにも根本的に逸脱したからである。さらに、宗教的であろうとなかろうと、共同体社会では、聖書の明示的なメッセージは、男女差別的衣服を維持するように、女性と男性に明確に警告した。
>
> 「女は男の衣装を身に着けてはならない。また男は女の着物を着てはならない。すべてこのようなことをする者を、あなた

の神、主は忌みきらわれる[30]。」（申命記）

そのような聖書の戒めに服従することを免除された人はほとんどいない。男性はおよそ 1400 年以来、500 年後のズボンは「自然な」排他的な男性服のように見えたので、何らかの形のズボンを穿いていた。したがって、聖書の言葉の一般的な解釈は、男性がズボンを着用し、女性がスカートを着用したことを意味した[31]。

ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーの論文のこの下りを読んで、筆者も大いに納得した次第である。なぜなら、筆者は申命記に記された男女の着るものについての戒めを、次のように解釈したからである。

旧約聖書の創世記 1 章には、神が人を造られた経緯が記されているが、神が人を造られた時、男と女とに造られた。それは男と女は違うように造られたという意味である。人間としては同等であり、同質だが、それぞれ与えられた役割に違いがあるということである。人は神のかたちに造られ、神の栄光を現すために造られたが、人がひとりでいるのは良くないと、神はアダムの助け手としてエバを造られたのである。そのようにして二人が互いに助け合って神の栄光を現すためである。それ故に、男と女は同等、同質だが、根本的な違いがあるのであって、その違いを認めつつも、それを混同してはならないということであろう。

聖書の申命記におけるこの戒めは、女性服へのズボンの導入の厚い障壁であった。この戒めの故に、女性がズボンを履くことに対する抵抗は、男性にとっても、女性にとっても、想像を絶するほど強かったであろう。この抵抗は、果たして、どのようにして弱まっていくのであろうか。それを解き明かすのが、本書の課題である。

4　オナイダ共同体でのドレス・リフォーム

ニュー・ハーモニー共同体が 1827 年に崩壊後、1848 年に、ニューヨーク西部において、衣服改革に取り組まれた。それはオナイダ共同体において興された衣服改革である。本節では、この改革の実態とその衰退を検証する。我が国では、倉塚平による精力的なオナイダ共同体に関する研究 [32] で、簡単に論じられてはいるが、この共同体における衣服改革に関する専門的な先行研究は皆無である。

オナイダ共同体の創設者は、ジョン・ハンフリー・ノイズである。そこで、以下において、ジョン・ハンフリー・ノイズの生い立ち、ジョン・ハンフリー・ノイズの宗教思想、オナイダ共同体における生産と生活のあり方、オナイダ共同体における衣服改革と労働の関係、オナイダ共同体における衣服改革がそれ以降の衣服改革に、どのような影響を及ぼしたのかという順に繙いていこう。

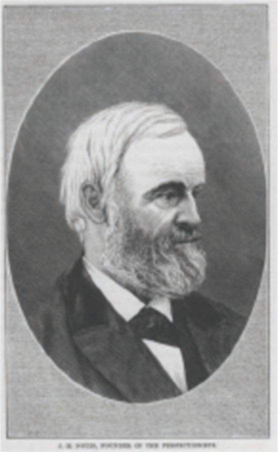


図 11　ジョン・ハンフリー・ノイズ。1865 年頃。

（1）　生い立ち [33]

オナイダ共同体の創始者ジョン・ハンフリー・ノイズ（図 11）は、1811 年にヴァーモント州ブラットルバラで生まれた。彼はダートマスカレッジを卒業し、法律の研究を始めたが、まもなく神学に転向した。アンドーヴァーで最初に学び、外国人

宣教師になるために、後にニューヘヴンのエール神学校に入学することを志した。ニューヘヴンでは、彼は熱心な復興説教者の影響を受け、そこに住んでいる間、完璧主義の名をとった新しい経験と新しい救いの道に入った。完璧主義の思想については、次項において述べる。

1834 年、彼は、父の家族が住んでいたヴァーモント州のプットニーに戻ってきた。父親は銀行家であった。そこで彼は説教して印刷物を作った。1838 年に議会議員の孫娘ハリエット・ホルトンと結婚し、完璧主義の教説に改宗した。

彼はゆっくりと国のさまざまな地域から集まった少数の信者を集め、様々な出版物から新しい信念を学んだが、1847 年には彼の会衆に約 40 人しかいなかった。

だが、ノイズに対応して他の州で「完璧主義者」の小さな集まりがあり、彼をリーダーにしようとする傾向があった。もともとノイズは共産主義者ではなかったが、彼の思考がその方向に変わったとき、彼は共同生活のために追従者を育成し始めた。1845 年に、彼は性別の関係に関する彼の独特の見解を彼らに知らせ、 1846 年にプットニーの社会は慎重に共同生活の実験を始めることになる。1848 年の春、彼らはニューヨークのマディソン郡のオナイダで信仰と実践を行っている人たちに加わるのである。

さて、オナイダとはどのような土地であろうか。オナイダ共同体設立当時の状況に遡ってみよう。チャールズ・ノールドホフ著『アメリカの共産主義社会：個人的訪問と観察から』（Charles Nordhoff, *Communistic Societies of the United States Economic Social and Religious Utopias of the Nineteenth Century,* New York: Dover, 1966, 1875）は、エコノミスト、ゾアリート、シェーカー、アマナ、オナイダ、ベテル、オーロラ、イカン教徒および他の既存の社会の詳細な報告を行っている。本報告は、彼らの宗教的信条、社会的実践、数、産業、および現状に関する、直接、現地を訪れて記された価値高い観察記録であり、臨場

感がある。本報告によると「オナイダ共同体の農場や領地は、オナイダの古い居留地の一部を形成している。この土地は平原で、自然に恵まれた良い土地であり、水も豊かである。この地は共産主義者たちによって勤勉に開拓され、ニューヨークセントラル鉄道のオナイダから4マイル離れており、ミッドランド鉄道はこの地を通過している[34]。」オナイダとウォーリングフォードの共産主義はアメリカ起源であり、会員はほぼ完全にアメリカ人である[35]」という。

ここで、松村赳、富田虎男編著『英米史辞典』(研究社、2000 年)に拠って、オナイダインディアンについて、解説しておこう[36]。

オナイダ族は、イロコイ五族連合(Iroquois)の一つである。ニューヨーク州北西部のモホーク族(Mohawk)とオノンガダ族(Onondaga)の領土の間の南北に長い地域に、オナイダ・クリーク(Oneida Creek)に沿って居住していた。17 世紀に、まず、オランダ人、次にフランス人、つづいてイングランド人と接触し、毛皮とヨーロッパ製品の交易を行い、他のイロコイ族とともに毛皮交易の競争相手のヒューロン族(Hurons)やアルゴンキン族(Algonquian)系のインディアンと戦った。アメリカ独立革命時にはアメリカ側についたが、戦争のきずあとは深く、内部に亀裂が残った。19 世紀前半オナイダ族は 3 分裂し、一部はウィスコンシン州グリーン・ベイ(Green Bay)付近の保留地に移住し、他の一部はカナダのオンタリオ州ロンドン(London)の近くのテムズ(Thames)川流域の保留地に移り、数百人はニューヨークに残留してオノンダガ保留地とオナイダの近辺に現在も住んでいる。

以下、チャールズ・ノールドホフ(Charles Nordhoff, 1887~1947)に拠って、オナイダ共同体建設の様子を紹介しよう。

「ここで彼らは、40 エーカーの土地に、塗装されていない骨組みの住居、放棄されたインディアンの小屋、古いインディアンの製材所が立っている土地で、新たにコミュニティー生活を始めたのである。彼らはこの財産のために 2 千ドルを借りた。土地は耕作されずに放置さ

れ、人々はとても貧しく、しばらくの間、彼らは彼らの主要な睡眠室であった屋根裏部屋の床の上で寝なければならなかった。

オナイダでの集まりは、ノイズの信奉者がコミューンに自分自身を確立しようとするいくつかの試みの信号だったようである。1849 年に、ニューヨークのブルックリンに小さな社会が形成され、後にすべての社会のための印刷が委ねられた [37]。」

「ノイズの初期の信者は、主にニューイングランドの農民であり、その大部分が何らかの生活手段をもっていたが、そう多くはなかった。ノイズ自身と他の何人かのメンバーがそれぞれ数千ドル寄付していた。



地図１　オナイダ

コミュニティ実験の初めから記録されていた残存する『財産登録簿』は、1857 年 1 月の初めまで、関連するすべてのコミューンのメンバーがかなりの金額（ 7776 ドル）を持ってきたことを証明している [38]。」

ここで、1850 年にコネチカットのウォリングフォードで別のコミュニティが始まったことを付記しておかねばなるまい。

引き続き、チャールズ・ノールドホフの報告を引用する。

「2 つの社会のメンバーは、ほとんどがアメリカ人であったが、いく人かのイギリス人とカナダ人がいた。弁護士、聖職者、商人、医師、

教師がいて、その大部分はニューイングランドの農民と機械工であった。元の会衆主義者と長老大聖堂派、メソジスト派、バプテスト派がいたが、カトリック教徒はいなかった[39]。」という。

（2）　ジョン・ハンフリー・ノイズの宗教思想[40]

上述のように、オナイダ共同体は、1830 年代と 1840 年代にニューヨーク西部を席巻した宗教的熱意の中で発展した。ノイズは空想的社会主義者のロバート・オーウェンとチャールズ・フーリエの教えを学び、宗教のない社会主義は不可能であると確信した。オナイダは、聖書共産主義と完璧主義に関する神学に基づき、人々が「キリストの完全な信者」になる可能性を信じている。完璧主義は、人間が罪から解放され、救いに必要な完全な聖なるものを人生にもたらすことができると断言した。完璧主義は原罪の結果を拒否した。宗教的イデオロギーと世俗的政治理論がオナイダのユニークなライフスタイルに影響を与えた。また、オナイダ共同体は、一夫一婦制の拒否、産児制限、優生学的育児を唱えた実験的ユートピア社会の一つである。

（3）　オナイダ共同体における衣服改革の実態

①　オナイダ共同体における生産と生活のあり方

チャールズ・ノールドホフの報告書には、オナイダ共同体での生産のあり方について、以下のように報告されている。要約・紹介する[41]。

オナイダ共同体設立の初期の段階では、いかなるビジネスで利益を上げるか、その方法を勇気を出して模索しながら、忍耐強く取り組まれていた。そのために、印刷事務所でフリーペーパーの配布が持続された。

最初は農業と園芸に着手し、次いで、これらを交易と結びつけた。まず、近隣の農家のための鋸挽きの木材の確保、鍛冶屋の設立、罠の発明が行われた。小さな果物を育て、素朴な家具を作り、農作物を栽

培したり、牛を売ったり、ハドソン川にスループ型帆船を持っていたりした。ノイズ自身は鍛冶屋、農民、その他多くの雇用者として働いていた。こうして困難に直面した彼らは、1857年1月までに4万ドルの資金を費やしたが、その間に貴重な経験を積んでいた。彼らはオナイダとウォリングフォードに全員を集中させ、機械を設置した。1857年1月、67万ドル強の利益が上がっていることを確認し、次の10年間で、2つの社会の純利益は1億8千580万ドルに達した。

この間、罠製作、トラベルバッグや小物、モップホルダー、その他の小さな物品の製作を行い、ガラスやスズ製品に保存された果物を置いた。ウォリングフォードで1851年にマッチ箱を作り始め、ブルックリンで旅行バッグの製造が始まり、後にオナイダに移った。1855年にオナイダで罠製造が始まり、1858年に果実を保存し、1866年には絹の製造が確立された。

次に、共同体での生活について、同報告書には、以下のように報告されている。要約・紹介する[42]。

自宅から1マイル以上離れた場所には、罠製作所、シルク製作所、鍛冶場、機械工場などからなるコミュニティの工場がある。これらは労働力を節約する機械を十分に備えており、罠を生産するのに十分な広さで、1年で20万ドル以上のシルク・ツイストの価値がある。これらのワークショップの近くには、30人または40人の共産主義者が住んでいる住居があり、彼らは特に商店で雇用されている。

彼らは21の常任委員会を持っている。娯楽、特許権、 テナントハウスの場所。 仲裁、家賃、お風呂、散歩道、道路、芝生など。火災、加熱、サニタリー、教育、衣類、不動産およびテナントハウス、水の仕事とその供給、ペインティング、森林、水と蒸気のパワー、 写真、散髪、アーケード、そして最後には、彼らが入浴、釣り、狩り、そして田舎に行くために訪れるオナイダ湖の孤立した場所がある。

これらの他に、48の部門の間で行政の任務を分けている。出版物、シルク製作、ハードウェア、果物の保存、紙箱、印刷、染色、大工、ビジネスオフィス、靴屋、図書館、写真、教育、科学と芸術、ランドリー、家具、法、生存率、ウォリングフォードでの印刷、農業、園芸、医療、付随する委員会—歯科、不動産、ミュージカル、娯楽、採石場、ハウスキーピング、 修理、旅行、時計、スズショップ、ポッター、ライト、服飾、衣類、文房具、花、水の作品、子ども、風景、森林、加熱、寝具、石炭。



写真3　オナイダ共同体の若い女性。ショート・ドレスにパンタルーン、短髪。

非常に多くの委員会を任命することによって、各部門に責任を負う者がいる場合もあれば、何かが必要なときや何か不具合が見つかると、その責任は特定の人に向けられる場合もある。男性と同様に女性も委員会に参加している。

彼らは朝5時から7時半の間に起きる。これは、それぞれが関わっている事業にある程度依存する。子どもたちは好きなだけ眠る。朝食は8時から9時、夕食は3時から4時である。 彼らは8時半から10時半に就寝する。これらの時間から見て取れるように、メンバーは現在、さほど過酷な労働に携わっているわけではない。彼らは常に勤勉である。ほとんどの人が何らかの部署を監督しており、彼らは皆が陽気に働いているので、必要な労働が遂行されている（**写真2、3**）。

以上から、オナイダ共同体とウォリングフォード共同体における生産と生活の様相が窺い知れるであろう。これらの共同体では、女性も委員会のメンバーであり、労働に携わり、地位も高かったとのことで

ある。ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーによると[43]、女性は料理、洗濯、印刷事務所の仕事、衣服生産および管理、男性の仕事とみなされた多種の産業に携わっていたという。

②　オナイダ共同体における衣服改革と労働の関係

本項目は本節のハイライトを成している。幸いオナイダ共同体における衣服改革に関する第一次資料を入手することができた。そこで、まず、本資料が掲載された文献に言及しよう。文献名は Oneida Community Journal, Vol.25, No.2, September 2011, Oneida, NY である。本誌は The Oneida Community Mansion House により出版されている。記事のタイトルは「オナイダ・コミュニティーのショート・ドレスとパンタルーンの起源」（Origin of Oneida Community's Short Dress & "Pantaloons"）である。本稿はジョン・ハンフリー・ノイズの生誕（1811年９月３日）200年を迎えて掲載されたものである。記事の冒頭には以下のように書かれている。

「私達は、ノイズの革新的思想の多くの例の一つ、すなわち、オナイダ・コミュニティの女性の衣装の一つを強調することによって、生誕 200 年を表明しています。プットニーの解体直後とオナイダ協会（Oneida Association）開始直前に、ノイズは、次のような道を開いて、来るべきユートピアの女性の居場所についてのアイデアを説明した。これは 1848 年２月に「オナイダ・クリークの南岸」に書かれ、後に 1849 年のオナイダ協会の第１回年次報告書と聖書共産主義に 1853 年に掲載された『聖書議論』の結論（命題 24）から抜粋されている 。

メアリー・クラギン、ハリエット・ノイズ、ハリエット・スキナーが、それから約４ヶ月後に、女性の衣装を提案した。それがどのように起こったのかは、ノイズのテキストに続く 1856 年の思い出に記載されている。完璧主義者は、ここで文書化されているように、オナイダの短いドレスは後のブルーマーの衣装に影響を与えたのではないかと

の疑問をいだいていた[44]。」

以上に続いて、ジョン・ハンフリー・ノイズの衣服改革思想に関するテキストが紹介されている。貴重な歴史的資料であるため、以下に翻訳・紹介する[45]。

ファッションを自然に従わせる

ジョン・ハンフリー・ノイズ

この生き生きとした社会では、労働が魅力的になる。労働における愛情尊重、特に両性が混ざり合って働くことが労働を魅力的なものにする。現在の男女間の分業は完全に分かれている。女性は家を守り、男性は野外で働く。男性と女性は暗闇の中で就寝時のみ交わる。これに代わって、この生き生きとした社会では、男性と女性は仕事の独特の部署の両方で混ざり合う。昼でも夜でも室内でも戸外でも彼らを一緒にすることは、経済的にも精神的にも有益なことである。男性と女性の解剖学的構造の違いは、彼らの労働の違いを示している。男性は



写真２　ジョン・ハンフリー・ノイズとオナイダ共同体員

胴部の上部、つまり腕の中で最大の筋肉発達が見られ、したがって手の労働に最も適している。女性は、脚に次いで、胴体の下部に最大の筋肉発達を有しており、したがって、運動を必要とする労働に最も適している。女の子は同じ年齢の男の子を上回る。奇跡的なダンサーは常に女性である。女性を家に閉じ込める現在の取り決めはどれほど酷いものであることか？彼らは本質的に、男性よりも優れており、戸外の労働やスポーツにも適応している。走ったり、飛び跳ねたりするのである。しかし、彼らは幼少のころからこの種のすべてのものから除外されて生きている。彼らは黙っているだけでなく、束縛されている。ガウンは拘束的であり、それらは脚の中で最も才能を持っているその性を拘束している！（中略）

現在の女性のドレスは、セックスに特別に不適切であることに加えて、みだらである。自然よりもはるかに顕著で目立つ男性と女性という性を区別している。自然の状態では、男性と女性の違いは500ヤードの距離ではほとんど区別できなかった。男性と女性が服を着るにつれて、彼らの性別は、彼らが見ることができる限り、衣服からわかるようになる。女性のドレスは立っている嘘である。彼女は二足歩行動物ではなく、キャスターに立っている攪乳器のようなものだと言っているようなものである。それは、恥と性的孤立という誤った原理がこの世を狡猾にも迷わしている姿なのだ。。

次に、上で言及したノイズのテキストに続く1856年の思い出の原文を翻訳・紹介する[68]。

ショート・ドレスコスチュームの起源

おそらくハリエット・スキナー作であろう（Circular、1856年8月28日、126頁）

ホームジャーナルに最近掲載された手紙の中で、ブルーマー夫人は自らの信用を放棄しました。ショート・ドレスの衣装の創始者であるミラー女史（Mrs. E. S. Miller）にそれを譲り渡しました。ブルーマー夫人は次のように書きました。

> 「短いドレスにズボンをはいた私たちの通りに、E・S・ミラー女史〔ニューヨーク州ピーターボロのゲリット・スミス（Gerrit Smith, 1797~1874）の娘〕が出現した結果、自分自身や他の人たちにこのスタイルのドレスを採用させました。ミラー夫人は2~3か月くらい、このようなスタイルの衣服を着ていましたが、これまで私が知っていた限りでは、この姿で初めて公の場に顔を見せました（これは1851年のことでした）。同じようなドレスは、長年にわたって水治療の女性や学校での美容訓練のために着用されていました。ミラー女史には、普段着向けの改革服の創始者であるという功績があります。私はドレスや運動の創始者であるとは決して言いませんでした。それとは反対に、私がそれを否定し、それが適切であると感じたミラー夫人に信用を置くことができました。私が考えている公衆の前でこの問題を最初に起こしたのは、私の名前がドレスに与えられたことが原因であり、私の存在は記者が目撃するための印なのです」

私たちは上記の声明に興味がありますが、夫人の利点があります。ショート・ドレス運動の起源をさらに遡らせることができます。オナイダ協会の年次報告書、1849年1月。協会の女性による短いドレスの採用通知が掲載されています。

> 「女性のドレスに関するいくつかの憶測の結果、同協会の主要な女性たちの一部は、パンタルーン（子どもたちに共通する

ドレスのファッション）を身につける自由を獲得した。この変化の利点はすぐに明らかになり、他の人たちは、このモデルに従い、やがて、フロックとパンタルーンが協会で優勢になった。」

これは、姉妹によって書かれ、1851 年の“The Free Church Circular”に掲載されているように、このイノベーションを行うために少しもヒーローが必要ではありませんでした。この引用文は、この動きがどのように起きたかを知りたいと思っている人にも喜ばれるかもしれません。彼女は次のように書いています。

Mrs. C と Mrs. N は、年次報告書に記載されている方法を実験することを提案した。彼女達のための 2 着の短いドレスの秘密の準備を記者が手伝ったのは、インディアンのログハウスの一番上の部屋でした。私たちはこのログハウスは、今や、思い出に富んだコミュニティの発祥地であると考えています。それは 1848 年 6 月のことです。現在の穏やかな公衆感情では、半紳士の服装で登場することは、この上ない拍手喝采を浴びています。このような服装で登場するのに必要があった勇気を高く評価することは能わなくなっています。世界に一つの意見があるように見えました。それは、女性らしくなく、また、慎みがないというものでした。環境全体がこのような告発を受けました。恥知らずの主権は、この運動に直面し、壊された権力でした。私たちはファッションに挑戦することに慣れており、その揺れを争う上で自由と寛容を感じました。恥の専制主義は絶対的でした。当時、この公国は回復不可能な傷害を被ったと私たちは確信しました。Mrs. C と N が採用したスタイルは、普通のルーズなパンタルーンでした。そして、私たちの中にはトルコの

> ファッションをさまざまな時代に試した人もいましたが、それは決して適合しませんでした。私たちは常に、最もシンプルで便利で、最もエレガントではないとして、インディアンのキャビンで生み出された最初のパターンに決定的な優先度をもって戻ってきました。
>
> ドレスのこの問題で、世界の世論とファッションを通じて得られた勝利を振り返って見ることは興味深いです。私たちは当時、私たちを束縛していた公国が壊れた時にはっきり感じました。私たちの精神にもたらされた効果は、シンプルさ、自由、そして若さでした。この革新は、空想のスポーツから作られたものではなく、真実の単純な信者として参加しました。私たちは短いドレスの起源であるという名前についてはほとんど気にしません。私たちは一般的な真実にもっと興味を持っています。すべての普及した改革は、精神よりも勝利を勝ち取ったことから始まります。したがって、彼らの本当の歴史は表面には出ていないのです。

では、ノイズが提案した女性のドレスとは、どのようなドレスだったのか。

倉塚平は『ユートピアと性―オナイダ・コミュニティの複合婚実験―』において、オナイダ・モードとショートカットの項目に、次のように書いている[47]。「オナイダの男たちは、外の人と同じく三つ揃いの背広を着てみんな髭を生やしていた……訪問者がびっくりするのは、女性たちの服装だった。」ノイズは、「両性のちがいは自然で見苦しくないものの範囲内に止めるべきである」とし、子ども服を勧めた。ノイズの妻のハリエットは、「長いスカートを膝まで切ってしまい、その余り布でパンタレッツを作った。……パンタレッツを脱げば現代のワ

ンピースに近い。」問題は、女性に対してだけこういうモード改革をやった理由を精神分析的立場から、主張しているカーンがいる。その主張を要約すると「第一に、男の性的欲望が、淑女たちの刺激的装いによって異常に興奮させられることから、彼らを守ることにあった。第二に、子どもと似たような格好をさせたのは、女性の未成年性、従って男性への依存を象徴させると同時に、純粋な処女に対する男たちの願望を表現したものであった。第三には、女性たちの心から母性本能を効果的に締め出すことにあった」等々、である。「数か月後、髪もショートカットにすることになった。……髪を短くしてみると、結構若返ったように見えて、彼女たちは嬉しがった。」

ジョン・ハンフリー・ノイズは、女性が着用する代わりの衣装、すなわち「子どもたちの服とパンタレッツ」を提案した。この提案について、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーは、次のように述べている[(48)]。

コミュニティは衣服の変更の必要性に同意した。だが、公式記録に反して、コミュニティのメンバーは短いドレスがオナイダの衣装になるべきであることに同意しなかった。女性は単に短いドレスについて話すのではなく、そのようなドレスがどのように見えるかを示すことによって、反対意見を振り回そうとした。おそらく、女性たちが「子どもたちの服とパンタレッツ」を着て登場したとき、彼らは子どものように見えるために笑われるのを恐れていたものと思われる。女性が服を変えて、若者が着ていたスタイルに似ていれば、「半男性」と見なされるのではなく、子どもと識別される可能性が高かったからである。

オナイダの女性たちは、身に着けたくない衣服を着用することは強制されなかった。しかしながら、ジョン・ハンフリー・ノイズは、彼の追従者がコミュニティの慣行に躊躇した場合、彼の不快感を露わにしたという。一度、女性はノイズを受け入れた。 オナイダとその宗教的なイデオロギーは、彼らの忠誠を宣言する衣装を着せて女性を喜ば

せた。さらに、オナイダでは公式な規則ではショート・ドレスが義務付けられていなかったのである。ニュー・ハーモニーのように、オナイダの女性の中には、短いドレスを着ないことを選んだ人もいた。

オナイダの女性は、1851年以前のほとんどのドレス・リフォーム論者のように、衣装を着たまま、頻繁に旅行や出張をすることはなかった。オナイダの改革衣服は、ニュー・ハーモニー同様に、男性が提案した衣服であり、閉鎖的なコミュニティーでしか着用されなかったのである。

以上のゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーの見解を踏まえて、ここで、ジョン・ハンフリー・ノイズの衣服改革に対する筆者の見解を述べよう。

① ノイズのジェンダー観は男と女を両性具有的に観ている。
② そのため、女性がファッショナブルな衣装の代わりに着用する衣服、すなわち「子どもたちの服とパンタレッツ」を提案した。
③ オナイダ共同体では女性の地位が高く、労働に携わっていた。拘束的なファッショナブルな衣装は、労働しないことを誇りとする貴族階級の女性の衣装である。それゆえ、オナイダ共同体で、前述のような労働に携わっていた女性には、機能的で動きやすい「短いドレスとパンタルーン」が適していると考えられた。端的に言うならば、この衣服は仕事着であり、労働に携わる者のユニホームであった。
④ それゆえ、審美的なものを求める女性には、この衣服は受け入れられなかった。
⑤ オナイダ共同体では、後述するように、もっと審美的な衣服のための予算が女性の委員達によって提案され、確保された。

以下はチャールズ・ノールドホフが当時の女性たちの衣服（図 12）

を観察した感想である[49]。男性は世界の人々のように、しかし明らかに、彼自身の想像を絶するような仕方で、それぞれの人が服を着ています。女性たちは、胴着、ゆったしたズボン、そして膝のすぐ上に落ちる短いスカートからなるドレスを着ています。彼らの髪は耳のすぐ下でカットされ、若い女性はたいていカールをしているように私は感じました。ドレスは間違いなく非常に便利です。それは泥や雪の中を歩くことを認め、運動の自由を許す。それは完全に控えめです。しかし、私の慣れ親しんだ目には、優雅さと美しさに完全に、そして致命的に欠けています。ファッションで処方された現在の女性のドレス、特に偽の髪の毛と奇妙な醜い帽子は、十分、野蛮です。しかし、非常に切り詰めているオナイダのドレスは、襞のいかなる優美なあしらいをも禁じているため、私には何の改善も見ることができませんでした。

以上から明らかなように、チャールズ・ノールドホフは一方で、オナイダ共同体で着用されていた改革衣服の機能性は十分、認めつつも、この衣服が優雅さと美しさを致命的に欠いており、改善された様子は全く見られないとの見解をはっきりと表明している。

チャールズ・ノールドホフは、1874 年に、財務委員会に出された衣服に関する陳述書の内容を以下のように仔細に記録している[50]。この陳述書が提出されたのは、ノイズがオナイダ共同体を追われる 6 年前のことであり、女性の衣服に対する欲望が増しつつあった様相が陳述書の内容から窺える。

毎年の終わりに、各人は、財務委員会に、来年のために必要な衣服の詳細な陳述書を提出し、累計額は衣料品の翌年の見積もりの基礎をなしています。1874 年の初めに、女性たちは別の計画を提案しました。これはサーキュラー（Circular）[51] に記載されています。「最後の女性の会合では、C さんはディスカッションと承認のための報告をしまし



図 12　オナイダ共同体のコスチューム

た。システムの変更が提案されました。数年間追求されてきた計画は、年初めに男性、女性、そして子どものために、非常に多くの衣服に充当される一定の金額を確保することでした。非常に包括的な範囲の言葉である「臨時の支出」のために別の金額が設定されました。優れた判断力と忍耐力を持つ女性が、キーパーと商品の販売代理店に任命され、同様の資格のあるものは、購入の大部分を経験した経験のある人物と関連付けられました。各々の女性は必要な物品のリストを作成し、手元にある商品から選んだり、近くの商人に送ったり、かれらの元へ行ったりしました。この計画は多くの面でうまくいきましたが、いくつかの欠点がありました。担当の女性は、必要なことを充当された合計と一致させるために、常に問題を調整し、決定する必要がありました。予期しない多くの要求が出てきて、年末には必然的に限界を超えました。今年、衣料品委員会は、財務官と協議して、別の計画を採用することを提案しました。提案の内容は次の様です。

年の初めに、すべての合理的な要求をカバーするのに十分な総額を割当て、次いで、子ども服、旅のためのワードローブ、幼児のワード

ローブ、および雑費に特別な資金を割当てた上で、 残額を家族のなかの女性たちに、公平に分配するというものでした。それぞれの女性は、年末に金額があうようにする責任を自分自身で負うことになります。彼女の帽子から靴までの衣服が何であるかを知ることは、各女性、特にすべての少女に大きな利点となると考えられました。彼女は経済と先見の明を学び、費用と支払いの問題に新たな関心を感じることでしょう。

この計画はまた、剰余金があるときにはプレゼントを作ったり、お互いに助け合ったり、必要がないときに財産に手を触れたりしないように、大きな変化をもたらします。正当な説明と討議の後、女性たちは満場一致で新計画を試して投票しました。いく人かの読者にとって、靴や帽子を含め、その年の各女性の服装のためにこうしてまとめられた金額が 33 ドルであったことを知ることは興味深いかもしれません。会員は説明を書いています。

③ オナイダ共同体における衣服改革のその後の改革への影響 [52]

ジョン・ハンフリー・ノイズは、当時の女性のドレスは、彼女が「二足歩行動物」であることを否定し、代わりに「キャスターに立つバターを作る大型攪乳器のようなものだ」と繰り返し書いている。オナイダの宗教的教義は女性を解放すると主張した。コミュニティの女性のドレスは、かなりの注目を集め、他の（通常は短命であった）共同実験でもよく知られ、模倣された。ノイズは 1848 年にニューヨークのオナイダにフォロワーのコミュニティを移した直後に、女性の当世のドレスの議論の中で、改革服の話題を最初に導入した。その年の後半、ノイズは初めて女性のドレスに関するアイデアを発表した。その内容は、すでに紹介したとおりである。

ここで、ひとつの疑問が浮上してくる。なぜ、1827 年から 1848 年

まで改革衣服の代替衣服が登場しなかったのであろうか。

この問に対する結論から述べよう。

1830 年代から 1870 年代のアメリカで流行した拘束的な衣装様式の特徴についてはすでに述べた。きつい紐締めの女性服が健康に及ぼす影響についても言及した。1827 年にニュー・ハーモニー共同体が崩壊してから、改革衣服に対しても、従来の拘束的な衣装に対しても、多方面から批評や批判が寄せられた。聖職者、医者、ジャーナリスト、社会評論家は 19 世紀のドレスの過度の装飾、無作法なクリノリン、きつい紐締めのドレス、フープスカート、ロングドレスへの攻撃・批判を行った。だが、1827 年から 1848 年の間に代替改革衣服は登場しなかったのである。ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーによると「報道、医療雑誌、人気のあるフィクションのアカウントは、女性のファッショナブルなドレスの変化を人々が望んでいたことを示している。しかし、どのように変更を考案すべきかについて誰も同意しなかった。」とのことである。

それでは、オナイダの改革衣服は、後の改革衣服に影響をおよぼしたのであろうか。ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーの見解を紹介する。女史の結論は「オナイダの短いドレスが自由ドレスの前身であるだけでなく、そのデザインに影響を与えている可能性がある」である。ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーがこのような見解に至った経緯は以下である。少々長いが、彼女の見解には、ドレス・リフォーム運動の第一期と二期のつながりを解く鍵があるため、引用する [53]。

オナイダのような他の閉じた共同体は、女性の服装を改革する必要性を認識していた。19 世紀の 100 以上のユートピア社会が、ある種のドレス・リフォームを実験したか否かを証明するのは、難しい問題である。共同社会の中には、会員を非会員から視覚的に区別する衣装の

必要性があると認識していた人がいた。共同体主義者は、必ずしも外部者に彼らの服装を採り入れ、彼ら自身が創造した独特の視覚的な区別をぼかすことを望まなかった。したがって、短いドレスを採用した社会は、通常、それを彼らのサークルの外で宣伝しなかった。

しかし、短いドレス衣装の特異性と独特性は、ドレス・リフォームを実践しているコミュニティの内部と外部の話題になることを保証した。19 世紀のジャーナリストは政治的自由ドレスについてかなりの時間を費やしていたが、1848 年に 100 人以上の女性がほぼ同じ衣装の宗教的なバージョンを着用し始めたオナイダコミュニティを見落とした。エリザベス・スミス・ミラーが、エリア内に父親と一緒に住んでいたことを考えると、自由なドレスをデザインする前にオナイダの衣装を知ったと仮定することは理不尽ではない。

ニューヨークのオブザーバー（Observer）はこの見解を共有した。オブザーバーはオナイダのドレス・リフォームの「楽しい説明」をし、それが「明らかにブルーマーリズムの萌芽」であることを認識するための少数の新聞の 1 つであった。オナイダコミュニティの存命期間と知識は、オナイダの短いドレスが自由ドレスの前身であるだけでなく、そのデザインに影響を与えている可能性があるという見解を強めている。

さて、オナイダ共同体のその後の動向はどうであったのか。その結末は、以下のようである [54]。

1870 年代、オナイダコミュニティは悲惨な変化を遂げたことが判明した。ジョン・ハンフリー・ノイズは、宗教上の問題を無視して世俗的な問題にもっと焦点を当て始めたのである。一族は、彼の理論だけでなく、実践の時間の多くを費やしたように見えた。「神が喜んでいる」という若い女性は、「彼はヘレン、コンスタンツ、そして私の子どもを持つつもりです」と書いている。ノイズには、攪拌培養実験中に 10

人の子どもがいたと推定される。些細な問題がコミュニティを悩ませ、議論の主要なポイントになった。

1877年、ノイズは辞任し、コミュニティでは彼の地位につくために、後継者の同意を得る必要があった。若者に創業者の精神を与えることができなかったコミュニティは、若者をオナイダの宗教的、社会的な生活に統合させる方法を見つけることに苦労した。最後に、ノイズは、オナイダの性的練習に若い女性処女を誰が導入するのかという問題が重要視された。ノイズは1879年にオナイダを逃れることを強いられ、法廷で強姦罪で逮捕された。それ以降は遠方からのガイダンスしか提供できなかった。結局、不同意な派閥はユートピア実験を解散し、合資会社（銀器を製造）を設立することに決めたのである。会社員として働くことを望んでいたメンバーに雇用を提供し、すべてのメンバーに配分された株式に対する定期的な配当を支払った。1881年1月1日、オナイダコミュニティはオナイダコミュニティ有限会社に変更された。1879年8月、ジョン・ハンフリー・ノイズはカナダの新しい家からオナイダの生活様式の最初の大きな変化の1つである複雑な結婚の習慣を放棄することを勧める。

5　シェーカー教徒の共同体と服装[55]

18世紀半ばから19世紀前半にかけて、アメリカ国内にはユートピア共同体が生まれ、規律正しい共同生活と富の分配を試みた。倉塚平によると、1820年から1859年の間に、108の宗教的、社会主義的共同体が建設されたとのことである[56]。本項ではこれらの共同体のなかから、シェーカー共同体とクエーカー共同体を取り上げて、歴史的背景と服装の特徴を論じたいと思う。これらの共同体では、果たして、ショート・ドレスとズボンの着用は見られたのであろうか。

シェーカー教徒はキリストの再来を信じる信者集団の一つで、アン・リー（Ann Lee, 1736~1784）が、キリストの再来は女性の姿をとる、自分こそその女性であるという啓示を受けたとして創設した宗派である。彼女と信者は、1774 年にイングランドから北米植民地に移住し、1776 年に現在のニューヨークのウォーターヴリート（Watervliet）に共同社会をつくった。1830 年までに 18 のシェーカー共同社会がニューヨーク州、ニューイングランド、オハイオ川流域地方にあった。思想的にはユートピア社会主義者で、財産の共同所有・男女平等・独身主義などが特色である。信徒数は南北戦争前の最大時には 6000 人で、その後しだいに減少し、今日ではわずかしか残っていない。

シェーカー教徒の女子服の特徴は、エプロン・フロント（1811 年以降）、タック、プリーツとスカートの脇線の傾斜が挙げられる。リン・ソルジュ（Lynn Sorge）によるとアメリカ女子服からの影響を強く受けているが、その衣服にはシェーカー教徒の宗教観、こだわりが感じられるとのことである。また、世俗の衣服の諸要素をシェーカー教徒が採用するまでには、10 年ないし 15 年のずれがあることを認識しなければならない。

服飾研究家のビバリー・ゴードンは、シェーカーが実用性を発揮し、主流のファッションで起こった変化に適応できるようにしていると指摘している。合成染料が入手しやすくなったとき、シェーカーがそれらを購入したのである。製作するよりも、工場から布を購入する方が安くなったとき、シェーカーは布を購入した。

シェーカー教徒の女子服には、ショート・ドレスとズボンの組み合わせは、取り入れられなかった。

6　クエーカー教徒の共同体と服装[57]

クエーカー教徒は、17 世紀の中葉に、イギリスで起こったピューリタンの一派であり、プロテスタント（新教）諸派の非国教徒である。創始者はイギリス人のジョージ・フォックス（George Fox, 1624~91）である。17 世紀の末期、アメリカに渡って勢力を伸ばし、この二国が本拠となっている。

17 世紀末期のクエーカー教徒のウィリアム・ペン（William Penn, 1644~1718）によるペンシルベニア創設の後、クエーカー教徒の本格的な移住が開始し、18 世紀に新大陸で、文化的開花期を迎えた。質素・倹約の生活態度であり、18 世紀以降、人道主義的・博愛主義的運動への献身が顕著となった。



図 13 クエーカー—教徒の婦人像
John Hesselius 作

なかでも、奴隷制廃止運動、刑務所改革などの社会改革に大きな役割を果たし、徹底した平和主義者であった。

プロテスタントが、当時の地味な色彩の虚飾のない衣服を身に着けていたことはよく知られている。クエーカー教徒もそうである。

クエーカー教徒の行動は、共同、調和、平等、簡素という四つの言葉によって説明できる。簡素とは、衣服、会話、作法、住まい、婚姻・葬儀などにおける不必要なものを取り除くことを意味する。

図 13 は、18 世紀の典型的なクエーカー教徒の女装を示している。

彼女の胴着は襟元があき、先端がＶ字型に傾斜し、肘よりやや斜めの袖がついている。そして、ゆったりとした二重に重なったスカートを見せている。胴着の内側に、ネッカチーフを入れ込み、その上に薄地のショールを重ねている。頭には、フードをかぶっている。

ところが、18 世紀の中葉頃、植民地の発展とともに、都市部に住む商人層の信徒が富裕化し、反質素観念といった世俗化が都会の協会をおそった。彼女たち（Gay Quaker，派手なクエーカー）は、流行の華麗な衣装を買い求め、その暮らしぶりは、贅沢そのものであったという。堅固なクエーカー教徒の婦人の中には、19 世紀に入っても 18 世紀の衣服を保持したものもいた。しかしながら、クエーカー教徒の婦人の大半は、世俗の目まぐるしいファッショナブルな衣服の変容に影響されたのである。

クエーカー教徒の女子服には、ショート・ドレスとズボンの組み合わせは、取り入れられなかった。

7　水治療師によるドレス・リフォーム

水治療師もドレス・リフォーム運動に取り組んだ。

さて、水治療とはどのような医療なのであろうか。

19 世紀半ばまでに、確立された医療慣行に対する不満は、いくつかの代替的な健康理論 (58) を促した。19 世紀の医療行為、疎水症または水治療（「イレギュラー」宗派）は、純粋な水の有益な効果を予言した。疎水性治療システムは、シャワー、バス、および圧縮の形態の冷水を身体の異なる部分に適用することを採用した。当時の社会的熱意に調和した水治療法師は、男女ともに共和国の市民権にふさわしい衣装が必要であると主張した。

水治療の医師は、「通常の」医療施設とは異なり、女性の苦情を真剣に受け止め、女性を自分の医者にすることさえ奨励した。「女性たちは、

自分たちの医師とお互いの医師にならなければならない」と言った。女性は熱心に水治療をサポートし、ドレス・リフォームの最も熱心な支持者の中には水治療法師を数えることができた。女性の衣服を改造することへの水治療の関わりは、オナイダの短いドレスに先立ってデザインされたものではないが、健康上の配慮に促され、より広く公表されたドレス・リフォームの煽動に先行した。

ジェームズ・C・ジャクソン（James C. Jackson,1811~1895）博士は、19 世紀後半の代表的な水治療師で、ドレス・リフォームを提唱した人物であり、アメリカのコスチュームを独自のものとして採用した全米ドレス・リフォーム協会の創設を奨励した。



写真 4　ジェームズ・C・ジャクソン博士（1864 年）。

さて、ジャクソン博士とは、どのような経歴の人物であろうか。ジョーン・セヴラの著作に掲載された写真（**写真 4**）にみるジャクソン博士像に迫ってみよう [59]。

ジャクソン博士はニューヨーク市で「水治療ハウス（Water Cure House）」を運営していた医学士のラッセル・サッチャー・トロール（Russell Thatcher Trall,1812~1877）の弟子であった。トロールのシステムは水療法、体操、食事、睡眠、運動を組み合わせたもので、彼は 1854 年に「ニューヨーク水治療・生理学学校（New York Hydropathic and Physiological School）を設立している。（中略）ジャクソン博士は、1852 年にニューヨーク州コートランド郡の「グレン・ヘイヴン（Glen Haven）」という水療法施設を買い取り、その業務部門の監督者としてキャリアをスタートさせた。この温

泉保養所には女性部門があり、おそらくジャクソンが創設したものと思われる。彼は、「治らなければお金はいりません」という方針を掲げ、1853 年には薬を使わずに 600 人の患者を治療したといわれている。施設滞在者ではない患者が彼に払う料金は、助言が１ドル、診察が３ドル、手紙による指示が５ドルであった。

グレン・ヘイヴンは 1858 年に売却され、ジャクソン博士はＦ・ウィルソン・ハード（F. Wilson Hurd）の資金援助を受けてニューヨーク州ダンズヴィルのジェネシー川沿いの高台にある温泉保養施設を買い取り、「丘の上のわれらの家」と名付けた。ジャクソン博士と養女のハリエット・オースティン（Harriet Austin, 1825~1891）博士が運営したこの施設は、19 世紀のアメリカで最も大きな温泉保養施設のひとつとなった。患者は、中心的な建物の中で性別によって分けられ、住み込みの内科医２人と訓練された３人の指導員による治療を受けた。治療は、栄養管理、運動、罨法（パック）や入浴などであった。「われらの家」では、治療の一環として女性に「アメリカン・コスチューム（American Costume）」、すなわち全米ドレス・リフォーム協会が推奨するタイプのブルーマー（Bloomer）を着せており、ジャクソンと養女はともに協会の創設メンバーであった。「われらの家」は大きく、よく手入れされ、繁盛していて、なかば宗教的な側面もあった。改革派や奴隷制反対の活動家たちだけでなく、クエーカー教徒もこの施設のプログラムに魅力を感じていた。

以上、ジョーン・セヴラに拠って、ジャクソン博士を紹介したが、ジャクソン博士は多くの著作を著している。以下に非生理的なドレスがいかに健康に良くないかについて書かれた“American Womanhood”

の第 5 章　非健康的なドレス（James C. Jackson, *American Womanhood, its peculiarities and necessities 1870,* Chapter V Unhealthy Dress）の内容を要約・紹介する[60]。本章の内容は、ドレス・リフォーム運動の考察に当たって、なかなか得難い、貴重なものである。本章の内容は、次の 5 項目から成っており、それぞれの項目において、生理学的な視点から、詳細な説明が加えられている。そこで、以下、これらの 5 項目を整理・紹介させていただく。

冒頭で次のように述べられている。

「アメリカ人女性の間に、祖先から備わった能力からの広範な逸脱を誘発した純粋に肉体的な原因には、世代から世代にかけての非生理的なドレスの着用があります。詳細に見ると、ファッションが悪いと思われます。」つまり、非生理的なドレスが女性の病気の根源を成していることが指摘されている。

その上で、5 項目の問題点が以下のように、提示されている。

①　髪の結い方について

「まず、頭の後ろで櫛、ピン、または結び目で一様に髪を結っています。このような結い方は、数えきれないほど多くの場合、小脳または後脳を損傷する傾向があります。この混雑した状態から、多くの場合、栄養と排泄の器官の病気が発生します。…頭の後ろに装身具を付けていることは、アメリカ人女性をひどく多くの不正な形にしたばかりでなく、非常に弱々しく作られた子どもたちを産んでいます。束ねずに長く後ろに垂らす髪型に結う習慣が流行しているので、この悪い結果は子孫にとってははるかに大きくなる可能性があります。…健康の問題が価値がある限り、髪を短くすることほど良いことはないでしょう。」

②　髪の装飾について

「第２に、 女性は一様に健康でない髪の装飾を頭に着けます。…頭

の上に何も載せないことほど、成長によって髪の毛の厚さを増やすより良い方法はありません。」

「しかし逆に、ほとんど不可避的に乱れた状態が確立されています。彼らは 1、2 か月以内に、2~3 回だけできるだけ何も着用しないだけであり、多くの場合、頭の上に厚い覆いをして、極端に装っています。このすべては、神経系の磁気的または電気的状態と非常に関係しています。これは、一般的な身体的健康だけでなく、知的活力について言えることです。」

③　胸を圧迫する装いについて

「第 3 に、女性が身体の上部を装う方法、または通常、胸と呼ばれる部分を装う方法について述べます。」

「鬱血がしばしば起こり、咳が出ると次のようになります。 救済されない場合、炎症がひどくなり、膿がどんどん出て、膿瘍が形成され、肺の消費が生じます。したがって、あらゆる原因による肺の圧力は、おのずとこれらの器官の病気を誘発します。私の治療では、これまでのところ、おそらく、通算、5,000 人以上の女性が、肺の病気を検出されるようになりました。肺の病気のかなりの割合が、私がそれらを少しでも良くするのはむずかしい状態になっていました。彼らは完全に治癒不可能です。しかし、私はすべての女性や男性に肺の病気を生じさせるほど長時間、肺に厳しい服を着ていない人は、十数人もいないと信じてきました。しかし、健康的な人は、貧しい人たちが手元にある衣服を身に着けていたような衣服をいつも着てきていました。」

④　胃を締め付ける衣装について

「第 4 に、 健康でないドレスを着る方法のもう一つのポイントは、胃が包まれている部分のウエスト部分と呼ばれる身体の部分にぴったりと着用することです…消化不良は肺疾患の前兆です。消化不良を生

じさせる多種多様な原因のうち、おそらく胃に対する衣服の外圧が発生させるほど一般的なものはありません。ほとんどすべてのアメリカの女性がベルトやガードルをちょうど胃の上を通って、身体の周りに巻きつけて、身体を収縮させ、いかなる自然な動きからも身体を妨げます。食べ物を消化するために、胃は収縮して拡張しなければなりません。あなたがそれを拡張することができないように収縮させるならば、あなたは食物を溶解させ、その容器から消化管に沿ってさらに臓器に移る準備ができているという自然な事実を妨げるでしょう。食物をくだいて、分解する際に、少なくとも胃の役目を妨害する外圧は、消化不良を直接引き起こす傾向があります。原因を理解することなく、多くの人が消化不良になります。」

⑤　ウエストを締め付ける衣装について

「第 5 番目。 ほとんどの女性がそうしているように、ウエストにぴったりのドレスを着用することは、女性の病気といったような丁寧な言い回しで知られている一連の病気の強力な誘発原因です。結婚していても結婚していなくても、何らかの形や段階の子宮の困難に苦しんでいない 25 歳以上のアメリカ人女性はほとんどいません。病気が一般的になった理由は、まず第一に、構造上の女性の脆弱性と一般的な健康の欠如のためです。第二に、ドレスのスタイルのために、腹部および骨盤腔に含まれる器官の機械的な変位を誘発するのです。ベルトが感覚的な圧迫が感じられるに十分なほどきつく人間の胴の周りや、胃の上やちょうど下に慣習的に巻かれた場合、私が前に言ったように、胃が収縮して恒久的に収縮するだけでなく、腰の周りを自然のサイズよりも小さくし、腸も圧力から逃れようとして収縮します。腹筋は収縮力を失い、腸が腹部の下部に沈み込むようにします。ベルトが下がると、ベルトの下に横たわる臓器を押し、骨盤腔にまで下がります。

これらの形態の機械的変位のいずれかに苦しんでいる女性は、身体

的に脆弱になります。彼女は歩くことも、仕事することも、まっすぐに座って、任意の快適さで体重を持ち上げることもできません。生命は彼女に不快な負担になります。」

次に、フィッシャーに拠って、水治療とドレス・リフォームの関係性についてまとめよう。

ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーは水治療とドレス・リフォームの双方の分野において活躍した女性たちについて、次のように述べている[61]。

「リディア・ハモンドストローブリゲン博士（Dr. Lydia Hammond Strobridgen）、リディア・セイヤー・ハズブルック博士（Dr. Lydia Sayer Hasbrouck）、メアリー・エドワーズ・ウォーカー博士（Dr. Mary E. Walker）、ゴーブ・ニコラス博士（Dr. Mary Gove Nichols）、ハリエット・オースティン博士（Harriet Austin）博士は、水治療とドレス・リフォームの両方の分野で活躍した女性であり、改革へのコミットメントを共有した。彼らは全員、本を出版し、講演し、ドレス・リフォームが政治問題ではなくなってからずっとリフォーム・ドレスを着ていた。これらの女性改革者は、おそらく他のどの女性改革者よりも、女性の社会的劣位とドレス・リフォームの必要性を同一視した。 彼らはまた、女性の健康状態が悪い社会における女性の従属的地位と密接に関かわっていた。」

以上のゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーの記述から、水治療とドレス・リフォームの分野で、女性の医師が活躍していたことが明らかである。リディア・セイヤー・ハズブルック博士、メアリー・エドワード・ウォーカー博士の活躍について、第４章において取り上げる。

8　まとめ

第2章を締めくくるに当たって、第一期のドレス・リフォーム運動を総括しよう。

ロバート・オーウェンのドレス・リフォーム運動は、果たして、成功したのであろうか。オーウェンは、ハーモナイトの女性の間でファッションへの関心を一掃することに、全面的に成功はしなかった。また、新約聖書の戒めの故に、女性がズボンを履くことに対する抵抗は、男性にとっても、女性にとっても、想像を絶するほど強かったものと思われる。そして、閉鎖されたコミュニティから始まったため、1827年に、このコミュニティの崩壊後は、オーウェンが提案したリフォーム・ドレス（パンツとドレスのコンビネーション）は着られなくなったのである。ヴェロニカ・フィッシャーによれば、フランシス・ライトのスタイルは、後にアメリア・ブルーマー、スーザン・アンソニー、エリザベス・キャディ・スタントンなどのフェミニストによって推進されたとのことである。ニュー・ハーモナイトのリフォーム・ドレスは、フランシス・ライトが提案したのではないかとの筆者の仮説が正しければ、ニュー・ハーモナイトのリフォーム・ドレスは、ブルーマー衣装のルーツであると言えよう。

それから20年後の1848年にオナイダの共同体において、ジョン・ハンフリー・ノイズによって、衣服改革が行われた。ここで、「なぜ、1827年から1848年の間に、代替改革衣服が登場しなかったのか」という疑問が湧いてくる。報道、医療雑誌、人気のあるファッションに関する報告は、女性のファッショナブルなドレスの変化を人々が望んでいたことを示している。しかし、どのように変更を考案すべきかについて、誰も同意しなかったためであった。

ノイズが提案した改革衣服の評判は、どうであったのか。ノイズが

改革衣服として提案した衣服は、「子どもたちの服とパンタレッツ」であった。コミュニティのメンバーは、女性たちがこの衣服を着て登場した時に、彼らは子どものように見えるために、笑われるのを恐れていたという。

オナイダの改革衣服は、ニュー・ハーモニー同様に、男性が提案した衣服であり、閉鎖的なコミュニティでしか着用されなかった。また、オナイダ共同体では、女性は労働に携わっていたため、短いドレスとズボンのようなスタイルの機能的で、動きやすい作業着を必要とした。だが、審美的で、ファッショナブルな衣装を好む女性には、このような半男性的な衣服は受け入れられなかったのである。

水治療師のジェイムズ・C・ジャクソン博士の見解に明らかなように、実際にファッショナブルな拘束的な衣装のために病気にかかった5,000人以上の女性たちの治療に携わっただけあって、非常にリアルにこのような衣装の弊害について、具体的に指摘されている。先に紹介したジェイムズ・C・ジャクソン博士の“American Womanhood”の第５章には、衣服改革の必要性を明確に裏付ける生理学者の見解が述べられている。ジェイムズ・C・ジャクソン博士がドレス・リフォーム運動において果たした役割は、大いに評価すべきものがある。だが、第５章で述べるように、ジェイムズ・C・ジャクソン博士は男性であり、ショート・ドレスにズボンという女性の改革衣服を着用しないで、ドレス・リフォームを唱えたがゆえに、改革派の女性たちから非難を浴びせられたのである。ジョーン・セヴラは先に掲載した写真１の解説において、次のように述べている。「この写真のジャクソン博士は黒いフロックコート（frock coat）、ベスト、ズボンを着用しており、1860年代のあまたのビジネスマンと同じような服装であるが、極端に長い顎髭と長髪や、幅の広いポエットカラー〔ロマン派詩人が好んだ、衿先の長いタイプの衿〕は、およそ普通とはほど遠い。当時の骨相学者ならさしずめ、高い額と鋭い目が彼の先見性を物語っているとでも評し

たことだろう[62]。」

それでは、オナイダの改革衣服は、後の改革衣服に影響を及ぼしたのであろうか。

ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーによると、オナイダの短いドレスは、自由ドレスの前身であるだけでなく、そのデザインに影響を与えている可能性があるという。また、地方紙のオブザーバー紙は、1848年に、100人以上の女性が、ほぼ同じ衣装の宗教的バージョンを着用し始めた、それは、明らかに「ブルーマーリズムの萌芽」であることを認識していたという。結局、ニュー・ハーモナイトのリフォーム・ドレスもオナイダ共同体のリフォーム・ドレスもブルーマーリズムのルーツであったものと推察される。

今日の我々の立場から見て、とても現代的で、合理的なリフォーム・ドレスは、聖書の申命記の教えやデザインにおける審美性の欠如のゆえに、衰退の道をたどって行ったと結論づけることができるであろう。

オナイダ共同体の結末であるが、前述のように、ノイズは1879年にオナイダを逃れることを強いられ、法廷で強姦罪で逮捕された。それ以降は遠方からのガイダンスしか提供できなかった。結局、不同意な派閥はユートピア実験を解散し、合資会社を設立することに決めたのである。会社員として働くことを望んでいたメンバーに雇用を提供し、すべてのメンバーに配分された株式に対する定期的な配当を支払った。1881年1月1日、オナイダコミュニティはオナイダコミュニティ有限会社（銀食器企業）に変更されたのである。

【注】

（1）　丹野郁博士叙勲記念論文集『服飾史学の五十年』, 丹野郁埼玉大学名誉教授叙勲記念誌編集委員会, 1990, p.32

（２）　Gayle Veronica Fischer, *Who Wears the Pants, Dress Reform, and Power in the Mid-Nineteenth-Century United States*, UMI, 1995, p.3.

（３）　*Ibid.,* p.3.

（４）　*Ibid.,* p.5.

（５）　*Ibid.,* p.78, 395.

（６）　*Ibid.,* p.80. 上田千秋著『オーウェンとニュー・ハーモニー』（ミネルヴァ書房、1984 年）。

（７）　ロバート・オーエン著、渡辺義晴訳『社会変革と教育』世界教育学選集〈26〉（明治図書出版、1963 年）、pp.180-187.
ロバアト・オウエン著、五島茂訳『オウエン自叙伝』（岩波文庫、1961、1995 年）
http://kakufu.com/economics/d-02.pdf

（８）　18 世紀末、南独ヴュルツブルク付近に住むルター派教徒のなかには、教会組織の理性主義に対する疑念を懐く人たちがいた。当初彼らは教会内での改革運動を望み、活動を続けていたが、こうした彼らの改革は聖職者の反感を買い、思うように進まなかった。こうしたなか、イプティンゲン〔Iptingen シュトットガルト北西約 25km に位置する〕で葡萄栽培に従事していたジョージ・ラップ（George Rapp:1757－1847）〔ドイツ名：ヨハン・ゲオルグ・ラップ Johann Georg Rapp〕は、17 世紀の神秘論者ヤコブ・ベーメ（Jakob Boehme:1575－1624）の著作や再洗礼派の考えに鼓舞され、祈りを通し個人が直接神の存在を体感することを確信するようになった。ラップに同調した人たちは 教会から脱退し、1785 年頃には宗派運動となっていった。だがこうした新宗派を組織し活動することは既存教会の権力否定となり、同時に教会権力の背後にある領主制度の否定を意味した。しかし 権力機構に逆らうだけの政治力を持たず、武力否定の立場を

とるラップは、アメリカに新天地を求め、新しい形の宗教共同体を建設することを決断、1803 年、息子のヨハネスと 2 人の友人とともに大西洋を渡りボルチモア港に上陸した。「ハーモニー協会 Harmony Society」という名の組織を結成し、しばらくボルチモアとフィラデルフィアで説教活動を続けた。その後、ピッツバーグ北方 〔ペンシルベニア州西部バトラー郡 Butler County〕に 5 千エーカーの土地を確保、翌年にはラップに共鳴した〔ラッピスト Rappist と呼ばれる〕人々が次々と移住した。土地を切り開き、道路を整備し、共同礼拝所と居住区を作り、1805 年、キリスト教共産主義の「ハーモニー共同体 Harmony Community」が誕生した。ドイツ系移民だけで組織されたこの共同体での日常語は当然ドイツ語であった。既婚者もいたが、この共同体では独身主義が原則で、財産共同管理と富の公平分配の方針が貫かれた。1814 年、「ラッピスト」たちはさらに、インディアナ州南部ポーセイ郡（Posey County）ワォバシュ Wabash 川付近に 3 万エーカーの土地を取得し定住し、その地を「ニュー・ハーモニー New Harmony」）と名づけた。指導者のラップは伝染病と近隣の人々との折り合いの悪さから、わずか 10 年ほどで、再び新しい土地を求め、ピッツバーグの北約 17 マイルのオハイオ川に面した場所 〔ビーバー郡 Beaver County〕に、「エコノミー Economy」という名の 3 番目の共同体を建設した。ラッピストたちが退去したニュー・ハーモニーは、1825 年に英国人ロバート・オーウェン（Robert Owen:1771－1858）が引き継ぎ、自己の社会改革思想に基づき理想共同体の建設を試みた。だが資金面で経営破綻、わずか一年で失敗してしまった。それでも「エコノミー共同体」は、石油を発見し、しばらくは栄えたが 1905 年には完全に消滅した。ジョージ・ラップは 1847 年 8 月 7 日、90 歳で 亡くなった。（長友雅美「ア

メリカ合衆国におけるドイツ系移民によるユートピア共同体」東北大学大学院　国際文化研究科論集　第十三号）。（www.intcul.tohoku.ac.jp/ronshu/vol13/13nagatomo.pdf）

（９）Gayle Veronica Fischer, *op.cit.,* p.82.

（10）*Ibid.,* p.82.

（11）*Ibid.,* p.128. 注 10.

（12）上田千秋著『オーウェンとニュー・ハーモニー』（ミネルヴァ書房、1984 年）p.287.

（13）ユネスコ世界文化遺産委員会の 2001 年第 25 セッションの議事録。ファイル　429rev.pdf

（14）ロバアト・オウエン著、五島茂訳『オウエン自叙伝』（岩波文庫、1961、1995 年）p.250.

（15）『同上書』p.255.

（16）ロバート・オーエン著、渡辺義晴訳『社会変革と教育』世界教育学選集〈26〉（明治図書出版、1963 年）、p.151.

（17）『同上書』p.152.

（18）『同上書』p.152.

（19）Gayle Veronica Fischer, *Pantaloons and Power, Nineteenth-Century Dress Reform in the United States,* 2001, p.36.

（20）*Ibid.,* p.37.

（21）Donald E. Pitzer, *New Harmony Then & Now*, Indiana University Press, 2012, p.73.

（22）*Ibid.,* p.73.

（23）http://www.womenhistoryblog.com/2012/01/frances-wright.html（2018 年 4 月 3 日）

・Carol A. Kalmerton, *Women in Utopia, The Idelogy of Gender in the American Owenite Cmmunities*, Syrause, 1998, Chapter 4.

・Gayle Veronica Fischer, *op.cit.*, p.101.

(24) Gayle Veronica Fischer, *Who Wears the Pants, Dress Reform, and Power in the Mid-Nineteenth-Century United States*, UMI, 1995, p.86.

(25) マドレーヌ・デルピエール著、濱田雅子訳『子供のモード 1750-1950』（装苑アイ、1993 年 No.12, 文化学園ファッション情報センター）p.14.

(26) *The Free Enquirer*（August 5, 1829）, p. 321, Fashionable Incarceration（Robert Owen）.

(27) モロクの祭壇　モロクは古代の中東で崇拝された神の名であり、ブロンズで「王座に座ったモロクの像」を作り、人間の新生児を生贄にして祀った。

(28) Gayle Veronica Fischer, *ibid.*, p.82.

(29) *Ibid.*, p.95.

(30) 新約聖書、申命記（旧約聖書第 5 の記 22:5)。

(31) Gayle Veronica Fischer, *op.cit.*, p.95.

(32) 倉塚平著『ユートピアと性　オナイダコミュニティの複合婚実験』(中央口論社、2015 年)。

(33) Charles Nordhoff, *Communistic Societies of the United States Economic Social and Religious Utopias of the Nineteenth Century,* New York:Dover, 1966, 1875, pp.259-260.

(34) *Ibid.*, p.277.

(35) *Ibid.*, p.260.

(36) 松村赳、富田虎男編著『英米史辞典』(研究社、200年）p. 538.

(37) Charles Nordhoff, *op.cit.*, p260.

(38) *Ibid.*, pp.260-261.

(39) *Ibid.*, pp.263-264.

(40) Gayle Veronica Fischer, *op.cit.*, pp.97-101.

(41) Charles Nordhoff, *op.cit.*, p.261.

（42） *Ibid.,* pp.278-279.

（43） Gayle Veronica Fischer, *op.cit.*, p.255.

（44） Oneida Community Journal, Vol.25, No.2, September 2011, Oneida, NY, pp.5-6.

（45） *Ibid.,* p.5.

（46） *Ibid.,* p.6.

（47） 倉塚平著『前掲書』pp.146-147.

（48） Gayle Veronica Fischer, *op.cit.*, pp.103-107.

（49） Charles Nordhoff, *op.cit.*, pp.282-283.

（50） *Ibid.,* pp.283-284.

（51） チャールズ・ノールドホフは、サーキュラー（Circular）について、次のように詳しく解説している。「サーキュラーは共産主義者によって、共産主義者のために出版されている。その主な目的は、いくつかの同盟関係団体の教育を支援することであり、同団体は実際に財産共同体のペンテコストの原則に専念している。これらの団体以外の読者のほとんどは、原則として共産主義者である。サーキュラーは、この共産党選挙区の自由献金によってほぼ完全に支えられている。そのような物や資源を有する広報紙は、適切に販売するのはむずかしい。私たちは自由に受け取り、自由に与える。サーキュラーを読むことを希望する者は、郵便での申請、またはブルックリンのウィロープレイスで、支払いをすることなく、または支払うことを約束することで、入手できまる。誰かが支払うことを選択した場合、彼は年間発行分の２ドルを送ることができる。しかし、彼は私たちのもとに彼の口座を作る必要はない。私たちは、私たちが働いている家族界の無料の贈り物に頼っている」（典拠：*Ibid.,* p.256）。

　この広報紙は、１週間に１回、２週間に３回、これらの回数発行された。過去数年間、それは毎週発行され、非常に良い紙

印刷されていた。それは今、次号の通知をその欄の冒頭に掲載している。「サーキュラーは、有料であろうとなかろうと、応募者全員に送付される。費用は 1 巻あたり 2 ドル以上必要である。それを必要とし、それを持っていなければならない人々は、3 つのクラスに分けられる。1.　2 ドルを払う余裕がない人。2. わずか 2 ドルなら支払うことができる人。3.　2 ドル以上を支払うことができる人。第一番目の人は、自由にできる。 二番目の人はその費用を支払うべきである。 そして第三番目の人は、第一番目の人の不足を補うために十分な費用を支払うべきである。これは共産主義の法則である。私たちにはそれを強制する手段がなく、それを述べ、それを関係者の良い感覚に任せること以外には、強制することは望んでいない。我々は価格を決めないで、全員にサーキュラーを提供するリスクを冒す。 無料の定期購読は、直接申請する人や、申請者に明示的な権限を与えることによって、自分自身で申請する人からのみ受け取る。（典拠：*Ibid.,* p.265）。

(52)　Gayle Veronica Fischer, *op.cit.*, p.107.

(53)　*Ibid.,* pp.109-110.

(54)　*Ibid.,* p.390.

(55)　Lynn Sorge, The Evolution of Nineteenth-century Shaker Dresses: Reflection of the "World", *Dress* vol.21, The Costume Society of America, 1994, p.44

(56)　倉塚平著『前掲書』p.23.

(57)　・Amelia Mott Gummere, *The Quaker:A Study Costume*, Benjamin Blom, New York/London,1968.

・Edward Warwick & Henry C. Pitz, Alexnder Wycoff, *Early American Dress: Colonial and Revolutionary Period*, Bonanza Books, 1965, pp.199-207.

（58）　Gayle Veronica Fischer, *op.cit.,* pp.115-116.
（59）　Joan Severa, *Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashions, 1840-1900,* Kent State University Press, 1995, pp.248-249.
（60）　James Jackson, *American Womanhood,* Chapter 5, pp.32-39.（https://catalog.hathitrust.org/Record/011555864）2018 年 3 月 19 日アクセス。
（61）　Gayle Veronica Fischer, *op.cit.*,p.116.
（62）　Joan Severa, *op.cit.,* p.249.

図・写真・地図の所蔵先・典拠

図 1　Alison Gaines, Mary Edwards Walker, *The Only Female Medal of Honor Recipient*, Cavendish Square, Publishing, LLC, New York, 2018, p.81.
図 2　議会図書館提供。Carol A. Kalmerten, *Women in Utopia,* Syracuse University Press, 1998, p.105..
図 3　Carol A. Kalmerten, *ibid*., p.101.
図 4　Gayle Veronica Fischer, *op.,cit.*, p.84.
図 5　典拠、ユネスコ世界文化遺産委員会の第 25 セッションの議事録。File 429 rev.pdf.（G.Hunt 作、New Lanark Conservation 所蔵）。
図 6　典拠：Josephine Mirabella Elliot（edited by）, *Partnership for Posterity, The Correspondence of William Maclure and Marie Duclos Fretageot, 1820-1833*, Indiana Historical Society, Indianapolis, 1994, p.455.
図 7　典拠：*Ibid.*,p.584.
図 8　典拠：*Ibid.,* p.397.
図 9　http://historic-memphis.com/biographies/wright/wright.html

Donald E. Pitzer, *New Harmony Then & Now,* Indiana University Press, 2012, p.73

図 10　http://historic-memphis.com/biographies/wright/wright.html

図 11　J. C. Buttre 作からの写真。Oneida Community Journal, Vol.25, No.2, September　2011, Oneida, NY, p.5.

図 12　Charles Nordhoff, *op.,cit.,*p.177.

図 13　典拠：Edward Warwick, Henry C. Pitz, Alexander Wyckoff, *Early American Dress: Colonial and Revolutionary Period*, Bonanza Books, New York., 1965, 図 52。

写真 1　典拠：マドレーヌ・デルピエール著、濱田雅子訳『子供のモード　1750-1950』（装苑アイ、1993 年 No.12, 文化学園ファッション情報センター）p.14.

写真 2　オナイダ共同体マンション・ハウス提供。Gayle Veronica Fischer, *Pantaloons and Power, A Nineteenth Century Dress Reform in the United States*, 2001, Kent States University Press, p.168.

写真 3　オナイダ共同体マンション・ハウス提供。Gayle Veronica Fischer, *op.cit.*, p.55.

写真 4　Joan Severa, *op.cit.*, p.248.

地図 1　上田千秋著『オーウェンとニュー・ハーモニー』（ミネルヴァ書房、1984 年）p.193.　を修正。

地図 2　https://en.wikipedia.org/wiki/Oswego_Canal（2018.10.25）を修正。

第3章

ブルーマーリズムと衰退

1　新しいコスチュームの提唱

本章は拙著『アメリカ服飾社会史』第3章を加筆・修正したものである[(1)]。

第2章の冒頭で述べたように、クリノリン・スタイルに挑戦して、女性の社会的地位の向上を目指したアメリア・ブルーマー夫人が提案したとされる「ブルーマー・コスチューム」はよく知られている。

アメリアは1818年にニューヨークのホーマーで生まれ、1840年に弁護士でジャーナリストでもあるデクスター・ブルーマーと結婚した。彼女は、結婚前から禁酒運動に関心をもち、1842年まで地方の禁酒運動に関する刊行物である『ウォーター・バット』にその主張を寄稿していた。その後、彼女の関心は広がり、当時まだ認められていなかった女性の政治参加におよんで、最終的に女性の人権や参政権などといった社会的地位の向上にむけて積極的に発言するまでになった。1849年に創刊された雑誌『ザ・リリー』では、エリザベス・C・スタントン、スーザン・B・アンソニーらとともに、禁酒や女性の権利、ドレス・リフォームについての記事を寄稿して、同誌は女性の権利向上に大きな影響力をおよぼした最初の雑誌と評価されている[(2)]。ブルーマ

ー・コスチュームは、地方新聞『セネカ・カウンティ・クーリエ』紙にこの新聞の編集者が掲載した記事をきっかけにして、その後『ザ・リリー』誌上で提案されていったものである。『セネカ・カウンティ・クーリエ』紙の記事は、有名な女優ファニー・ケンブル(Fanny Kemble, 本名　Frances Ann Kemble, 1809~1893)が、1849 年にトルコ風ズボンの衣装で現れたと記しており、もし女性がトルコ風ズボンやちょうど膝下丈のぴったりしたや実用的な帽子を着用するようになれば、より健康的でより慎ましやかになるだろうということを示唆したのである。

ブルーマー夫人は、その地方新聞の保守的な編集人がこのようなコスチュームを提案し、わずかな修正、とくに靴のかわりにブーツを加えて同意したことに驚かされた。地方新聞『セネカ・カウンティ・クーリエ』紙に掲載されたこの記事は、1851 年 2 月に『ザ・リリー』誌上に再版して掲載された。『ザ・リリー』の次の号で、彼女はブルーマー・コスチュームに賛同する仲間の女性たちを得て、実践する勇気を奮い立たせると、すぐにその衣装を準備した。こうして 4 月までには、自らショート・ドレスとパンタロンを着用しているということを喧伝する。

「セネカフォールズの女性の一部が女性の服装のスタイルを改革し始めたことを知ってうれしいです。私たちは、スタイルが導入されたかどうかはっきりとはわかりませんが、世界で最も美しく優雅な女性のドレスである短いドレスとトルコのズボンのスタイルであるものと思われます。ストリートを掃く流行の引き裾に対抗して道を歩む道徳的な勇気と堅実さは、私たちの賞賛を必要とします。新しいスタイルがここで採用されたのであれば、長官は着用者に損害賠償を求めることでしょう。歩道や交差点の掃除は、都市の仕事に振り向けられます[(3)]。」(『ザ・リリー』1851 年 4 月 1 日) と記されており、彼女はブルーマー・コスチュームが実用性に富むことを、身をもって伝えたかったことが窺える。

2　もともとの考案者

アメリアが提唱したと言われてきたブルーマー・コスチュームという特異なスタイルは、エリザベス・キャディ・スタントンのいとこであるエリザベス・S・ミラーの協力がなければ採り入れられなかったであろう。スタントンはセネカフォールに1847年から住んでおり、アメリア・ブルーマーと永続的な友情を築き、禁酒や女性の権利やドレス・リフォームの記事を『ザ・リリー』誌に書いていた。ミラーは1850年にハネムーンでヨーロッパへ旅行した際、スイスにあるサナトリウムを訪れた。そこで、コルセットによるきつい紐締めの影響と運動不足から健康を損ねた女性たちが、トルコ風ズボンと短いスカートを着用しているのを見たのである。それから間もなく、ミラーはこの衣装にヒントを得た万能の旅行用衣装を考案し製作したのであった。この衣装を見た彼女のいとこのスタントンは、次のように述べている。



図１　ブルーマー・コスチュームをまとう女性（19世紀中頃）。

「私のいとこが片手にランプ、もう片方の手には赤ん坊を抱き、楽々と階上へ歩くのに対し、私は垂れ下がるロープのためにランプや赤ん坊など問題外で、スカートをたくし上げてかろうじて階段を

上った。私はすぐに女性の衣服の改革の必要性を痛感し、すぐにいとこと同様の衣装を身につけた(4)。」

さらに、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーが言うように(5)、彼女はオナイダ・コミュニティのエリア内に父親のゲリット・スミスと一緒に住んでいたことを考えると、彼女が自由ドレスをデザインする前に、オナイダの衣装を知っていたと仮定するのは、理不尽ではないだろう。

また、第1章のまとめで述べたように、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーによると、オナイダの短いドレスは、自由ドレスの前身であるだけでなく、そのデザインに影響を与えている可能性があるという。また、地方紙のオブザーバー紙は、1848年に、オナイダ共同体において、100人以上の女性が、ほぼ同じ衣装の宗教的バージョンを着用し始め、それは、明らかに「ブルーマーリズムの萌芽」であることを認識していたという。

こうして、スタントンが黒のサテンの新しい衣装で現れた直後に、ブルーマーも同様なスタイルで現れたのである。つまりトルコ風ズボンは「創案」ではなく、「原案」についてはミラーかあるいは、前述の有名な女優ファニー・ケンブルが1849年に同様の衣装で現れたと記した『セネカ・カウンティ・クーリエ』の編集者かどちらかの功績によるものなのである。

ブルーマー・コスチュームが注目されはじめると、多くの人々がその型紙を求めるようになったので、ブルーマーは1851年5月の『ザ・リリー』に衣装の詳しい説明を載せている（図1）

これによると、ズボンまたはパンタロンはドレスと同じ生地製になり、足首にゴムバンドでギャザーが寄せられたり、ボタンで留められ

たり、あるいは彼女が好んだように履き口から約2インチのところでギャザーが寄せられたり、プリーツが入れられたり、フリルがブーツを覆うようにされた。ドレスは前開きで、肩から膝丈までのチュニック風に作られ、通常のようにギャザーが寄せられたものか、ウエストの部分でぴったりさせてチュニック・スタイルで裁断されたものであった。ショールは利用されなくなり、チュニックやマンティラに変わった。そしてブーツやゲートル、丸い帽子でそのスタイル一式は整うわけである。

ここで、ジェラルド・カーソンの説を紹介しておこう[6]。彼は、1851年6月、アメリア・ジェンクス・ブルーマーとエリザベス・キャディ・スタントンが、グレン・ヘヴンで開催されたヘルス・コンベンションに参加したときに、トルコ風のズボンと短いドレスをジャクソンとオースティンに紹介した。カーソンの報告の中に、オースティンは衣装を見て、すぐそれに「恋に落ちた」という記述が見られた。オースティンは「自由服である衣装を採用して」自分のデザインであるアメリカのコスチュームを作ったという。ジョーン・セヴラの著書には、以下のように、オースティンの写真（**写真１**）と解説が掲載されている[7]。



写真１　ハリエット・オースティン博士、1865-67年。

ジェームズ・C・ジャクソン博士の養女であったハリエット・オースティン博士が、彼女流の『アメリカン・コスチューム』を着てポーズを取っている。彼女は温泉保養施設『丘の上のわれらの家』の共同経営者だったので、この服はおそらく彼女の普段の服装の

ひとつの見本といってよいだろう。

このアンサンブルはブルーマードレスに似てはいるが、ズボンが非常に男性的なことと、平らな靴をはいている点が違っている。しかし、黒いベルベットのチュニックは、1860年代半ばに流行した女らしいスタイルである。細くてほんの少し先が広がった長い袖の下には、手首にフリルの付いた上質の白モスリンのアンダースリーブを着用しており、これとお揃いの衿もとのフリルとの効果で、全体の印象がいくらかやわらげられている。黒いシルクスカートは膝の少し下までの丈で、当時の一般的なスカートと同じくらい膨らみが出るよう裁断されている。フープは着用していないものの、スカートの膨らみを支えるために十分な枚数のペチコートをはいており、スカートの形に女性らしさを与えている。

ハリエットはウエスト部分に、いくぶんこれ見よがしに時計の金鎖を下げているが、これは女性の一般的なファッションではない。彼女の髪はボブヘアで、天然のウエーブか、若い女性らしくカールさせたかは不明だが、波打つ髪をとてもシンプルな髪型に整えている。このスタイルはドレス・リフォーム運動の初期に、最も解放的で簡素であると同時に、締め付けのない健康的な服装やライフスタイルに合った髪型として選ばれた。

3　社会の反応─賛否の渦

ショート・ドレスやトルコ風ズボンの出現は、新聞・雑誌メディアで大きくとり上げられ、その賛否はさまざまであった。『クーリエ』や『ザ・ニューヨーク・イブニング・タイムズ』『クノーシャ・テレグラフ（ウィスコンシン）』は、この衣装に概して好意的であったから、一般

に考えられているよりも多くの支持を受けていたことが分かる。「水曜日の午後、私たちの最も尊敬できる市民の２人の妻たちが短いドレスとズボン姿で登場しました。ファッション全体が適切であり、それを裏付けるための常識を示しています [8]。」と『ザ・リリー』に再版された『クノーシャ・テレグラフ（ウィスコンシン）』の記事には書かれている。（1851年6月1日）。

しかし、賛同しないメディアも少なくなかった。『ザ・ニューヨーク・トリビューン』は、その衣装は太って見え、ガニマタの印象を受けるとコメントし、『パターソンズ・マガジン』も、この衣装は上品ではないと述べたのである。ちなみに、この時代の最も有名な女性誌である『ゴーディーズ・レディーズ・ブック』は、この衣装を無視することで論争から逃れた。つまり、ブルーマー・コスチュームの賛否が分かれたため、読者を遠ざけないように、あえてこの話題には触れないようにしていたのである。

ブルーマー夫人は『ザ・リリー』誌で、すべての論調に反駁することに努めた。ブルーマー・コスチュームは上品ではないと非難した人々に対して、彼女は活動的な女性や家事を強いられた女性のかさばった衣服よりも上品であることを主張したのである。

1851年6月の『ザ・ニューヨーク・トリビューン』では、ブルーマーリズムに関する意味深長な個人的見解が掲載された。ニューヨークでブルーマー・コスチュームを装って、初めて夫と一緒に散歩した時のことについて、記者である女性が次のようなことを述べている。すなわち街に出て彼女が最初に出会ったのは、通りの向こうに住んでいる年輩の独身男性であった。彼は近づいてくる彼女を見た時、しばしポーズをとってから、とうとう自分の帽子で顔を隠してしまった。また、女性は何度も立ち止まったり、来た道を振り返ったり、もう一度その道を戻ったりする羽目になった。通りで遊んでいる子どもたちでさえ彼女ら夫婦の後を追い、その衣装について大声で騒々しくはやし

立てた。つまり彼女はニューヨークでのブルーマー・コスチュームに対する反応は嘲笑か驚きかのどちらかであったというのである。

また『パターソンズ・マガジン』誌上でも 1851 年からブルーマーについての議論が掲載されたが、一年を経た 1852 年 4 月までにこの衣装が現在は流行遅れとなり、以前流行したようにフィラデルフィアの通りでは見られなくなったということを指摘している。事実、その 2、3 年後には忠実な支持者であったスタントンでさえ、家族によってブルーマー・コスチュームを着用することをやめさせられたのである。当のブルーマーは 1857 年頃まで着用し続け、ミラーもまた、ワシントン D.C.での晩餐会や招待パーティーでこの衣装を着用し続けた。

衣装が“流行遅れ”といわれた直後、ブルーマー夫人は個人的には着用を続けたものの、それについての発言や推奨をやめている。それにもかかわらず彼女が着用したブルーマー・コスチュームの詳細は新聞紙上で忠実に報告され続けた。つまり、賛否は別としてもブルーマー・コスチュームへの注目度は依然非常に高かったことがうかがえる。このスタイルに反対していた『ザ・ニューヨーク・トリビューン』でさえ、1853 年の彼女の衣装について詳細に記述しているのである。

4　衣生活への浸透度

流行としてのブルーマー・コスチュームは、約 1 年間（前頁のパターソンズ・マガジンの記事からも明らか—濱田）と短命であった。その間、彼女は一度もこの衣装の流行を企図したことはなかった。彼女が望んでいたのは、実用性に富んだこの衣装を流行に終わらせることなく、最終的にほとんどの女性が採り入れてくれることだったのである。だが、それに反してこの衣装は人々や新聞の嘲笑が原因で長続きしなかった。「社会的影響力のある女性たちが気乗りしないファッショ

ンは、それを奨励してくれなければはやらないという。われわれが１月号で報じたように、滑稽な衣装が頻繁に着用されてきた。しかしこの衣装は最初、著名なファッションリーダーによって導入されたのである[9]。」と、『パターソンズ・マガジン』はこうした顛末を評している。『ゴーディーズ・レディーズ・ブック』の場合は冷徹であった。ブルーマー・コスチュームがはやらなくなってしまうまで、この衣装を無視し続けたのである。

では、実際の衣生活のうえでは、ブルーマー・コスチュームがどのような影響を与えたのだろうか。ミネソタにおける賛否の論調からさぐってみよう。

1845年から1869年のミネソタではクリノリン衣装が流行していた。糊付けしたペチコートが何枚も重ねられ、スカートの広がりは動作を不自由にしていた。それゆえ、ブルーマー・コスチュームはとくにミネソタの中西部で流行したのである。以下にその実態に触れた新聞記事を紹介しよう[10]。

○『セント・ポール・パイオニア』紙（1851年7月24日）の記事

ショート･ドレスとパンツがガレーナ･ドュビュックに登場した。…これはスー一族の横断路で流行している女性用の衣服である。夏のリゾート用の流行、あるいはセント・アンソニー・エクスプレスがミネソタのサラトガと呼んでいる衣服である。この衣服はわれわれの街で、日常、ネイティヴが着ている。

○『セント・ポール・パイオニア』紙　（1853年7月13日）の記事

たくさんの人々がボートに押し寄せて挨拶をしあった。25人の男性と6人の女性たち…。女性たちは全員がブルーマー・ファッションに身を包んでいた。ここは有名な町ブルーメルヴィル（ブルーミングタウン）である。

このようなスタイルのドレスは、ファッション・デザイナーと一般

女性からは猛反発を食った。ジェーン・スイッシェルムは「これらのドレスは、皆が着るには不恰好で優雅ではありません」とこのドレスに賛成しなかった。彼女は「私たちのロング・ドレスは実に大きな障害物ですね。…たしかにショート・ドレスとパンタロンはとても便利ですわ。…ただしあくまでも、この衣服が男性の衣服と十分に異なる女性的な特徴があり、男性のものと区別できるものだったらということです。(ブルーマー・コスチュームに条件付で賛成していると考えられる—濱田)…私たちは殿方のパンタロンに対する権利を保つため、あらゆる影響力を行使すべきです。パンタロンは皆が着用するにはあまりにも不恰好。これは男性のものです」と主張して、長いスカートを擁護したのである。スイッシェルムは頑なで、ブルーマー夫人は「軍法会議にかけられて、彼女の権利を剥奪されるべきだわ」と言い放つほどであった[11]。

当時のブルーマー・コスチュームは、過渡的な段階であり、デザインや着用上の難点を指摘する声はたしかに強かったようであるが、かといって容易になくなりはしなかったという。

5　ドレス・リフォームから女性権利運動へ[12]

1851年、ドレスの改革は、アメリカの歴史の中で初めてズボンと女性の権力が合体した問題として公表された。以前は女性が自分の目的に合わせてドレス・リフォームを行い、19世紀のジェンダーシステムに挑戦したことはなかった。エリザベス・スミス・ミラー、エリザベス・キャディ・スタントン、アメリア・ジェンクス・ブルーマーは、最初は女性の権利に焦点を絞ったのではなく、身体的に解放された、改革衣服の健康面を考慮して、最初の自由なドレスを作ったのである。

エリザベス・キャディ・スタントンは、ショート・ドレスを着たと

きには､｢夕暮れの散歩や雪と雨が降るなかでの散歩､山登り､柵越え､庭園での作業、そして必要なすべての運動のためにいつも準備ができていたことを思い出しました。衣服は、私が思うように身体を動かせるような気持ちにしてくれました」と彼女は言った[13]という。

しかし、女性の公的合理的なドレスの創設者は、女性の健康を改善するという意図された目的で、すなわち政治的に受け入れられる姿勢で、ドレス・リフォームを実施したにもかかわらず、実験のために厳しい嘲笑を受けた。

スタントンは､間もなく､短いドレスの実用性を擁護することから、彼女のフェミニスト哲学の原則としてのドレス・リフォームに焦点を当てることにシフトした。なぜなら、国民は既に、要求の高い平等な権利を持つドレス・リフォーム論者を責め始めていたからである。スタントンは彼らの批判をかわし、女性の権利活動家をドレス・リフォーム論者のために合意に至らせた。スタントンによると、長いスカートは社会における女性の「堕落」を象徴していた。短いドレスとズボンのアンサンブルは、個人の家庭や閉鎖されたコミュニティやリゾートで着用された「宗教的」または「健康的」衣服から、女性の権利のための戦いに密接に関連した「公的」かつ「政治的」衣服になったのである。

すべてのドレス・リフォーム論者は、たとえ女性の権利活動家から離れていたとしても、女性の権利に対処しなければならなかった。直接的および間接的に、19 世紀後半に女性の権利の形をしたドレス・リフォームの問題が浮上してきた。

前述のように、大衆的なドレス・リフォームが私的なドレス・リフォームに影響を与えた最初の兆候の 1 つは、1851 年 8 月のグレンヘブン水治療で開催されたフェスティバルで現れた。このフェスティバルは健康改革とドレス･リフォームへの転換を促すことを期待していた。これはプライベートスパの外の公的な領域で、水治療服の改革を進め

る最初の試みであった。エリザベス・キャディ・スタントンとアメリア・ジェンクス・ブルーマーがショート・ドレスを身に着け、水治療ピクニックに参加した。おそらく「才気あふれて、面白い」会話は、短い服装への賞賛と「長いドレス」への嫌悪感が話題の中心になったことであろう。

祝祭の間、ジェームズ・C・ジャクソン博士は、ショート・ドレスについて一般の人々を教育し、乳児のドレス・リフォーム運動を強化し、新しい衣装を公に着用した女性を支援する組織を設立するよう提案した。だが、誰も彼の提案を取り上げなかった。人々は、大衆的なドレス・リフォーム組織の必要性を認識していなかったため、誰もジャクソンのアイデアに追いつくことができなかった。ジャクソンは5年間に渡って取り組んだドレス・リフォーム協会の組織化に失敗したが、彼と他の水治療者たちは、女性の権利主張者とともに、1850代初期に公衆の前でドレス・リフォームの着用を続けた。水治療ジャーナルは、水治療医師がドレス・リフォームを生き残らせる方法の一つとなった。1851年以前は、ドレス・リフォームに関する記事は、時折、掲載されただけであった。アメリア・ジェンクス・ブルーマーの衣装がニュースになったように、新聞は読者の要求に応じて、定期的なドレス・リフォーム欄を印刷し始めた。さらに、女性の権利活動家は、改革服を政治的議題の一部とすることで、この衣服が、オーウェン衣装のように国民の意識から消えないことを保証した。

やがてスタントンは改革衣服の着用を止めるのである。スタントンの衣服改革への考えの変化と彼女の服装の変化について、以下、ゲール・ヴェロニカ・フィッシャーの論文に委ねることにしよう[14]。

スタントンは、自由なドレスの政治化を主に担当していたが、彼女は女性の権利支持者がドレス・リフォームの原因を取り上げるべきかどうかに関して、早期に疑念を抱いていた。彼女の疑問はおそらく、1851年にドレス・リフォーム協会を創設するうえで、水治療主義者と

合流しないという彼女の決定に影響を与えたものと思われる。スタントンはまた、彼女が改革衣服を着用し続けなければならないだけでなく、ドレス改革に完全にはコミットしない他の女性を説得しなければならなくなったのである。

スーザン・B・アンソニーにこのドレスを採用するように説得するために、6カ月以上を費やした。最終的にアンソニーが彼女のスカートを短くし、トルコのズボンを作ったのは、ファッショナブルなドレスのバリエーションとは異なり、衣装が「アメリカの勤勉な女性」を疎外しないと彼女は信じていたからである。

エリザベス・キャディ・スタントンは、1853年の終わりまでに、女性の権利活動家として初めて改革衣装の着用を止めたのである。1854年の女性権利会議がアルバニーで会合した時までに、彼女のペチコートは元の長さになり、彼女のワードローブから、すべての短いスカートが取り除かれた。彼女はスーザン・B・アンソニーに「大義のために」彼女の短いスカートをあきらめるように懇願した。結局、スタントンは、ドレスの改革とファッションに関する批評の重要性は、女性の政治的権利の重要性と同等ではないと判断したのである。

アルバニーのコンベンションの数ヶ月後、アンソニーは彼女のドレスやペチコートの裾を短くして、1年余り自由服を着た。アンソニーの衣装への態度の変化は、彼女が女性の権利の原則を具現化した短いドレスを身に着けているという彼女の確信から生まれた。だが、結局、エリザベス・スミス・とアメリア・ジェンクス・ブルーマーだけが長い間、自由ドレスを着ていたのである。

ミラーは時には改革ドレスを“厄介”であると思っていたにもかかわらず、彼女の父親のゲリット・スミスからの圧力を受けて、さらに7年間改革ドレスを着用し続けた。1855年、アメリア・デクスター・ブルーマー夫妻はアイオワ州カウンシル・ブラッフス（Council Bluffs）

に移住した。ブルーマーの短いスカートが彼女を恥ずかしく思わせることもあったが、彼女はそれを原則から守り続けた。しかし、高い風が彼女の頭の上に彼女のスカートを巻上げたときに､彼女を 大いに悩ませ、怒らせた。1858年、ブルーマーは、長いスカートに戻ることを決めたのだが、彼女は、その頃には、短いスカートの興奮は落ち着いていたと主張した。

19世紀のフェミニストたちが自由服を着用しなくなった理由を詳述している。そのうちのいくつかの説明は、女性自身、執筆者、歴史家によって提供されたものである。

スーザン・B・アンソニーは、ドレス・リフォームと女性の権利という二つの改革を促すことで､「両方の人が傷ついている」と結論付けている。したがって、女性の権利に焦点を当て続けるために、女性は長いスカートに戻ったという見解がある。

もう一つの解釈では､改革服は､デザイン上の瑕疵に苦しんでおり、当時のファッションから大きく外れていて、不平等と崩壊に寄与していたという見解がある。他のアナリストは、女性の権利のための闘いにおける副次的な問題として、ドレス・リフォームは活動家の注目を集めていないことを示唆した。

1851年2月、ブルーマーとスタントンは、相手、特に男性が女性を長いドレスに戻すために膨大なエネルギーを費やしていることに気づいていなかった。喫煙の似顔絵、ズボンを穿いたフェミニストの似顔絵は、より一般的な攻撃の形態の1つであった。

結局のところ、力関係はフェミニストを長いスカートに戻すように導いた。1854年までに、ほとんどの女性が改革衣服あきらめたのである。

全国ドレス・リフォーム協会（NDRA）に参加したような社会における女性の地位を変えることを約束したドレス・リフォーム論者は、女性の抑圧における美とファッションの役割の解釈において、女性の

権利運動家とは異なっていた。幾人かのドレス・リフォーム論者は、女性の権利支持者とは異なる場所で戦いを選んだフェミニストとして分類することができる。

ブルーマー・コスチュームが大きく取り上げられたのは、それが女性の服装の改革を求めていたということにとどまらず、その衣装を着た女性が、女性の権利向上のために当時の社会的秩序を変革しようとしていたという意味をも含んでいた。当時発行された多くの風刺画には、ブルーマー・コスチュームを着た女性は単に男性と同等になることを欲し、男性のような行為や着衣を望んだばかりではなく、彼らの支配者になることまでも望んだのであろうことを暗に匂わせ、揶揄したものも多い。実際、ブルーマー夫人やその衣装の多くの支持者は女性権利運動のリーダーであったし、ブルーマー夫人自身「ショート・ドレスと女性の権利は不可分[15]。」と言っているくらいだから、まぎれもなくブルーマー・コスチュームは女性権利運動の一部と捉えられていたはずである。

これまで述べてきたように、ブルーマー・コスチュームは短命であった。しかし、その特異なスタイルが女性のドレス・リフォームを提唱するものとして国中の注目を集めた点は見逃せない。そしてファッション誌のみならず主要な新聞などでも頻繁にとり上げられ、女性の権利運動を意識しつつ議論された事実は、単なる一過性の流行として軽々しく排除することができないことを示している。

ちなみに、ブルーマー・コスチュームは、女性のドレス・リフォームのなかで最も必要な要素のひとつでもあった、きつい紐締めを取り除くことには失敗している。なぜなら、その衣装の下にきつく紐締めしたコルセットを着用するという衣習慣がまだ続いていたからである。

6　異なる方向への定着

奇妙なことに、ブルーマー・コスチュームまたはこれに類似した衣装は、ブルーマー夫人が意図しなかった方向で定着していくこととなった。

1853年、彼女がコネティカット州ホーマーを訪れた時、その地で家事をする際にショート・ドレスとズボンをまだ着用している女性がいることを聞いて大いに喜んだ。スタントンも、その衣装が農夫の妻たちはもとより、体操選手や旅行家、このズボンの発案のきっかけを作ったサナトリウムにいる女性たちに支持されているということを報告している。

トルコ風ズボンと呼ばれる衣服は、しばしば運動着として受け入れられた。19世紀半ばの、運動着一式を描いたあるイラストには、ブルーマー・コスチュームの外見とほぼ同じ形態の衣服が描かれている。ある先駆的な新聞では、こうした衣服をブルーマー・コスチュームではなく、散歩や乗馬を楽しくさせた運動用衣装として認めている。それにもかかわらず、“ブルーマーパンツ”としてのズボンを好んではいないのである。

7　まとめ

結果として、ブルーマー夫人の運動自体はあまり大きな成果をあげることができなかったとはいえ、率先して女性の社会的地位の向上を目指したことや婦人服の実用性を掲げたことには大きな意義があるだろう。彼女は、嘲笑を浴びながらもブルーマー・コスチュームの実用性を、身をもって主張した。にもかかわらず、それは単なる流行として捉えられたため、長く続かなかったのである。それは、やはりその衣装の男性的外観が根本的な原因だと思われる。ブルーマー・コスチ

ュームと運動用衣装の間には、その形状においてほとんど違いが見られなかったはずなのに、運動用衣装としての側面だけが生き残ったというところにも、当時は女性が男性と同じ権利を持つにはまだ遠かったということが充分理解できよう。

【注】

（１）濱田雅子著『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009 年）pp.110-118.

（２）Charles Neilson Gattey, *The Bloomer Girls*（London, 1969）, p.39.

（３）Lily, April 1, 1851. Accessible Archives, 5 Great Valley Parkway, Suite 216, Malvern, PA 19355, 866-296-1488.

（４）Elizabeth Cady Stanton, *Elizabeth Cady Stanton as Revealed in her Letters, Diary and Reminiscences* (New York & London, 1928) vol.1, p.171, quoted from Shelly Foote, Bloomers, *Dress,* Vol.5,1980, p.3.

（５）Gayle Veronica Fischer, *Who Wears the Pants, Dress Reform, and Power in the Mid-Nineteenth-Century United States*, UMI, 1995, p.109.

（６）*Ibid.,* p.118.

（７）Joan Severa, *Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashions, 1840-1900,* Kent State University Press, 1995, p.257.

（８）Lily, June 1, 1851. Accessible Archives, 5 Great Valley Parkway, Suite 216, Malvern, PA 19355, 866-296-1488.

（９）Peterson's Magazine　（April, 1852）,p.232.

（10）Suman Ananth Shenoi, *Women's Costume in Minnesota during Nineteenth Century*, Master's Thesis, University of Minnesota, 1967, p.53.

(11) *Ibid.*, p.54.

(12) Gayle Veronica Fischer, *op.cit.*, pp.140-149.

(13) Elizabeth Cady Stanton: As Revealed in Her Letters, Diary, and Reminiscences, edit. by Theodore Stanton and Harriot Stanton Blatch (New York: Harper & Brothers Publishers, 1922), pp.172-173, quoted in Gayle Veronica Fischer, *op.cit.*, p.138.

(14) Gayle Veronica Fischer, *ibid.*, pp.145-148.

(15) Quoted in Dexter C. Bloomer, *op.cit.*, p.70.

図・写真の所蔵先・典拠

図1 Charles Neilson Getty, *Bloomer Girls*, Femina Books, 1967, p.48. Raymond Mander & Joe Mitcheson Collection.

写真1 Deborah Fontana Cooney 提供。Joan Severa, *op.cit.* p.257.

第4章

ドレス・リフォーム運動の復活から衰退へ

1.『シビュラ』紙に見るドレス・リフォーム思想

第3章では「ブルーマー運動」の実態とその衰退、衰退の要因について検証した。「ブルーマー運動」の衰退後、ドレス・リフォーム運動が復活する。本章第1節では、この運動の復活に取り組んだリディア・セイヤー・ハズブルック（Dr. Lydia Sayer Hasbrouck, 1827~1910）が編集した機関紙『シビュラ』(*Sibyl*) 紙におけるドレス・リフォーム思想について論じることとする。時期としては、1856 年から 1865 年に焦点を当てる。この時期はズボンに短いドレスを着用している女性が、路上にこの衣服を持ち出し、それを支持する人々と蔑視する人々の注意を引いたために、おそらく最も活発な議論が展開された時期であったといっても過言ではない。また、この時期に『シビュラ』が刊行され、全米ドレス・リフォーム協会（National Dress Reform Association）が設立されたのである。

『シビュラ』の内容を紹介するに当たって、リディア・セイヤー・ハズブルックとメアリー・エドワーズ・ウォーカー（Mary Edwards Walker）の関係、ハズブルックの結婚、『シビュラ』刊行の背景につい

て、アリソン・ゲインズ（Alison Gaines）[1] に拠って書いておこう。

メアリー・E・ウォーカーとリディア・セイヤー・ハズブルックは同じサークルの多くで活躍した。どちらも生涯にわたり服装改革の提唱者であり、両者は同時にニューヨーク州のニューヨーク水治療カレッジに入学した。だが、同時に通ったわけではない。ハズブルックは 1849 年に改革服を着始めた。彼女はそれを身に着けていたため、フロリダ州のスワード神学校への入学を拒否された。彼女は、その後、この衣服の原則と利便性の問題に固執した。戦争が終わった後、ウォーカーにドレス改革協会に公式に協力してくれるように頼んだのは、ハズブルックだった。

リディア・セイヤー（Lydia Sayer)、当時のハズブルックは短い講習を終え、ワシントン DC で医学研修に従事した。ウイッグ・プレス（Whig Press）の編集者ジョン・ウィットベック・ハズブルック（John Whitbeck Hasbrouck, 1821~1906 ）は、彼女に 1856 年にドレス改革に関する講義ツアーに参加するよう頼んだ。彼はまた、フェミニストの機関紙『シビュラ』を刊行し、リディアは編集者になった。 最初の号が印刷された数週間後、ジョンとリディアは結婚した。彼らはニューヨークのミドルタウンに住んでいて、『シビュラ』はそこから出版された。『シビュラ』は 1856 年から 1864 年にかけて刊行された。ウォーカーは『シビュラ』に時折、記事を書いた。『シビュラ』は、「あらゆる生活部門の改革に捧げられた 8 ページの半月刊誌」と呼ばれていた。しかし、その焦点は、女性の医学教育の重要性とリディア・ハズブルックが研修した水療法の話を含むドレスの改革であった。ジャーナルの内容のほとんどを作成しているハズブルック自身は、ドライだが、ウィットに富んでいた。

次にジョーン・セヴラの著書に掲載されたリディア・セイヤー・ハズブルックと彼女の夫、ジョン・W・ハズブルックの写真（**写真 1**）と解説を紹介する [2]（

この珍しい写真に写っているのは、ドレス・リフォーム論者とその夫である。リディア・セイヤー・ハズブルック（Lydia Sayer Hasbrouck, 1827~1910）は、全米ドレス・リフォーム協会（American Dress Reform Association）の機関紙『シビュラ』（*The Sybil*）』の編集者であり、協会の創設メンバーであった。彼女は、この写真の姿が物語るように自らの責務を真剣に果たし、つねに改革派らしいドレスを着ていた。彼女の夫、ジョン・W・ハズブルックは、その面での彼女の努力を全面的に支持していたに違いない。でなければこの服装の彼女と一緒に写真を撮りはしなかっただろう。

ドレス・リフォーム論者たちは特に極端な主張をしているつもりはなく（彼女たちを非難する人々は口を揃えてそうけなしていたが）、実際、「男のような」服装をすることは避けようとしていた。女らしい可愛いアクセサリーを身に着け、どんな流行の衣服と比べても遜色のない上質な生地を使った。このスタイルを支持するハズブルック夫人やその他多くの人々はこうした改革派ドレスについて講演し、健康上好ましい効果があることとともに、シンプルで女性らしい服装だと訴えた。ただ、彼女たちの声を本当に受け止めたのは、肉体労働をする女性たち——農場で働く女性や家に小さい子どもがいる女性——に限られたようで、そのうえそうした人々も、改革派の服装をするのは仕事や子どもの世話をする時だけであった。ドレス・リフォーム論者たちは、自分たちが勧める服を一日中着るという考え方を人々に浸透させられなかっただけでなく、新聞や街中でますます嘲笑された。

写真のハズブルック夫人の服装は、非常に低いウエストライン、長い袖、縁飾りのスタイルから判断して、上質のシルクの錦織生地を使った1850年代中頃のドレスを、節約のため



写真1　リディア・セイヤー・ハズブルックと夫。

にリフォームしたように見える。

（彼女はそれが流行遅れだということを気にしなかったろう。ドレス・リフォーム運動のもうひとつの教えは、絶えず変化するファッションの要求を無視することであった。）ドレスの色は、おそらくモスグリーンと青だと考えられる（当時は茶色と青のような組み合わせにも人気はあったが）。彼女は、スカートを短くし、余った布でズボンを作ったほか、（トリミングの線から判断するに）窮屈なネックラインを楽にするために前身頃のフロント部分をおかしな具合に内側に折り返している。胸元は上質の白いシュミーズで覆われている。

彼女は、当時流行していたやわな靴ではなく、きちんとした頑丈なブーツをはいている。このブーツとズボンの細い脚部だけは、当時の人に「がさつな」服という印象を与えた。極めて女らしい雰囲気を出すために、よく考えた上で黒いレースの手袋が身に着けられている。ドレス・リフォーム論者たちが提唱したとおりにカットされた彼女の髪は、多くの女性たちがしていたように、シンプルにネットをかぶせてまとめられている。

ハズブルック氏の方は、上質の黒いウールで作った丈の長いゆったりとしたサックコート、同じ生地のベスト、こざっぱりとした白いシャツ、細い黒い蝶ネクタイという服装であり、典型的な1860年代のファッションである。薄い色のズボンは生地が柔らかく、折り目がない。ブーツは、つま先がスクエアなプルオン式のありふれたタイプである。



図１　『シビュラ』1858 年３月１日のマストヘッド。

以上のアリソン・ゲインズとジョーン・セヴラの解説を踏まえて、次に『シビュラ』の由来や記事の特徴について、キャスリーン・M・トーレンスに拠ってまとめる (3)。

『シビュラ』（*Sibyl*）は、古代ギリシャ、ローマの巫女、女予言者の名前に由来している。この新聞は各号のマスターヘッド（**図１**）にリフォームドレス姿の女性の絵が印刷されている。『シビュラ』には、ドレス・リフォームの支持者の特に衛生に関する意見、従来のファッションの有害な影響、ファッションに関する女性の意識、そして制限的な衣服からの女性の解放の必要性、女性の権利運動に関する記事が掲載されている。ここには「最前線」の活動家、そして家庭や地域社会でドレスを着た女性たちの運動の声が含まれている。

さて、19 世紀におけるアメリカン・ファッション、ニューヨーク・ファッションの特徴については、第１章の歴史的背景において詳述した。ここで述べた拘束的な衣装が女性の身体に及ぼした影響を想起しながら、以下において、『シビュラ』の記事に目を向けよう。

キャスリーン・M・トーレンスは「ドレス・リフォームは女性の権利運動との頻繁な交差のため、修辞的に重要である (4)」と述べ、『シビュラ』におけるドレス・リフォームの修辞的文脈を紹介・検証して

いる。以下、キャスリーン・M・ トーレンスの論旨に即して、『シビュラ』、および『ザ・リリー』の記事を紹介する。その上で、本項のまとめにおいて、『シビュラ』廃刊の背景について検証する。

キャスリーン・M・トーレンスに拠ると、「女性の身体への被害が広範囲に及んでいるにもかかわらず、これらのファッションは圧倒的に人気があり、ドレス・リフォームの主張者に、大きなチャレンジを行わせた」とのことである。そこで、編集長のリディア・セイヤー・ハズブルックは、『シビュラ』において、こう述べたという (5)。

> 真実、美しさ、健康、および、人間らしさという人類の決して静まることのない声のために、ファッションの奴隷になることに抗して、立ち上がらなければなりません。押しつぶされ、荒廃させられ、救済のために泣き叫び、さもなければ、邪悪な人が通った跡のように見なされ、ファッションの領域の引き裾やコードやストライプは、咲き誇っている魅力的な花のすべてを盗んで枯らしてしまいます。

さらに、リディア・セイヤー・ハズブルックは、その後、『シビュラ』に宛てた手紙では、次のように述べている、という (6)。

> 善悪の判断力がなく、愚かなうぬぼれが、彼らの仲間の生き物に負わせる苦悩を何ら理解できない社会やファッション・リーダーが是認することにではなく、神や自らの良心が是認することに、人は誰しも注意を向けるのではないでしょうか。

『シビュラ』に掲載された次の詩は、ドレス・リフォーム論者の

負担を総合したものである、とのことである[7]。

フープで縛られている婦人たちは、そのドレスが地面を掃除し、
誰の健康も今までに見つかったことはありません。
私は祈っています。
その日がやってくることを。その時が訪れることを。
あなたはタイラントの力を粉砕して、永遠に自由になるのでしょうか?
鎖や奴隷から？
すべてのフープと拘束から自由になることに
まだ挑戦している人たちもいます。
彼らが彼女の悩みに立ち向かうのを、
独裁者のファッションに知らしめようではありませんか。
姉妹よ、あなたが健康と喜び、心の安らぎを見つけたいならば、
自然の法律が従うファッションの神社にもはや従ってはなりません。
あなたの弱い苦しみのフレーム、
あなたの子どもの悲しみと苦痛によって、
あなたが暴君の鎖を壊すと断言するならば、
あなたは自由になるでしょう。

また、キャスリーン・M・トーレンスは、アメリア・ジェンクス・ブルーマーが『ザ・リリー』において、服装について書いた記事を紹介している[8]。

私たちは、スカートを膝と足首のほぼ半分にまで下ろし、ス

カートは現在のファッションのようにふっくらと作られていません。このスカートの下には、ズボンがほどよくふくらんでいて、気候が穏やかな場合には、足首に降りてきて（甲ではなく）、伸縮性のあるバンドにギャザーが寄せられています。機会に合わせて、靴やスリッパが履かれています。

さらに、キャスリーン・M・トーレンスは「ドレス・リフォーム派は、女性が社会で自由に、そして完全に機能することを可能にする魅力的で健康的な衣服を作りたがっていた」と述べ、ドレス・リフォームの努力の最も声援的な男性支持者の1人であるゲリット・スミスが、1857年1月のドレス・リフォーム大会での演説で、女性に懇願した記事を紹介している(9)。

女性が彼女の人生を延長したい場合、男と同じように彼女は固有の権利を行使する。彼女は、現在のばかばかしいパリ流の様式ではなく、彼女の権利を行使することができるような様式の服を着なければならない。私はこの真実が見え始めたこと、そしてこの大会に参加した女性たちの中では、彼らの判断と良心の確信を実際に守られていると信じてうれしい。しかし、あなたは嘲笑と虐待に耐えることを期待しなければならない。それは真の改革者の多くであり、この改革に従事する者は誰も逃げることを期待する必要はない。

第2章でフィッシャー論文から引用したように(10)、ブルーマーの衣装で知られるようになったセネカ・ホールズにエリザベス・スミス・ミラーが到着したことで、ドレス・リフォーム運動が引き起こされたと言われている。

女性の様々なグループは、ドレス・リフォームの大義のために、い

くつかのローカルな、国家規模の組織を作った。そこで、以下において、全国ドレス・リフォーム協会（National Dress reform Association）の設立、構成メンバーおよび活動内容について、キャスリーン・M・トーレンスに拠って、解説する[11]。

全国ドレス・リフォーム協会（National Dress reform Association）〔以下、NDRA と表記〕は 1856 年に設立され、1862 年を除き、1865 年まで、毎年、会合した。NDRA には会長と複数の副会長がいた。

NDRA の会長は次のとおりである。シャルロット・A・ジョイ（Charolotte A. Joy, 就任期間 1856 年、1859 年）、リディア・A・ストローブリッジ博士（Dr. Lydia A. Strobridge, 就任期間 1857 年、1858 年）、ハリエット・オースティン博士 （Dr. Harriet N. Austin, 就任期間 1861 年、1861 年）、リディア・セイヤー・ハズブルック博士（Dr.Lydia Sayer Hasbrouck, 就任期間 1863 年、1864 年）、メアリー・E・ウォーカー博士 （Dr. Mary Walker, 就任期間 1865 年）。ウォーカー博士は医者だった。各大会でリーダーシップが変わった。この組織を担当している女性は、はっきり名前が知られていなかったため、彼らの歴史は今日アクセスできない。彼らの名前は、学術的な議論や動きに関する書誌的なデータには稀にしか現れない。

NDRA のメンバーは中産階級の白人であった。19 世紀の有色人種の女性の経験には、一般的に、ドレス・リフォーム運動への参加は含まれていなかった。興味深いことに、組織の会長であった 5 人の女性のうち、3 人は水治療師であり、2 人は医師であった[12]。NDRA は男性を積極的に募集し、平等の理想を支持し、性別の共通性を強調した。メンバーは会費を払わず（寄付は積極的に求められたが）、12 歳になっていなければならず、組織が支援する原則を定めた憲法に署名する必要があった。会員数の正確な記録はないが、約 200〜400 人の男女が年次総会に出席したとゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーは書いている[13]。1865 年 6 月 21 日、NDRA の最後の大会には約 800 人が実際

に出席した。

特に初期の『シビュラ』のページに示されているように、ドレス・リフォーム運動の支持は、多種多様な人々から得られた。多くの人生を歩んできた女性たちは、改革服を支持して『シビュラ』に手紙を送り、多くの人が夫の支持を得たと主張した。

ドレス・リフォームの主張者は、女性の健康と幸福に関する合理的な議論を構築した。例えば、1856 年 6 月 18 日にニューヨークのホーマーで開催された NDRA の第 1 回大会では、以下が可決された (14)。

> 外国生まれの人を除いて、アメリカの女性、少女、女児の大多数が病気にかかっています。この病気は、ファッショナブルで長いスカートの衣服が原因であり、習慣のなかで、習慣を通じて、そして習慣によって生まれたものです。これらの習慣はこれらの衣服を奨励するだけではありません。それどころか手直しすることを禁じます。彼らの健康を芸術で克服することはできません。自然と彼女の法律に調和しているような生活の実践と習慣への復帰によってのみ、それを支配すべきであることは確かです。彼らの衣服とその習慣の中で成長している法律は、粗野で、明らかに永遠に法にそむいています。女性時代に成長して結婚したとき、彼らは病気を子どもに伝えます。すでに彼らはこれまでにこのひどい致命的な誤りを犯しており、すべての住民に遺伝病を「家庭の言葉としては馴染み深い」ものにしていると言いました。

女性はこれらの議論に支持的に反応したが、改革服を着て改革を実行するという希望の行動をとることを断った。これは、ドレス・リフォーム論者が 19 世紀の女性に最も重要な課題、すなわち女性性、審

美性、階級の区別の問題に取り組むという議論を構成することができなかったことを示唆している。ある意味では、この運動のイデオロギーは、その点を完全に見逃していた。

ドレス・リフォームの単純な立場に反して、強い反対勢力が形成された。改革服を着た女性たちは、嘲笑され、ひどく怒られ、公然と私的に嫌がらせを受け、好奇心と怒りからさまざまな侮辱を受けた。真の女性の崇拝によって定義された「真の女性」の時代には、女性は、社会的な期待によって彼女に要求された服従性と純粋さの先をゆく勇気と強さを必要とした。『シビュラ』は改革衣装を着た女性が経験した野蛮な話を自問自答する。例えば、ハッティ・W・ルイス（Hatty W. Lewis）は次のように書いている。

> 私は見知らぬ人ばかりでなく、私の最も親密な親戚、友人によって、自分がサタン自身であると思うほどにまで、嘲笑され、中傷を受け、迫害された。何のために？単に私が表情から世論を見て、「これまでに行ったことのある、さほど遠くない所へ」歩いて行くために、単純な形で地味なドレスを身に着けたからです [15]。

ハッティ・W・ルイスだけではなかった。アズバ・S・ノックス（Azuba S. Knox）は書いている。

> 私の友人は私を助け、私は改革ドレスを手に入れ、作り、着て、最後まで続けると決めました。しかし、一連の出来事が再び私を自分の親戚の支配下に置いたのです。彼らは慣習の鉄棒で支配されました。そして、私はしばらくの間、不愉快な拘束的な（流行のドレス）を再び着用しなければなりませんでした。私は父親、母親、姉妹と

> 論じても無駄でした。彼らは盲目で、聞く耳をもっていませんでした。私がいつも愛して、敬っていた私の父は、私が好ましくないとされる服を着ていると、自分の目の前に来てほしくないと私に胸を張って言ったのです [16]。

女性の権利と賢明な服装に対する反対者は、女性が精神的にも肉体的にも虚弱であることを好み、服装によって女性の性質を証明することを好んだのである。フィリップス夫人の若い娘フェーブ（Phebe）の告白が、次のように、『ザ・リリー』で報告されている。

> …頑丈な女性は優しい女性とはみなされません。男性はその反対のようです。 常に細身と繊細を好みます。 あなたは女性のために設計されており、すべての積極的な運動は慎重に避けなければなりません。あなたが教育を終えたら、あなたは美人としてデビューしなければなりません。そして、あなたがファッションのラウンドを実行したときに、あなたはふさわしいスタイルであなたを維持することができる紳士と結婚する必要があります。人生の適切な決済はすべての賢明な女性の終わりと目標であり、身体的な運動を控えない限り、あなたは巨大になり、趣味の良い男性は、あなたを見て震えて萎縮するでしょう [17]。

さて、以上にキャスリーン・M・ トーレンスの論文に拠って紹介した『シビュラ』や『ザ・リリー』の記事を踏まえて、本項のまとめに入ることとする。前述のように、『シビュラ』には、ドレス・リフォームの支持者の特に衛生に関する意見、従来のファッションの有害な影響、ファッションに関する女性の意識、そして制限的な衣服からの

女性の解放の必要性､女性の権利運動に関する記事が掲載されている。ここには「最前線」の活動家、そして家庭や地域社会でドレスを着た女性たちの運動の声が含まれている。

衛生に関する意見､従来のファッションの有害な影響については｢外国生まれの人を除いて、アメリカの女性、少女、乳児の女の子の大多数が病気にかかっています。この病気は、ファッショナブルで長いスカートの衣服が原因であり、習慣のなかで、習慣を通じて、そして習慣によって生まれたものです。これらの習慣はこれらの衣服を奨励するだけではありません。それどころか手直しすることを禁じます」と1856年6月18日にニューヨークのホーマーで開催された全国ドレス・リフォーム協会の第1回会合で可決された文書に書かれている。

ファッションに関する女性の意識については｢私の友人は私を助け、私は改革ドレスを手に入れ、作り、着て、最後まで続けると決めました。しかし、一連の出来事が再び私を自分の親戚の支配下に置いたのです。彼らは慣習の鉄棒で支配されました。そして、私はしばらくの間、不愉快な拘束的な（流行のドレス）を再び着用しなければなりませんでした」という改革衣装を着たくても、親戚の反対でそれを断念せざるを得ない女性の苦しい立場が訴えられている。

制限的な衣服からの女性の解放の必要性について､『シビュラ』の編集長のハズブルックは「真実、美しさ、健康、および、人間らしさという人類の決して静まることのない声のために、ファッションの奴隷になることに抗して、立ち上がらなければなりません。」との呼びかけを行っている。

女性の権利運動に関する記事としては、エリザベス・ミラーの父親のゲリット・スミスが「女性が彼女の人生を延長したい場合、 男と同じように彼女は固有の権利を行使する。彼女は彼女の権利を行使することができるような様式で服を着なければならず、現在のばかばかしいパリ流の様式ではない」と書いているのは、印象深い。

最後に『シビュラ』の廃刊の背景には何があったのであろうか。

1864 年、『シビュラ』は契約の喪失と生産コストの上昇により発刊を辞めたのである。さらに、リディア・セイヤー・ハズブルックは疲労に悩まされ、いくつかの改革に関与し、『シビュラ』の責任を引き継ぐことはできなかった。『シビュラ』がないために、ハスブルックとジャクソン博士の間の緊張が深まり、ドレス・リフォームの関心が低下し、ナショナル・ドレス・リフォーム協会は衰退したのである[18]。

2　メアリー・E・ウォーカー博士のドレス・リフォーム思想と運動

メアリー・E・ウォーカー博士（Dr. Mary Edwards Walker, 1832~1919）は、おそらく 19 世紀アメリカの最も有名なドレス・リフォーム論者であろう。ドレス・リフォームの彼女の試練は、すべてのドレス・リフォーム論者の経験を表していると言われている。そこで、本節ではメアリー・E・ウォーカーの歴史的背景と生い立ち、ドレス・リフォーム思想、南北戦争での活躍、南北戦争後のドレス・リフォーム運動―異性装のメアリー・E・ウォーカーの順に語りながら、彼女がドレス・リフォーム論者として、周りからどのような評価を受けたのか、また、ドレス・リフォーム運動において、どのような役割を果たしたのか、伝記やアメリカの研究者の論文や彼女の著作に基づいて明らかにしたいと思う。

(1) 歴史的背景と生い立ち

① 歴史的背景[19]

最初に、メアリー・E・ウォーカーが生まれ育ったニューヨーク州オスウェゴの歴史について語ろう。

1600年代半ばに、イロクォイ族たちは「川から水が注ぐ場所」という意味で、オスウェゴという名前を付けた。それは、最初のイギリス人の白人移住者がオンタリオ湖の東岸にあるニューヨーク州オスウェゴに到着するずっと前のことであった。オスウェゴ川は大きな湖に流れ込み、川は渇いた。土地を耕して、川沿いに農家を建設した入植者の後には、貿易、十字架、旗などの文明を進化させる古代の三位一体が続いた。1775年、毛皮貿易業者は宣教師をオスウェゴに呼び寄せ、彼らはインディアンをキリスト教化しようとした。英国のレッドコート（イギリス軍の主要部隊の銃兵。赤いコートを着ていた）が続き、河口に2つの砦を建設し、1796年までニューヨーク市の北西300マイルに位置する戦略地区の支配を維持した。

19世紀前半には、川が定期船や海上交通で混雑しており、その岸辺には大穀物倉庫と製粉所があり、街は栄えていた。エリー運河とオンタリオ湖を結ぶオスウェゴ運河の建設は、シラキュースからの大量の交通輸送、中西部からの穀物、そして小さな居住区の内外を問わずあらゆる種類の製品をもたらした。トマス・キングズフォード（Thomas Kingsford, 1799~1809）という発明者は、1848年にトウモロコシからデンプンを抽出し、世界最大のデンプン工場を建設する方法を考案した。こうして、キングズフォードはオスウェゴの発展に重要な章を追加した。

メアリー・E・ウォーカーは、1832年11月26日にアルバカーキ・ウォーカー（Alvah Walker）とヴェスタ・ウィットコーム（Vesta Walker）の6番目の子どもとして生まれた。当時のオスウェゴの人口は約3000人であった。彼らはバンカー・ヒル・ロードの33エーカーの敷地を耕した。

ウォーカーの生い立ちに先立ち、彼女の両親の背景について、以下に語ろう。

母のヴェスタ・ウィットコーム・ウォーカーは1801年に、マサチ

ューセッツ州グリニッジで生まれた。彼女の祖先はニューイングランド人であること以外、詳しいことはほとんど分からないという。ヴェスタは、ロバート・グリーン・インガソール（Robert Green Ingersol, 1833~1899）のいとこであり、彼は、メアリー・ウォーカーの家族が特別な関心を抱いていた親族であった。メアリー・ウォーカーはインガソールから大きな思想的影響を受けている。そこで、インガソールとは、どのような人物であるのか、メアリー・ウォーカーについて語るにあたり、簡潔に紹介することにする。

インガソールはニューヨーク州ドレスデンの生まれである。父親は会衆派の牧師であり、奴隷制廃止論者であった。インガソールはイリノイ州、またはワシントン州の弁護士をつとめ、政治的指導者であり、不可知論者であった。

ヴェスタは確かに彼の論争のキャリアを追って、彼の有名ないとこについて、ウォーカーの家庭で話をしており、インガソールはニューヨークのウォーカーを訪問したこともあるものと推察されている。

インガソールは彼の崇拝者たちによって「ロイヤル・ボブ」と呼ばれた背の高い、ドーム型のハンサムな青年で、エリザベス・キャディ・スタントン（Elizabeth Cady Stanton）や女性運動の先駆者たちの最愛の友人であり、家庭の重要性と心の徳について、感動的に語った。彼が内戦後にウォーカー家の彼のいとこのヴェスタを訪れたならば、彼はメアリーと両親、とりわけ彼女の自由思考の父親と戦争の物語と進歩的なアイデアを共有していたことであろう、とデール・L・ウォーカー（Dale L. Walker）は推察している。

ウォーカーの父のアルヴァ・ウォーカーは、マサチューセッツ州グリニッジで 1798 年に生まれた。若者としての巡回カーペンターで、ニューヨーク州、ピッツバーグ、ボストン、ケンタッキー州、ミシシッピ州、ルイジアナ州を移動して家を建てた。

② 生い立ち [20]

前述のように、メアリー・ウォーカーは、1832 年 11 月 26 日、父アルヴァ・ウォーカーと母ヴェスタ・ウォーカーの娘として、ニューヨーク州オスウェゴの町で生まれた。

さて、ウォーカーの生い立ちであるが、 前述のように、彼女は６人の子どものうち最年少であった。彼女には４人の姉妹（Vesta, Aurora Borealis, Luna, Cynthia）と１人の兄弟（Alvah Jr.）がいた。アルヴァとヴェスタは息子と娘の両方を、当時としては、革命的で進歩的な方法で育て、彼らの非伝統的な子育ては、メアリーの自立心と正義感を育んだという。彼らは献身的なクリスチャンであったが、ウォーカーは子どもたちが様々な宗派の規制や制限を受けることに対して、疑問を投げかけてきた「自由思想家」であった。ウォーカーの両親はまた、農場周辺で仕事を分担することに関して、子どもたちに非伝統的なジェンダーの役割を実践してみせたのである。農夫に生まれた６番目の娘として、ウォーカーは伝統的に男性家族や労働者に割り当てられた家事を頻繁に行わなければならなかった。彼女の「やや正統性のない」両親は奴隷制廃止と健康的な衣服を信じ、女の子たちは職業教育を受けていたことを確信していた。

彼女は当時の女性が着ていた衣服は、農業労働には不向きであるとみなし、農業労働に携わっているときには、女性の衣服を着なかったという。彼女の母親は、コルセットときつい紐締めは健康には良くないとの見解を抱いていた。アリソン・ゲインズによるとオスウェゴはオナイダ共同体の近くであり、メアリーの母親はオナイダ共同体のショート・ドレスとパンツから成る改革衣服を知っていたとのことである。オナイダ共同体では、1848 年に 100 人以上の女性がほぼ同じ衣装の宗教的なバージョンを着用し始め、ウォーカーの母親は、その様子を見聞きしていたのであろう。女性の権利指導者のウォーカーが自由ドレスを導入したのはわずか 19 歳だった。

彼女は、両親が始めた地元の小学校へ登校して、小学校教育を受けた。小学校を終えた後、メアリーと彼女の姉妹のうちの 2 人はニューヨークのフルトンにあるファーリー神学校に通った。ファーリー神学校は、高等教育の機関ではなく、ジェンダーの役割、教育、衛生における近代的な社会改革を重視した学校でもあった。メアリーは、自由な時間に、彼女の父親の医学の教科書を読んで、解剖学と生理学について学習した。彼女の医学への関心は、彼女が早い時期に医学文献を学習したことに起因するのである。

彼女は父親の影響を強く受けている。父親はなぜ、医学を学んだのであろうか。アリソン・ゲインズによると「メアリーの父親のアヴァはヴェスタと結婚後、息子が生まれるが、2~3 日で亡くなる。母のヴェスタは、その後、数週間、重病にかかった。父も麻疹にかかった。父は、このときに、医学に興味を持ち、自分の状態を知るために、医学書を読んだ。煙草と飲酒をやめた。そして、医学書への情熱、自分自身と家族の健康に対する情熱は、生涯、続いた [21] 」という。

5 人の娘全員が結婚前に学校で教えた。メアリーは、若い女性として、ニューヨークのミネットにある学校で教鞭をとっていた。ウォーカーは教えながら、最初の改革のドレスを試し、いくつかのバリエーションを試した。ほんの数年後。 メアリー・ウォーカーは、医学のキャリアを追求するために教えるのを断念した。

ウォーカーと彼女の将来の夫、アルバート・E・ミラーは、短命のシラキュース医科大学､折衷主義の学校から 1855 年に医学の学位を取得した。医学部にいる間、ウォーカーはズボンをはいて、短いドレスを着用し、より快適なスタイルのバリエーションを探した。ウォーカーのドレス・リフォームへのコミットメントには、結婚式で短い服を着用することが含まれていた。結婚式はいくつかの点で伝統を無視した。

ウォーカーは彼女の誓いに従うことを拒否し、ウォーカー（Walker）

の前に最初の “M” または ミラー（“Miller”）を配置することに同意したが、彼女は彼女の結婚前の名前を保持することを主張した。この夫婦はすぐにニューヨークのローマで診療を行ったが、2年以内に婚姻と専門職の苦労がペアの分離をもたらした。ウォーカーは最終的にアイオワ州に移り、1860年にミラーと離婚した。ウォーカーは女性の権利、全米ドレス・リフォーム協会と節制に関与した。

（2）　南北戦争以前のドレス・リフォーム思想と運動[23]

①　“Hit” に見る思想

ウォーカーは1870年代に、彼女の収入を補完し、女性と服装に関する彼女の声を公にするために、二冊の本を出版した。ウォーカーは記録に残すことは好まず、二冊の著作、Hit: Essay's on Women's Right（1871年）および Unmasked, or The Science of Immorality to Gentleman（1878年）を残しているだけである。これらのうちドレス・リフォームに関する彼女の見解が書かれているのは、前者の著作である。後者は男性に宛てた啓蒙書であり、両性具有やキスが子どもに及ぼす害、不妊やヘルニアなどの病気への対処法に関する著作である。

“Hit” の第二章には、メアリー・E・ウォーカー博士の医師としてのドレス・リフォーム思想が表明されている。すなわち、ファッショナブルな拘束的な衣装が女性の身体（頭のてっぺんから足の裏まで）に及ぼす影響という視点から、医学的な理論的根拠が明示されている。第1章で紹介したジェイムズ・C・ジャクソン博士の著書 “American Womanhood” と共通している部分もあるが、Hit は女性の医師としての立場からの見解である。両者を比べるとウォーカーの著作はメモ的な書き方をしていて、英語は現代の我々には読みづらい。何はともあれ、本書は価値高い歴史的文書である。それゆえ、以下において、筆者が整理して箇条書きにした12項目を部分的に引用しながら、紹介する[22]。

項目① ドレス・リフォームの担い手は女性の医師たちである。

「人を保護し、運動と循環の自由を許し、着用者を衣服の奴隷にしないようにするために、女性の服装が、あるべき状態であり続けてきた問題には、今まで、アメリカの女性医師のある人が、被験者を相手に、健康に関する法律と生活の必需品に基づいて衣服の配分を指示してはじめて接近されました。」

項目② ドレス・リフォームの必要性に対する男性の理解のなさ。

「奇妙なのは、女性がありとあらゆる衛生的なやり方で衣服を着ていても、多くの点で、そのやり方がどれほど優れているか、男性が理解できないことです。彼らはそれを理解できないので、実際には舌とペンの力ですべてを行い、衛生的に服を着たい人を圧迫するのです。」

項目③ 結婚を妨げるのは、拘束的で、非常に高価な衣装である。高価な衣装は、男性にとっての悩みの種である。

「ファッショナブルなドレスが結婚関係に与える影響を解明するためには、費用がかかります。その限りにおいて、多くの男性は結婚しないでいなければなりません。ボリュームのある数多くのドレスは、絶え間なく変化するファッショナブルなスタイルを補充するために、他の道具類とともに細々した財産を必要とします。」

項目④ ファッショナブルな衣装が夫や父親だけではなく、将来、子どもに及ぼす影響について

「ドレスやドレッシング、そして厄介なものを身につけて運ぶために、女性が防ぐことができない病的な感受性が誘発され、、神経とエネルギーの多くが消費されます。このような類の衣装を装

うことで、女性がそれほど神経質になって、些細な事にわけもなく悩まされる必要はないと考える男性は、忍耐を失います。夫と父親はこのような終わりのない過敏症に悩まされているだけでなく、同じ状態の子どもたちとそうなると思われる子どもたちに苦しんでいます。」

項目⑤　非衛生的な衣服が原因で、病気に罹患していない、結婚するのに十分な年齢の女性はほとんど見つからない。

「ウィング付きの非衛生的な服が原因で病気に罹患していない、結婚するのに十分な年齢の女性はほとんど見つかりません。頭のてっぺんから足の裏まで、女性は不健康な服装をしています。健康がなければ幸せになりません。」

項目⑥　女性が男性と同じように衛生的な衣服を着て、能力を発揮して、労働に携わる権利、高貴な女性として生きる自由を持っている。

「結婚関係においてもそれ以外でも、女性は男性とは別個の分離した個人なのです。－彼らは偉大なる労働の分担者であり、より大きな悲しみと人生の重荷を背負っているのです。それゆえ、なぜ彼らは男性と同じように衛生的に服を着けなければならないのか、偉大な、またはより大きな理由があります。彼らの精神と心と良心には力があり、彼らを正しい方向に導きます。女性は、道が開ければ、直ちに、高貴な女性として生きるための甘い自由を持つことができます。この方向で生きれば、妨げられることもなく、窮屈になることはありません。」

項目⑦　長いドレスには克服できない重さと揺れ動く欠陥がある。改革衣服だけが、腹部および骨盤内蔵の機械的変異を生じさせない、あ

るいは悪化させない方法で装われる。

「…たとえ、スカートが足首に落ちても、長いドレスの着用から苦しんでいない女性はほとんどいないことが知られていません。何も克服できない重量と揺れ動く欠陥があります。システムのいくつかの部分には過剰な衣類があり、他の部分には欠陥があります。ドレス・リフォームを除いて、暖かさが均等に分配されるような方法で服を着た女性はいません。改革衣装だけが、腹部および骨盤内臓の機械的変位を生じさせないか、または悪化させない方法で装われます。」

項目⑧　衛生的な方法での衣服の着用は、年齢の霜が現れた後でも、美を保ってくれる。

「もし誰かが衛生的な方法で服を着ているならば、年齢の霜が現れた後でさえ、美を保つことは可能です。また、増加する心の美しさを維持することは可能です。常に、より不健康で、おしゃれなドレス姿—この姿は、あらゆる種類の悪を覆い隠し、数千の悲しみを家庭生活のなかに生み出します—の愚かな女性よりも、もっと優れた女性を熱望する人の伴侶でなければなりません。」

項目⑨　我々はキリスト教の布教のために、中国の纏足を批判するが、その何千倍も悪いファッショナブルな衣装が身体に及ぼす害を謙虚に受け止めるべきである。

「私たちは、キリスト教の啓蒙の中で、中国人が女性の足をつまんで変形させる不当なことを話します。私たちが本当の謙虚さの粒子を持っていたなら、何千倍も悪い事実に直面している場合には、私たちは、決して、そのようなことは言わないでしょう。」

項目⑩　頭髪が女性の身体に及ぼす影響。

「粗雑に結髪された女性のことを理解することはできません。しかし、そのような女性は、髷、編組、ちぢれ毛、カール、ラット、マウス、櫛、ピンなどからどうすれば解放されるか、救済のあり方をとてもよく理解しています。彼らはほとんど例外なく、頭の中の痛みを訴えます。この痛みは、これらのエクストラの磨耗と、髪の毛が紐や弾性体で結ばれて、圧縮されていることが原因なのです。」

項目⑪　ファッショナブルなドレスが子どもに及ぼす影響

「事実、女性の重要な器官のすべてが、健康を損ない、人生を短くしているステイやコルセットによって、締め付けられています。それだけでなく、長さやその他の点では、子どもの命は恐るべき失望を産んでいます。」

項目⑫　身体に纏う衣服の３つの原則について。

①　完全な運動の自由があること。

「身体のあらゆる部分の動きの完全な自由はありません。袖のサイズは、腕が頭の上に達することができないほど細いか、または袖を身に着けることなくあらゆる方向に到達するか、または、偉大な女性たちは、肩より上に腕を上げて、髪を整えるには、腕が疲れてしまい、何度も自分の腕を休ませなければ、自分の髪を整えることができません。ウエストの端が圧縮された状態で、袖が付けられています。腰も緊張しているか、少なくとも身体にぴったりしていることが、疲れた腕の感覚の原因の１つなのです。」

「ドレスやコルセットの腰のぴったりしたフィットは、動きの自由、呼吸、消化、血液の同化循環、および栄養液の循環を妨げます。」

「ドレスに完全な自由があるとき、呼吸には、これらの筋肉だけでなく、肋間および腹筋の穏やかな動きがあります。しかし、大半の女性は人間を麻痺させてしまい、人間のシステムに関する科学にはあまり精通していません。」

② 衣服の均等な配分が行われること。

「完璧な健康を享受するためには、衣類を身体に均等に配分する必要があります。」

「快適さのために衣服を四肢と体に均等に配分する必要があるだけでなく、血液循環の必要性はそのようなものであり、同じものに対する需要があります。循環しているだけでなく、血のある種の均一な暖かさがなければなりません。血液が流れるにつれてシステムの老廃物を集めることが必要です。血行の自由と暖かさがないために腐敗が起こるのです。老廃物は血液によって集められ、自然がその目的のために提供した様々な手段によって捨てられます。」

「体の一部が冷えている場合、その部分は、その過程で絶えず排除されている消耗した粒子を無意識の汗で吹き飛ばすことはできません。女性の足には大きなフープが着用されています。リュウマチや神経痛のケースが多く見られます。四肢はほとんど保護されておらず、冷たい空気はその周りを自由に循環し、動脈血は四肢に達する前に冷却され、そして、戻る静脈循環に

おいて、重力の法則に反して走って、血液の流れは疲れ果て、荒れ果てるのです。」

「若い女の子は、婦人服を身につけた徹底した衛生的なドレスだけでは、さまざまな生活のために女性の活力を救うことはできません。特に自分自身と彼女の子どもたちに最大の信用を与える妊産婦の高い義務感のもとに、ドレスを適切に配分することによって、有害な影響から自分自身や子どもの生命を救うことができます。」

③　可能な限り、衣服の持ち運びに力が要らなくすること。

「ファッションが指示する愚かで邪悪なやり方で、活力を蓄えるのではなく、ドレスの目的は、活力を救うためのものでなければなりません。そして、特に女性の服装に関してこれは真実であるべきです。人類の母親になっている人、または人類の母親になる人は、衣服の最善の装い方によって、救うことができなければなりません。」

Hitの第２章では,以上を踏まえて,改革衣装の提案が行われている。以下に、メアリー・E・ウォーカー博士の提案を紹介する。

アメリカの改革服の説明

リネンはハイネックとゆるいウエストで作られており、長ズボンや長袖にはリストバンドがついています。このようにして、完全なアンダーシャツを１枚の衣服に仕立てます。長ズボンは足首の上に折り重ねられ、ストッキングは長ズボンの上で調節され、このようにして、

足首を暖かく保ち、伸び縮みするバンドやその他のバンドを用いないで、あるいは、大部分が循環を妨げ、静脈瘤を生じさせ、歩行に疲れを感じさせるといった厄介なまたは有害なしつらえなしに、ストッキングを履きます。

ズボンは男性のズボンのように作られており、アンダースーツのウエストにボタンを付けたり、通常のサスペンダーでアレンジしたりしています。ドレスは、サックコートのようなワンピース形式の胴着、ウエスト、およびスカートから成っていて、ゆったりと膝に落ちるように作られています。このように階段を降りる間に足踏みをしたり、雨の日に汚れたりするのを防ぎます。—だが、それは主にそのようなドレスが不足しているために、その状態を救済する必要があるためなのです。したがって、一般的な服装では3種類の衣類が必要です。

ウール、カントンフランネル、シルクは通常のリネンのアンダースーツと同じように作ることができます（リストバンドは例外です）。より多くの服を必要とするシーズンには、これらはリネンの上または下に着用することができます。衣服を持ち歩くために活力を大いに消費することなく、またはそれらを購入するためのお金を必要とすることなく、必要なだけの暖かさを提供してくれます。

② 南北戦争以前の活躍

彼女はローマでささやかな医療行為に携わりながら、『シビュラ』を購読し始めた。

『シビュラ』の作家としてのメアリーのデビューは、1857年1月1日に、シラキュースから数マイル東にあるカナスタータで行われるドレス・リフォーム大会を催促する手紙とともに登場した。彼女はその後、シラキュースのドレス・リフォーム協会に出席し、1860年春に

ニューヨークのウォータールーで開催されたNDRA会議に出席して執筆した。その間に彼女はこの組織の９人の副会長の１人に選ばれた。

ファッショナブルで人気のあったドレスの習慣に反する行為は、彼女の偉大な十字軍として継続された。彼女のハズブルックとの関係から、講演活動という活動分野が生まれ、1858年に新たな追求を開始することができた。彼女の講演には、社会的なお茶会で少数の好奇心が強い、セミショックを受けた女性の前であろうと、賃貸されたホールの混雑した群衆を前にした舞台であろうと、診療所での治療よりはるかに多くの人々が集まったと言われている。付随的な副業として始まった講演活動は、その後、数年間で彼女の主な収入源になった。メアリー・E・ウォーカーとリディア・ハズブルック（Lydia Hasbrouck）の友情の詳細は残っていないが、女性権利運動に携わっていた仲間の間では、生活の中で改革服を着用し続けたのは、ほとんど彼女たち二人だけであった。二人は禁酒運動員であり、世俗的な医学へのキャリアを捧げており、1848年のセネカフォールズでの会議で進められた女性の権利観に触発された。

以上のような経緯で、メアリーは服装の改革に関する演説で彼女の口頭でのキャリアを開始した。

メアリー・E・ウォーカー博士は、ズボンをはいて、短い改革服を採用した最初の女性ではないと主張したり、のちにその衣装を男性服の着用に置き換えたりした。彼女の人生経験、そして彼女のドレス・リフォームの経験は、19世紀の女性の幸福とその制約を描いたものである。彼女のズボンの衣装にしばしば誇張された反応は、ある時点で直面していたドレス・リフォーム論者のすべての敵意、恐怖、怒りのタイプを示している[24]。

（3）南北戦争での活躍[25]

メアリー・E・ウォーカー博士は、彼女の人生の中で達成した名声のために、歴史において著名な人物となった。シラキュース医科大学の医師として教育を受けたウォーカーは、南北戦争が開始された1861年に外科医として陸軍に加わることを試みた。陸軍は女性を受け入れなかったので、彼女の要求は拒否され、1862年にフィールドに送られるまでワシントンでボランティアとして働いた。彼女は戦争が終わった後も任務を続けた。

ドレス・リフォームのための闘いにおいて、ウォーカー博士は重要な役割を果たした。彼女は改革衣服を着た非常に公的な人物であり、時には男性用の衣服に改装した。ウォーカーの異性装については、後述する。

1861年から1864年まで、メアリー・ウォーカー博士から、『シビュラ』に寄せられた6通の手紙が掲載された。第一に、彼女の手紙はドレス・リフォームの動機と『シビュラ』を支持し、第二に、女性の権利と雇用、女性の戦争努力への貢献であった。ウォーカー博士は、ワシントンD.C.、および医師として陸軍に勤めた最前線からこれらの手紙を書いた。彼女はチャールズ・H・ミラー（Charles H. Miller）やエレン・ル・クレール（Ellen Le Clere）のような戦争の英雄について書いた。

ウォーカー博士の感情は、戦争にとっての女性の重要性に関する『シビュラ』の立場を支持した。「女性と戦争」、「女性兵士」、「女性ができること」、「現在の危機の中で女性は何をすべきか」などのタイトルが掲載されている。セイヤー・ハズブルックと彼女の読者にとっては、女性が戦争の努力において重要な貢献者とパートナーとして認められていることが重要であった。女性が直面している不平等は、しばしば強調された。特に、女性は家庭や社会で不在の男性の役割を果たす必

要があったが、平等な権利や同権を付与されていなかった。セイヤー・ハズブルックの戦略は、戦争を女性の権利を求める必要性を説明する機会として利用することであった。

ウォーカーは、内戦が始まると、軍隊の委託外科医としての地位を要求した。何度も任務を拒否されたが、ウォーカーは医療サービスをボランティアし、任命依頼を続けた。1864年、アメリカ政府は彼女に契約外科医を指名した。これは医療専門家の等級の最下位に位置していた。彼女への命令は彼女をテネシー州チャタヌーガに送ったが、その後すぐに軍の医師が彼女への命令と地位を取り消した。テネシー州で働いている間、ウォーカーは女性服の負担をこれまで以上に認識し、男性将校が着用するのと同様の軍服を着用し始めた。ゴールドストライプのズボンとフェルトの帽子とジャケットを身につけ、ウォーカーは初めて男性服を着たのであった。しかしながら。ウォーカーは、制服を着て、性を偽装しようとしたことは一度もなかった。

ウォーカーは彼女の正式な任命の喪失にもかかわらず、第52オハイオ連隊との協力を続け、しばしば貧しい家族を治療するために南部への領土を渡って発見されることがあった。1864年4月、彼女はユニオンラインを越えた後、敵が彼女を捕らえてバージニア州リッチモンドに投獄した。刑務所に入れられてから4ヶ月後、南軍は南部外科医の囚人と彼女を交換した。その年の後半に、ウォーカーは彼女を代理外科医にする契約を受けた。戦争が終わると、大統領は、1866年に、メアリー・E・ウォーカー博士に功労のための議会勲章を授与した。彼女は歴史上唯一の名誉を与えられた女性である。しかし、1916年にはMedal of Honor基準の改正と兵役が区別されないという懸念から、議会はメダルを廃止した。メダルは、1977年に議会の命令により死後に修復された。

（4）　南北戦争後のドレス・リフォーム運動
—異性装のメアリー・E・ウォーカー博士[26]

戦争直後、ウォーカーはいくつかの問題に直面していた。彼女は自分のプライベートな診療のために患者を見つけるのが困難であった。彼女の元夫、ミラーは、アイオワの離婚に異議を唱え、ニューヨーク州で彼女との離婚判決を下した。ウォーカーは、戦争に疲れて病気に苦しんだ。1866年、彼女はリラックスして休養するためにヨーロッパに旅行した。

ウォーカーは、ドレス・リフォーム、女性参政権、幼児殺し、および死刑に関する講義のために、海外に留まった。観客は彼女の講義を聞くためにホールを満たした。批評家は、人々がウォーカーの話を聞くのではなく、ウォーカーの「人の気を引くドレス」を見に来たと推測している。ニューヨーク・メディカル・ジャーナルは、ある記事で彼女の衣装をたいへん詳しく説明した。

> 彼女のドレスは暗い布地の長めのチュニックで、ほぼ膝丈で、下に広がっていて、右の図（**写真2**）ととてもよく似ており、ある程度まで開いているので、我々があえて名前をつけようとしない内側の衣服が覗いて見える。この衣服は、ウエストコートの目的を果たし、男性の間でいつも持ち歩かれている腕時計とチェーンを持ち歩いた。ダークなズボン（「パンタレッツ」と呼んでいる）と男性が普通に履いているようなブーツが、彼女の衣装の必需品を完成させた。彼女は、さらに、暗い緑の葉を彼女の髪に飾った[27]。

彼女は彼女のチュニックの前に、誇らしげに名誉の勲章を披露した。この特別講演で群衆の「騒々しい嘲笑と騒々しい笑い声」が彼女の言葉をかき消した。ウォーカーはどのような話題を扱う場合にも、常に


写真２　南北戦争後のメアリー・E・ウォーカー。

女性の平等にとって最大の障害の１つと考えていたファッションのテーマを提起した。ウォーカーに関する広報は、アメリカよりもイングランドで彼女を有名にした。

1866 年の逮捕でメアリー・ウォーカーと彼女の改革衣装は、アメリカで国民の公の注目をあびることになった。ニューヨークタイムズ紙は、「乱暴者たちは、マンハッタンの通りを通ってウォーカー博士のあとを追い、彼女の独特の服装を垣間見ようとした」と報じた。

警察官は、ドレス・リフォーム論者を包囲した「暴動」を解散させる代わりに、「無秩序な行為と男性衣装で現れる」との訴状でウォーカーを逮捕した。マンスフィールド判事は訴状を尊重し、ウォーカーの保釈金を 300 ドルに設定した。彼女は弁護士が資金を手に入れて、債券を掲示するまで、数時間拘留された。

この事件の１週間前に、もう一人の熱心な役人が、ウォーカーがマンハッタンの下を歩いている間に拘束した。しかし、駅舎の上司は、彼女に「苦情を控えている」とすかさず発表した。彼女の釈放時に、ウォーカーは逮捕した役員に対して苦情を言い渡した。その後の裁判と１週間以内の２度目の逮捕は、報道の対象となった。すべての証拠を提示した後、事件を司るアクトン局長は、逮捕した役人に向かって、「彼女は自分の身を守るのに十分スマートです。彼女を再び逮捕しないで下さい」と言った。警察官が懲戒を受け入れた後、裁判所の劇的なドラマが何度も繰り広げられた。

裁判を通じ、「ウォーカー氏は男性的なスタイルの衣服を着用し、群

衆を引っ張ったり、平和を邪魔したりすることで、警官が彼女を逮捕した」と逮捕した役人は主張した。これが事実であると認めた者は誰もいなかった。逮捕した役人は公然の迷惑を犯したと主張し続けた。

議会がウォーカーに男性服を着用することを許可する法律を可決したという神話は、この頃から始まった。彼女は男性の身体に好みの服を着用する許可を求めたという考えは、ウォーカー博士に怒りを抱かせ、彼女はその噂を抑えようとした。神話が残っているにもかかわらず、ウォーカーは、ズボンを着用することについての議会の制裁を求めたり、受けたりはしなかった。

3 年後、ウォーカーは 「半男性服」を着て、シンシナティの通りを歩いた。彼女の存在と衣装は、「完全なズボン、緩やかなベストとアブソリュートコート」を着用した地元住民アイダプライスを興奮させ、刺激した。ウォーカー博士が街を歩くことは許されていたが、プライスはそれほど幸運ではなかった。警察官がプライスを「逮捕」し、「男性の独裁者」に彼女が声を掛けた「駅舎に連れて行った」。逮捕した役人は告訴しなかったし、プライスは彼女が望んだ衣服のスタイルを追求するために自由に駅舎を去った。

ウォーカーは、成功したヨーロッパの講義ツアーをアメリカでやろうとした。しかし、彼女は講師として自分自身をサポートするのに十分な聴衆を惹きつけたことはなかった。彼女はワシントン D.C に移り、自分自身のための戦争年金を含むいくつかの理由で議会に働きかけた。当時、彼女は女性参政権運動に同調していたが、憲法は、すでに女性に投票権を保証しているとすぐに確信した。彼女は投票権が必要なすべての女性は、まとまって投票に現れたと主張した。前述のように彼女の収入を補完し、女性と服装に関する彼女の意見を公にするため、ウォーカーは 2 冊の本を出版した。1871 年に “Hit”、1878 年に “Unmasked: or the Science of Immorality”を出版した。医療行為が減少するにつれて、講義の機会と彼女の生活の糧の獲得手段が減った。



写真３　晩年の異性装のメアリー・E・ウォーカー。

ウォーカー氏は1850代後半と1860年代初めに、全米のダイム美術館で舞台に出演することに合意し、人々は男のような服を着た女性を見るために支払った。彼女の人生の終わりに、貧しいウォーカーは生きるために努力した。ウォーカーのコスチュームは時間がたつにつれてより「男性的」になった（**写真３**）。彼女は1870年代に改革服をあきらめ,男性のズボン、コート、ベスト、そしてトップハットを身につけていた。

ウォーカーは、男性用ドレスを採用してからというもの、ほとんどのドレス・リフォームグループからはみ出して、改革衣装を男性の服装に置き換えた。男性の服を着たが、ウォーカーは彼女の性を隠そうとはしなかった。男らしい服を着ること対する彼女の動機には、男性としてまかり通りたいという欲望は含まれていなかった。

ウォーカーの伝記作家の一人によると、リンダ・ポインター（Lida Poynter）は、ウォーカーを迫害し、彼女の衣服のために何年も彼女を嘲笑したという。報道によると、ポインター氏はウォーカー氏の絵を変わった、奇妙なものとして描いたが、彼女は今日もその名声を誇っている。報道陣は、他の改革派の大部分よりも、さらに厳しくウォーカーを扱った。ウォーカーのような女性は19世紀には不安定であったため、期待通りのやり方で行動しなかった。その結果、接触した人々

の極端な反応を刺激することがよくあった。ウォーカーがズボンだけでなく、男性スーツ全体を着用し始めるよりも前でさえ、彼女に向けられた批判は特に毒性が高かった。マスコミは公然と彼女を軽視し、通りで彼女に顔を合わせたときに、ストリートボーイは彼女に戯言を言って、そそのかしたという。ウォーカーは、女性の権利指導者や後の権利擁護者など、彼女が接触したほとんどの人を苛立たさせたようだ。

性別の視覚的マーカーとしての衣服は、その妥当性を失い始めた。ウォーカー博士に対する様々な反応は、ズボンにショート・ドレスを合わせた衣装への強い反応に対するいくつかの理由を示唆している。第一の理由は、パンツは男性に属し、男性の衣服を着た女性は女性らしさを否定し、男性はそれを信じている人々に恐怖を抱いたという、長い間浸透した信念にあった。強い反応のもう一つの理由は、短いドレスを着た女性（少なくとも最初に着ている女性）と関連したグループと関係があった。これらの組織は、一般に、一般の人々が承認または拒否した社会における根本的な変化を主張した。最後に、ほとんどの人が短い衣装の登場が魅力に欠けていたことに同意し、いたずらのための簡単なターゲットにした。

（5）　まとめ

メアリー・ウォーカーは生い立ちから見て、ファッショナブルな衣装にはあまり縁がないキャリアーを歩んできた女医に見受けられる。農家に育ち、オナイダ共同体の改革衣服を目の当たりにしていた母親の影響を強く受けていた。19 歳からリフォーム・ドレスを提唱し始め、父親の影響で、医学書に親しみ、女医としての道を歩むことになる。そして、南北戦争期には戦場で契約外科医として活躍し、議会勲章を授かった。少なくとも現代人の立場から見て、農業労働においても、戦場での外科医としての労働においても、きつい紐締めのファッショ

ナブルな衣装は非機能的であったであろう。一旦、機能的で実用的なズボンと短いドレスとブーツという衣服を身に着けてしまえば、性別とは無関係に、男性的な衣服を着て労働するのが当然のことになってしまったのではないだろうか。彼女は医師として、"Hit"の第2章に書いたように、ファッショナブルな衣装が女性の健康に及ぼす悪影響は十二分に知り尽くしていた。アリソン・ゲインズも述べているように、彼女の幼年時代から父親の信念で育った時から、彼女が亡くなった日まで、健康はファッションやルックスよりも彼女にとってより重要であった。だからこそ、街を歩いて、男の子たちに罵倒・嘲笑されるのは、彼女にとっては何ら気に留める問題ではなかったのではなかろうか。しかし、一般の人々にとっては、ウォーカーのこのような意識や思想にはとてもついて行けなかったのであろう。

3　ドレス・リフォーム運動（第一期、第二期）の衰退の要因

（1）　全国ドレス・リフォーム協会の終焉 (28)

明らかに、全国ドレス・リフォーム協会は1866年に会合しなかった。執行委員会がその決定を下したのか、あるいは大会の関心が単に失われたのかは不明のままである。協会の最後に記録された会議は、1865年6月21日にニューヨーク州ロチェスターで開催された。現地の新聞によると、アメリカの衣装を身に着けた800人近くの女性と男性が大会に参加したとのことである。リディア・セイヤー・ハズブルック博士会長は、この集会に秩序を保つように呼びかけた。会議は、さまざまな委員会が設置されたプログラムに沿って進められた。指名委員会は、次の会長として、メアリー・ウォーカー博士を提案した。議事録で日程を確認した後、会長は集会に参加したいと思っている人のために場所を空けた。水治療師のジェームズC.ジャクソン博士は、短いド

レスに関する「説得力のある」演説をする機会を利用した。彼の発言の終わりに、ビジネス委員会は、協会の検討のために提示された 28 の決議のうち 18 を読んだ。こうして典型的な NDRA 大会の幕を終えた。

午後のセッションでは、午前の会議で紹介された決議案についての議論が無事に始まった。しかし、若い男性のグループはセッション中に失礼な発言と騒音を発し、ジャクソン博士を怒らせ、ジャクソン博士は彼らを逮捕させると脅迫した。明らかに彼の脅迫は間違った行為者と騒動を怖がらせた。リディア・セイヤー・ハズブルックは、提案された決議について意見を求めた。ジャクソン博士は再びボランティアをして話した。リディア・セイヤー・ハズブルックは、むしろ当惑して、ジャクソンが会議を独占する危険性があり、他の人に議論の中でより積極的な役割を果たすよう呼びかけていることを示唆した。リディア・セイヤー・ハズブルックは、ジャクソンの完全統制下での会合を望んでいないことを明らかにした。ハズブルックとジ ャクソンの間の緊張は、やじをとばす者の存在によって作られたすでに緊張した雰囲気を悪化させた。若いいたずらグループは、このような連中に騒がせる目的のために会議に出席し、午後の最後の 2 人の講演者を頻繁に中断したようだ。

このコンベンションは最終セッションのために夕方に再び集まり、ジェームス C.ジャクソン博士による別の演説を聞いた。ジャクソンの発言の試みは、常に観客の歓声で中断された。犯人たちであるいく人かの若い男性は怒って騒ぎ立てた。ジャクソンは続行を拒否し、混乱と未解決の事業の中で会議が延期された。それによって、最後の正式な集まりと全国ドレス・リフォーム協会の終わりの始まりを記録することになった。

1865 年のミーティングでジャクソンには批判的だったが、女性はジャクソン博士が NDRA のために行ったすべての仕事とその手紙に書

かれたドレス・リフォームについて賞賛した。しかし、ジャクソンの行動は、女性に関係する組織内の男性の存在に固有の問題があることを彼らに認識させた。18 人の女性は、ジャクソンが改革服を着用しておらず、潜在的に激しい状況に対処する方法を理解していないと述べた。また、彼は、ドレス・リフォームの支持者と良好な関係を構築する必要性を完全に理解していなかったのである。これらの女性の NDRA メンバーは、男性が女性に同情を示すことができる一方で、男性は、彼らのドレス・リフォームの経験に共感できないと結論づけた。ジャクソン博士とリディア・セイヤー・ハズブルック博士との間の争いは、このような事件の最初ではなかったのである。これらの 2 人の「強心」の個人は、多くの点で NDRA をまとめて開催し、彼らの間に亀裂があり、協会全員に反発を感じさせた。ハズブルックは女性の権利問題を支持し、協会はますますこの影響を示した。ジャクソンは女性の権利を支持した。彼は、NDRA が健康上の懸念を強調するのを好んだ。1865 年には、協会の目的は、過去のようにはっきりと定義されておらず、潜在的なメンバーがその動機を取り上げるのを混乱させ、嫌ったのである。

闘争と喧嘩が他の問題とともに NDRA の終焉につながった。最後のいくつかの慣行で多くの観衆が惹きつけられたが、改革服を着た女性の数は、改革の一般的な利益とともに落ちていたようだ。南北戦争の後、国は再建と新大統領の選挙に忙しかった。このような状況のもと、ドレス・リフォームはこれまでのように多くの人々にとって重要な問題ではなくなった。さらに、1864 年、『シビュラ』は契約の喪失と生産コストの上昇により発刊を辞めたのである。さらに、リディア・セイヤー・ハズブルックは疲労に悩まされ、いくつかの改革に関与し、『シビュラ』の責任を引き継ぐことはできなかった。ジャーナルは、ドレス・リフォームや全国ドレス・リフォーム協会の情報を会員や非会員に伝える上で重要だった。疎水性のジャーナルは、『シビュラ』を

特徴づけるドレス・リフォームに、ほぼ心を一つにして献身するほどのものを持ち合わせていなかった。『シビュラ』がないために、ハスブルックとジャクソンの間の緊張が深まり、ドレス・リフォームの関心が低下し、全国ドレス・リフォーム協会は衰退した。

（2） 安息日再臨派信者たちは改革服をあきらめる[29]

1865年、安息日再臨派信者のエレン・G・ホワイト（Ellen G. White , 1827~1915)〔アメリカ合衆国のセブンスデー・アドベンチスト（Seventh Day Adventist、頭文字をとって、ADAと略記する）教会の創立において指導者として活躍し、「預言者」と呼ばれていた人物〕は慎重に改革服を試した。およそ10年後、衣装は安息日再臨派信者の教義から姿を消した。ホワイトは、ドレス・リフォームへの最初の取り組みには躊躇していた。彼女は快適な気分になったときに短い服を着て、SDAの姉妹に同じことを頼んだ。この衣装は、霊性への道を行く安息日再臨派信者の女性のための必須のステップにはならなかったが、健康的な生活のためのエレン・G・ホワイトの計画の一部として開発された。しかし、このドレスは、安息日再臨派信者の間で決して人気はなかったのである。

ホワイト・シスター・ホワイトは、導入後すぐに改革服の話を止め、服装を着用しなくなった。10年以内に、大部分の安息日再臨派信者の女性たちは改革服を身に着けなくなったのである。1877年、エレン・G・ホワイトは適切な安息日再臨派信者の礼拝服を再解釈し、キリスト教徒の女性が単に神に喜んでもらえる服を着せるように勧めた。安息日再臨派信者の注目を集めていたドレス・リフォームの話題は、数年の間に消え去った。しかし、ドレス・リフォームのテーマは、安息日再臨派信者の遺産から完全に姿を消したわけではない。

ホワイトは、19世紀半ばのファッショナブルなドレスの「賢明な」ものと見なされ、「好ましくない特徴」が見られない世紀末のファッシ

ョンを評価することで結論づけた。彼女はまた、安息日再臨派信者の敵は、SDA の信奉者が"転向"し、 "服装に関する論争"に関与していることを望んでいると推測した。ホワイトは、SDA の女性が現在着用している衣服のスタイルを承認し、「礼儀正しく着」続けることを奨励した。

（3）　ラストショート・ドレス [31]

1870 年代、オナイダコミュニティは方向性の悲惨な変化であることが判明した。ジョン・ハンフリー・ノイズは、宗教上の問題を無視して世俗的な問題にもっと焦点を当て始めたのである。ノイズは 1879 年にオナイダを逃れることを強いられ、法廷で強姦罪で逮捕された。それ以降は遠方からのガイダンスしか提供できなかった。結局、不同意な派閥はユートピア実験を解散し、合資会社を設立することに決めたのである。会社員として働くことを望んでいたメンバーに雇用を提供し、すべてのメンバーに配分された株式に対する定期的な配当を支払った。1881 年 1 月 1 日、オナイダコミュニテはオナイダコミュニティ有限会社に変更された。1879 年 8 月、ジョン・ハンフリー・ノイズはカナダの新しい家からオナイダの生活様式の最初の大きな変化の 1 つである複雑な結婚の習慣を放棄することを勧める。まもなく、ノイズの勧告を受けた後、コミュニティ内でいくつかの一等世帯の結婚が行われた。

1881 年までに、以前のオナイダの完璧主義共同体の敷地には、ほとんどの短いドレスは見られなくなった。かつて霊的救済の手段として告知され、視覚のジェンダーの差異を破壊する手段として賞賛された衣装は、女性や男性からの大きな抵抗なく、オナイダコミュニティから姿を消したのである。

【注】

（1） Alison Gaines, Mary Edwards Walker, *The Only Female Medal of Honor Recipient*, Cavendish Square, Publishing, LLC, New York, 2018, p.88.

（2） Joan Severa, *Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashions, 1840-1900,* Kent State University Press, 1995, p.239.

（3） ・Kathleen M. Torrens, All Dressed Up with No Place to Go: Rhetorical Dimensions of the Nineteenth Century Dress Reform Movement, *Women's Studies in Communication, 20:2,* 1997.

・Kathleen M. Torrens, *Dress Reform Rhetoric in The Sibyl, 1856-1864*, UMI, 1997.

・*The Sibyl* の現史料を入手できないため、Kathleen M. Torrens の前 者の論文に掲載されている *The Sibyl* からの引用から紹介・考察した。なお、以下のホームページに *The Sibyl* の記事が 8 ページ分（The Sibyl, Vol 1 No. 17, 1857-03-01）掲載されている。本書ではこのホームページ掲載分は引用していない。

https://www.hrvh.org/cdm/ref/collection/hsw/id/43

（4） Kathleen M. Torrens, All Dressed Up with No Place to Go: Rhetorical Dimensions of the Nineteenth Century Dress Reform Movement, *Women's Studies in Communication, 20:2,* 1997.p.191.

（5） *The Sibyl*, 1856, p.26 quoted in Kathleen M. Torrens, *ibid.,* p.193.

（6） *The Sibyl,* 1857, p.107 quoted in *ibid.,* p.193.

（7） *The Sibyl,* p.136, quoted in *ibid.,* p.193.

（8） *The Lily*, pp.73-74, quoted in *ibid.,* p.193.

（9） *The Sibyl*, 1857, pp.121-122, quoted in *ibid.,* p.195.

(10) Gayle Veronica Fischer, *Who Wears the Pants, Dress Reform, and Power in the Mid-Nineteenth-Century United States*, UMI, 1995,p.

(11) Kathleen M. Torrens, *op.cit.,* pp.198-199.

（12） Gayle Veronica Fischer, Clothes make the woman: The National Dress Reform Association, 1856-1865. Unpublished Master' Thesis, Sarah Lawrence College, p.23.

（13） *Ibid.*

（14） *The Sibyl,* July 15, 1856, p.14, quoted in Kathleen M. Torrens, *op.cit.,*p.200.

（15） *The Sibyl*, Jul y 1,1 858、p.395, quoted in *ibid.,* p.202.

（16） *The Sibyl*, August 1861, p.975, quoted in *ibid.,* p.202.

（17） *The Lily*, quoted in A. Russo＆C. Kramarae, *The Radical Women Press of the 1850s*, New York, Routlege, 1991, p.55

（18） Gayle Veronica Fischer, *op.cit.,* p.387.

（19） Dale L. Walker, *Mary Edwards Walker: Above and Beyond,* pp.25-27.

（20） Alison Gaines, *op.cit.,* pp.34-39.

（21） *Ibid.,* p.34.

（22） Mary Edwards Walker, *Hit: Essay's on Women's Right*, 1871, Chapter 二　Dress reform, Kindle Edition.

（23） Dale L. Walker, Mary *Edwards Walker: Beyond*, p.67

（24） Gayle Veronica Fischer, *op.cit.*, pp.281-283.

（25） Kathleen M. Torrens, Dress Reform Rhetoric in The Sibyl, 1856-1864, UMI, 1997, pp.148-152.

（26） *The Sibyl*, March, 1863, p.1123, quoted in Kathleen M. Torrens, *Ibid.*, p.149.

（27） Gayle Veronica Fischer, *op.cit .*, pp.281-288.

（28） New York Medical Journal quoted in Gayle Veronica Fischer, *ibid.*, p.286.

（29） Gayle Veronica Fischer, *ibid.*, pp.384-388.

（30） *Ibid.*, pp.388-390.

（31） *Ibid.*, pp.390-391

図・写真の所蔵先・典拠

図１

https://www.hrvh.org/cdm/compoundobject/collection/hsw/id/79/rec/5

写真１　Joan Severa, *op. cit.*,p.239.

写真２　Alison Gaines, *op. cit.*,p.58.

写真３　*Ibid.*,p.108.

.

第5章
新しいドレス・リフォームの波（第三期）と
ドレス・リフォーム運動の意義

1　新しいドレス・リフォームの波

（1）1879年以前の変わるドレス・リフォーム

女性のオナイダ完璧主義者が短いドレスを着る前に、すでにドレス・リフォームの変化が起こっていた。短いドレスは農村部や小都市や町で最大の追随を得ていたが、1870年代から1880年にかけて、ドレス・リフォームの中心は大都市に移った。さらに、当時、ボストンのニューイングランド・ウーマンズ・クラブ（1868年）やニューヨークのソロシス（1868年3月末に設立された。アメリカで初めての女性専門クラブ）など、いくつかの女性クラブが短い改革ドレスではなく、それとは異なるドレス・リフォームに関心を示していた。

いく人かの歴史家は、女性のファッショナブルなドレスを再設計しようとするのではなく、論争の的になる外衣を導入しようとする代わりに、穏やかな「第二アメリカの波」の始まりとして、下着改革を強調した。

この下着改革の代表的な事例を以下に挙げる。

事例①　ニュー・イングランド・ウィメンズ・クラブの取り組み[1]

アメリカの女性は、全米の店舗と通販で、健康で快適な下着

を用意していた。この再編成の成功は、アメリカ人女性の政治的意識と能力の増大に大きく起因していた。政治活動家は節制、参政権、道徳的純粋さを強調し、ドレス改革を熱心に受け入れた。予防医学への特別な献身で有名な女性医師たちは、運動の頑強な支持者になった。女性の大学や新クラブの女性たちも、文学的、教育的、社会的機能を多数備えて組織されていた。これらのフェミニスト団体の中で最も早く、最も強いのは、1868年にボストンで創立されたニュー・イングランド・ウィメンズ・クラブ（New England Women's Club）であり、"The Battle Hymn of the Republic"の著者であるジュリア・ウオード・ハウ（Julia Ward Howe）によって20年以上にわたって支配されていた。クラブはアッバ・ルイーザ・グールド・ウールソン（Abba Louisa Goold Woolson）議長の下で服装改革委員会を設立した。1874年、委員会は男性が除外された展覧会を後援し、すべての女性が歓迎された。その後、特定の改革下着について、「ドレス改革委員会」（1875年5月25日特許取得）という認可印を設定し、全国各地に配布されたことを確認した。服装改革委員会の承認を受けた「衛生的な」衣服の中の最初のものは、「ユニオン・アンダー・フランネル」（図1）であった。1868年に特許を取得したこの製品は、首から腕まで身体を覆い、白いカシミヤとメリノ製の足首まで



図1 ユニオン・アンダー・フランネル

伸びた下着で、一年中履くことを意図していた。この衣料品の改良版、コンビネーション・ユニオンスーツ、スカートサポート・コルセット、およびコルセットカバーはすべて、1875 年にスーザン・テイラー・コンバースによって発明された。

事例②　ニュー・ヨーク・ソロシスの創設メンバーによる取り組み[2]

エレン・デモレスト（Ellen Demorest）とジェーン・C（Jane C., "Jennie June"）はニューヨーク市の女性クラブであるソロシスの創設メンバーであり、両人とも幅広いフェミニスト団体で活躍していた。彼らは、マダム・デモレストのファッション・ハウスや、デモール・エスターの「マンスリー・マガジン」（ジェニー・ジュニア編集）を通じて、「美しさを保つためには、健康の保全が最優先事項である」と主張した。 医療上の理由から、コルセットは女性にとって、四六時中「絶対に必須な」下着であった。驚くことではないが、最も優れたものはマダム・デモレストの考案したコルセットであった。デモレストの「健康コルセット」、「完全に科学的な原則のもとに構築された」コルセット、女性の肩掛け、スカート、ストッキング・サスペンダーのコレクションに対して、100 周年の審査員によって表彰された。

事例③　メアリー・E・ティロットソン（Mary E. Tillotson）〔元 NDRA 会員〕の取り組み

1870 年代初頭に「科学衣装」を宣伝するためにアメリカ自由ドレスリーグ（American Free Dress Leage）を組織したが、組織はわずか 3 年間しか続かず、内部の不和に悩まされていた[3]。

事例④　ジャーナリストのマリエッタ・ストウ（Marietta Stow）の取

り組み (4)

「機能的なスカート時代の膝の長さ」を備えた「トリプル S」コスチュームの着用を奨励するため、全米社会科学姉妹都市を設立した。

事例⑤　エリザベス・スチュアート・フェルプス（Elizabeth Stuart Phelps）の取り組み (5)

彼女は 1873 年にニューイングランド・ウィメンズ・クラブに対戦し、女性の健康とドレスの関係について語った。彼女は健康についての科学的かつ合理的な考え方に基づいて議論を試みたが、水治療や他の健康ドレス・リフォーム派の文献で既に表現されているアイデアを繰り返した。1870 年代に登場したドレス・リフォームは、商業的成功を収め、多くの女性が合理的な下着を着用していた（だが、健康コルセットを縛り付けた女性がいるため、健康上の利益を否定しているという噂があった）。

（2）　新しいドレス・リフォーム（1879~1920 年）

第 1 章から第 4 章において検証してきた 19 世紀アメリカのドレス・リフォーム運動は、果たして失敗に終わったと言えるのであろうか。ロバート・E・リーゲル（Robert E. Riegel）は、1890 年代後半にドレス・リフォームが「崩壊」したと断言している (6)。だが、多くの文献には、1879 年以降に様々なドレス・リフォームが行われ、20 世紀初頭に続いたことが示唆されている。ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーによると「イデオロギーを共有していないが、短いドレスとズボンのアンサンブルが共通していた 19 世紀半ばのドレス・リフォーム論者の異種グループとは異なり、19 世紀後半から 20 世紀初頭のドレス・リフォーム論者は同様の衣装を共有しなかった (7)」という。

さらに、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーは新しいドレス・リフ

ォームの事例を挙げて、こう述べている。「1879 年以降のドレス・リフォームの中には、『アートとクラフツ』運動に根ざしたもの、自転車、体育、スポーツに結びついたもの、コルセットだけに集中したものがいた。また、他のドレス・リフォーム論者は、依然として、健康への関心や代替の女性の服装を開発するための美学と結びつけた。さらに、アメリカの女性たちは、1892 年にシカゴで開催されたコロンブス博覧会で改革服を目の当たりにした [8]」と。

そこで、本項では、1879 年以降のドレス・リフォームの事例として、①サイクリング、②「芸術ドレス」、③「アニー・ジェンス＝ミラー（Annie Jenness-Miller, 1859~?）推奨」の代替コルセットを取り上げる。

事例①　サイクリング衣装 [9]

> 1890 年代に、観察者は自転車用のドレスのテーマについて大きくコメントした。多くの人々にとって、「1890 年代の女性用の自転車」は、「ブルーマー・ガール（Bloomer Girl）」と同義であった。40 年前と同じように、人気のある報道によると、自転車に乗っている女性の「二股」または「合理的」な衣服を見て、女性のサイクリストを風刺するユーモラスな漫画、歌、詩を印刷したという社会の衝撃的な反応が報告された。自転車に乗っている「ブルーマー（Bloomers）」を穿いた女性という概念は、女性に二股衣服を導入する権利と新たな取り組みのための積極的なキャンペーンの可能性を示唆した。キュレーターのサリー・シムズ（Sally Sims）は自転車の衣装はドレス・リフォームの一形態ではなく、サイクリング中に女性が快適に着用できる「ユニフォーム」を追求するものであることを示した。彼女は、「自転車競技は、世紀を迎えたドレス・リフォームに関連しているが、その役割は間接的である」と結論づけている。

事例②「芸術的ドレス」の普及

サイクリングの衣装とはまったく異なるが、19 世紀末には、世紀の前半にルーツを築いた芸術工作の「芸術的ドレス」である別の改革服が普及した。それは、ラファエル前派の画家たちが描いた流れるようなガウンを模倣してデザインされた女性のドレスである。建前は「自然な」スタイルを掲げ、天然染料で染めた自然の色彩の布を使い、コルセットを装用せずに身体にフィットさせて着用した。イングランドに起源を持ち、1870 年代末から 1880 年代にかけて一時的に大流行した。

例えば、オスカー・ワイルド（Oscar Wilde, 1854~ 1900）〔アイルランド出身の詩人、作家、劇作家。 耽美的・退廃的・懐疑的だった 19 世紀末文学の旗手のように語られる〕は、この「芸術的ドレス」のおおいなる支持者であった。ジョーン・セヴラはオスカー・ワイルドがアメリカを訪れたときの様子を次のように書いている [10]。

例えばオスカー・ワイルドは、女性のためのこの「芸術的な」スタイルの大いなる支持者であった。1882 年 4 月 14 日、シカゴの上流社会の裕福な女性である J・J・グレスナー夫人は、装飾芸術協会理事会の会合に参加した。会合には、オスカー・ワイルドがゲスト講演者として招かれていた。ワイルドは 1881 年から 1882 年にかけて、ギルバートとサリヴァンの「芸術的な」オペレッタ『ペイシェンス（*Patience*）』の宣伝と芸術的ドレス運動の普及のためにアメリカ各地を回り、かなりのセンセーションを巻き起こしていた。だがグレスナー夫人は感銘を受けなかった。彼女は日記に次のように書いている。

「彼はとても馬鹿でペテン師だ。彼は目の粗い布で作っただぶだぶのズボンにねずみ色のベルベットのジャケット（jacket）

とベスト（vest）、エナメル革の靴、フランス憲兵のような青い色のシルクネクタイとハンカチ、衿と袖口に厚い毛皮のついた深緑のコート（coat）、おかしな形の茶色い帽子、黒糸のステッチが入ったレモン色のキッド革の手袋といういでたちで、象牙の杖を持ち、オーバーコートを背中に掛け、長い髪は真ん中で分けて耳の下まで垂れ下がっていた。(…) 彼は私たちに、造花を身に着けるべきではないと言った」。

それでも、本質的には英国内で展開されたこの芸術運動は、ワイルドの訪問以降はアメリカでも——主に大都市の住民の間に——いくらかの刺激を与えた。芸術的ドレスを着た女性の姿を見せるために、「芸術的な」ティーパーティ、夕べの集い、劇やミュージカルが催された。ドレスには、「ぞんざいに結われた」自然でゆるい髪型が合わせられ、ドレスと帽子に自然の花が留められていた。最も愛好されたのはヒマワリの花だった。芸術的ドレス運動のさらなる目的には、あらゆる種類の芸術的探求を行うことと、家を芸術的に飾ることが含まれていた。この運動は 1890 年代に入ってもある程度まで存続した。

事例③　Jenness の姉妹が考案したコルセット

ジェンス（Jenness）の姉妹が考案したコルセットについて、ジョーン・セヴラは次のように述べている (11)。

1890 年 6 月と 8 月には、さまざまな女性誌に、人気ファッションライターで運動と服装改革の主導者だった「アニー・ジェンス＝ミラー（Annie Jenness-Miller, 1859~?）推奨の」いくつかの代替コルセットの広告が載った。ジェンス＝ミラーは、自らもいくつかのコルセットを考案して提案した。たとえば、ボストンのジョージ・フロスト＆カンパニー（George Frost and Company）が製造する「最高の代用コルセット（The Best Corset

Substitute)」、「妥協的身頃（Compromise Bodice）」、「均衡胴着（The Equipoise Waist）」などである。「均衡胴着」は、「コルセットと胴着とコルセット・カバーを組み合わせたもので、長らく探し求められてきたコルセットの代替品」と説明されている（『ゴーディーズ』1890年8月号）。

19 世紀が近づくにつれて女性たちは女性服を改革する必要があると主張し続けた。その結果、20世紀に入っても、女性はファッションを改善し、女性のドレスをより快適に、便利に、より健康にするためのさまざまなアイデアを実験した。ドレス・リフォームの扇動を明確に終わらせることはできないが、1920年代以降、その原則の多くは残っていて、女性の服装に不満が続いていたにもかかわらず、「ドレス・リフォーム」というフレーズは消え去っていたようだ。

2　ドレス・リフォーム運動の意義

筆者が本研究の基礎的文献としてフル活用させていただいたゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーの論文の最終章において、ドレス・リフォーム運動の意義づけが行われている。筆者としての意義づけを行うに当たり、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーの見解を以下に要約する。彼女の見解は、７項目に分類することができる [12]。

① この研究の目的の１つは、「ブルーマー・コスチューム」がアンティベラムのドレス・リフォームの全体を占めているということ、または様々な状況で着用された短いドレスが互いに関係していなかったという神話を廃止することであった。

② これらの章で議論された短い服装の衣装、組織、個人の数は、女

性の権利運動の歴史の中で、ドレス・リフォームは一瞬ではあるが興味深い瞬間であったことを示している。短い改革服に焦点を当てた 19 世紀半ばのドレス・リフォームには、オーウェンの追随者、健康改革派、オナイダ完璧主義者、ストランジット（Strangite）モルモン、安息日再臨派信者、女性権利擁護家、農民、陸の歩道を歩く旅行者、そしておそらくは売春婦など、多様な人々が関わった。この多様な女性グループは、健康、女性の権利、仕事、宗教と関係があるために、そのドレスを着用した。

③　この多様な女性グループが、自分のドレスを身に着けた理由には、健康、女性の権利、勤労、宗教が含まれる。時々彼らは他のドレス・リフォーム論者と関心を共有した。他の時代には、ドレス・リフォーム論者は彼らのイデオロギーを急激に発散した。

④　しかし、すべてのドレス・リフォーム派は、さまざまな期間にわたって短いドレスに身を委ねた。ドレス・リフォームに携わった女性の数の多さと衣装のバリエーションが着用され続けていたことから、ドレス・リフォームは失敗しなかったことが分かる。

⑤　女性の地位を変えることができないということは彼らの改革が失敗したことを意味するものではない。歴史家アミー・ケッセルマン（Amy Kesselman）は、ドレス・リフォームは、女性に、女性の権利指導者が推進しているものよりもフェミニズムの代替ブランドを提供していると主張している。ケッセルマンの結論は正しく、戦前のドレス・リフォームの成功の 1 つを指摘しているが、それにはドレス・リフォーム派の少数のグループ、すなわち全国ドレス・リフォーム協会のメンバーと疎水性のドレス・リフォーム論者のみが関与している。

⑥　ドレス・リフォームは、すべてのドレス・リフォーム論者にとってフェミニズムのクローゼット型ではなかったかもしれないが、女性のドレス・リフォーム論者に女性の役割と女性の役割を再定義す

る機会を与えた。

⑦　したがって、女性が何が好きで、男性がどのように見えるべきかを決定するルールは、20 世紀後半のアメリカ社会において引き続き機能する。ドレス・リフォーム派はほとんどの女性をズボンに入れることに成功しなかったかもしれない。彼らは、女性や男性に、衣服は単に身体の覆いではなく、女性が経験する制約を示す視覚的な文化的シンボルであることを認識させた。従来の衣服へのドレス・リフォーム論者の挑戦は、性別間の力関係の交渉における衣服の役割を強調した。

以上のゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーの見解を踏まえて、以下に筆者の見解を述べよう。

①　筆者は 19 世紀のドレス・リフォーム運動は、本書の第一部のタイトルにあるように、失敗でも挫折でもなく、衰退したという表現での評価が適切であると確信する。

②　筆者は拙著『アメリカ服飾社会史』の第 3 章の見出しを「ブルーマー運動の挫折」とした。確かに「ブルーマー運動」は挫折したが、特にハズブルックとジャクソンとウォーカーが推進した全国ドレス・リフォーム協会の活動とジャクソンとオースティンが中心的に推進した疎水性のドレス・リフォーム論者の運動はきわだっていたものと考える。

本書執筆に当たって、ドレス・リフォーム運動に携わったロバート・デール・オーウェンが The Free Enquirer（August 5, 1829）p.321 に投稿した記事、ジェイムズ・C・ジャクソンの“American Womanhood” に著した記事、リディア・セイヤー・ハズブルックの『シビュラ』の記事およびメアリー・E・ウォーカーの “Hit”を丹念に読み、本書に紹介した。これらは第一次資料であり、4 人の人物の思想がつぶさに綴られた歴史的資料である。ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャ

ーは、これらの文献には言及しているが、それらの内容の詳細は紹介されていない。筆者は服飾研究と歴史研究をドッキングさせて、長年、アメリカ服飾研究に携わってきたが、モノであれ、文書であれ、第一次資料の歴史的価値を重視してきた。上記の4人が残した文書には、とりわけヨーロッパからアメリカに導入されたファッショナブルで拘束的な衣装が、女性の健康に及ぼす生理的影響という視点から、また、医者の視点から、赤裸々に分析されている。それだけにドレス・リフォーム運動において、特に3人の博士、ジャクソン博士、ハズブルック博士、ウォーカー博士が主張してきた見解には信念がにじみでている。そこにこそ、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーが評価した「19世紀のドレス・リフォーム運動は失敗ではなかった」ことの確固たる根拠があるものと確信する。その意味で、本書にはゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーの研究では見られない筆者独自のオリジナリティを発揮できたものと自負するものである。

③　本書で3つの時期に区分して、その実態を検証したドレス・リフォーム運動が改革のターゲットとした女性の衣服は、パリから導入された拘束的な衣装であった。労働着としてのリフォーム・ドレスは、審美性を欠いており、おしゃれを好む女性には、受け入れがたいものであった。また、「女は男の衣装を身に着けてはならない。また男は女の着物を着てはならない。すべてこのようなことをする者を、あなたの神、主は忌みきらわれる。[12]」という聖書の申命記の教えに反するものであった。それゆえ、この運動は衰退していったのである。20世紀初頭にはドレス・リフォームという言葉は使われなくなり、「アメリカ人女性のためのアメリカン・ファッション」への取り組みが推進されてゆく。本書第二部では、パリ・モードのアメリカン・スタイルへの転換がいかにして成し遂げられてゆくのかをテーマに、さらに筆をすすめてゆく。

【注】

（1） Deborah Jean Warner., Fashion, Emancipation, Reform, and the Rational Undergarment, *Dress*, 4:1, pp.25-26

（2） *Ibid.,* p.29.

（3） Gayle Veronica Fischer, *Who Wears the Pants, Dress Reform, and Power in the Mid-Nineteenth-Century United States*, UMI, 1995, p.163.

（4） *Ibid.,* pp.395-396.

（5） *Ibid.,* p.395.

（6） Robert Riegel, "Women's Clothes and Women's Rights," *American Quarterly* 15 （Fall 1963）, pp.390-401, quoted in Gayle Veronica Fischer, *op. cit.,* p.24, p.395.

（7） Gayle Veronica Fischer, *op. cit.,* p.395.

（8） *Ibid.,* p.395.

（9） *Ibid.,* pp.395-396.

（10） Joan Severa, *Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashions, 1840-1900,* Kent State University Press, 1995, p.380.

（11） *Ibid.,* p.462.

（12） Gayle Veronica Fischer, *op.cit.*, pp.399-400.

図の典拠

図１　The Emancipation Union Under-Flannel, Covered by Patents of Oct.27, 1868, and August 3d, 1875.典拠 : The Emancipation Union advertisement in George Frost & Co., Catalogue of Dress Reform and Other Sanitary Undergarment for Ladies and Children（Boston, 1876）.（Courtesy of Smithsonian Institution.）. Deborah Jean Warner, Fashion, Emancipation, Reform, and the Rational Undergarment, *Dress* Vol.4, 1978, p.26.

第二部

パリ・モードから「アメリカン・ルック」への転換
―その背景とドロシー・シェーバーの活躍―



ロード・アンド・テーラー　5番街のディスプレー。

エディス・ルスのテキスタイル・デザイン。1932 年。典拠：Tiffany Webber-Hanchett, Dorothy Shaver: Promoter of "The American Look", *Dress* Vol.30, 2003, p.83.

第1章

歴史的背景

1800年代から1950年代のニューヨーク・ファッション

本書の「はじめに」の冒頭で述べたように、第二部ではドレス・リフォーム運動の「第二の波」をテーマとする。第一部の第5章末尾で述べたが、20世紀初頭にはドレス・リフォーム運動という言葉は使われなくなり、「アメリカ人女性のためのアメリカン・ファッション」への取り組みが推進されてゆく。我が国では馴染みがないが、ドロシー・シェーバー（Dorothy Shaver, 1893~1959）は、その推進を図った重要人物である。第二部では、ニューヨーク都市における商業およびファッションの発展を背景として、彼女の活躍ぶりを具体的に考察し、パリ・モードから「アメリカン・ルック」への転換をもたらした牽引力について、明確な答えを打ち出す。そこで、歴史的背景の考察から始めよう。

ドロシー・シェーバーの活動を論じるに当たって、ニューヨーク市の衣服産業を次の視点から分析する。第一に、ニューヨークマンハッタンにおける商業発展の地域特性について。第二に、アメリカン・ファッションの生成の時期とその実態について。そのため、本章では19世紀から1950年代を以下の6つの時期に区分して、各時期の特徴をまとめる。

第1期　1800年代、第2期　1900~1920年、第3期　1920年代、第4期　1930年代、第5期　1940年代、第6期　1950年代

1　1800 年代

（1）　小売業の発展の時系列的分析

表 1 は C・R・.ミルバンク（Caroline Rennolds Milbank）[1] に基づいて、19 世紀ニューヨークにおける商業発展を時系列に沿って、表にまとめたものである。年代順に、小売店の設立年・移動年、店舗の種類・名称、創設者、店舗の業態・販売商品、および所在地を順次、項目化した。表に見るように、百貨店（百貨店は小売店であるが、本表では、業態として百貨店と小売店に分類した）と小売店の劇的な発展が見られる。本表では店舗数が多い順に集計すると小売店（ドレスメーカー）が 35 店舗、小売店（販売を主とするドライ・グッズ・ストアー）が 31 店舗、百貨店 24 店舗、小売店（帽子の仕立・販売）が５店舗、計 94 店舗であるが、百貨店は移転、あるいは統廃合されているため 20 店舗とカウントして、表２にそれぞれの店舗が全体に占める割合を表した。小売店（ドレスメーカー〔洋服仕立業〕）が 38.5 パーセント、小売店（販売を主とするドライ・グッズ・ストアー〔雑貨屋〕が 34 パーセント、百貨店が 22 パーセント、小売店（帽子の仕立・販売）が 5.5 パーセントという割合である。ドレスメーカーが 3 分の 1 以上を占めている。もっともミルバンクがすべての小売業を網羅して叙述しているかどうかは定かではない。

小売店のうち、ドレスメーカーの代表的なものに、1850 年代に、洋服仕立業と帽子屋をブリーカー・ストリート（Bleecker Street）で営んでいた Mr. Davidson & Mme Pinorse、1868 年に 5 番街でヨーロッパ・ファッションのトップ・ドレスメーカーを営んでいたカトリーヌ・ドノヴァン(Mrs.Catherine Donovan)などがある。その他、表 1 に見るように、多数のドレスメーカーが小売業を営んでいた。衣服のデザイン傾

向は、パリ・モードが主流を占めていたものと推察される。ドライグッズストアーの代表的なものに、ブルックス・ブラザーズ（Brooks brothers）（男性と女性の贅沢な衣料品を販売）やガンザー（Gunther）（毛皮店）など31店舗が営まれていた。帽子店には代表的な店舗のマダム・ハリス・アンド・サンズ(Mme Harris & Sons)などの5店舗が挙げられる。

百貨店[(2)]のA・T・スチュワート（Stewart）は1823年にブロードウェイ283番地で開業し、1862年にはブロードウェイ・4番街・9丁目・10丁目で囲まれた街区に開店した。アーノルド・コンスターブル（Arnold & Constable）は1825年にフロント・ストリートで開業し、パイン・ストリートに移転した。ロード・アンド・テーラー（Lord & Taylor）（**写真1**）は1826年にキャサリーン・ストリート・バウアリで設立され、1852年グランドストリート・クリスティストリートへ、1869年、ブロードウェイ20丁目に移った。R・H・メーシー（Macy）は1858年に、ダウンタウン（6番街13・14丁目）に開店し、1902年までこの地を拠点として営業した。スターン（Stern's）は1867年に、バッファローに開店した。オールトマン（ Altman's）は1864年に、3番街に開店した。シンプソン・クロフォード・シンプソン（Simpson-Crawford-Simpson）は1876年に、6番街に開店した。ボンウィット・テラー（Bonwit Teller）は1895年、シーゲル・クーパー（Siegel-Cooper）は1896年、レディズ・マイルで開業した。ワナメーカー（Wanamaker）は1896年に、ニューヨークのA・T・スチュアートのカースト・アイアン・パレスを買収し、ニューヨークに進出し、1911年にグランド・ディポーの場所に12階立ての大理石の新しい店をオープンさせた。本書の第二部で考察対象とするのはロード・アンド・テーラーである。

ここで、ニューヨークにおけるアパレル産業の推進者として注目したいのが、エレン・カーティス・デモレスト（Ellen Curtis Demorest,

1824~1898）である。筆者はデモレスト夫人のパターンについては、論文 [3] を著しているが、ミルバンクの次のデモレスト評価は注目に値する。「19 世紀のファッションにとって重要なのは、プロとして知られているパターンの発明家、エレン・カーティス・デモレストのパターンである。他の誰よりも、彼女は、発明、生産、教育、マーケティング、および流通にたずさわり、質の良い製品の生産をめざすアメリカのファッションの構造を予見した [4]」とミルバンクはデモレストの多様な取り組みを賞賛している。「ある意味では、デモレストは、今日のクチュール・キャリバー・デザイナーの 19 世紀バージョンである。…アメリカのファッションは注文服から既製服へと進化しただけではなく、現在に至るまで、両者は、ほぼ並行して存在していたため、デモレストの貢献は重要なものであった [5]。」デモレストもニューヨークのイレブン・ストリート（Eleven Street）に小売店を構えていた。

また、ファッションへの関心の高まりは、通販カタログやファッション雑誌の設立によっても証明された。このカタログは E・バタリック（Ebenezer Butterick, 1826~1903）がファッション・ジャーナルを引き継ぎ、通信販売でペーパー・パターンの販売を開始した 1866 年に発行され始めた。引き続き、1867 年にハーパース・バザー（Harper's Bazaar）がニューヨークで、最初に出版された。ヴォーグの創刊号は 1892 年に出版された。

さて、小売店や百貨店で販売されていた女性の既製服にはどのような種類があったのか。「女性の既製服産業または衣料品は、1850 年代になると、ゆるやかにフィットしたラップとアウターが手作業と機械で量産され始めた。紳士服に最も似た、上着クラスのスタイルの需要が高まるにつれて、シャツウエスト、テーラードスカート、ジャケットなど、紳士服の仕立てに必要な技法を駆使した服種が徐々に製造され始めた [6]。」「20 世紀初頭には、アメリカの既製服の品質は国際的に認められていた [7]。

表１　19 世紀ニューヨーク市における商業の発展

年	店舗の種類・名称	創設者	業種	業態・販売商品	所在地
1818	H. & D. H. Brooks & Co	Henry Sands Brooks	小売業	男女の贅沢衣料品	Catherine & Cherry St.
1820	Gunther	C. G. Gunther	小売業	毛皮店	Chatham St.
1823	A.T.Stewart	Alexander T. Stewart	小売業	アイルランドのリネン、レース	283 Broadway
1825	Arnold & Constable	Aaron Arnold	百貨店	雑貨屋	Pine St.
1826	Lord & Taylor	Samuel Lord and George Washington Taylor	百貨店	ストッキング、婦人服、カシミア・ショール	Catherine St. & the Bowery
1837	James McCreery	James McCreery	小売業	雑貨屋	82 Canal St.
1840	Gunther & Sons	C. G. Gunther	小売業	毛皮店	Maiden Lane
1842	George A.Hearne	George A.Hearne	小売業	アート・コレクター、雑貨屋	425 Broadway
1846	A.T.Stewart "Marble Palace"	Alexander T. Stewart	百貨店	雑貨屋	280 Broadway
1856	George A.Hearne	George A.Hearne	小売業	アート・コレクター、雑貨屋	775 Broadway
1856	Brooks brothers	Henry Sands Brooks	小売業	男女の贅沢な衣料品	464 Broadway
1856	Bowen McNamee Co.	Bowen McNamee	小売業	雑貨、アメリカと海外のシルク	Broadway and Pearl St.
1857	Ehrich Brothers	Julius, Samuel, Louis and William	小売業	雑貨屋	8th Avenue at 24th St.
1857	Mrs. Erickson	Mrs. Erickson	小売業	洋服仕立業・帽子屋	464 Broadway
1858	R.H.Macy Co	Rowland Hussey Macy	百貨店	雑貨屋	14th St. and 6th Ave.
1850年代	Gray Beekman & Co	Gray Beekman	小売業	雑貨屋	Broadway
同	Lichtenstein	Lichtenstein	小売業	帽子屋	Broadway
同	LeBoutillier Brothers	LeBoutillier Brothers	小売業	通信販売	Broadway
同	Elliott	Elliott	小売業	通信販売	Broadway
同	Miller & Grant	Miller & Grant	小売業	通信販売	Broadway
同	Tucker	Tucker	小売業	通信販売	Broadway
同	Jackson	Jackson	小売業	通信販売	Broadway
同	McCutcheon	McCutcheon	小売業	通信販売	Broadway
同	Mr. Davidson and Mme Pinorse	Mr. Davidson and Mme Pinorse	小売業	洋服仕立業・帽子屋	Bleecker St.
1862	A . T. Stewart	A . T. Stewart	百貨店	雑貨屋	280 Broadway
1864	B. Altman	Benjamin Altman	百貨店	雑貨屋	3rd Ave.
1866	C. G. Gunther & Sons	C. G. Gunther	小売業	毛皮店	502 Broadway
1867	Mme Demorest	Mme Demorest	小売業	パターン、洋服・帽子販売、洋服仕立業	11th St.

年	店舗の種類・名称	創設者	業態	業態・販売商品	所在地
1867	Stern	The Stern boys, Louis, Benjamin and Isaac	百貨店	雑貨屋	Buffalo
1868	L. Binn	L. Binn	小売業	帽子屋	555 Broadway から 579 Broadway へ
1868	Arnold & Constable	Aaron Arnold	百貨店	雑貨屋	19th St.
1868	Lord & Taylor		百貨店	雑貨屋	12th St.
1867	Mme Diede	Mme Diede	小売業	洋服仕立業	15 Broadway
1867	S. T. Taylor	S. T. Taylor	小売業	パターン	407 Broadway
1867	W. Lockwood	W. Lockwood	小売業	未亡人の喪服、second mourning	551Broadway
1867	Lord & Taylor		百貨店	雑貨屋	461 Broadway
1867	George A.Hearne	George A.Hearne	小売業	パリのラップ	425 Broadway
1867	Bereman & Co	Bereman	小売業	刺繍用品, 朝食セット マントル, ラップ	478 Broadway
1867	Mrs. Kahn	Mrs. Kahn	小売業	帽子屋	499 Broadway
1867	Genin	Genin	小売業	贅沢な輸入品	513 Broadway
1867	Mme Harris & Sons	Mme Harris	小売業	一番, 贅沢な帽子屋	Broadway & Waverly Place
1867	James Gray & Co.	James Gray	小売業	帽子屋	Broadway
1867	Mrs. Cripp	Mrs. Cripp	小売業	洋服仕立業	571 Broadway
1867	Mrs. Simmons	Mrs. Simmons	小売業	洋服仕立業	637 Broadway
1867	Wilkes & Moynan	Wilkes & Moynan	小売業	洋服仕立業	691 Broadway
1867	Mme Havais	Mme Havais	小売業	洋服仕立業	729 Broadway
1867	Mrs. Lovett	Mrs. Lovett	小売業	洋服仕立業	Broadway
1867	Mathilde	Mathilde	小売業	洋服仕立業	Broadway
1867	Clark & McLoghan	Clark & McLoghan	小売業	洋服仕立業	Broadway
1867	R. Thompson & Co.	R. Thompson	小売業	洋服仕立業	Broadway
1867	F. Mather	F. Mather	小売業	洋服仕立業	Broadway
1867	R.H.Macy.Co	Rowland Hussey Macy	小売業	雑貨屋	14th and 13th St.
1868	Mrs. Ringold	Mrs. Ringold	小売業		6th Ave.
1868	Mrs. Higgins	Mrs. Higgins	小売業	洋服仕立業	6th Ave
1868	Mrs. Ryel	Mrs. Ryel	小売業	洋服仕立業	6th Ave
1868	Miss Shugg	Miss Shugg	小売業	洋服仕立業	6th Ave
1868	Mrs. Lovett	Mrs. Lovett	小売業	洋服仕立業	6th Ave
1868	Mrs. Davidson	Mrs. Davidson	小売業	洋服仕立業	125 Bleecker St.から University Place へ
1868	Mme Burlmeyer	Mme Burlmeyer	小売業	洋服仕立業	Great Jones St.
1868	Mme Regnier	Mme Regnier	小売業	洋服仕立業	9 Fifth Ave.

年	店舗の種類・名称	創設者	業態	業態・販売商品	所在地
1868	Natalie Tilman	Natalie Tilman	百貨店	輸入ものの帽子業、オーダーメイドのクローク、ドレス、ランジェリー、レース、アクセサリー	148 East 9th St.
1868	Mme Railings	Mme Railings	小売業	世界一の専門販売業者の一つ	out of 318 Canal
1868	Brodie	Brodie	小売業		out of 318 Canal
1867	Brooks Brothers		小売業	男女の贅沢な衣料品	moved to 14th St.
1868	Brooks Brothers		小売業	男女の贅沢な衣料品	Union Square
1868	Mrs. C. Donovan		小売業	洋服仕立業(NY市のトップの業者のひとつ	5th Ave.
1876	F. J. Denning & Co	F. J. Denning (Alexander T. Stewartを継ぐ)	百貨店	雑貨屋	280 Broadway
1876	Best & Co.	Best	小売業	洋服仕立業・輸入業	Broadway
1876	Thum	Thum	小売業	洋服仕立業・輸入業	Broadway
1876	Rogers Peet	Rogers Peet	小売業	男子服の会社	Broadway
1876	Lord & Taylor		百貨店	百貨店	Broadway
1876	Arnold	Arnold	百貨店	百貨店	Broadway
1876	Constable & Co.	Constable	百貨店	百貨店	Broadway
1876	Hearne	Hearne	小売業	アートコレクター、雑貨屋	4th St.
1876	Demorest	Demorest	小売業	パターン、洋服・帽子販売、洋服仕立業	11th St.
1876	B.Altman	B.Altman	百貨店	百貨店	6th Ave
1876	Stern	Stern	百貨店	百貨店	23rd St.
1876	Simpson-Crawford-Simpson		百貨店	百貨店	6th Ave
1876	Adams	Adams	百貨店	百貨店	
1876	M.A. Connelly	M. A. Connelly	小売業		Ladies' Miles
1876	Albert Guerin	Albert Guerin	小売業	洋服仕立業・輸入業	
1876	Marian Dick	Marian Dick	小売業		
1895	Bonwit Teller	Bonwit Teller	百貨店	百貨店	
1895	Hilton Hughes	Hilton Hughes,	百貨店	百貨店	
1895	F. J. Denning & Co	F. J. Denning & Co	百貨店	現在のDenning & Companyの母体か?	
1896	Wanamaker		百貨店	百貨店	
1896	Redfern	Redfern	小売業	洋服仕立業(イギリス人の仕立て屋)	
1896	L. P. Hollander	L. P. Hollander	小売業	L.P.Hollander & Companyの母体か?	

年	店舗の種類・名称	創設者	業態	業態・販売商品	所在地
1896	Siegel-Cooper department store	Siegel-Cooper	百貨店	百貨店(世界最大)	Ladies' Miles
1896	White-Howard & Company	White-Howard	小売業	洋服仕立業・輸入業	
1896	Macheret	Macheret	小売業	洋服仕立業・輸入業	
1896	T. M. and J. M. Fox	T. M. and J. M. Fox	小売業	洋服仕立業・輸入業	
1896	Mme A. E. Sauer	Mme A. E. Sauer	小売業	洋服仕立業	
1897	Mrs. C. Donovan	Mrs. C. Donovan	小売業	洋服仕立業 (ヨーロッパファッション)	

Caroline Rennolds Milbank, *New York Fashion, The Evolution of American Style*, Harry N. Abrams, Inc., Publishers, New York, 1989. から作成。

表2　業態

業態	店舗数	割合(%)
小売業(販売)	31	34.0
小売業(仕立て・販売)	5	5.5
小売業(仕立て)	35	38.5
百貨店	20	22.0
合計	91	100.0

(2)　ユダヤ人移民の縫製労働者

女性の既製品はどこで誰によって生産されていたのか。野村達朗著『ユダヤ移民のニューヨーク』(山川出版、1995年)に拠って、19世紀半ばのアパレル産業の現場を訪れてみよう[8]。

ニューヨークでアパレル産業が興ったのは、1800年代半ば頃のことである。仕立屋は貧しい移民が最初についた職業の一つであった。もともと富裕層は仕立屋に洋服をカスタム・メードしていた。すなわち特別注文で作らせていたのである。衣服の大量生産が可能になると、

アパレル産業は貧困区域のロワー・イースト（マンハッタン区の下町）やヘルズキッチン（タイムズスクエアーの西側）などで発展し、ユダヤ人移民などの新移民がその縫製業に就いた。彼らの作業場は、当初は顧客の便利の良いブロードウェイ周辺のエリアで、ソーホー、グリニッジ・ビレッジの南東あたりであった。一階がショールームなどの接客スペース、その奥か階上が倉庫と裁縫作業場という作りが一般的だったようである。しかし、その作業場は決して労働環境としては良好ではなく、また低賃金・長時間労働が当たり前であった。

ニューヨークにおけるデパートや小売店における中流階級の上・中層部の消費生活の背後には、このような生産部門で労働に携わる縫製労働者が歴然と存在したことは忘れてはならない[9]。

（3） 商業地域の南部から北西への移動とレディズ・マイルの形成

次に、項目（1）で考察した 19 世紀 ニューヨークにおける商業地域の南部から北西への移動の問題に言及する。移動の要因[10]としては、ニューヨークマンハッタンの地域特性が挙げられる。第一に、1809年に、ロバート・フルトンが蒸気船を発明した結果、ハドソン川の航行が容易となり、ニューヨークの港を二重に便利にした。第二に、マンハッタン島の南部に、2 つの水路があり、1825 年には、そのうちの 1 つのエリー運河を通って、五大湖の内陸にアクセスできた。その結果、ニューヨーク市は地理的にも小売りの拠点となった。

1870 年代には、レディズ・マイル（**図２**）がしっかりと設置されていた。これは単なる 1 マイル長の豪華な店舗ではなく、ブロードウェイが対角線として走って東の境界線を形成し、南に 14 ストリート、北に 23 ストリート、そして 西によって 6 番街をなしている。

A・T・スチュアート（A. T. Stewart）やロード・アンド・テーラー（Lord&Taylor）（**写真１**）のような百貨店は、規模が大きくなるにつ



図２　レディズ・マイル

れて、より多くの種類の商品を提供した。百貨店や小売店で販売していた既製品は、マンティラ、ショール、ケープ、クローク、衿である。1868 年までに、スカートとルーズフィットのサックジャケットを備えた既製のスーツが販売されていた。価格はウエスト（ブラウス）の材料のコストを含めて、25 から 250 ドルの範囲であった[12]。1880 年代までは、小売店では自分のブティックでデザインされたカスタムメイドのファッションを販売していた[13]。

19 世紀半ばにファッション小売業に起こった主要な革新は、春と秋に毎年開かれたオープニングデイズに誘惑された消費者の行動であった。ニューヨークの住人や訪問者は、精一杯のお洒落をして、ブロードウェイを通って北へ南へと遊歩した。



写真１　ロード・アンド・テーラー。Broadway and 20th St. 南西の角。1869 年建立。

彼らはウィンドーというウィンドーに展示された衣装をお互いの衣装と目を凝らして見比べながら、サイドのストリート沿いに、散策して回った。当時の新聞記者は、「その日、何百、何千人もの魅力的な国内の女性、献身的な家政婦、注意深い母親、優しい妻たちは、夫と子供と家庭の心配を尻目に、ニューヨークの通りを駆け抜けました[14]」(ニューヨーク・タイムズ、1859年3月25日）とコメントした。

2　1900-1920年

S・B・マーケッティ（Sara B. Marketti）とJ・L・パーソンズ（Jean L. Parsons）の論文は「アメリカ人女性のためのアメリカン・ファッション：アメリカのファッション・アイデンティティを開発するための20世紀初頭の取り組み」をテーマとしている。本論文によると「20世紀初頭、アメリカでの女性のアパレル製造は、もともとコルセット、バッスル、アウターラップの生産に基づいた新興産業であった。しかし、アメリカの企業は、1900年以降、衣服着用者の人気の少なくとも一部に起因して、劇的に拡大した。ニューヨーク市では、業界の中心で、女性アパレル会社の数は1900年から1917年にかけて1,856社から6,392社となり、350%増加した。1920年までに、米国のアパレルメーカーはアメリカ人女性のための衣服の主要生産国になった。この急速な成長は、ますます活発で多様なアメリカの消費者のための新しいスタイルを、絶え間なく迅速に作り出す必要性によって奨励された[15]」という。

ここには実に明快に20世紀初頭のニューヨークにおけるアパレル産業の発展の実態が、数量的に提示されている。とはいうものの、こうも書かれている。「1910年のWomen's Wearの第1号の1つで、編集者は、影響力のある女性、著名な女優、衣料品メーカー、パリのドレスメーカーの役割について考察している。最終的には、女性はパリの

レーベルを付けたドレスを探しているにせよ、フランスの起源を示唆している広告をしているにせよ、パリへの帰属が消費者を導く大きな影響であると信じていた[16]。」

Women's Wear は、1910 年に発刊されたファッション産業貿易雑誌であり、今日の Women's Wear Daily の元である。1911 年にはパリのオートクチュール協会[17]が設立された。それだけに編集者のパリ製の衣装に対する関心は、非常に高かったものと思われる。そして、そのような状況のなかで、本論文が明らかにしているようなアメリカ人女性のためのアメリカン・ファッションへの取り組みが行われていたことに注目したい。本書第二部第 3 章で扱う「アメリカン・ルック」の萌芽は、すでにこの時期に始まりつつあったのではなかろうか。

3　1920 年代

（1）アメリカン・ファッション・キャンペーン

本節では引き続き、S・B・マーケッティと J・L・パーソンズの論文に基づいて、1920 年代のニューヨーク・ファッションについて考察する[18]。

1920 年代までに、パリに依存しないアメリカのスタイルの開発が求められるようになる。ナショナル・レディース・テイラーズ&ドレスメーカー協会が、広告キャンペーンとスローガン「アメリカン・スタイルのアメリカ人女性」を組織する。だが、アメリカの趣向に合わせてパリのデザインを常に改造してきた米国の製造業者やデザイナーは、次の論理的なステップを踏み出すことができなかった。そして、1930 年代にアメリカのデザインが徐々に認められたが、ほとんどのアメリカのデザイナーは 1940 年代までは名前の認知を達成しなかった。しかし、米国の既製服アパレル業界のこの緊急の時期に整えられた土台な

しでは、これは不可能であったものと思われる。

The American Cloak and Suit Review で説明されているように、「アメリカン」スタイルは、パリのオートクチュールの芸術的カットとアメリカの女性が望む実用的なデザインを組み合わせたものである。しかし、「実用的」を構成するものは説明されていなかった。最もよく挙げられるのは、「明確にアメリカの製品」とみなされる、シャツウエア、テーラードスーツ、ウォーキングレングスのスカートである。これらは実践とファッションの耐久性が評価された

ここで、1920 年代からアメリカ女性に愛用されていた『絹ストッキング』に言及しておきたい。鴇田章氏によると「1919 年に日本はアメリカ向けの生糸輸出が 96%に達し、それ以降も 1933 年まで 90%以上がアメリカ向け輸出で、そのほとんどがフルファッション編機による『絹ストッキング』となり、第二次世界大戦でアメリカとの生糸貿易が途絶えるまで、日本の生糸で作られた『絹ストッキング』はアメリカ女性を虜にしていた [19]」とのことである。1920 年代には「女性のファッションはシンプルで機能的なショートスカートへと変化し、仕事や娯楽による女性の外出が増えたことなども、ストッキングの消費を促進したのである [20]。」

表3　アメリカに於ける人絹と生糸の消費量とその比率　(単位：千Kg)

		人絹		生糸		合計	
西暦	和暦	消費量	%	消費量	%	消費量	%
1923	大正12	14,787	41	21,636	59	36,423	100
1924	13	19,096	46	22,135	54	41,231	100
1925	14	26,807	47	30,255	53	57,062	100
1926	昭和元	27,216	47	30,255	53	57,471	100
1927	2	45,405	58	33,248	42	78,653	100
1928	3	45,405	57	34,428	43	79,833	100
1929	4	59,557	61	37,376	39	96,933	100
1930	5	53,161	60	35,108	40	88,269	100
1931	6	71,350	67	35,879	33	107,229	100
1932	7	69,037	67	33,430	33	102,467	100
1933	8	93,803	77	28,304	23	122,107	100

出典:『別所時報』昭和11年1月5日発行

表４　戦前アメリカの生糸消費比率　（単位：千Kg）

		織	物	ストッキング		合	計
西暦	和暦	消費量	%	消費量	%	消費量	%
1919	大正 8	11,744	95	574	5	12,318	100
1929	昭和4	26,400	73	10,200	27	36,600	100
1936	11	13,860	53	12,180	47	26,040	100
1937	12	6,780	28	17,400	72	24,180	100
1938	13	6,480	28	16,860	72	23,340	100
1939	14	4,020	17	17,280	83	21,300	100

※単位俵を千Kgに換算（最新の米国絹工業と其問題）
出典：昭和24年『蠶絲年鑑』
1919年の みアメリカ絹業協会統計資料

表３と表４は鴇田氏からご提供いただいた。表４からストッキング生産に用いられた生糸量が 1919 年から 1939 年にかけて、劇的に増加してゆく様相を読み取れる。だが、1940 年代には L-85 の規制の影響でストッキングをはかないで、レッグメイクアップという新案装置を用いて、眉毛の鉛筆で縫い目を塗るファッションが登場するのである。

（2）パリの偽レーベル

本節では S・B・マーケッティと J・L・パーソンズの論文に基づいて、20 世紀初頭のパリの偽レーベルについて述べる [21]。

ユニークなアメリカンデザインの存在を確立することの問題点の 1 つは、多くのアメリカンデザインの衣服が売り上げを上げるために、フランス製として通っていたということであった。フランスの衣装の威信は依然として多くの顧客に影響を与えたため、フランスの裁縫師とデザイナーの作品の過度のコピーは続いたのである。一部の製造業者や小売業者にとって、「フランス製」のデザインへの最も簡単なルートは、フランスの偽造品レーベルを付けることであった。大規模な小売業者も同様にこれらのレーベルを使用していた。

アメリカの女性がそうでなければ買わないので、アメリカ製の服がフランスのレーベルをつけている店舗がニューヨークには十数店あったとのことである。「どのアメリカ人女性も、20 ドルでは新しいパリ

の帽子を手に入れることができないことを知っている」と主張している人もいた。だが、虚偽のレーベルが消費者を欺いていると感じた人もいた。他の人は、売り手が顧客を欺くための法的および道徳的責任を負うべきだと主張した。

以上の S・B・マーケッティと J・L・パーソンズの見解から、偽りのパリのレーベルが、当時、アメリカで横行していたことに対する消費者の思いを察することができる。S・H・アダムズ（Samuel Hopkins Adams）[22] は、「アメカ人女性のパリのものに対する独創性のない執拗な要求は、詐欺につながった。このような詐欺は、今日では米国のほとんどの裁縫や製造業に浸透している。例えば、女性がいわゆる“Worth”のレーベルが縫い込まれた輸入ガウンを持っている場合、その確率は圧倒的であり、それは詐欺罪である」と述べ、今日のパリの



図 3　偽レーベル。米国で製造され、アメリカ製のドレスで使用するために今年、販売された有名なパリのドレスメーカーの偽造ラベルの例。



図 4　偽レーベル。シカゴのレーベル工場の「見本帳」にあるこの 1 枚の複製は、偽造されたフランスのレーベルが帽子の製造業者とディーラーに用いられていることを示している。その数は 1000 枚にも及ぶ。

偽レーベルの写真（図４）を掲載している。このような偽レーベルは、今日、大量生産されている。

（３）　貿易規則の変更－関税 [23]

歴史的に関税は、外国の競争に対する米国のようなビジネス促進の兵器の中で最も効果的な武器であった。

南北戦争が終わってから、関税は 1930 年代まで繰り返し上昇し、フランスからの消費財の購入に悪影響を与えた。パリから米国への輸出は、20 世紀初頭に急激に減少した。彼らは、衣類がその価値の 50～150%という高い評価義務を負っていたため、1912 年の第 1 四半期から第 2 四半期までに 50%減少した。

以前、何百人ものアメリカ人の裁縫師が、毎年 2 回パリに定期的に旅行し、平均 12 ダースの新しいモデルを携えて帰国し、多かれ少なかれ関税を免れた。現在は関税がかけられており、大企業のみがパリのモデルを購入するだけである。もちろん、パリの偉大な衣装製造所のどれもがこの事実を認めないのは当然であるが、アメリカやニューヨークは、あらゆる観点から、特にアメリカがパリと共に、ファッションの中心地となっていたことは間違いなかった。パリでさえもこれを認めていたのである。

（４）デザイン・プレゼンスの開発 [24]

「アメリカ人女性のためのアメリカのファッション」の募集が好評を得ている中で、アメリカのデザイナーを教育し、アメリカのファッションの発展を奨励し、ファッションセンターとして米国を促進するためには、組織体制を整える必要があった。そのため、以下の学校が設立され、デザイン教育が行われた。

1）ニューヨークのデザイン学校（American School of Design、1896 年設立）

2）ニューヨーク市のプラット・インスティテュート（Pratt Institute、1887 年設立）
3）現在、ニュー・スクール・パーソンズ・デザイン・スクール（The New School, Parsons School of Design）として知られているクーパー・ユニオン（Cooper Union、1910 年代）
4）ファッションアカデミー（Fashion Academy、1912 年）
5）メトロポリタン・アートスクール（Metropolitan Art School、1919 年）
6）トラップハーゲン・スクール・オブ・ファッション（The Traphagen School of Fashion、1923 年）
7）グランド・セントラル・スクール・オブ・アート（Grand Central School of Art、1924 年）
8） ニューヨーク市 2 番街のデザイン学科の I・ローゼンフェルド教授とシカゴのアンナ・モルガン・スクール・オブ・エクスチェンジのような、それほど知られていない小規模な学校も、貿易プレスでデザイン教育プログラムを宣伝した。

また、以下の博物館・美術館が設立された。

1）メトロポリタン美術館（1872 年）
2）アメリカ自然史博物館（1869 年）
3）ブルックリン美術館（1895 年）

博物館やスタイルライブラリに加えて、アメリカはパリのデザイナーが享受する文化的雰囲気と法的保護の両方を欠いていた。コメンテーターは、パリと競争するために、アメリカ人は、フランスのファッションがいつも初演された競馬、壮大な野外レストラン、アフリカのお茶を飲むことができるカフェ、ファッショナブルな女性が見られる場所など、同じ場所が必要だと示唆した。

アメリカのデザイナーが 20 世紀初頭に認知を得るために苦労した

理由の 1 つは、報道からの関心が薄かったことであった。パリのデザイナーは絶妙なデザインの優れたクリエイターとして賞賛されたが、アメリカのデザイナーはパリのデザインをコピーするための技術的能力のために賞賛された。

さらに、以下のデザイン・コンテストが企画された [25]。

1）1912 年　アメリカでデザインされた帽子とドレスのための最初の新聞コンテスト（ニューヨークタイムズ）。
2）エセル・トラップハーゲン（Ethel Traphagen, 1882~1963）〔イブニングドレスの優勝者、 1920 年代にニューヨークのファッションの学校を設立、アメリカの女性のファッションにショートパンツとスラックスを紹介〕主催のコンテスト。
3）プロのアーティスト、アマチュア、学校の子どもたちを含むアメリカのアート・アライアンス（Art Alliance of America）で 1916 年に開催されたコンテスト。
4）全米レディーステイラーズ＆ドレスメーカー協会（The National Ladies' and Dressmakers Association）が開催したコンテスト。
5）アメリカで創作されたバティック、タイ・アンド・ダイ・プロセス、ブロック印刷されたファブリックを含む、手で作られた生地のためのアルバート・ブラム・コンテスト。
6）1918 年にニューヨークとフィラデルフィアのワナメーカーの店舗（Wanamaker's Stores）によって主催されたコンテスト。

以下の組織が誕生した [26]。

1）ウエスト＆ドレスデザイナーズ協会（The Waist and Dress Designers' Association）
2）ドレスメーカー保護団体（The Dressmakers' Protective Association）
3）全米衣服デザイナー協会（National Association of Clothing Designers）

4）男性リーグの広告（The Advertising Men's League）
5） シカゴ・ドレスメーカーズ・クラブ・コンベンション（The Chicago Dressmakers' Club Convention）

（5）デザイナーの活躍[27]

ファッション・プレスがクリエイティブ・ファッション・デザインの中心であるパリに焦点を当てていたのに対し、1920年代には、ニューヨークに本拠を置く既製品のデザイナーのクレア・マッカーデル（Claire McCardell, 1905~1958）やノーマン・ノレル（Norman Norell, 1900~1972)、製造元のハッティー・カーネギー（Hattie Carnegie, 1880 ~1956）を含む今ではおなじみの多くのデザイナーが活躍を始めた。

「アメリカの女性のためのアメリカのファッション」の仕事は時期尚早に推進されていたが、20世紀初頭の多くの声が、パリの独立したスタイルを求め、さらにはそれを要求していたことは明らかである。

20世紀の初期には、アメリカ製の衣服の認知と促進、それを設計し、育てようとする試みは、独立したアメリカのデザインの存在を確立するために必要なステップとして予告されることがあった。

4　1930年代

S・F・レイプツッヒ（Sheryl Farnan Leipzig），J・L・パーソンズ（Jean L.Parsons ）、およびJ・F・ベック（Jane Farrell-Beck）の論文は、1930年代におけるアメリカ人デザイナーの昇進をテーマとしている。そこで、本章では、本論文[28]に基づいて、1930年代のニューヨーク・ファッションを考察する。パリ・モードから「アメリカン・ルック」への転換に関して、大変、論理的に考察された論文である。アメリカ人デザイナーの認知について、各デザイナーの特徴に言及しながら、子

細に言及されている点は、特に注目すべきである。とりわけ、ドロシー・シェーバーが、これらのアメリカ人デザイナーの認知に当たって、マーチャンダイザーとして果たした役割について、明快に論じられている。

この論文では 60 人の認知されていたアメリカ人デザイナーを一覧表に掲載している（**表 5**）。

そこで、本項では、問題（1）から（５）を設定し、本論文の中にそれぞれの問題に対する答えを見つけ出そう。

(1)　パリ・モードとアメリカン・ルックのせめぎあい。
(2)　ドロシー・シェーバーが、アメリカ人デザイナーの認知に当たって、マーチャンダイザーとして果たした役割。
(3)　ファッション・グループ・インターナショナル（The Fashion Group International）の設立の経緯。
(4)　認知されたアメリカ人デザイナーの特質
(5)　代表的な認知されたアメリカ人デザイナー

（１）　パリ・モードとアメリカン・ルックのせめぎあい

「ファッション・プレスやメーカーによるプロモーションの不足にもかかわらず、60 年以上にわたりアメリカのファッション・デザイナー（主に女性）が、ビジネス、文学、および女性のさまざまな興味のある多数の特集記事に登場した。Forbes、Time、Collier's、Scribner's、Independent Woman、Good Housekeeping、Ladies Home Journal などの出版物が含まれる。特に、記者たちは、アメリカの女性のファッションデザイナーは、真にアメリカ人であり、工芸への接近感やセンスがあり、独創性、経営洞察力、実用性を持っていたと強調した[29]。」

S・F・レイプツッヒらは上記のように述べて、疑問を投じている。「これらの出版物は米国のデザイナーを注目に値するものとして登場させながら、なぜ、ファッション・プレスは、このグループのデザイ

ナーをほぼ完全に除外して、パリを宣伝することを選んだのだろうか[30]」と。その答えは、以下のようである。

「金持ちのアメリカ人にとって、パリでのショッピングは、シックでエキゾチックな経験と高い社会的地位を誇示する場を提供してくれた。…La Syndicale de la Couture Parisienne は、貿易組織であり、買い手が望むだけ多くの人に出席できるように、ニュースリリースやコーディネートされたショーなどのファッションイベントを提供した。これらを主催したデザイナーたちは、米国のプレスと貿易を大いに頼りにしていた。パリは壮大な国際的なパーティーを開催した。The New York Times のファッション・エディター、バージニア・ポープ（Virginia Pope）のような熟練した長年の専門家でさえ、大きなメゾンのオープニングに参加することに、いつも感動を覚えたものである[31]。」

雑誌の特集記事に登場するアメリカのファッション・デザイナーのファッション・プレスにおける扱い方が問われており、富裕層と中産階級の間のパリ・モードとアメリカ製の衣服をめぐるせめぎあいには、依然として熾烈なものがあったことが覗い知れる。

引き続き、S・F・レイプツッヒらは、アメリカにおける中産階級の女性たちの社会進出、それに伴う既製服産業の発展について、次のように述べている。

「20 世紀初頭のアメリカ女性の経済状況、教育、労働、賃金収入の変化は、アパレル消費の動向に貢献し、変化をもたらした。マデリン・ショー（Madelyn Shaw）は、アメリカの中産階級が広がり、女性が看護、教育、ソーシャルワーク、事務職、その他のオフィスワークや販売だけではなく、管理を含むリテールのポジションなどのさまざまな仕事で労働力に参入するなど、幅広い経済水準に沿った女性のための『スタイリッシュな服装』に対する高まりゆく必要性を詳述した 。

価格、知覚される品質、スタイルの利用可能性などの要因が、既製服に次第に嗜好を移した。衣服の縫製やドレスメーカーからのカスタムアパレルの購入は実行可能な選択肢だったが、1920年代後半には既製衣料品の購入が他のどの衣料品の購入よりも上回っていた[32]。」

また、S・F・レイプツッヒらによると「ヴァレリー・スティール（Valerie Steele）は、『パリファッション』では、19世紀後半から20世紀初頭にかけて中流階級や下層階級の多くのアメリカ人がパリのファッションに対して、反感を強めていることを語っている[33]」という。

（2）　ドロシー・シェーバーが、アメリカ人デザイナーの認知に当たって、マーチャンダイザーとして果たした役割

このような状況のもとで、「ニューヨークのロード・アンド・テーラー副社長であるドロシー・シェーバーは、数年にわたり市場を観察したのち、1932年4月、特定のグループのアメリカ人デザイナーを紹介する店舗プロモーションを開始した。Best＆Companyは3年前にアメリカのデザインプロモーションを行ったが、1929年、シェーバーはこのイニシアチブを最も革新的な方法で立ち上げた。このキャンペーンは、店舗プロモーション、広報、広告キャンペーン、ランチョンなどのイベントを組み合わせて、アメリカのデザイナーを中心に『アメリカのファッション・デザイナーの周りに個性のカルトを創造する』ためのものであった[34]」という。

S・F・レイプツッヒらによるドロシー・シェーバーの素早い政策展開に対する評価は見逃せない。

もうひとり、目を離せないのはファッションの広報担当者エレノア・ランバート（Eleanor Lambert, 1903~2003）の動きである。S・F・

レイプツッヒらは、彼女の動きについて「他の百貨店はすぐにアメリカのデザイナーを昇進させ始め、ファッションの広報担当者エレノア・ランバートは、個々人の得意先として、幾人かのデザイナーを紹介し、シェーバーのプロモーションの範囲を超えて報道を広げる可能性があった[35]」と鋭く指摘している。

（3） ファッション・グループ・インターナショナル (The Fashion Group International) の設立の経緯

さて、ここで、本論文に基づいて、ファッション・グループ・インターナショナル（The Fashion Group International）の設立の経緯について述べよう[36]。

「1928年、ファッションとデザイン分野の有力な女性17人が出会い、アメリカのファッション業界で働く女性の専門家を支援するための協会を設立することについて議論した。最終的にザ・ファッション・グループ（The Fashion Group）と呼ばれるこのパイロットグループには、編集者、教育者、マーチャンダイザー、デザイナーが参加した。特に、エドナ・ウールマン・チェイス（Edna Woolman Chase, 1877~1957）〔1914年から1952年まで、ヴォーグ誌の編集長を務めたアメリカ人〕、カーメル・スノー（Carmel Snow, 1887 ~1961）〔ハーパース・バザーのアメリカ版の編集長を1934年から1958年まで務めた〕、バージニア・ポープ（Virginia Pope, 1887 ~1978）〔ファッション・エディター〕、キング・フィーチャーズ（King Features）のアリス・ヒューズ（Alice Hughes, 1857-1939）〔ファッショナブルな女性と子供のイメージを専門とするロンドンの代表的なポートレート写真家〕、クレア・マッカーデル〔デザイナー〕、リリー・ダチェ（LillyDaché, 1898~1989）〔フランス生まれのアメリカ人・ファッションデザイナー〕、イーディス・ヘッド（Edith Head, 1897~1981）、アデル・シンプソン（Adele Simpson, 1903~1995）

〔ファッション・デザイナー〕が参加し、アメリカのデザイナーとアメリカのファッション評論家を一つのプロフェッショナルな存在にした。 将来のメンバーではないが、ニューヨーク州のファーストレディーであるエレノア・ルーズベルトも参加している。ファッション・グループ・インターナショナル（The Fashion Group International）と名付けられたこの組織は、6,000人を超えるファッション・プロフェッショナルの国際会員であり続けている。ファッショングループは当初、Women's Wear Dailyが提供するスペースを共有し、業界の専門家からさまざまなビジネスや審美的な話題を聞くために毎月、会合をもった。」

（4） 認知されたアメリカ人デザイナーの特質

筆者は、本項の冒頭で、本論文では「アメリカ人デザイナーの認知について、各デザイナーの特徴に言及しながら、子細に言及されている点は、特に注目すべきである」と述べた。

そこで、本論文に基づいて、認知されたアメリカ人デザイナーの特質に言及しよう。彼らの特質は以下のように分類されている。単にアメリカ人デザイナーの認知と言っても、パリのデザイナーとの違い、アメリカ人デザイナーの特質を具体的に把握し、評価しなければ、真の意味でのアメリカ人デザイナーの認知とは言えないであろう。その点において、本論文はこの問題に実に具体的な答えを提示している。そこで、本論文から下記の7点を紹介することとする。

①「アメリカン」としてのデザイナー
②「女性」としてのデザイナー
③「オリジナル」な才能をもつデザイナー
④「実用性」を重んじるデザイナー
⑤「管理」能力のあるデザイナー
⑥「裕福な」存在のデザイナー
⑦　教育者・趣向のメーカーとしてのアメリカのファッションデザ

イナー

①「アメリカン」としてのデザイナー [37]

この項目では、アメリカのナショナリズム、および、フランクリン・ルーズベルトの経済回復のためのニューディール政策に言及した上で、この計画がアメリカ人デザイナーのプロモーションを奨励したと次のように、述べられている。

「1933 年のヴォーグは、1938 年以前のアメリカのデザインに関する数少ない論評のひとつにおいて、『ナショナリズムは今日の盲目的崇拝物である』と語った。この愛国主義は、経済的必要性から生まれた。」「フランクリン・ルーズベルト政権の主要議題は、少なくとも彼の大統領選挙の初期の段階では、経済回復に焦点を当てた。論争がないわけではないが、ルーズベルトのニューディールは、この計画が繁栄を刺激するだろうと多くのアメリカ人の間で楽観主義と希望を更新した。この影響は、おそらく、『アメリカン人』としてのデザイナーのプロモーションを奨励したものと思われる。」

そして、引き続き、移民がアメリカで市民権を得て、デザイナーになった場合、アメリカ人のデザイナーとして認知されたことが以下のように、述べられている。

「デザイナーはアメリカのルーツを語った場所からやってきた。例えば、ミュリエル・キングはワシントン州シアトルで育った。クレア・ポッターはニューヨークのロックランド郡の農場で馬に乗り、ダルマチア犬を育てた。『南の女の子』であるアリス・スミスは、南部のルーツを誇った。それらの外国生まれのデザイナーに対して、『アメリカ市民』という身分が授与された。」

②「女性」としてのデザイナー [38]

本項目では、女性にはデザインの仕事の適性があることが、以下の

ように強調されている。

「ファッショングループに加えて、いくつかの他の団体が、アパレルおよび装飾芸術分野における女性の専門家の昇進を促進した。国家芸術産業連盟、美術教育連盟、全国職業指導協会、女性専門職協会、全国小売りドライグッツ協会は、多くの場合、キャリア情報の形で出版されたすべての資料を提供している。戦争の間、女性は職業を支配した。アートとスタイルとのより良い、より自然なつながりを持っていると考えられている女性は、デザインにおける仕事に最も適していると思われる。女性のための『適切な』雇用としての地位を与えても、アパレル取引は、家庭で最終的に使用されるスキルを向上させるために役立つかもしれないので、無駄な教育や訓練のようには見えなかった。」

「1940 年には、女性役員の約 84%がファッション関連の分野で職を得た。表５のアメリカ人デザイナーのリストを参照すると、ハリウッドの衣装デザイナーだけが、女性のデザイナーの報道を支配していることは驚くべきことではない。」

そして、引き続き、デザイナーが女性性を維持するためには、小柄で、若くなければならないことが、次のように指摘されている。

「小柄さや若さが女性性を定義することに役立ち、デザイナーが若くて、小さくて、ケアフリーであれば、おそらく彼らはより脅威の少ない人物のように見え、おそらくこのキャリアをより受け入れやすくすることでしょう。」

筆者にはこの主張は男女差別のように聞こえる。

③「オリジナル」な才能をもつデザイナー [39]

この項目では、女性デザイナーは「オリジナル」な才能を持っていることが、次のように指摘されている。

「デザイナーのプロモーターの意見によると、女性的な振る舞いに

加えて、アメリカのデザイナーは、趣味、スタイル、オリジナルの才能を持っていた。」

「オリジナリティーと調和した趣向は、アメリカのデザイナーのプレゼンテーションを際立たせた。アイデアとインスピレーションは、フランス以外の経験や場所からもたらされた。これは、早期のアメリカ人デザイナーに対する激励から生まれた変化である。1920年代以前のアメリカのデザイン運動の特徴は、アメリカ人デザイナーにパリのクリエイターと同じ創造的な機会を提供する必要性が認識されたことであった。」「たとえば、デザイナーのミュリエル・キング（Muriel King）はインスピレーションのために自然を使った。ジェシー・フランクリン・ターナー（Jessie Franklin Turner）は、テキスタイルをインスピレーションの源として使用し、しばしば自分の生地をデザインした。」

④「実用性」を重んじるデザイナー [40]

本項目では、「実用性」を重んじるデザイナーについて、次のように述べられている。

「デザインにおける実用性は、アメリカのアパレル業界の商標特性となっており、現在進行中の国家的理想を反映している。」「生産に必要な余分なステップは、衣類のコストを高めるため、"高価な小さな凝った飾り物"なしで、ファブリックの属性と衣服のラインに注意を集中させることになった。」「また、作家は、頻繁に一時的と見なされる流行の変化には論理があることを強調した。ファッション世界の頂点にある少数のエリートたちの奇妙な予言の代わりに、スタイルの変化とデザインは自然な観察プロセスとして浮かび上がった。」

「1930年代になると、アメリカのデザイナーは、自分の声と存在を発展させるために大きな進歩を遂げた。」

⑤「管理」能力のあるデザイナー [41]

本項目では「管理」能力のあるデザイナーについて、次のように述べている。

「"彼らは真剣に仕事をして、彼らが聞くものと見るものはすべて服に変換されます。"ジャーナリストは、アメリカのデザイナーを熟練した専門家として描写し、読者はデザイナーを通じて教育を受け、アメリカの消費者のニーズを満たす能力を勘案する業界について教育を受けた。デザイン開発に関する説明は、アメリカの衣服の開発にどのくらいの仕事、思考、才能が投入されたかを強調した。」

「ネッティー・ローゼンスタイン（Nettie Rosenstein, 1890~1980）は、可能性のある小売業者を個人的に見直し、適切な場所と商品を使用して財政的に最も適したものを手作業で選んで、自分のデザインを適切に紹介した。」

「女性は、長年の経験とサポートの役割を果たしてから、デザインの職に就きたいと考えていた。いったん達成されると、デザイナーは業界の『クイーンビー』であった。」

⑥「裕福な」存在のデザイナー (42)

本項目では、デザイナーの給料について、次のように述べられている。ファッション・デザイナーがいかに高給取りであったかが明らかである。

「特定の給与が特集記事ではほとんど開示されていないにもかかわらず、作家はデザインを、女性に開放されている仕事の中だけでなく、一般的に非常に有利な職業として、非常に有利な立場として常に描写していた。職業のトップレベルに達していた人にとっての給料を「高給取り」と説明し、$ 50,000 という製造会社の利益の半分と同じくらい高い給料については記事で言及した。同じ期間のキャリア情報文献によって提供された所得水準は、デザイナーは、既製品業界ではドレスメーカーやカスタム衣装の生産者よりもかなり高い報酬を得て

いることを立証している。最も収益性の高い取り決めは、大量に生産された中小の卸売会社で報告された。「美術教育連盟」と「女性専門職連盟」と共同で出版された「職業としての衣装デザイン」と、「リサーチ・インスティテュート」によって出版されたファッション・デザインのキャリアは、いずれも、初心者レベルの報酬は、1930 年代には、年間 1,368 ドルと報告している。経験豊かなデザイナーの給与は、平均収入をはるかに上回り、多くの場合手数料や会社の持分を含んでいた。経験豊富なデザイナーは、平均して、1 週間に 300〜400 ドル、年間約 15,000〜20,000 ドルを支払われていた。」

「収益性の高い給料に加えて、デザイナーはギリシャやバミューダのような場所で、エキゾチックな休暇を楽しんだ。彼らは水彩画、乗馬、犬の繁殖など、興味深い高級趣味を楽しんだ。彼らの旅行や趣味は、何らかの形で仕事とインスピレーションに貢献し、デザイナーとしての発展のために重要な活動として描かれた。」

⑦ 教育者・趣向のメーカーとしてのアメリカのファッション・デザイナー (43)

本項目では､アメリカのファッション･デザイナーは教育者であり、趣向のメーカーであったことが、明快に述べられている。

「見た目の超人物のこのようなミックスは、アメリカのデザイナーを趣向とスタイルに関する有資格者として位置付けた。ヒント一覧が定期刊行物に登場し、読者には装いに関する簡潔なガイドラインを提供し、予算内で賢明でスタイリッシュなワードローブを作成した。この目的のために、アメリカのデザイナーは貴重なリソースとなった。彼らは、スタイルを維持しながら、特定のフィギュアの問題に対応するために選択する最良のデザインラインに関するガイドラインと、衣服の予算を節約して、やりくりするためのヒントと合わせて、消費者にファッションとスタイルに関する実践的なアドバイスを提供した。

より才能のあるコミュニケータはインタビューを許可するだけではなく、彼ら自身の記事を書いた。エリザベス・ホウズ(Elizabeth Hawes, 1903~1971)は、読者にファッションのアドバイスを提供し、最終的にファッション業界を離れるとともに、数多くの社会的、政治的、フェミニスト主義的な問題の著者とオブザーバーとしての地位を確立することによって、収益性が高く長持ちする執筆活動を開始した。その他には、エセル・トラップハーゲンとギルバート・アドリアンが参加し、それぞれがアメリカのデザインと良いスタイルの要素に関する解説を書いた。」

本論文では、以上7つのアメリカ人デザイナーの特質を踏まえて、以下のように締めくくっている。

「フランスのデザイナーは、カスタムメイドにもっと力を入れていたが、アメリカの業界の強みは既製品であった。米国の大量生産のために、ファッションはより民主的で利用可能になった[44]。」フランスのカスタムメイドとアメリカの既製品との比較は注目すべきである。「人気のある出版社が、エリートにスタイルを普及させるために、時代遅れのフランス系として描かれたものの助けを借りずに、大衆にスタイルがもたらされた。1930年には1件のレポートが1,500社近く、1933年には7,000社が報告され、現代の百貨店に全国的に、毎年、数万、配布されている。これらの資料から、これらの数字がニューヨークにある企業のみを表す場合、または特定の製品ラインを生産する企業を表す場合は明らかではないが、国勢調査局によって報告されたアパレルおよびテキスタイルを生産する企業の数は 1939 年には 2 万人をわずかに上回る 19,750 の設立企業である。1937 年以降、米国国勢調査のデータは、製造スーツ、ブラウス、下着、アクセサリーやジュエリーを除く他の衣料品の生産に直接携わる請負会社約 9,116 を報告している。衣料品やその他の繊維製品生産者の雇用と賃金の数字は、こ

の減少期の成長を示す。生産労働力は 1931 年から 1939 年にかけて29%増加し、同じ期間に支払われた賃金は23%増加した[45]。」

「1930 年代にアメリカのデザイナーを支持した報道を通じて、アメリカのファッションを身に付けた推定 4,500 万人の女性を対象とした[46]。」「1930 年代のアメリカ人デザイナーは、新しいアイデンティティーを得て、今後 10 年間で中心的な役割を果たす、趣向とスタイルの仲裁者として中米に知られるようになった[47]。」

（5） 代表的な認知されたアメリカ人デザイナー

本項の最後に 1930 年代の 60 人の認知されたデザイナー（表５）の中から、代表的な５人のデザイナー、すなわち、エリザベス・ホウズ、ネッティー・ローゼンスタイン、ハッティー・カーネギー、クレア・ポッター、および、ミュリエル・キング（Muriel King, 1900~1977）を取り上げ、彼らの活躍ぶりを本論文とミルバンク他に拠って、紹介しておく。

エリザベス・ホウズ[48]

エリザベス・ホウズは、最初の華々しく活躍したネイティブデザイナーであった。1930 年代に彼女の行動が報道された。1933 年までに、エリザベス・ホウズの布地デザインは、ホーズの宣伝力の鋭さを実証した。それは、単純な、拘束された、ときにはカラフルな、そして彼女自身のような知的な女性を対象としたものであった。1932 年に彼女は、25 着のドレスのコレクションを携えて、7 月 4 日にパリでファッションショーを開催した。彼女がパリから帰った時、おそらくクチュールがアメリカで後援されていることを知って、急激に落ち込んで少し嫌になり、彼女は自分が「丁寧に受け入れられていない」と不平を言ったために、ニューヨーク・タイムズで報道された。同年、彼女は、チェックのドレスとシティ・チャイルド（City Child）と呼ばれるダー

表 5　1930 年代に昇進したアメリカ人デザイナー

デザイナー	タイプ	デザイナー	タイプ
Carol	卸売	Alan Kramer	小売
Lousieanders	小売	Marie Leeds	
Dorine Abrade	卸売	Jossete de Lima	
Gilbert Adrian	ハリウッド	Maybell Manning	小売
Grace Arcuri	卸売	Vera Maxwell	スポーツウェアー
Charles Armour		Sally Milgrim	小売と卸売
Shirley Baker	卸売	Renee Montague	
Travis Banton	ハリウッド	Germaine Monteil	卸売
Eve Bennet	卸売	Veda Moore	
Hattie Carnegie	小売と卸売	Leslie Morris	
Francis Clyne	小売	Bernard Newman	ハリウッド
Helen Cookman	卸売	Gladys Parker	卸売
Jo Copeland	卸売	Ruth Payne	
Dorothy Cox		Clare Potter(Clarepotter)	卸売
Lily Daché	卸売	Natalie Renke	卸売
Paulin Fields	卸売	Edith Marie Reuss	
Fifi	小売と卸売	Mary Robinson	
Polly Francis	小売	Nettie Rosenstein	卸売
Mrs.W.B.Franklin	小売	Royer	
Mrs.(Sophie) Gimbel		Alice Smith	
Dorine Gordon	バタリック・パターンズ	Caroline E. Smith	ヴォーグ・パターンズ

デザイナー	タイプ	デザイナー	タイプ
Howard Greer	ハリウッド	Adel Smithline(Simpson)	
Elizabeth Hawes	小売	Herbert Sondheim	
G.Howard Hodge	卸売	Robert Ten Eyck Stevenson	
Peggy Hoyt	小売	Herman Patrick Tappé	小売
Emmer Joyce	小売	Lillian Templeton	ハリウッド
Alice Kelly	卸売	Ethel Traphagen	
Orry Kelly	ハリウッド	Jessie Franklin Turner	小売
Omar Kiam	ハリウッド	Valentina	小売
Muriel King	小売	Sally Victor	卸売（帽子）
Kiviette	卸売	Lisbeth Von Kraus a.k.a. Lisbeth Von Krausz a.k.a. "Lisbeth"	卸売
Margot De Bruyn Kops a.k.a. Margot Kops	卸売	Betty Witcoff	シンプリシティ・パターンズ

典拠：Sheryl Farnan Leipzig, Jean L. Parsons & Jane Farrell-Beck, It is a Profession that is New Unlimited, and Rich: Promotion of the American Designer in the 1930s, *Dress* vol.35, 2008~2009.p.30

クコート・アンサンブルで、ロード・アンド・テーラーのアメリカン・ファッションの広告に、はじめて登場した。既製品で、価格は 10.75 ドルであった（彼女のカスタム価格の 10 分の 1）。1935 年、彼女はソビエト連邦政府からソビエト連邦でのファッションショーに招待され、帰国後、今回のレセプションは温かく、ロシアの女性は実際にファッションに興味をもっていたとニューヨーク・タイムズに報告した。 また、この報告によると彼らはパーマネントウェーブをかけ、指にマニ

ュキュアを塗り、そのうち 80%がベレー帽を被っていたとのことである。1938 年に出版された彼女が故意に論議を呼んだファッション・イズ・スピナッハの本は、ファッションは嘆かわしいが、スタイルは賞賛されるという前提に基づいていた。彼女は、“Men Can Take It”や「それはまだホウレンソウ」のような何冊かの本を書くようになり、結局、ファッションデザイナーというより、むしろファッションセージと評論家になった。

ネッティー・ローゼンスタイン (49)

オーストリアのネッティ・ローゼンスクランス（Nettie Rosencrans）生まれのネッティー・ローゼンスタインは、1890 年代に家族とともにニューヨークに移住した。彼らはハーレムに定住し、そこで雑貨屋を経営した。ネッティーは彼女が 11 歳の時に自分自身の服を作り始めた。彼女は 1916 年にソール・ローゼンタインと結婚し、3 年後、友人のために非公式に服を作った後、彼女の家で服飾ビジネスを始めた。1921 年に彼女は East Fifty-six Street に移った。ここには 50 人の従業員がいた。彼女は、アイ・マグニン（I. Magnin）が西海岸で彼女の服を売るために、彼女に近づいたとき、卸売に切り替えた。1929 年、彼女はビジネスから引退したが、コルボー・エ・シエ（Corbeau et Cie）社のデザインに戻った。1931 年、彼女の姉妹であるエヴァ・ロゼンスクランス（Eva Rosencrans）とチャールズ・ガム・プレヒット（Charles Gum Precht）とパートナーシップを結び、彼女は West Forty-July Street で自分の名前で卸売業を始めた。 1942 年に彼女は 550 Seventh Avenue に移った。

ロード・アンド・テーラーは 1938 年にローゼンスタイン（Rosenstein）に賞を与えた。彼女のピーク時に、年に 500 のモデルを設計し、身体に直接材料をドレープすることによって作業することを好んだ。通常、既製服向けに、彼女のドレスのそれぞれは、特別な刺繍者が必要な場

合を除いて、最初から最後まで一人の縫製者によって作られた。彼女の服は全国で販売されていたが、各都市の店舗で彼女のレーベルを使用することはできなかった。ニューヨークで彼女の服を名乗った店はボンウィット・テラーであった。彼女の服の価格は$ 89.50 から$ 795.00まで上昇し、彼女の専門は壮大で、よりカジュアルな夜会服であった。

ハッティー・カーネギー [50]

Off Fifth Avenue は、42-44 East 49th Street に位置し、1934 年には全米の店舗に支店を展開する小さなデパートの規模の専門店 Hattie Carnegie が設立された。それはフランス製（Alix、Schiaparelli、Worth、Chanel、Patou、Mainbocher、Vionnet から輸入されたカスタムメイドモデルのような)、それとも（ タウンリー、またはノーマン・ノレルを雇った 1930 年代後半前後に、そこで働いていたクレア・マッカーデルのような企業内のデザイナーによるような）カーネギーのものかのいずれかであった。特殊部門には、現代的な Our Little Salon、低価格の Spectator Sports Shop、Mrs.Potts のハットメイキング施設、特定のドレスやアンサンブルに合わせてハンドバッグを注文できるカスタムメイドのハンドバッグ部門が含まれていた。香水、毛皮、さらにチョコレートもあった。

クレア・ポッター [51]

クレア・ポッターは、ニュージャージー州ジャージーシティのクレア・メーヤー（Clare Meyer）で生まれ、アーティストになる目的で、ニューヨークのアート・スチューデント・リーグ（Art Students League）とプラット・インスティチュート（Pratt Institute）で学んだのであるが、衣装デザインに切り替えた。彼女はエドワード・L・メイヤー（Edward L. Mayer Inc.）で働くために、卒業前に退学した。それは、1920 年代、

精巧なビーズのドレスが絶頂期を迎えた時期に、彼女の任務は博物館の刺繍デザインを研究することにあったためである。徐々に彼女は他のデザイン要素も提案し始め、デザイナーになり、3年間、そのポストを維持した。

ポッターは、1928年にファッション・グループ・インターナショナル Inc.を設立するために、ヴォーグの編集長エドナ・ウールマン・チェイス（Edna Woolman Chase）によって集められた17人の女性の一人となった。

クレア・ポッターは、彼女がチャールズ・W・ヌデルマン社のデザイナーとして 550 セブンス・アベニューで仕事を開始した頃から（1930年）知られていた。ロード・アンド・テーラーのプロモーションに登場したアメリカのデザイナーの一人で、彼女は1937年の女性スポーツウェア賞を受賞した。彼女は、1930年代から1940年代にかけて、小文字の名前のクレアポッター（Clarepotter）を使った。

非常に多くのアメリカ人デザイナー同様に、彼女は、故意にパリを避け、メキシコやバミューダへの休暇旅行やニューヨーク州の農場で、彼女と彼女のエンジニアの夫がダルメシアン（クロアチア原産の犬、白地に黒や褐色の斑点がある）と野菜を調達した郊外の生活様式からインスピレーションを得た。

彼女は安息日にメキシコに行き、別のセブンス・アベニュー・ハウスで短時間働き、ついにヌデルマンに移った。彼女の主な才能は色彩主義にあり、彼女の服は効果のために装飾を加えたのではなく、線と色の組み合わせに集中する傾向があった。彼女は紙の上にデザインを作ってから、それをトワレやモスリンのパターンにすることを好まなかった。ファブリックを直接使用することで、素材のハングや色の相互作用がはっきりとわかった。彼女は彼女のペットに基づいてダルマチアのプリントを作成した。彼女はほとんどが彼女の仕様に染まった固体材料で服作りをした。彼女の服は活動的なアメリカのイメージを

反映し、美しいパンツやショーツ、パジャマ、その他のスポーツウェアを含んでいた。

彼女は1948年にマンハッタンのTimbertopという名前の既製ファッション会社を設立し、1960年代にはファッションを製造する卸売会社も設立した。

ミュリエル・キング (52)

ミュリエル・キングは、1901年にワシントンのベイビューで生まれ、ニューヨークに移住する前にワシントン大学で劇場の衣装をデザインし、芸術を学んだ。彼女の最初の仕事は、ヴォーグやハーパース・バザーのような出版物のファッションイラストレーション制作であった。1927年、キングはヨーロッパに、8ヶ月間滞在した。その後、3年連続して、ヨーロッパに滞在した。そこでは、フランスの流行のファッションアーティストとして自由に闊歩した。

彼女は1932年にニューヨークのEast 61 Streetに彼女のサロンを開いた。彼女は長い間、自分のワードローブを手伝っていた友人たちを頼りに、専門的な衣服のデザインを始めることにした。彼女は美しく描かれた絵を最初に仕上げた後、縫製スタッフに衣服を作らせた。顧客は、実際のモデルからではなく、スケッチから注文した。彼女はしばしばアメリカの生地で仕事をし、1933年にB・アルトマンのために全コレクションをデザインした。彼女は、水着やスケート服からイブニングドレスまであらゆるものをデザインした。特に、セパレートの交換式ワードローブや昼間の服に興味があった。1935年にキャサリン・ヘップバーンが映画「シルビア・スカーレット」で着るように衣装をデザインし始め、その後、映画のために時折働いた。彼女は1937年に彼女のサロンを49 East First Fifty First Streetに移した。

ミュリエル・キングの服は息を呑むほどエレガントであった。彼女は、アメリカで初めてのファッションデザイナーの一人で、エリザベ

ス・ホウズとクレア・ポッターと一緒に名前の認定を受けた。

ミュリエル・キングは、以下の映画のワードローブに取り組んだ。
・シルビア・スカーレット（1935年、キャサリン・ヘップバーンの服）
・ステージドア（1937年、ガウン）
・マンハッタン・メリー・ゴー・ラウンド（1937年、Tamara Gevaのガウン）
・愛のためのアポイントメント（1941年、マーガレット・サラバンのガウン）
・バックストリート（1941年、Margaret Sullavanのガウン）
・窓の女性（1944年）
・カサノバ・ブラウン（1944年）
・クリスマスホリデー（1944年）
・カバーガール（1944年、ガウン）

5　1940年代

周知のように、日本による真珠湾攻撃によって、第二次世界大戦の火蓋が切られた。本項では、C・R・ミルバンクとメグハン・メゾン（Meghann Mason）に拠って、第二次世界大戦がファッションに及ぼした影響を、次の三点について、順次、まとめる。
(1) ニューヨークにおけるアメリカ人デザイナーの認知
(2) 戦争生産局（WPB）による衣服に対する制限、つまり、L- 85という規制について
(3) 規制に対するアメリカ人デザイナーの対応

(1) ニューヨークにおけるアメリカ人デザイナーの認知

S・F・レイプツッヒ、J・L・パーソンズ、および J・F・ベックは、ナチスによるパリ占領時のファッション業界の動向に関する懸念について、次のように述べている。

「1940 年にナチスがパリを占領した後の数日間および数週間のあいだに、ファッション業界を通じた驚異的な不安が広がった。アメリカのアパレル業界のプロモーターは、アメリカのデザイナーがパリのファッション・ハウスからのインスピレーションとスタイルの導入なしに、ファッションを維持してゆく能力に疑問を呈した。占領以前は、ヴォーグ（Vogue）やハーパース・バザー（Harper's Bazaar）などのアメリカのファッション出版社が、アメリカのデザインやアメリカのデザイナーを非常に限られた人物に認定し、フランスがファッションのインスピレーションと創造性の主要な源泉であったと信じていた [53]。」

他方、ミルバンクは第二次世界大戦中のニューヨークにおけるアメリカ人デザイナーの認知について述べるに当たって、次のように書いている。

「パリが占領された瞬間から、アメリカのファッションが、クチュールのインスピレーションから切り離されて機能するかどうかについての憶測が飛び交った。ニューヨークは世界のスタイルの中心地となる可能性が最も高い都市として、頻繁に言及された [54]。」

「アメリカの主要ファッション誌であるヴォーグとハーパース・バザーは、ファッション欄を持つすべての定期刊行物や新聞を上回って、デパート、カスタムハウス、卸売業者によってニューヨークで開催されたショーの報道を拡大した。デザイナー自身がよく知られるようになり、店舗や小売業者の重要性は低くなった [55]」

さて、ニューヨークのアメリカ人デザイナーを認知させるに当たって、今日も世界的に名を馳せているかのエレノア・ランバートのよう

な、著名なファッションの広報担当者が果たした役割は大きかった[56]。彼女は、アメリカのデザインに関するニュースの普及に大きな影響を与えた。彼女はプレスリリースと写真を全国の新聞に送っていたため、ほとんどすべての地元紙がアメリカのファッションに関する記事を掲載しやすくなっていた。その上、何と彼女は、1940年代には、コスチューム・インスティテュートを創設した。このインスティテュートは、ニューヨークのメトロポリタン美術館の一部となった。そして、彼女は、コティ・アメリカン・ファッション批評家賞〔地元のデザイナー、ファッション批評家評議会から与えられたコティ（Coty）が主催する毎年のファッション賞〕、そしてマーチ・オブ・ダイムズ（March of Dimes）〔「10セントの行進」（略してMOD）のことは、日本ではほとんど知られていない。これは、アメリカで赤十字に次ぐ額の募金を集めた、ポリオの治療と予防のために10セント（10分の1ドル）を送ろうという、大規模な募金運動の名前である〕の毎年の慈善ファッションショーを鼓舞した。

また、ニューヨークのアメリカ人デザイナーを認知させるに当たって、ロイス・ロング（Lois Long, 1901~1974）や、バージニア・ポープ（Virginia Pope, 1887~1978）のようなジャーナリストが影響力をもっていた[57]。ロイス・ロングは、1920年代半ばにニューヨーカーのために執筆を始めて以来、ネイティブスタイルのチャンピオンとして活躍していた。また、バージニア・ポープはニューヨーク・タイムズのファッション・エディターであった。

ミルバンクによると「雑誌や新聞は、特定のデザイナーの作品を描いたものと同じくらいポロコート、シャツウエストドレス、セーターセットなどのアメリカンスタイルの一般的な要素を賞賛した。興味深いことに、最も高級感のあるカスタムドレスから、安価な大量生産のミスのダンスフロックまで、あらゆるレベルのファッションに注目が集まった[58]」とのことである。ミルバンクは、このように述べて、

引き続き、認知されたアメリカ人デザイナーを列挙している。① カスタム部門のデザイナー、　② 既製服デザーナー、③ スポーツ服のデザイナー、　④ アクセサリー・デザイナー、コスチューム・ジュエリー・デザイナー、およびファブリック・デザイナーの順に簡潔に紹介する。

① カスタム部門のデザイナー

デザイナーのトップラグ[59]には、百貨店ボンウィット・テラー（Bonwit Teller）のフィラベネンソン（Fira Benenson, 1898~1977）、サックス（Saks）〔フィフス・アベニューのサロン・モデルヌ〕のソフィー・ジンベル（Sophie, 1898~1981）、シュタイン・エンド・ブレイン（Stein＆Blain）のミュリエル・キング（Muriel King, 1900~1977）ジェイ・ソープ（Jay-Thorpe）のウィルソン・フォルマー（Wilson Folmar, 1950~2018）〔婦人服デザイナー〕、アーサー・ファルケンシュタイン（Arthur Falkenstein）、メインボッチャ（Mainbocher, 1890~1976）〔パリのクチュールハウスを経営してニューヨークに新しく到着したデザイナー〕、ジュエリー・デザインに戻る前に、ニューヨークのドレスサロン、シェ・ニノン（Chez Ninon）のファッションをデザインしたデザイナーのヴァレンティナ（Valentina）、ジャン・シュルンベルジェ（Jean Schlumberger, 1907~1987）などが含まれていたとのことである。

アンリ・ベンデルのカスタム部門は、Leone によって運営され、デザイナーのスタッフはドレス・デザイナーのメイベル・マッキルヴェイン・ダウンズ（Mabel McIlvain Downs）であった。 ベルグドルフ・グッドマンにはレスリー・モリス（Leslie Morris）とバーナード・ニューマン（Bernard Newman, 1903~1966）がいた。その他 ハッティー・カーネギー〔帽子デザイナー〕、サリー・ミルグリム（Sally Milgrim, 1892~1994）〔カスタム・デザイナー〕、映画衣装デザイナーのハーマ

ン・パトリック・タップ（Herman Patrick Tappe, 1876~1954）も豪華なカスタム・デザインの洋服をデザインした。

②　既製服デザイナー

さらに、ミルバンクは、次のように述べて、既製服デザイナーを列挙している。

「トップクラスの既製服デザイナーの衣服は、自分のサロンやショールームだけでなく、国全体の名前で宣伝され販売されていたので、アメリカの婦人服のドレスメーカーよりもよく知られていた[(60)]」。1940 年代のこのグループには、ファッションオリジネーターギルド（Fashion Originators Guild）の会長とスポークスマンでもあったネッティー・ローゼンスタイン、モーリス・レントナー（Maurice Rentner, 1889 ~1958 ）、フィリップマン・マンゴーン（Philip Mangone,1884~1957）、トゥリジェール（Pauline Trigère, 1908~2002）、アンソニー・ブロッタ（Anthony Blotta, 1922~1971）〔テーラード・ドレス、ジャケットとドレスのアンサンブル、スーツとコートを好んでデザイン〕、ブルーノ（Bruno）、チャップマン（Ceil Chapman, 1912~1979）〔マリリン・モンローが好きなデザイナー〕、ハーヴェイ・バーリン（Harvey Berin）〔サック・シルエットを好む男性デザイナー〕、ジェーン・ダービー（Jane Derby, 1895~1965）、マダム・エータ（Mme Eta）、パットロー（Pattullo）のジョー・コープランド（Jo Copeland, 1899~1982）〔Pattullo の専任デザイナー。エレガントで高価な既製服のデザイナー〕、ノーマン・ノレル〔ディテール、シンプルで飽きのこないデザイン、カスタマイズされたデザインで有名〕、そして、カリフォルニアのエイドリアン・アドルフ・グリーンバーグ（Adrian Adolph Greenberg, 1903~1959）〔アメリカを代表するファッションデザイナー、映画の衣装以外にも、小売の分野でも活躍〕、アイリーン（Irene, 1907~1962）とハワード・グレア

（Howard Greer, 1896~1974）〔ハリウッドのファッションデザイナーで、アメリカ映画の黄金時代の衣装デザイナー〕が参加し、そのうち３人は映画の衣装デザインに携わっていた。全員、夕方とドレッシーな昼間のイベントのための服を街で提供した多彩なデザイナーであった。

③ スポーツ服のデザイナー

次に、ミルバンクは「おそらく、アメリカンファッションの新しい名前の中で最も革新的だったのは、スポーツや遊戯のための衣服の分野で働いていた人たちであった[61]」と述べて、スポーツ着や遊戯着の分野のデザイナーを挙げている。

ロード・アンド・テーラーのトム・ブリガンス（Tom Brigance, 1913~1990）、クレア・マッカーデル（Caire McCardell, 1905~1958）、ヴェラ・マックスウェル（Vera Maxwell,1903~1995）、クレア・ポッター（Clare Potter, 1910~1986）、ティナ・レッサー（Tina Leser, 1910~1986）、そしてB・H・Wraggeのシドニー・ラッジ（Sydney Wragge, 1908~1978）はすべて、新しいカテゴリーのセパレーションの中で働いていた。

④ アクセサリー・デザイナー、コスチューム・ジュエリー・デザイナー、およびファブリック・デザイナー

最後に、ミルバンクはアクセサリー・デザイナー、コスチューム・ジュエリー・デザイナー、およびファブリック・デザイナーを挙げている[62]。

適度な価格であることに加えて、非常に現実的な女性を念頭に置いて設計された彼らの服は、実用的で創造的なものであった。またニューヨークでは、リリー・ダッチェ（Lilly Daché, 1898~1989）、ハワード・ホッジ（G. Howard Hodge, 1891~ 2012）、ジョン・フレデリックス（John-Frederics）、フローレンス・ライッヒマン（Florence Reichmann）、サリー・ヴィクター（Sally Victor, 1905~1977）、ウォルター・フロレル

（Walter Florell, 1911~1986 ）などのアクセサリーデザイナー、Koret と Josef のポケットブック、ミリアム・ハスケル（Miriam Haskel, 1899~1981）のようなコスチューム・ジュエリー・デザイナーを誇っていた。ファブリック・デザイナーのブルック・カドウォラダー（Brooke Cadwallader）は、愛国的または歴史的なテーマで上映された映画のなかで登場したシルクスカーフを毎シーズン発行した。他のファブリックデザイナーには、コットンを専門とするホープ・スキルマン（Hope Skillman, 1908~1981）と、西海岸のポーラ・スタウト（Pola Stout, 1902~1984）が認知され、手織りの幾何学的な毛糸がエイドリアン・アドルフ・グリーンベルグ（Adrian Adolph Greenberg,1903~1959）とアイリーンのインスピレーションの源泉となった。

ミルバンクは、ニューヨークにおけるアメリカ人デザイナーの認知について、書き終えるに当たって「戦争はアメリカのデザイナーに脚光を浴びさせた（ニューヨーク・タイムズの1944年のファッションショーでは、その服装はさまざまな色合いの素材から作られていた）[(63)]」と結んでいる。

（2） 戦争生産局（WPB）による衣服に対する規制（L-85）

メグハン・メゾン（Meghann Mason）は、第二次世界大戦勃発後の衣服に対する制限について、次のように述べている。

「1941年12月、米国は真珠湾の爆撃の後、正式に第二次世界大戦に突入した。ファッション・デザインは止まった。"フランクリンルーズベルト大統領は、戦争生産委員会（以下、WPB）を命じた。その目的は、国家の経済を戦争に一層合うように変えるために、物質と燃料の生産と配分を規制することであった" [(64)]。」

WPBとはWar Product Boardの頭文字を表記したものであり、戦争生産委員会や戦争生産局と訳されている。

メグハン・メゾンは引き続き、L-85のような衣服産業のルールの制

定について、次のように述べている。

「米国での配給は、イギリスをはじめとするヨーロッパ諸国とは異なり、衣料品配給の責任は民間人ではなく衣類製造業者に課されていた。スタンレー・マーカス（Nieman Marcus の Stanley Marcus）は、WPB の織物部門の長であった。彼は基本的に衣服を作るために使用できる布の量を 1941 年の金額（ウォルフォード）に制限することによって、時間のシルエットを凍結させた。Marcus と WPB の下で、L-85 のような衣服産業のルールが作成された。「L」は「制限注文」の欄に表示され、その後に数字が続いた。L-85 は女性の衣服をカバーしていた。WPB が設定したルールを破った製造業者に対しては、非常に重い罰金と潜在的な懲役刑があった [65]。」L は limitation を表している。

ミルバンクは、この L-85 という規制について、この規制の目的、服種別、素材別の規制内容を詳細に渡って記している。かなり、長くなるが、以下、順次、要約・紹介する。National Archive に下記の規定が掲載されているが、筆者は、この規定の内容を見つけることができない。そこで、ミルバンクに拠って、その内容の詳細を紹介する [66]。

179.2.3 Orders and regulations

Textual Records: Orders, regulations, directives, and related records of the WPB and the CPA （"Recording Secretary's Files"）, 1941-47. Equipment （"E"）, limitation （"L"）, conservation （"M"）, preference rating （"P"）, rubber （"R"）, and utilities （"U"） orders, 1941-47, with gaps. Orders and regulations manual, 1941- 47. Controlled Materials Plan （"CMP"） regulations, 1943-45. Priority regulations, 1941-47, with gaps.

① 規制の対象となった服種

1943年に最初に発表されたL- 85という規制は、結婚式用の衣服、妊婦用服、乳幼児用服、4歳までの幼児用服、宗教的な礼服、および埋葬シュラウドを除いて、戦争への取り組みのために重要な素材で作られたあらゆる種類の衣服に影響を与えた。

② L-85の目的

1つは、シルエットを維持または凍結することであった。これは、重要な変更が機械、技術、余分な労力を調整する必要があったからである。この規制は製造業者を対象としており、戦争生産委員会は期間短縮と政府の優先順位に変化をもたらした。

③ 服種別の規制内容

・この制限は、プリーツやカフスを使わずにカットされたシングルブレステッド、ツーピース（スリーピースではなく）スーツやパンツに限定されていた。クラーク・ゲーブル（Clark Gable, 1901~1960）〔アメリカ合衆国の映画俳優。第二次世界大戦前後の時代を代表するビッグスター〕によって普及された「ファンシーバック」ジャケットと呼ばれたものは、ダブルブレステッド・ディナージャケットと同様に禁止された。

・L-85の女性用衣服への適用は必然的により複雑であった。羊毛や戦争への取り組みにとって重要な他の素材で作られている場合、衣服は裾周りが72インチあるスカートを持つことができる（実際には今日の平均ギャザースカートよりもフルである）。これは、狭いバージョンを伴う、実際の縮小を排除した。

・スーツジャケットは長さが25インチに制限されていた。これは平均的な女性のヒップ丈のすぐ下であり、パンツの裾は19インチの幅でしかない（ちなみに、1980年代半ばの狭いパンツの脚の平均は約14インチ ）。

・スカートの裾の深さは2インチを超えてはならず、ベルトの幅も2インチに制限されていた。
・シャツとブラウスでは、折り返し袖口、ダブルヨーク、サッシ、スカーフ、フードが禁止され、パッチポケットは1つしか認められなかった。
・コートはバックプリーツを持つべきではなかった。 完全にプリーツされたスカートは、一対のキックプリーツ （細いスカートの裾の後ろの中央に入れるボックスプリーツ）のスカートに置き換えられた。
・狭くて長いドレスは、通常、動きのためのスリットを特徴とする。
・ ハリウッドはL-85から免除されていなかった。



写真1 シルク・ストッキングのふくらはぎのラインに似せて眉毛の鉛筆で線を引く女性。

④　素材別の規制

・羊毛の規制

数百万強の合衆国軍隊のための冬のユニフォームと毛布に用いられたウールは、ほとんどの生産が政府に向けられた最も制限された布であった。赤十字社は、靴下、スカーフ、またはセーターを誰が編むのかを指示して、兵士である友人や親戚のために編ませさえしていた。アメリカの女性はL- 85で決められた量のウールを着用することが許されていたが、ウールブレンド、リサイクルウール製の生地、およびレーヨンの素材で服を着ることが推奨しされた。レーヨン・ガバルディーヌ（Rayon gabardine）〔レーヨンで織り上げたギャバジン〕が最も普及したウール代替品であり、女性の衣服と同様に男性用のシャツや

その他の衣服に使用されていた。

・シルクの規制

第二次世界大戦の大部分が空中で戦われたので、シルクはもう一つの重要な戦争の材料であった。シルクは重い大砲の仕掛けを詰まらせることなく、爆発で崩壊したので、パラシュートと火薬袋のために使用された。見知らぬ国に墜落した場合に、パイロットがシルクに転載した生存マップは、読みやすさを損なうことなく一定の折り畳みと湿気に耐えたので、パイロットによって携行された。パイロットはたえず後ろを見る。そのために、後ろを向くときに、スカーフが首をこすることのないように、シルクのスカーフをかけていた。わずかの絹は服用に利用可能なままではあったが、女性はスリップのような下着や、特にストッキングのために絹を用いることが難しくなった。1939 年に初めて導入されたナイロンストッキングはすばらしい代替品ではあったが、ナイロンもまたパラシュートに使用されて以来、制限されていた。レーヨンのストッキングが考案されたが、常に、戦争生産委員会は、靴下工場へのレーヨン糸の全国生産量を非常に小さな割合で配分した。綿のストッキング、特にメッシュのストッキングを入手することができたが、すでに短いスカートをはいて足を見せびらかしていた女性の数は、お世辞にもならないほど少ないことが判明した。レッグメイクアップは新案装置以上のものになった。女性はそれを使用し、脚の後ろに眉毛の鉛筆で縫い目を塗っていた（**写真１**）。彼らは、彼らが持っていたストッキングをあざけり、J・C・ペニー（J. C. Penney）　はストッキングの穴を再編成するサービスを提供した。女性が彼女の最後のペアをいかに洗うことができたかを示す記事が現れ、彼女の頭上の空気中でストッキングを振って、すぐに乾燥させることができた。

・羊毛に替わる綿の使用の推奨

綿は、夏のユニフォーム、サンドバッグ、風船などの軍事用に用

いられた。幸いなことに、女性のために、ベルベットやコーデュロイのような厚手の綿は豊富だった。その他には、アイドリング状態になっていた自動車向けの布張り産業によって生産された材料が、涼しく着用するために羊毛に替わって用いられた。

・人造染料の制限

人造染料は、ダイナマイト製造に必要な物質が同じ基本物質から作られているため、限られた数量しか入手できなかった。また、女性は素朴な素材の衣服を可能な限り着用するよう促された。化粧品用容器に使用されていた様々なプラスチックと同様に、アルコールとグリセリン、化粧品、香水、石鹸の成分も戦争のために募集された。

・ゴムの制限

ゴムは飛行機とジープ用タイヤに用いられたため、ガードル、ブラジャー、パンツ用のゴムは不足し、それらは弾力性を欠いていた。

・金属製のアイテムの制限

ジッパー、金属製のボタン、トリムが最小限に抑えられた。コルセットはジッパーで開閉されずに、紐で締められなければならなかった。

・宝石の制限

宝石さえも戦争の影響を受けた。プラチナは軍事目的のために確保されていたので、貴重なジュエリーは金、通常は緑、黄、ピンク、白の組み合わせで作られ、トパーズ、アクアマリン、アメジストのような大きな半貴石で仕上げられた。コスチュームジュエリーに使用された銀白またはベースメタルは、1940年代の作品のほとんどがスターリングシルバーに交換された。その後、変色を防止するためにより少ない金属でメッキされた。コスチュームジュエリー以外のシルバージュエリーは、大胆なデザインのメキシコの作品を中心に人気を博し、銅と真ちゅうの手作りジュエリーも増加した。

・革の制限

歩兵は月に1足のブーツを履き潰してしまったので、鞄や靴に革の代わりに織られた織物が使用されていた。靴はエスパドリルのようにコルク、木材、またはプラスチック製であった。注文L-217は女性の靴の革を黒、ネイビー、白、および濃淡の3色の茶色の6色に限定し、ソールが不合理な物質から作られた場合にのみ、2色を1つのスタイルで使用することを義務付けた。1943年、政府は制服からサム・ブラウン（Sam Browne）ベルト（革製）を取り外した。織られた軍用ベルトは十分であった。制限のすべてが戦争期間中、持続したわけではなく、また、1945年に、戦争が終了したときにすべてが停止したわけではない。革の不足は数年間続いた。

以上、ミルバンクに拠って、L-85という規制の具体的内容を要約・紹介した。

引き続き、パッチワーク・ポケットとスカートの裾囲以外、ミルバンクが言及していないL- 85という規制内容をメグハン・メゾンに拠って紹介する(67)。

製造元のL-85による規制の例：

【ブラウス】

- タックまたはプリーツが使用されている場合、フリルは使用できず、その逆もなかった。
- フードなし。
- ポケットは内側または外側に1つ以上あり、25平方インチを超える材料を用いたパッチポケットは禁止。

【コート】

- ノーフォークタイプのバックは禁止。
- 肩の上のエポーレットやタブの禁止。

・周長は 16 1/2 インチに制限。

【スカート、スカートスーツ、プレイスーツ】

・非羊毛布または 9 オンス以下の羊毛布で作られたミスサイズ 16 の場合、裾囲は 81 インチから 78 インチに減少した（ミルバンクは 72 インチと書き、肯定的に評価している—濱田注）。

・ノーキュロット、リバーシブルスカート、ラインスカート、キルティングスカート、スケートスカート。

・3 インチ幅以上のウエストバンドなし（ミルバンクは 2 インチと書いている—濱田注）。

【ドレス】

・各袖口に 2 つ以上のボタンとボタンホールを禁止。

・300 平方インチを超えるキルティングは禁止。

・ドレス：タフタとサテンのドレスの丈は 144 インチのまま。

【靴】

民間人は 1 年につきわずか 3 ペアの革靴に限られていた。革命と人力不足と軍事需要のため、非支配的な需要が大幅に減少した供給よりもはるかに大きいため、靴は配給された。

（3） 規制に対するアメリカ人デザイナーの対応 [68]

ミルバンクは、次のように述べて、衣装デザイナーが L-85 による衣服規制に、どのように対応したかについて、代表的なデザイナーの取り組みを紹介している。

「1940 年代を振り返る多くのアメリカ人女性は、大半の特定の制限をほとんど思いつかなかった。なぜなら、靴を除いて、食糧券で購入することができたため、稀少性や限られた使用の問題のほとんどは、買うことができた衣服で、すでに解決されていたからである。アメリカ人のデザイナーは、自分が持っていたものに熟練していた。狭い服を面白く見せ、ジッパーや余分な素材を使用することの制限

を乗り越えて、独創的なソリューションを作り出した[69]。」

クレア・マッカーデルは、ボタンやジッパーの代わりに、真鍮のタブとフックで衣服を固定し、余分な綿のバルーン布でドレスを作って、自分の料理をしてくれたホステスのためにエプロンとマッチした衣服をデザインした。卸売デザイナーのジョゼ・ウォーカー(Joset Walker)は、女性が洗濯してアイロンをかけるのに適したウエストドレスを専門に扱っていた。ツイードの専門知識で知られるヴェラ・マックスウェルは、わずか 2〜4 ヤードの生地で、襟や身返しがなく、また、正面に重なりのない、直線的なコートをデザインしたエイドリアンはビクトリースーツをデザインした。細長いジャケットはウエストにファブリックネクタイで留められ、スカートにはリサイクルされたマッチしない布から作られたヨークが付けられていた。このヨークはジャケットの下からは見えていなかった。

トム・ブリガンスは、ファブリックが肩に集められて、折り畳まれたノースリーブをデザインした。フィラ・ベネンソンはジャケットの上に「所得税」のポケットをつけた。 それらはジャケットの裾に別布で裾がつけられず、ジャケットとして、1枚の布でカットされたので、生地の使用量は少なかったため、このように呼ばれたのである。 暖房油の不足のせいで、家が寒い女性用に、メインボッチャは、夕方のセーター、刺繍や光り輝くカーディガンを用意した[70]。

バーナード・ラッジ（Bernard H. Wragge）.は巨大な安全ピンで固定されたラップドレスをデザインし、ハーベイ・バーリン（Harvey Berin）のためにデザインしたカーレン・スターク（Karen Stark）は、ドレスにスターリングシルバーのジッパーを使用した。 他のデザイナーは、明るい灯火管制用スカーフ、カバーオールやジャンプスーツのバージョン、2 つしかボタンが必要ないようにカットされたドレープを思いついた。大抵の衣服にはキャップ・スリーブが付けられ、この袖は沢山のヤードの生地を節約した[71]。

規制にもかかわらず、戦時のシルエットは実際に変化した。この期間は多くの人の心中で、最初にエイドリアンが映画の中で、広い肩幅のジャケットと鉛筆のスカートで有名になったシルエットに固定されていた。特に、高い帽子やターバン、額の上に巻かれた髪、大胆な宝石類、細長いポケットブック、紫色の赤いリップスティックなどは、1940 年代の外観として記憶されている。これらは影響力があり、イレーネ、ヴェラ・マックスウェル、フィリップマン・マンゴーン、アンソニー・ブロッタ（Anthony Blolta, 1922~1971）を含む多くのデザイナーが取り上げたが、それだけではなかった。同じように人気があったのは、ウエストのちょうど下で終わっているフィット感のある短いジャケットと若干フレアのあるスカートであった [72]。

多くの人が創造したと主張していたセパレーツという考え方は、大学の学生服の比較的新しい領域で最も著しく発展した。キャンパスライフは、特定の機会に応じてさまざまな衣服を指定した。学生はサッカーの試合やデートのためにポロコートを好んだ。クラスでは、スカートやセーター、羊毛のドレス、ジャンパー、時にはスーツが着用された。教室では、靴や靴下を履いたり、寒い気候ではストッキングを着用したりしていた。ナチュラルレザーのパンプスまたはジリーシューズ（かかとの低い飾り紐付きの女性用スポーツシューズ）は、ドレッシーな服装に仕上げた。毎晩夕食に期待されるロードレス。スーツを着た大学生。華やかなセーター付きのスカート、またはドレス。ウール、ジャージー、コーデュロイまたはベルベットのデート用ドレス。他の学校や軍事基地に近い学生はダンスに出かけ、合成シルクとデコルテのイブニングドレス、ジャージーボディスのタフタ、黒いベルベットとオーガンディをジャンパーとブラウスをあわせて着用した。青いジーンズを含むパンツは、カジュアルウェアとして、また、スポーツ用として役立った [73]。若々しく装った年配の女性によって着られ

た服を着た学生の服のデザインを指導した会社は、B・H・ラッジ（B. H. Wragge）であった。1930 年代後半には、シドニー・ラッジが運営していたこの会社は、注意深くコーディネートされたコレクションを企画し､服の仕組みや 窓やインテリアのディスプレイを点灯させる方法を示すパンフレットを編集者や店舗に提供した。このようなプロモーションの方向性は今では一般的であるが、1940 年代の店舗は、別々の衣服のコンセプトを売る方法を示すことをありがたく思っていた[74]。

戦争が終わった後、材料の循環が回復してくると、アメリカのデザイナーはより軽薄なファッションを試し始めた。男性は前線から戻ってきた。そこで、女性は購入できる限りの最も魅力的な羽毛で、将来の夫に挨拶したがっていた。戦後のアメリカの女性は、より高く、より鋭い踵が付けられた靴､シアーストッキング､ウエストコルセット、より尖った、より高いブーツ、より短い、よりしっかりした髪、より繊細なアクセサリーを身に着けた[75]。

1947 年、クリスチャン・ディオールは、論争の的になった独創的なニュールックでフランスのクチュールの覇権を取り戻した。

ニュールックは、クチュールで流行しているバロックスタイルを試してみる準備ができているデザイナーのほかに、アメリカ人女性をいくつかのキャンプに分けた。スポーツウェアのよりカジュアルなバージョンを身に着けた人。できるだけ女性的で魅力的なものに見える衣装を選んだ人。この最後のグループのデザイナーには、短い（バレエの長さの）ふっくらしたイブニングドレスを提供したチャップマンが含まれている。また､アン・フォーガティー（Anne Fogarty, 1919~1980）は、ミスや小柄なサイズに特化しているため、ティーンエイジャーや若く見える小柄な女性に利用可能な別々のクリノリンの下着を作った[76]。

世界がフランスのファッションから切り離されていた時期は、実際

にはそれほど長くはなかった。1944 年にコレクションが再開され、ディオールの新しいメゾンを 1947 年にオープンしたことで､引き続き強さを増した。これは、アメリカのファッション・アンド・ファッション・センターとしてのニューヨークの台頭が、パリからの数年の独立よりも後れをとっていたことを意味している。

ニューヨークをとても重要なものにしたのは、実証された能力、技能、創意工夫であった。ニューヨークが生産した服はスタイリッシュで、アメリカ人には適していて、何千人の人々にもうまくいった。戦争の諸年が生んだ違いは、これが最終的に認められたということであった。既製服はもはや必要な悪とはみなされなかった。それは現代的で民主主義的であり、ニューヨークは既製服がスタイリッシュであることを証明した。

以上、第二次世界大戦がニューヨーク・ファッションに及ぼした影響について、L-85 に焦点を当てて述べてきた。

戦争の勃発とそれに続くフランスの占領で、パリのファッションハウスは米国と世界の他の国々から切り離された。小売業者はロード・アンド・テーラーのリードを追い続け、アメリカのデザインを積極的かつ一貫して推進し始めた。パリの運命は不確かなように見えたため、主に業界とその職業を守るため、製造業と縫製労働組合がこの努力に参加した。1941 年 7 月までに、アメリカのデザイナーの名前と縫製レーベルをその作品に貼り付けるという慣行が一般化し、女性のドレスの販売が活発になり、アメリカのデザイナーの地位が高まり、業界は安全になった

6　1950 年代

戦後、若者の価値観、生活意識の変化の中で、ニューヨーク・ファッションはいかなる変化・発展を遂げていったのか。前項で述べたように、1947年に発表されたクリスチャン・ディオールのニュールックは、ニューヨーク・ファッション界において、フランスのクチュールの覇権を取り戻した。ニュールックの主な特徴はまろやかな肩、ふくよかな胸、細い胴、花びらのように広がった長いスカートにある。ディオールは以後 10 年間にわたってパリのオートクチュール界に君臨し続け、毎年、春夏、秋冬のシーズン毎に独自のラインを発表していく。なかでも1954年秋冬のHライン、1955年春夏のAラインのアルファベットラインは有名である。その他に1953年春夏のチューリップラインや1957年のスピンドルラインもよく知られている。

だが、他方において、すでに認知されていたアメリカ人デザイナーによる既製服のデザインも盛んに進められた。本項では、ミルバンクに拠って、双方のせめぎあいの様相を描き出してみよう [77]。

戦争の時期を通じてのアメリカ人の外観を定義する試みは困難であることが証明された。1950年代は、女性が手袋、帽子、ポケットブック、ストール、靴などを身に着けていたかなりドレッシーな時期であったが、実際には家族主義的な活動の重要性を反映して、カジュアル感が増す時期であった。

アメリカの女性は、明るく強い歯と光沢のある髪をしていた。世界中の女性よりも足が長く、大股で歩いた。ビタミンを投与された表情に加えて、おてんばで、甘く、スポーティーで、テーラードで、洗練されているか、カジュアルであった。

クチュールが強くなるにつれて、より国際的にもなった。エリザベス女王の結婚と戴冠式は世界の目の前で英国人の男性を昇格させ、イタリア人は評判を高め、フィレンツェのピッティ宮殿に、他の国のファッションバイヤーや編集者を集めた。

アメリカ人のより簡単なカスタム服、イギリス人の保守的なスタイ

ル、イタリア人の見た目が第2位を占めていた。平均的なアメリカの女性は、ヴォーグやハーパーズバザーの広告で、時折の Bargains や Finds の記事で紹介されているものを除いて、最も現実的で手頃な価格の服を見つけた。既製服デザイナーは、しばしば最高の写真家を使用して全面広告を掲載するようになった。1950年代までに、最も一貫して広告は Modess によって運営されたものであった。デザイナーによる豪華な作品を着た女性を常に登場させた。

しかし、ニューヨークの重要性は、既製品の分野にあった。その驚異的な卸売デザイナーの多様性と彼らが製作したものの品質によって、ニューヨークは確かにスタイル・センターであった。戦争生産委員会は、多くの努力の中で、全国規模で10万人のアメリカ人女性を支援し、これらのガイドラインを用いて業界はすべての体型のサイズ別の標準化された測定を考案した。丁寧にデザインされた既製服は、カスタムメイドの服とほぼ同じ優れたフィット感を実現した。1950年代の新しい才能の中には、ルイス・エステベス（Luis Estevez, 1930~　）、アーノルド・スカージ（Arnold Scaasi, 1931~2015）、フェルディナンド・サーミ（Ferdinando Sarmi, 1912~）、ジェームズ・ガラノス（James Galanos, 1924~2016）が見られた。

アメリカのカスタムデザイナー、特に店舗に関連するデザイナーは、少なくとも1930年代から既製服をデザインしていた。1950年代にサックスのソフィーは既製服のデザインを始めた。フィラ・ベネンソンは、既製服のデザインをするために、ボンウィット・テラーを去り、チャールズ・ジェイムズは不幸にも量産を実験した。メインボッチャは、ラック外で生産することのない唯一のニューヨークのクチュリエであった。ニューヨークの帽子メーカーはまた、全国に配備できる安価なラインを製造し始めた。デザイナーの名前を知った今、アメリカの顧客は彼らが好きな名前のために特別に買い物をした。

1940年代後半にジョゼフ・ハルパート（Joseph Halpert）の Christian

Dior-New York とジャック・ファット（Jacques Fath）がニューヨークで実際に作られた服を持っていたことは、アメリカの技量の卓越性を認めていたことになる。アメリカ人女性は非常に多くの、さまざまな種類の服が必要なので、ほとんどのアメリカ人デザイナーはいつでも複数のシルエットを提供していた。彼らはその後、よりぴったりとフィットするようにドレスを変更した。ぴったりとした衣服は、1960 年代に、徐々に一般的なスタイルに進化したが、特に夏用とイブニング用にはフルスカートのドレスが引き続き展示され着用された。

最初の最も重要なアクセサリーアイテムはコスチュームジュエリーであった。 ここでは、マッチングセット、すなわちパウリが普及していた。イヤリングはローブ、チョーカー、ビブネックレス、ブレスレット、ブローチの形になっていた。ブローチは 1930 年代と 1940 年代のアールデコとアート・モダンの幾何学的形態とはまったく異なり、花や葉の形やモチーフのライン・ストーンやダイヤモンドがセットされたプラチナやプラチナ・ライクな金属が白い銀白のものであった。

ロードアイランドを中心としたコスチュームジュエリー業界は、依然として、ファッション業界にとってアメリカのトップ機構の 1 つと考えられていた。 他の場所では、考慮すべき重要な名前があった。ミリヤン・ハスケル（Miriam Haskell）、トゥリファリー（Trifari）、コロ（Coro）、リチェリュー（Richelieu）。 ハッティー・カーネギー、アデル・シンプソン（Adele Simpson）、トゥリジェール、ネッティー・ローゼンスタイン、アーノルド・スカージを含む服飾デザイナーは、シカゴに拠点を置く既製服会社アイゼンベルグ（Eisenberg）の指揮を借りて、衣装を補完するコスチュームジュエリーを作った。

靴は丸みを帯びたつま先のハイヒールが履かれていた。歴史上、一番、高いヒールである。他の選択肢には、夏と冬の両方のためのイブニングサンダルが含まれていた。これはサテン製のスリッパで、ドレスを補完するために染められていた。

女性は机に座って､仕事をしていても､昼間に帽子をかぶっていた。新しいスタイルは絶えず開発されていたが、幅広い帽子から、クローシェ、トーク、フラットターバン、そして髪の上に載せられた縁無しの小さな円形の婦人帽まで､10 年を通して同じ種類のものを着用できた。

1950 年代、髪の毛はパーマネントがかけられ、柔らかく波打つようなページボーイや渦巻き飾りの短いコイフが登場した。女性の気分に合わせて、メークアップはより凝ったものになった。淡いベース、パウダー、高い頬骨を強調するルージュ、そしてかなり新しくなった目のメイクである。目の色は、暗いアイライナーを角に、濃い色を瞼に向けて描いた。

郊外の生活は、テニス、水泳、ゴルフなどのアクティブな特定のスポーツのためにデザインされたスポーツウェアの新バージョンをもたらした。遊び着には、子供が着用するとても華麗で丈が短いサンスーツ、脚の細いカプリズや闘牛士のズボンやスポーツ用スラックスのようなショートパンツがあった。サイドファスナー付きの狭くて長いパンツは、人気のある外観で、カリフォルニアのジャクス・オブ・ブティック（Jax of Boutique）に由来している。

1950 年代には、男性は、戦争から故郷に帰って働き始め、家族を養うために再出発した。女性は立派な裏庭で腰を曲げて、食肉菓子の調味料を創意工夫し、子供たちの顔がこぼれ落ちるのを見て、自分たちがきれいに見えるようにした 。ベビーブームの子供たちが年を取るまで、すべてがうまくいっていた。

【注】

（1） Caroline Rennolds Milbank, *op.cit.*, pp.22~25.

（2） 百貨店に関する研究書

・Jan Whitaker, *Service and Style: How the American Department*

Store Fashioned the Middle Class, Saint's Martin's Press, New York, 2006.
・海野弘『百貨店の博物誌』(アーツアンドクラフト、2003)。
・濱田雅子『アメリカ服飾社会史』(東京堂出版、2009）, pp.207~211.

（3） 濱田雅子『同上書』pp. 186~202.

（4） Caroline Rennolds Milbank,*op.cit.,* p.16.

（5） *Ibid.,* p.16.

（6） *Ibid.,* p.18.

（7） *Ibid.,* p.28.

（8） 野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク』山川出版、1995年、p.76.

（9） 「1881年から1905年にかけて、ニューヨーク市は約85万人のユダヤ人の到着を目撃した。1890年にイタリア移民の波が始まり、ユダヤ系移民が女性服業界を支配する傾向にあったが、イタリア人はメンズウェアを支配し、コートやスーツの仕立てに特化された。どちらの産業においても、労働者の大半は女性であった。しかし、新しい移民のほとんどは男性であり、女性は切断ナイフ（1876）とプレス機械（1890年代）の発明後に、切断と押さえの位置からますます離れていった。移民労働者の安定供給と増加する人口（特に労働者階級）の需要の増加による産業の成長は、工場数が1880年の562から1900年の1823に、雇用者数が1880年の25,000人から1905年の84,000人に増加したことに反映されている」(Norman M. Rantisi, *Unpacking the Garment Districts Innovation System*, Ph.D. thesis, Graduate Department of Geography, University of Tronto, 2002, p.26)。

（10） Caroline Rennolds Milbank, *op.cit.,* p.22.

(11) *Ibid.,* p.29.

(12) *Ibid.,* p.29.

(13) Norman M. Rantisi, *Unpacking the Garment Districts Innovation System*, Ph.D. thesis, Graduate Department of Geography, University of Tronto, 2002, p.28.

(14) Caroline Rennolds Milbank, *op.cit.,*p.25.

(15) Sara B. Marketti & Jean L. Parsons, American Fashions for American Women: Early Twentieth Century Efforts to Develope an American Fashion Identity, *Dress* Vol.34:1, 2007.

(16) *Ibid.,* p.80.

(17) 1868 年にサンディカが創立、84 年には同業者組合として認定され、19 世紀の終わり頃までには、規模の大きい衣装店が 250店にも達していたとされている。サンディカはパリの高級衣装店組合（ラ・シャンブル・サンディカル・ド・ラ・クチュール・パリジェンヌ / La Chambre Syndicate de la Couture Parisienne）の略称である。1868 年、シャルル・フレデリック・ワースにより創立され、パリ オートクチュール・コレクションとパリ プレタポルテ・コレクションを取り仕切るほか、服飾関係の専門学校も開設している。また、1910 年頃、パリ コレクションが定期的に開催され始めた。以上のように、創立当初は特に資格を要求することもなく、多くのクチュリエをメンバーとして迎え入れていたが、それがために創作のないコピーだけの安売り仕立て店もサンディカのメンバーとして多く存在するようになってしまったのである。

そこで、1911 年にサンディカを再発足し、オートクチュールと銘打つための厳格な規約を定め、その規約に沿ったクチュリエのみを正式メンバーとして登録させることにした。これにより、オートクチュール自体に付加価値が付く格好とな

り、サンディカ並びにオートクチュールがファッション業界の最高峰として君臨することとなる。このような経緯でオートクチュール協会が設立された。

(18) Sara B. Marketti & Jean L. Parsons, American Fashions for American Women: Early Twentieth Century Efforts to Develope an American Fashion Identity, *Dress* Vol.34:1, 2007.

(19) 鴇田章『ストッキングは昔、男性貴族のお洒落アイテムだった』p. 26.

(20) 『同上書』p. 27.

(21) Sara B. Marketti & Jean L. Parsons, *op.cit.,* p.86.

(22) Samuel Hopkins Adams, The Dishonest Paris Label: How American Women are Being Fooled by a Country-Wide Swindle, *Dress,* Vol.4, 1978, p.17.

(23) Sara B. Marketti & Jean L. Parsons, *op.cit* .,p.88.

(24) *Ibid.,* pp.89~90.

(25) *Ibid.,* p.93.

(26) *Ibid.,* p.93.

(27) *Ibid.,* p.93.

(28) Sheryl Farnan Leipzig, Jean L. Parsons & Jane Farrell-Beck, It is a Profession that is New Unlimited, and Rich: Promotion of the American Designer in the 1930s, *Dress* vol.35, 2008~2009.

(29) Sheryl Farnan Leipzig, Jean L. Parsons & Jane Farrell-Beck, *op.cit.* pp.30~31.

(30) *Ibid.,* p.31.

(31) *Ibid.,*p.31.

(32) *Ibid.,*p.31.

(33) *Ibid.,*pp.31~32.

(34) *Ibid.,*p.32.

(35) *Ibid.*,p.32.

(36) *Ibid.*,pp.33~35.

(37) *Ibid.*,pp.37~38

(38) *Ibid.*,pp.38~39

(39) *Ibid.*,pp.39~40

(40) *Ibid.*, p.40.

(41) *Ibid.*, pp.40~41.

(42) *Ibid.*, p.41.

(43) *Ibid.*, pp.41~42.

(44) *Ibid.*, p.44.

(45) *Ibid.*, p.44.

(46) *Ibid.*, p.44.

(47) *Ibid.*, p.44.

(48) Caroline Rennolds Milbank, *op.cit.*, p.67.

(49) *Ibid.*, pp.124~125.

(50) *Ibid.*, p.61.

(51) *Ibid.*, pp.68~69.

(52) *Ibid.*, p.122.

(53) Sheryl Farnan Leipzig, Jean L. Parsons & Jane Farrell-Beck, *op.cit.*,p.29.

(54) Caroline Rennolds Milbank,*op.cit.*, pp.131~132.

(55) *Ibid.*, p.132.

(56) *Ibid.*, p.132.

(57) *Ibid.*, p.132.

(58) *Ibid.*, p.132.

(59) *Ibid.*, p.132.

(60) *Ibid.*, p.132.

(61) *Ibid.*, p.132.

（62） *Ibid.,* pp.132~133.

（63） *Ibid.,* p.133.

（64） Meghann Mason, *The Impact of World War 二 on Women's' Fashion in the United States and Britain,* A thesis submitted in partial fulfillment Of the requirements for the Master of Arts Theatre College of Fine Arts. The Graduate College University of Nevada, Las Vegas December 2011, p.17.

（65） *Ibid.,* p.18.

（66） Caroline Rennolds Milbank, *op.it.,*pp.133~138.

（67） Meghann Mason,*op.cit.,*pp.18~20.

（68） *Ibid.,* pp.20~24.

（69） *Ibid.,* p.138.

（70） *Ibid.,* p.138.

（71） *Ibid.,*p.138.

（72） *Ibid.,*p.140.

（73） *Ibid.,*p.140.

（74） *Ibid.,*p.142.

（75） *Ibid.,* p.143.

（76） *Ibid.,* p.142.

（77） *Ibid.,* pp.170~181 を要約。

図・写真の所蔵先・典拠

図１　ロード・アンド・テーラー。
https://en.wikipedia.org/wiki/Lord_%26_Taylor

図２　Ladies' Mile の地図
https://www.officesublets.com/sublets/new-york/ladies-mile-historic-district

図３　典拠：Samuel Hopkins Adams, The Dishonest Paris Label: How

American Women are Being Fooled by a Country-Wide Swindle, *Dress,* Vol.4, 1978, p.20.

図 4　典拠：*Ibid., p.22.*

写真 1　典拠：Meghann Mason, *op.cit., p.22.* Kay Bensel Applying Stocking Seams with Contraption, c. 1942, Kitsch-Slapped.com

第２章

アメリカン・ルックの推進者 ドロシー・シェーバーの生い立ちと活躍

ドロシー・シェーバー（Dorothy Shaver, 1893 年 7 月 29 日~1959 年 6 月 28 日）に関する研究は、我が国では皆無である。アメリカにおける先行研究には以下がある。

1） Tiffany Webber-Hanchett, Dorothy Shaver: Promoter of "The American Look", *Dress* Vol.30, 2003.

2） Sandra Lee Braun, *Forgotten First Lady: The Life, Rise, and Success of Dorothy Shaver, President of Lord & Taylor Department Store, and America's " First Lady of Retailing"*, UMI dissertation Publishing, 2009（UMI Number:3390537）

T・W・ハンシェット（Tiffany Webber-Hanchett）の研究では、シェーバーの簡単な略歴とロード・アンド・テーラーでの急上昇を紹介し、彼女のマーチャンダイジング・プラクティスがアメリカのファッション業界に及ぼした影響を検証している。資料としては、シェーバーの個人的で専門的な記録とロード・アンド・テーラーのアーカイブ、および昔の仲間のインタビューを主な出典として掲載している [1]。

S・L・ブラウン（Sandra Lee Braun）の研究は、シェーバーの生活、

仕事、哲学、および関連する文脈上の資料に関する第一次および第二次資料を調べることによって達成された。主な資料には、彼女の論文の２つのコレクションが含まれている。１つのコレクションは、ワシントン DC のスミソニアン研究所アーカイブセンターの国立アメリカ歴史博物館（NMAH）に保管されている。他のコレクションは、ボストンのハーバード大学のラドクリフ研究所所属アーサー・エンド・エリザベス・シュレジンガーアメリカ女性史付属図書館（SLRI）に所蔵されている[(2)]。

次に、我が国における研究には、直接、ドロシー・シェーバーを扱ったものではなく、衣服産業都市・ニューヨークのファッション産業史を扱った研究に、富澤修身著『模倣と創造のファッション産業史―大都市におけるイノベーションとクリエイティビティ―』(ミネルヴァ書房、2013）第６章「アメリカン・ファッション成立直前のニューヨーク Paul H. Nystrom (1928) , *Economics of Fashion* の紹介と検討―」第７章「衣服産業都市・ニューヨークのファッション産業史―ファッション模倣都市からファッション創造都市へ―」がある[(3)]。衣服産業都市・ニューヨークのファッション産業史の貴重な必読文献である。

本章では、ドロシー・シェーバーの略歴を年表にまとめ、解説を加える[(4)]。

1　年表

・1893 年 7 月 29 日	アーカンソー州の小さな町で生まれる。著名な弁護士、裁判官、芸術家の家族の出身。
・1910 年	高等学校卒業。次席優等生として卒業式の開会式辞を朗読。 アーカンソー大学で、英語を学ぶ。

・1912 年	教員免許証を取得。メナの公立小学校で教員を務める。
・1914 年	シェーバーが、地元のダンスにエスコートされないで、無分別に参加したため、教育委員会が教員の契約更新を拒否。
・1916 年	シェーバーと妹のエルシー（Elsie Shaver, 1896~1981、芸術家）はシカゴに移る。姉のシェーバーはシカゴ大学で英文学を学ぶ。
・1921 年	姉妹はニューヨーク市に移り、エルシーが画家として身を立てるお金を稼ぐために、彼らはエルシーが作った Little Shavers と呼ばれる人形を販売した。シェーバーは遠くの親戚であるロード・アンド・テーラーのサミュエル・レイバーン（Samuel Reyburn）社長に店内で人形を売るように頼んだ。 人形はドロシーとエルシーがロード・アンド・テーラーで Fifth Avenue 付近で自店を開くほど十分に売れた。レイバーンはドロシーがビジネスを成功させたことに感銘し、店に３回仕事を提供した。
・1924 年	姉妹は店を閉めた。エルシーは絵に戻り、ドロシーはロード・アンド・テーラーの商品を競合他社と比較するコンサルタントとして仕事を引き受けた。この仕事は" The Store" での彼女の著しく成功した 35 年のキャリアの始まりであった。
・1927 年	店舗で雇用され始めてからわずか 3 年後の

	1927年にロード・アンド・テーラーの取締役に任命された2人の女性の1人であった。
・1931年	彼女はスタイルと宣伝部の副社長に選出される。シェーバーは、副社長（1931~1945）として、1930年代初めに、アメリカのデザイナー運動を開始する。
・1937年	広告、プロモーション、ファッションコーディネーションの副社長に選出される。また、1930年代初期のファッショングループのチャーターメンバーでもあった。このグループは、アメリカのファッションビジネスとそのビジネスにおける女性の役割の広範な認知を表明し、強化するために組織されたものである。
・1940年代半ば	“The American Look”広告キャンペーンを開始。彼女は、アメリカン・ファッションを促進するために、店舗のマーチャンダイジングとマーケティングのポリシーを拡張した。
・1944年	彼女は、出版社であるエレノア・ランバート（Eleanor Lambert）と一緒に、コスチュームインスティテュートをメトロポリタン美術館に移転するに当たっての重要人物であった。
・1945－1959年	ロード・アンド・テーラー の社長を務める。
・1949－1959年	彼女の死に至るまでコスチューム研究所の所長を務めた。

2　生い立ちと活躍

第１節に掲載した年表に、以下において解説を加えよう [5]。

第１章で述べたように、ロード・アンド・テーラーは、アメリカで最も古いチェーンデパートメントストアのひとつである。創業は 1826 年であり、5 番街の最高級の場所にあるロード・アンド・テーラーのウィンドーは、90 年以上にわたって、ニューヨーク・ファッションの場面で衝撃を与えてきたのである。



写真 1 ドロシー・シェーバー。ロード・アンド・テーラー社長。1946 年頃。

このような小売業の幹部であったドロシー・シェーバーは、アーカンソー州センターポイントで、弁護士のジェームズ・シェーバー（James Shaver）とサリーボーデン（Sally Borden）の元に生まれた。彼女の母方の祖父はアーカンソー州ガゼットの編集者であるベンジャミン・ボーデン（Benjamin Borden）であり、父親の祖父はロバート・グレン・シェーバー（Robert Glenn Shaver）であった。祖

父は、南北戦争の際に活躍した著名な連邦軍の役人であった。1898年に家族はアーカンソー州のメナに移り、父のジェームズ・シェーバーは、市民のリーダーになったのである。彼はのちに、第六司法裁判所の大統領裁判官に選出された。母親は作家であった。ドロシー・シェーバーは、地元の聖公会教会聖歌隊で歌うことから、地元の男の子たちに加わって、ピックアップ野球の試合に参加することまで、幅広い活動のための限りない情熱を持った、外向的な人気者の子どもだった。彼女は1910年にメナ高校を卒業し、卒業式の開会式辞朗読者に選ばれた。その後、彼女の両親は地元のボーイフレンドとの逃走を妨害し、その秋、彼女はフェイエットビルのアーカンソー大学に入学した。

シェーバーは 1912 年に教師免許証を取得した後、メナの家に戻って、地元の公立小学校で7年生を教えるために雇われた。あらゆる事柄において、彼女は教室で成功をおさめた。しかし、彼女は、彼女の積極的な社会生活を嫌った保守的な教育委員会のメンバーに不満を感じていた。地元の慣習では、独身の女性として、公的な場にエスコートされないで、公然と現れるべきではなかったのである。そして、1914年には、シェーバーが地元のダンスに無分別に参加したため、教育委員会は、彼女が教員の契約を更新することを拒否したのである。シェーバーと彼女の妹エルシーは1916年にシカゴに移った。シカゴにいる間、ドロシーはシカゴ大学で英文学を学んだ。

こうして、学校の先生として短期間働いた後、1920 年代初めに、シェーバーと彼女の姉妹エルシーは、ニューヨークに移住した。マンハッタンへの移動はこの小さな町の少女に、転換期をもたらした。ニューヨーク市は1920年代にはエキサイティングな場所であった。ハーレムのジャズシーンの他にも、街は繁栄する商業拠点であり、国内最大の有名な小売業者の本拠地であった。彼らが到着した直後に、エルシーは、パステルカラーで描かれた綿の包帯から人形を作り始め、人形を作る小さなワークショップを立ち上げた。ドロシーは、キューピ

ードールの成功に触発され、エルシーの５種類のリトルシェーバー人形を販売し始めた。人形は猛威を振るい、若い女性がマンハッタンの通りでマスコットとしてリトルシェーバーを持ち運ぶのが流行した。エルシーによってデザインされ、人気のあるキューピーの人形をモデルにしたこっけいなリトルシェーバーは、エンパイアステートビルとニューヨーク公共図書館の間の 5 番街にある高級デパートであるロード・アンド・テーラーに在庫された。ロード・アンド・テーラーのエグゼクティブと遠いいとこで、ロード・アンド・テーラーの社長のサミュエル・レイバーン（Samuel Reyburn）が人形に感銘を受け、姉妹が今後 4 年間人形を生産するワークショップを立ち上げる手助けをした。サミュエル・レイバーンは、1921 年にロード・アンド・テーラーでシェーバーを比較商店街に雇った。この仕事は、彼女がそれを呼んだように、"The Store"での彼女の著しく成功した 35 年のキャリアの始まりであった。1 年後、ロード・アンド・テーラーでインテリアデコレーションサービスを開始した。シェーバーは、1927 年に店の取締役会に選出されるのである。

ドロシー・シェーバーは、1945 年にロード・アンド・テーラーの有名なニューヨーク・シティ・フィフス・アベニュー（New York City Fifth Avenue）の社長に就任し、同社の成功の大部分は、彼女の功績であった。

1921 年以降の活動は、年表にまとめたとおりであり、詳細は第 3 章において、紹介・考察する。

シェーバーのエレガントで美しい外見は、しばしばジャーナリストや同僚から「背が高く、細身で、テーラーメイドの黒い服を着た」キャリア女性とコメントされた。

【注】

（１）　Tiffany Webber-Hanchett, Dorothy Shaver: Promoter of "The

American Look", *Dress* Vol.30, 2003, pp.80~90.

（２） Sandra Lee Braun, *Forgotten First Lady: The Life, Rise, and Success Of　Dorothy Shaver, President of Lord & Taylor Department Store, and America's " First Lady of Retailing"*, UMI dissertation Publishing, 2009（UMI Number:3390537） *Ibid.*,p.47.

（３） 本書のあとがきに次のように述べられている。

「本書の各章は、個々の点をとれば、掘り下げ不足と映るかもしれない。本書は、繊維・衣服・ファッション・産業・大都市の視点から、大きな流れを『イノベーション』『変化への新対応』『模倣と創造』の視点から描いたものであり、これを理解した上で、今度は、特定時点の特定地域の特定対象を掘り下げていただければ、仮にその作業によって大きな流れの理解が修正されたとしても、本書の役割は十分果たされたといえよう。」

第６章では名著、Paul H. Nystrom, *Economics of Fashion*, The Ronald Press Company, 1928の紹介・分析が行われている。本書は服飾研究者にとっても必読書である。冨澤氏の著作の第６章、第７章は、５年もの歳月をかけて取り組まれた労作であるが、ドロシー・シェーバーについては一言も言及されていない。

（４） Tiffany Webber-Hanchett, *op.cit.*, pp.80~81.
Sandra Lee Braun, *op.cit.*,pp.51~63.

（５） Tiffany Webber-Hanchett, *op.cit.*, pp.80~81.
Sandra Lee Braun, *op.cit.*,pp.51~63.

写真の典拠

写真１　Tiffany Webber-Hanchett, *Dorothy Shaver: Promoter of "The American Look"*, Dress Vol.30, 2003, p.80.

第3章

「シェーバー・タッチ」とは

本章では「シェバー・タッチ」の紹介・考察を通じて、彼女がパリ・モードから「アメリカン・ルック」への転換をはかった重要な歴史的人物であったことを、第1章で考察した19世紀から1950年代のニューヨーク・ファッションに焦点を当てた歴史的背景を踏まえて実証する。

さて、「シェーバー・タッチ」とは何か。第二部のハイライトをなす本章に入るに当たって、最初にシェーバー研究の権威者である二人の研究者の言説に言及しておこう。

ティファニー・ウェーバー・ハンシェットは、シェーバーの活躍について、次のように述べている。

「マーチャンダイジング・ワールドのファースト・レディのドロシー・シェーバーは、ロード・アンド・テーラーの在職期間中（1924~1959）に小売業の新しい基準を設定した。他の業界リーダーが同じことをする前に、特に、アメリカのデザイナーの店舗を宣伝していた。宣伝と販売促進、新しいマーチャンダイジング手法とアメリカ人デザイナーの認知に関するロード・アンド・テーラーにおける彼女の革新は、「シェーバー・タッチ」"The Shaver Touch" と総称されていた。シェーバーは、副社長（1931~1945）として、1930年代初めにアメリカのデザイナー運動を開始し、1940年代半ばに "The American Look" 広告キャ

ンペーンを開始した。彼女は、アメリカン・ファッションを促進するために、店舗のマーチャンダイジングとマーケティングのポリシーを拡張した。シェーバーは国内の才能に敬意を表する必要があることを知り、そうすることで、アメリカのファッション・デザイナーを業界の不毛から救うための道を切り開いた[(1)]。」

サンドラ・リー・ブラウン（Sandra Lee Braun）は、シェーバーの活躍について、次のように述べている。

「シェーバーはロード・アンド・テーラーで通算35年間働いた。彼女は1924年から1927年まで部長を務め、1927年から1931年には副社長、1931年から1945年には第1副社長、その後1946年には1959年に死亡するまで、社長を務めた。彼女は彼女が就いた各部署に革新性と創造性をもたらし、彼女のスタイルは「シェーバー・タッチ」"The Shaver Touch" として愛されるようになった。それはロード・アンド・テーラーで全面的なリニューアル努力の中で感じられることになる。それは、アメリカと海外の両方のファッション界に感じられ、小売と通信の世界に永続的な影響を与えることになる[(2)]。」

1 比較ショッピング局
(Bureau of Comparison Shopping) の設立[(3)]

シェーバー・タッチの第一は比較ショッピング局の設立である。そのきっかけとなったのは、ロード・アンド・テーラーのシューズ部門でトラブルシューティングすることであった。

部門は売上げが下がり、経営幹部は彼女にそれを修正する方法について、いくつかのアイデアを求めていた。レイバーン社長に対する彼女のノン･ナンセンスのレポートは､問題を正しく認識したのである。在庫は顧客の望みを反映していなかった。「部門の株式の約 75%が間違った種類の靴に投じられている」と彼女は報告した。偽物の靴を扱っていた靴部門は、オックスフォードの需要を見落としていたのであ

る。オックスフォードは男性の靴の最新流行であった。

レイバーン社長は彼女の判断に感銘を受け、彼女は比較ショッピング部門で働くように求められたのである。多くの店舗には、このような部門があった。それらはしばしば広告部門に配置され、マーチャンダイジングマネージャーによって管理されていた。彼らの機能は、どのような商品が納品されているか、価格、価格に対する製品の相対的な品質、製品ラインの深さ、競合他社が提供していたサービスやアメニティを検証することであった。それは困難な仕事であり、歩き回ることが多く、体力が必要であった。1920年代、百貨店事業は非常に競争が激しく、比較ショッパーは、消費者がそれを体験したり購入したりすることができないように、競合他社の製品を買い取るというゲリラ戦術で知られていた。時には比較買い物客は、競合他社のレストランのメニューを盗むことさえあったのである。シェーバーはこの比較ショッパーの仕事に対して、ネガティブな考えを抱いていた。

2　ファッションと装飾の局
（Bureau of Fashion and Decorating）の設立[4]

そこで、シェーバーはロード・アンド・テーラーの経営陣にレポートを書いて、店が比較ショッピングの実践を完全に廃止することを示唆したのである。顧客や環境を調べて、ニーズを決定し、傾向を分析し、スタイルを予測する方法は、「ファッション予測」の一種の方法として推奨できる、と彼女は提案した。彼女は、ファッションと装飾の局（後に、それは時にはスタイリストの局とも呼ばれる）と呼ばれることを提案し、買い手に購買意思決定を助言するスタイリストによって、スタッフが雇用されることを提案した。彼女は、スタイリストが、ファッションのイメージ全体を意識し、店舗のバイヤーに、どのようなデザインや製品をそれぞれの部門に入荷するべきかについて、スタイリストに相談することを提案した。同局の目標は、顧客満足度の向

上である、と彼女は報告した。結果として、比較ショッピング局は廃止されることなく、シェーバーは、比較ショッピング局とファッションと装飾の局の双方を担当することになる。

これらのスタイリストは、ロード・アンド・テーラーのすぐに有名になったパーソナルショッパーサービスの始まりであった。ファッションと装飾の局のスタイリストは、顧客の個人的なコンサルタントとしての役割を果たし、顧客に人気を得た。彼らは若い母親の靴下、あるいは赤ちゃんのためのアイテムの選択に当たって、顧客に助言することができた。彼らはクリスマスデコレーション、精巧な夕食を演出する方法、結婚式の花や装飾をアレンジする方法など、生活の中での細かい分野で、顧客にアドバイスをしたのである。

スタイリストの局を設置した結果、ロード・アンド・テーラーは「この国の最も特色のある店の1つ」と呼ばれるようになる。これは、パーソナルショッピングサービスの開発と普及につながり、小売業の業界標準となったのである。それは今日、「ローズ&パーソナルショッピングサービスを提供するロード・アンド・テーラー」という表現で存続している。

3　現代フランス絵画と装飾美術展覧会の開催（1928年）[5]

部門長としてシェーバーは、海外に赴き、デザイナーやメーカーがヨーロッパ、特にパリで何をしていたのかを調査し始めた。彼女はココ・シャネルのようなフランスのデザイナーの個性が礼賛されていることを指摘した。彼女はシャネルの威信、シャネルの賞賛、シャネルのデザインハウスに注目した。そして、彼女はアメリカのデザイナーのための同様のビジョンを形作り始めたのである。

1925年パリの装飾美術展（Exposition Internationale des Arts Décoratifs et Industriels Modernes）が開催された。この博覧会にはアール・デコ博覧会という略称もある。これは、博覧会の名前のうち「Arts

Décoratifs」（装飾芸術）の部分を短縮した表現に由来する。アール・デコ（Art Deco）という言葉が登場した。これは、この博覧会で出品された服飾品や建築にみられる、同時代の精巧で官能的な装飾芸術やデザインを言い表すための言葉である。アール・デコは 1920 年代から 1930 年代前半にかけてフランスを中心にヨーロッパで流行した工芸・グラフィック・ファッションなどのデザイン思潮である。この思潮は、アール・ヌーヴォーへの反動で、機械文明を肯定し、幾何学的形態と機能美を強調した。

シェーバーは、1925 年にパリで日常的な買い物旅行をしていた時に、パリの装飾美術展を見て、アメリカの消費者に、現代フランスのデザインを導入する可能性に気づいたのである。3 年後、彼女は彼女のアイデアを実演する機会を得た。

シェーバーはレイバーン社長に、当時のフランスの家具と芸術のコレクションを輸入し、一般の人々のための展示品を準備するために、かなりの金額を投資することを納得させた。彼女はフランス、スペイン、イタリアに旅行して、1 年以上にわたり展示を続けた。「数ヶ月の間に、私は骨董品と現代のものを買いました。… 私は最も現代的な家具デザイナーのジャック・エミール・リュールマン（Jacques-Emile Ruhlmann, 1879-1933）やジュール・ルルー（Jules-Emile-Leleu,1883-1961）などの作品を持っていただけではなく、シルバー、プレート、ガラス、リネン、そして、ピカソ、ブラック、デュフィの画期的な絵画も持っていました [(6)]」と彼女は後に回想している。彼女はロード・アンド・テーラーの 2 つのフロアを埋めたのである。

当時としては、アメリカにおいて、美術、家具、アクセサリーのフランスの現代的なデザインを展示した最大のものであった。この美術展はロード・アンド・テーラーを「従来のデザインから一歩踏み出した最初の店」として確立し、ホームファッションの新たなトレンド、すなわちモダニズムを導入した。シェーバーは何年もアイデアを育ん

でいた。

1928年2月2日、ハリウッドの映画初演を思い起こさせる演劇様式で、プライベートレセプション、レッドカーペット、バラ、投光照明、シャンパン、キャビア、フォーマルな服装のオープニングナイトが完成したのである。そして、シェーバーは、白いイブニングドレスを着て目立っていた。このような宣伝は、店舗がこのような祝賀を行った夜に、小売業界で初めて見られたのである。それが促進された演劇的なスタイルのために、「芸術の形態としての販売媒体」の展示を確立したことに対して、シェーバーは賞賛された。

4　ロード・アンド・テーラーの再ブランド化 (7)

シェーバーのロード・アンド・テーラーの再ブランド化は、革新的な内外装ディスプレイ、トレンド設定広告、注目度の高いプロモーションを通じて達成された。

彼女の新しいオフィスの現代的な白とクロームのモダンなスタイルの家具から、彼女は積極的にアイデアを探し出し、彼女が引き受けた各プロジェクトに熱意と興奮をもたらした。彼女の創造性は、マーチャンダイジングとプロモーションのために、多くの小売業の傾向を設定し、「シェーバータッチ」として知られるようになったのである。

彼女はミラーの豊富な使用を認めた。特に新しいミラーリングされた壁が付いているブライダルエリアではそうだった。

彼女はニューヨークで最初の店内ランチカウンターとして認められたものを確立した。

シェーバーは彼女の芸術への愛情を展示し、ウィンドーのディスプレイを劇場に引き上げた。1950年に、彼女はエレベーターシステムを利用して、3分ごとにウィンドーの表示マネキンを変更した。

彼女は、広報目的でウィンドー展示を使用する最初の小売業者として認められている。フリーウィーリングのアイデアで、彼女は商品を

一切ためこまないとの考えをもっていた。商品のないウィンドーでの彼女の最初の試みは、1938 年であった。不況は、アメリカにおいて、依然として明白だったので、彼女のポスト感謝祭のウィンドーに休日の商品を載せるのではなく、人々の精神を高揚させるために、白と黒のベルベットの背景に、金色のクリスマスの鐘が飾られていた。「商品は一切なく、金色のクリスマスの鐘だけが、金色の音符を鳴らし、音は偶然、世界中で聞こえました [8]。」

彼女はまた、シーズンの視覚的な喜びの可能性を表現するウィンドー・ディスプレーで、店の５番街のファサード向けの 10 階建てのクリスマスツリーを飾るために、ライトをつけた。他のショップもロード・アンド・テーラーに続いており、ニューヨークの通りはクリスマスの飾り物で有名になったのである。当時としては、まったく新しいアイデアであった。シェーバーのウィンドーディスプレイは、多くの人を集めてメディアの注目を集めた。

シェーバーはアーティストに広告に署名することを許可した。それは、彼女は、この国においてユニークであると言われたやり方であった。彼女はまた、店舗ロゴの演出を開発するためにアーティストを利用した。

5　アメリカのデザイナームーブメントと「アメリカン・ルック」キャンペーン [9]

(1)　アメリカン・デザイナー・キャンペーン

「シェーバー・タッチ」の第５項目目は、まさに本章のハイライトを成しており、第１章の冒頭において提示した「パリ・モードから『アメリカン・ルック』への転換はいかにはかられたのか」という問題提起に関する答えを本項目において明確に出したいと思う。

シェーバーは、展示、広告、プロモーションを通じて、ロード・アンド・テーラーのブランドを構築していた。シェーバ自身は服飾デザ

イナーではなく、あくまでもマーチャンダイザーであったが、アメリカのデザイナーに対して彼女は確信を抱いていた。第1章第2節で考察したように、1920年代には、ファッション・プレスがクリエイティブ・ファッション・デザインの中心であるパリに焦点を当てていたのに対し、ニューヨークに本拠を置く既製品のデザイナーのクレア・マッカーデルやノーマン・ノレル、製造元のハッティー・カーネギーを含む、多くの今ではおなじみのデザイナーが活躍を始めたのである。「アメリカの女性のためのアメリカのファッション」の仕事は時期尚早に推進されていたが、20世紀初頭の多くの声がパリの独立したスタイルを要求していたことは明らかである。

1932年、このような背景のもとに、シェーバーはアメリカンデザイナーキャンペーンを開始した。彼女は米国でファッション業界を築くために、国内におけるファッション・デザインの才能を求めた。シェーバーはデザイナー自身が持っていたよりも多くの信念を抱いていた。彼女は広告と宣伝を含む計画を思いついたのである。

「しかし、購買者の俗物根性をくすぐるパリの特質を制覇するには、いかにすればよいのか？アメリカのファッション誌や私たちの周りにいるデザイン才能のある米国の一般人を説得するには、どのようにすればよいのか？ネイティブデザイナーを援助することによって、自分自身を助けることができることを、ファッション業界に対して、どのように証明すればよいのか？」「若いアメリカ人デザイナーの服を特徴とする一連のロード・アンド・テーラーの広告で、私はそれをやり始めました。これを行うには、デザイナーを抱えているメーカーを見つけ出し、デザイナーを宣伝することで会社の威信を高め、ビジネスを拡大し、最終的にアメリカを素晴らしいファッションの中心にすることを納得させることでした[10]。」とシェーバーは述べている。

そういうわけで、1932年4月17日に、シェーバーはアメリカのデザインを特集した広告を出したのである。彼女はロード・アンド・テ



写真１　ロード・アンド・テーラー　５番街のディスプレー。
エディス・ルスのテキスタイル・デザイン。1932 年

ーラーで特別なランチとファッションショーを開催した。このショーでは、３ 人の選ばれたデザイナーの作品を特集した。エリザベス・ホウズ、アネット・シンプソン（Annette Simpson)、エディス・ルスは、彼らの作品を展示し、アメリカのデザイナーの「第一位」として知られるようになった。次のような広告が宣言された。

> ロード・アンド・テーラーは、3 人の若いアメリカのデザイナーによって創出された､アメリカ人女性とアメリカ人女性による、アメリカ人女性のための新しい衣服傾向を認識しています｡ロード・アンド・テーラーは、3 人の若手デザイナーの作品で認められた新しいアイデアをスポンサーに熱望しています｡彼女が暮らしているアメリカの生活を理解する服…これらの若い女性たちは知人､典型的なアメリカの女の子のための服をデザインし始めました…これらのコレクションを発表する際には､あなたを理解する服をあなたが購入し､着るという新しい満足感を発見すると

信じています[11]。

2 回目のプロモーションでは、ミュリエル・キングとエリザベス・ホウズの作品が紹介された。3 回目のプロモーションでは、クレア・ポッター、アリス・スミス、ルース・ペインの作品が紹介された。プロモーションは新聞で広く報道され、好評を博した。これらの強力で明確な行動のため、シェーバーとロード・アンド・テーラーは、アメリカのデザイナーを促進する最初の店として知られるようになったのである。

ところで、シェーバーは、ファインアーティストを積極的に宣伝していたニューヨークの広報担当者であるエレノア・ランバートの助けを借りて、デザイナーをクライアントとして迎え入れた。ランバートはシェーバーとほぼ同じ時期にニューヨークにやってきた。2 人とも、メトロポリタン美術館とアートの舞台に携わっていた。シェーバーと同じように、ランバートは革新者であった。彼女のファースト・クライアントは 1932 年に取材したアネット・シンプソンであった。シンプソンは、ロード・アンド・テーラーが公的に後援した最初のデザイナーの 1 人であり、彼女は全国的な評価を受けることになる。

ランバートはデザイナーの全面的な緊縮を促進し、名前を認知させ、新しいスタイルの宣伝を展開して目標を達成するという仕事を引き受けた。彼女は、ナショナルファッションプレスウィーク、アメリカのファッションデザイナー評議会、コティ・アメリカンファッション批評家賞、国際ベストドレッサー投票を開発した。彼女は「ファッション宣伝の発明者」として広く知られるようになり、「7 番街の皇后」として愛されるようになった。ランバートとシェーバーは、アメリカのデザイナーのビジョンに協力し、コスチューム研究所の資金調達やコティ・アメリカン・ファッション批評家賞の受賞など、多くのプロジェクトに協力した。

（2）ロード・アンド・テーラー賞（Lord & Taylor Awards）の制定[12]

デザイナーのエリザベス・ホウズは、ニューヨークの新興デザイナーについて「私たちのアメリカのデザイン」としか書いていないことについては非常に戸惑った。「私たち自身のアメリカのデザイン？」彼女は、公然と非難した。「誰によって？ なぜ、アメリカ人。彼らは誰なの？ それらの名称は何ですか？ これらはアメリカでデザインされた服です…完全に無名の人々によって、おそらくロボットによって」とホーズは非難した。

1937年、彼女はアメリカデザインのイニシアチブと独創性を刺激する手段としてロード・アンド・テーラー賞（Lord&Taylor Awards）を制定した。賞は優れたデザインに対して授与されたものであった。最初の年に、4人の受賞者がロード・アンド・テーラーから1,000ドルで小切手を受け取った。この賞は、ファッションデザイナーのクレア・ポッターとネッティー・ローゼンスタイン、繊維デザイナーのドロシー・リーブス(Drothy Liebes)、絨毯デザイナーのスタニスラヴ・ヴォスケ(Stanislave V'Soske)に贈られた。

当初、デザイナーは単に小切手を受け取るために店に行ってきた。しかし、シェーバーは賞をディナーイベントに変えるという考えを抱いた。メディアは1938年にそれをカバーし始めた。

ロード・アンド・テーラー・デザイン賞は、ニューヨークで最も有名なイベントのひとつとなった。1945年までに、それは競争率の高い抽選権を保持し、ウォルドーフアストリアに約1,800人の影響力のあるゲストを集めた。

（3） Met Galaの創設[13][14][15]

コスチューム研究所（The Costume Institute）は、劇的な劇場を支える衣装の保管庫として、ルイスソン(Lewisohn sisters)の姉妹によっ

て始められた。しかしシェーバーには別のビジョンがあった。彼女は、すべてのファッションは循環的であり、過去のファッションの単なる変更であると信じて、デザイナーのためのデザインインスピレーションの源としてそれを見たのである。そこで、コスチューム研究所をメトロポリタン美術館に移す計画を立案したのである。

シェーバーとファッショングループのメンバーは、博物館がスタイルのアイデアを伝達する主要な手段であったため、アメリカのファッションのプロフィールを高めるのに役立つだろうと信じていた。

コスチューム研究所をメトロポリタン美術館に移す計画が実現すれば、デザイナーは博物館とコスチューム・インスティテュートの常設展示のインスピレーションを得ることができた。デザイナーは、ローンで利用可能だったコレクションの恩恵を受けることもできた。この計画の目的は、デザイナーや衣装ついて学ぶ学生にとって可能な最も実用的な博物館を発展させ、展覧会を通してアメリカの人々にファッションを投影することであった。国際女性服飾労働組合（International Ladies Garment Workers Union）の副社長であるジュリアス・ホックマン（Julius Hochman）は、衣料品産業に対するこのような計画の経済的可能性を認識し、「アパレル製造の約 10 億ドル」の「金鉱山」に座っていると宣言した。メトロポリタン美術館は、それを労使関係への巨大なステップと呼んだ。サンクトペテルブルグ・タイムズ紙は、この動きに伴い、ファッションは「深刻な芸術」であると宣言した。その動きを賄うために、シェーバーは再びファッション広報担当者のエレノア・ランバートの援助を得た。彼らは野心的なプログラムに着手した。彼らは$ 150,000 を調達し、1946 年にその運動を完了した。両機関は合併して、世界で最も包括的なファッションのコレクションを作った。新しい場所には、研究室とラボが含まれていた。ここで生徒は人工物を調べ、年代を超えてファッションに関する本を読むことができる。シェーバーとランバートによって始まった資金調達者は、「今年

の党」と呼ばれる年次行事になったのである。今日の Met Gala の起こりである。

（4）「アメリカン・ルック」の誕生
—クレア・マッカーデルを事例として [16] [17]

デザイナーは、挑戦に立ち向かうだけでなく、アメリカの女性が望む最高のデザインを作り、彼らがパリと同等であることを国民に説得しなければならなかった。1940 年の夏、ロード・アンド・テーラーを含む 5 つの大規模小売業者が集まり、一連のプロモーションを実施した。彼らはファッションショーを上演し、彼らを調整して、公衆と報道陣のメンバーが彼ら全員のもとへ行くことができるようにした。

彼らはファッションを事前に宣伝することによって、伝統を破ったのである。事前の宣伝は、生産コピーとノックオフの可能性のために、以前は推奨されていなかった。ロード・アンド・テーラーは 9 月 4 日に、10 人のデザイナーを紹介するために、昼食会とファッションショーを開催した。出席者は 200 人であった。イベントはニューヨーク・タイムズで報道の全ページを受け持ち、新聞社はデザイナーの名前をつけ、その創作について話した。

1930 年代から 1940 年代まで、ロード・アンド・テーラーのアメリカン・デザイナー・キャンペーンでは、アドリアン、クレア・ポッター、ジョイス（Joyce）、ネッティー・ローゼンスタイン、リリー・ダッチェなど、約 60 人のデザイナーを地図に載せた。

「アメリカン・ルック」は、アメリカ人女性と典型的なロード・アンド・テイラーの顧客のライフスタイルを取り入れて具現化した、特定のファッションスタイルを描くために、シェーバーによって一般化された用語であった。シェーバーは、アメリカの女性のためにアメリカのデザイナーが特別に作ったスタイルがあると信じていた。

初期のシェーバーのプロテーゼであったクレア・マッカーデルは、典型的なアメリカのデザイナーとして知られるようになった。クレア・マッカーデルは第1代目の真の意味でのアメリカ人デザイナーであり、「アメリカン・ルック」の創始者と呼ばれた。アメリカ人の女性はいつも彼女の新しさとエネルギーを賞賛していた。そこで、以下において、拙著『アメリカ服飾社会史』の第8章のクレア・マッカーデルの項目に補足して、リライトさせていただく次第である。

まず、クレア・マッカーデルの生涯を追ってみよう。

1905年、クレア・マッカーデルはアメリカ合衆国のメリーランド州、フレデリックで、上院議員にも選出された銀行総裁の父親のもとに生まれた。母は南部の軍人の娘だったので、かなり裕福な育ちである。クレアには3人の弟がいて、スポーツ好きな子として成長した。

高校と2年制の大学卒業後、保守的な父親の反対をおしきり、クレアは1925年に芸術工芸学校、今のパーソンズ・デザイン学校（Parsons School of Design, 当時は New York School of Fine and Applied Arts と呼ばれた）でファッションイラストを専攻した。

1926年、彼女はパリのヴォージュ広場のパーソンズ・デザイン学校で2年目を過ごし、オートクチュールの世界に触れている。パリでクレアが特に影響を受けたのは、マドレーヌ・ヴィオネである。シャネルとも交流があった。彼女は最終学年にはニューヨークの芸術工芸学校に戻った。

1927年に 卒業後、7番街の会社で、パタンナー、モデル、デザイナーなどの仕事を転々とする。1930年に、彼女はスタートしたばかりの若手デザイナーのロバート・タークのアシスタントになった。彼のベンチャーが失敗したので、その後、彼とクレアはタウンリー社（確立したスポーツウェアのアトリエ）に移ったのである。

1932年にタークが航行事故で死んだので、クレアはタークの地位について、コレクションを終えた。このコレクションで認められて、正



写真２　ロード・アンド・テーラー５番街の店内ディスプレー。若手のアメリカ人デザイナーの作品を展示。1933 年。

式なデザイナーへと昇格する。

会社が崩壊するまで、彼女は 7 年間、タウンリー社に留まった。1938 年にタウンリー社で仕事をしている間、彼女は最初の商業上の成功をおさめた。着用者がサッシかベルトで彼女自身のウエストラインをかたどった流麗なローブのようなデザインのいわゆる「修道院のドレス」で、得点を獲得した。Best & Co. はこれらのドレスを 100 着購入した。これらのドレスはたちまち有名になった。タウンリー社が会社を畳んだ 1939 年に、彼女はハッティー・カーネギーで短期間、働いた。カーネギーのメゾンはパリジャンのデザインを販売した。 しかしながら、カーネギーの好みには、マッカーデルのデザインはあまりにもシンプル過ぎた。

1940 年にタウンリー社が再オープンした。そこで、クレア・マッカ

ーデルはかれらのために彼女の最初のコレクションを持参した。このコレクションは、当時としては急進的な自然なショルダーが特徴的で、袖付きのワンピースに裁断されていた。彼女は、当時流行していたような、男性の仕立てをコピーするよりも、快適で魅力的なフィットを達成するのにプリーツかバイアス・カットを取り入れる方を選んだのである。彼女はシャネルとヴィオネから影響を受けた。そして、ボタンを好み、ボタンとサッシュで結び合わせた。

シャネルとマッカーデルの方向性は非常に似ていたように見える。シャネルが活躍したのが 10 年代以降で、マッカーデルは 30 年代以降と時代はずれているが、男性用の素材、労働服にインスピレーションを受けている点、スポーツウェア、装飾よりも機能性、シンプル化を進めた点などさまざまな共通点がある。マッカーデルは 20 年代、フランス留学の経験があるので、シャネルの影響は少なからず受けている。



写真 3　クレア・マッカーデルの作品。1940 年。タウンリー社で制作。チャコール・グレーのウール地に細いストライプ。小さな衿に５部丈の細い袖。膝丈のワンピース。

しかしシャネルとマッカーデルには決定的な相違点があった。それはシャネルは、オートクチュールであり、高所得層にフォーカスしたデザインだったのに対して、マッカーデルは既製服を意識して、幅広

い層にファッションを発信していた点である。言い換えると既製服の限界の中で、バイアス・カットを用いて女性の身体を最大限考慮したデザインを展開した。この相違点こそ、当時のアメリカのライフ・スタイルから生まれた、アメリカン・スタイル、アメリカンウェイの本質を示すものではないだろうか。パリとアメリカはファッションのスタートラインが全く異なっていたのである。

1942年、この年は彼女の最もポピュラーなものの1つの「ポップ・オーバー」ドレス、すなわち、巻きつけて着るホームウェアがデザインされた。

40年代の間、クレア・マッカーデルはアメリカの女性が好んださまざまなビーチウェアと遊び着をデザインした。彼らは自分達の家でビーチやレジャー用のこれほど快適で魅力的なカジュアルウェアを一度も着たことがなかった。この遊び着は綿製であり、これは1946年から編まれるようになった。

クレア・マッカーデルは古典的なギリシアとローマの巻き衣とスタイリングに非常に関心があった。彼女は多くのカジュアルな衣服を作ったが、彼女のいくつかのガウンは真に古典的なデザインである。

1953年に、クレアはテキサス出身の建築家アービング・ドゥロー・ハリスと結婚した。彼らはニュージャージー州のフレンチタウンの農家で自分達の時間を享有した。

1941~1945年の間、アメリカは第二次世界大戦によってヨーロッパから隔離された。これはマッカーデルのようなアメリカ人のデザイナーに楽で快適な「アメリカ・ルック」を創作する機会を与えた。彼女のインスピレーションはいつもアメリカであった。それは自由であり、カジュアルさであり、すばらしい健康である。「衣服はそのすべてを示すことができる。」と、彼女は言った。

ロード・アンド・テーラーとの会合に先立って、彼女は長年にわたってデザインしてきたが、適度な成功を収めた。彼女はパリのオート

クチュールのスタイルを拒否し、自分の道を歩いていたので、沢山の魅力を見つけることができなかった。しかし、1945 年、ロード・アンド・テーラーのスポンサーシップを受け、彼女はデザインに対する支持、賞賛、認知を得た。

シェーバーが宣伝していたシンプルで機能的でスタイリッシュなアメリカン・ルックに完全に合っていた。彼女のデザインは、テントドレス、ラップアラウンドスカート、ハーレムパジャマ、流行の水着、デニムの使用、擬似毛皮など、今や共通すると考えられる多くのファッションのための道を開いた。

マッカーデルは 1943 年と 1956 年に名門のアメリカ人デザイナーのコティ賞を受賞した。1952 年に、マッカーデルはタウンリー社の共同経営者兼副社長になった。1955 年に、クレアは、綿のリゾート用の衣服を作るのにシャガール、ピカソ、ミロ、およびデュフィのような現代の芸術家のデザインを使用した。 次に、彼女はヨーロッパの芸術家のスタジオに彼らを連れて行った。

ライフは、1990 年に彼女のデザインに影響を与えるために、20 世紀の最も重要な 100 人のアメリカ人の一人と名付けた。彼女は彼女の名前をライセンスする最初のアメリカ人デザイナーの一人であり、Time のカバーの初めての女性デザイナーであった。

クレア・マッカーデルは 53 歳のときに癌で他界して、ファッション界は一人の偉大なデザイナーを失った。

国内で最も影響力のあるデザイナーの 1 人であるドナルド・ブルックス（Donald Brooks）[18] は、シェーバーから、ファッションでキャリアを始めるよう奨励された。ブルックスはディスプレイ部門で、ロード・アンド・テーラーで夏の仕事をしていた。彼の望みは、ステージや映画の衣装をデザインすることであった。ロード・アンド・テーラーのディスプレイディレクターのヘンリー・キャラハン（Henry

Callahan）氏は、シェーバーにブルックスのスケッチのコレクションを示した。シェーバーはブルックスにファッションデザイナーになる必要があるとアドバイスした。

彼はアメリカン･ルックの影響力のあるデザイナーの一人になった。これらのデザイナーには、アメリカのスポーツウェアに洗練されたと言われていたボニー・カシン（Bonnie Cashin）、トップレスの水着をデザインしたルーディー・ゲルンライッヒ（Rudy Gernreich）がいた。ノーマン・ノレルはガウンのために注目された。ポールライン・トゥリジェールは、彼女の洗練された構造化仕立て、特にコートやドレスで知られていた。ヴェラ・マックスウェルは合成繊維のスエードを使用した最初のデザイナーであった。これらのデザイナーはすべてロード・アンド・テーラーのウィンドーにデビューした。

シェーバーはまた、米軍を支援した。1942 年から 1945 年まで、彼女は陸軍看護師団（ANC）の制服のデザインについて助言を求められた。彼女は、司法長官室のゼネラルコンサルタントを務めた。彼女のような地位についた最初の女性である。司令官は、看護師が戦闘地域や多くの気候での使用に適した制服を所有することを望んでいた。シェーバーはプロジェクトを調整し、看護師からのフィードバックを得て、軍の要件を調べた。彼女は素材、スタイル、および機能を選択した。彼女は、メンテナンスしやすく、どんな人物にも優しい制服を制作した。例えば、陸軍看護師のニーズに適した機能を取り入れた制服を作った。

（5）　ドロシー・シェーバーの最後[19]

彼女の任期の終わり近くである 1959 年までに、ロード・アンド・テーラーは 1 億ドルの会社になった。彼女の支配下で、店舗の売上高は、14 年の短期間で 225％以上伸びた。ロード・アンド・テーラーは、それがシェーバーの指示の下にあるときほどの成功を収めたことはなか

った。売上高は 1945 年に 3 千万ドルから 1951 年には 5 千万ドルに、そして最終的には 1959 年には 1 億ドルに増加した。従業員は 1946 年の約 2,300 人から、1957 年の約 5,000 人に増加した。店舗は 1 店舗から 7 店舗に増えた。印象的な成長率であった。これとは対照的に、ボンウィット・テラー（Bonwit Teller）は 100%、メイシーズ（Macy's）は 85%、サックス（Saks）（Gimbel Brothers）は 65%の増加を示めした。シェーバーの業績は、豪華なデパートを国際的な名声に導いたのである。

彼女のテニュアの終わりまでに、ロード・アンド・テーラーは「ニューヨークで最も豪華な店のひとつ」として知られていた。ワシントン州広告クラブのアーノールドホファイン氏は「シェーバー氏のリーダーシップに直接起因する国際的な名誉と功績は、ミス・シェーバーのリーダーシップに直接起因している」と語った。彼女が社長を務めていた間に、ロード・アンド・テーラーはニューヨークで最も有名なデパートの一つになり、アメリカでは女子服の国民的シェアの約 80%を生産するファッション業界は都市のトップ産業となり、ファッションは米国の 85 億ドルの産業となり、石炭、石油、鉄鋼に次いで全米トップ 10 の業種となった。

しかし、すぐに「シェーバータッチ」は感じられなくなった。彼女は 1959 年 6 月 28 日に一連の心臓発作に苦しみ始め、ニューヨークのタナーズヴィル（Tannersville）にある彼女の夏の家で、3 度目の最終的な心臓発作にかかり、近くの病院に連れて行かれ、そこで亡くなった。6 月 29 日、ニューヨーク・ポストは「ドロシー・シェーバーの死によって、女性が今までに実現した最も魅力的なマーチャンダイジング・キャリアの 1 つが閉鎖した」と宣言した。本書では章単位でまとめを書いているが、第 4 章において、まとめをかねてドロシー・シェーバーの業績の意義について、サンドラ・リー・ブラウン（Sandra Lee Braun）の立場を踏まえて、筆者の見解を述べる。

【注】

（１）Tiffany Webber-Hanchett, *op.cit.*, p.80.

（２）Sandra Lee Braun, *op.cit.*, p.75.

（３）Sandra Lee Braun, *ibid.*, pp.76~78. Tiffany Webber-Hanchett, *op.cit.* p.81.

（４）Sandra Lee Braun, *ibid.*, pp.78~80. Tiffany Webber-Hanchett, *ibid.* p.81.

（５）Sandra Lee Braun, *ibid.* pp.80~86. Tiffany Webber-Hanchett, *ibid.* pp.81~82.

（６）Sandra Lee Braun, *ibid.*,pp.81~82.

（７）Sandra Lee Braun, *ibid.*, pp.86~97. Tiffany Webber-Hanchett, *ibid.* p.82.

（８）Sandra Lee Braun, *ibid.*, p.91.

（９）Sandra Lee Braun, *ibid.*,pp.97~101. Tiffany Webber-Hanchett, *op.cit.* pp.83~86.

（10）Sandra Lee Braun, *ibid.*, pp.100~101.

（11）*Ibid.*, pp.98~99.

（12）*Ibid.*, pp.101~102.

（13）*Ibid.*, p.103. Tiffany Webber-Hanchett, *op.cit.*p.81.

（14）Sandra Lee Braun, *ibid.*, p.103.

（15）*Ibid.*, pp.103~104.

（16）*Ibid.*, pp.105~107.

（17）*Ibid.*, pp.108~109.

（18）*Ibid.*, pp.109~113.

（19）*Ibid.*, pp.133~135.

写真の所蔵先・典拠

写真 1　Tiffany Webber-Hanchett, Dorothy Shaver: Promoter of "The American Look", *Dress* Vol.30, 2003, p.83.

写真 2　*Ibid*.,p.84.

写真 3　神戸ファッション美術館収蔵。

第4章

ドロシー・シェーバーの業績の意義 (1)

サンドラ・リー・ブラウン（Sandra Lee Braun）は、ドロシー・シェーバーの業績の意義について、彼女の学位論文において、以下のようにまとめている。

1　シェーバーは、最初から女性の業績の最前線で、一貫して活躍していた。シェーバーがロード・アンド・テーラーの部長に就いた1920年代、女性はデパートでは一般職においてに雇用されたが、部長や上司としては雇われなかった。実際、どの業界でもほとんどの管理職を務めていなかった。1934年、シェーバーはニューヨーク市のデパートのわずか4人の女性副社長の1人であった。

2　シェーバーは他の女性がデパートや他の大企業の社長になる道を開いた。1957年、ジェラルディン・シュッツ（Geraldine Stutz,1924~2005）がアンリ・ベンデル（Henri Bendel）の社長として小売階級に加わった。彼女は、1955年から1957年まで、靴の小売店I・ミラー（I. Miller）の副社長を務め、シカゴのファッション業界の広報担当ディレクターの助手として、その後グラマー・マガジン（Glamour Magazine）の編集者として長年働いていた。

3　1946年、彼女が社長に就いて最も高い給料を支払うビジネス・ウーマンに選ばれたとき、彼女は110,000ドル（今日の経済で約803,000ドル）を稼いだ。シェーバーは、その時代の男性CEOの給与のわ

ずか 4 分の 1 しか得なかったことが広く報告されている。しかし、これは全く真実ではない。彼女の 1946 年の給与は、この期間の多くの男性役員の給与と同じかそれを上回っていた。

4　シェーバーは、世論を形成する上で重要な役割を果した。ロード・アンド・テーラーに入社してから 4 年以内に、彼女の 1928 年の展覧会は、米国の近代的なデザイン運動を誘致する重要な力であると評価された。しかし、世論に対する彼女の最も徹底的な影響は、米国の人々に、アメリカのファッションを買わなければならないことを説得していたことである。1920 年代半ばのパリのデザインハウスと第二次世界大戦中のアメリカン・ルックの誕生の間には、長い闘いがあった。しかし、この努力はファッションの顔を変え、ニューヨークの都市や州だけでなく、国や世界全体にも大きな経済的影響をもたらした。

5　シェーバーの業績は、フェミニズム、ファッション、小売、コミュニケーションの分野で感じられた。マーチャンダイジングの進化に対する彼女の影響は、「単純に巨大であった」と彼女を賞賛する人は語り、それは彼女に「アメリカのファースト・レディ・オブ・リテーリング」という称号を与えたのである。

第二部第 3 章では T・W・ハンシェットとサンドラ・リー・ブラウンの研究に基づいて、我が国ではおそらく全く知られていない、ドロシー・シェーバーの生涯と業績を紹介させていただいたが、本書の締めくくりに当たり、筆者の見解を述べよう。

ドロシー・シェーバーの業績は、第 3 章において「シェーバー・タッチ」として、5 項目にわたって紹介したとおりである。これらの業績から明らかなように、ドロシー・シェーバーは、マーチャンダイジングの歴史において、パリ・モードからアメリカン・ルックへの転換の運動における強力な牽引力になった重要人物の一人といえる。

ドロシー・シェーバーの死後、10年後の1969年に、サンフランシスコにドナルド・フィッシャー（Donald Fisher, 1928~2009）と彼の妻のドリス・フィッシャー（Doris Fisher, 1931~　）によってGAPが設立された。筆者は、このようなサプライチェーン誕生の動きをドレス・リフォームの「第三の波」と定義づけたい。GAPの誕生を皮切りに台頭してきたファスト・ファッションは、今日では、右肩下がりになりつつあり、未来のアパレル産業の方向性が問われている。環境問題、気候異変も深刻化している。現状打開の牽引力となりうる人物が現れることを期待したい。近年、話題を読んでいる映画『ザ・トゥルーコスト』や杉原淳一、染原睦美著『誰がアパレルを殺すのか』（日経BP社、2017）は、我が国やアメリカや発展途上国におけるアパレル業界の危機的現状について警告を発し、日本とアメリカで打開策を模索している事例が紹介されている。

映画『ザ・トゥルーコスト』は非常に衝撃的である。あるいは本書の本題とははずれるかもしれないが、今後のアメリカ服飾史研究の課題の参考になればという思いから、この映画の概要を以下に、紹介する[(2)]。

> 日本のファッション産業は、2016年で約9兆2000億円。一番、ピークだった1992年より4~5兆円も規模が小さくなっている。その理由は「安い、早い、大量、トレンド」を特徴とした、いわゆるファスト・ファッションが急激に増えたからである。ファストファッションの店舗数は、ここ10年で2倍になっていて、日本の45%の衣料品は安物衣料である。
>
> 表題の映画は、この服飾ビジネスの世界を牽引しているファスト・ファッションをテーマにしたドキュメンタリーである。この映画は、最新の流行を取り入れて、大量生産された洋服が

低価格で供給され、ほぼ使い捨て同然にまでなってしまったファスト・ファッションにメスを入れ、その生産者たちが置かれている現況や環境を追っている。主に欧米向けのほとんどの安価な衣服を作っているバングラディッシュや原料の綿花栽培地であるインドなどで取材した映像を元に、衣服の製造に携わる人たちの劣悪な労働環境、低賃金長時間労働、化学薬品の垂れ流しによる環境汚染や遺伝子組み換えコットン農家の悲惨な現状などを浮き彫りにしている。

さて、映画『THR TRUE COST』は、なぜ制作されたのだろうか？

アンドリュー・モーガン監督がインタビューで語ったところによると、「この映画製作の動機は、2013 年 4 月 24 日、バングラデシュの首都、ダッカ郊外の 8 階建商業ビル「ラナ・プラザ」が崩落事故を起こし、1,100 人以上の犠牲者を出したという記事が翌日のニューヨーク・タイムズの記事に掲載されたのを読んだからだ」という。

かつてのアパレル業界では、季節ごとにラインナップを揃えるメーカーがほとんどであった。だが、ファスト・ファッションではそうではない。1 週間でショップのディスプレイがガラッと変わっていることも日常茶飯事である。そして、安すぎるぐらい安い。消費者にとっていいことずくめのように見えるファスト・ファッションは「世界の縫製工場」バングラディッシュなどの悲惨な製造工場によって支えられているのである。カンボジアのプノンペンの繊維工場においてもバングラディッシュ同様、労働者の賃上げを要求するデモが起こり、警察官による発砲・逮捕劇が起こっている。

バングラディッシュの首都ダッカに立ち並ぶ多くの縫製工場で働く労働者は、ほとんど貧しい女性たちである。労働時間

は1日12時間以上、賃金はわずか3ドル。この映画に登場する20代の工員の女性、シーマは、一児の母で、子どもを一人前にすることを夢見て、子どもを親戚に預けて、働いている。住まいはバラックのようなところであり、朝から晩まで工場で働いている。

服を作る工場では、毎日、大量の化学薬品が使われている。使用水の汚染水は農業用水としても使われる。この水を使った農地で獲れた農作物や、海で獲れた魚介類を食べた人たちの健康は損なわれ、癌患者が沢山出て、先天性の重度の麻痺や奇形なども後を絶たない。

インドのBt綿栽培農家では、大量の農薬が撒かれている。世界のコットン出荷量世界第2位のインドでは、そのほとんどがモンサント社が開発したGM（遺伝子組み換え）綿である。インドの種苗会社マヒコは1999年にモンサント社に買収され、細菌由来の殺虫性毒素が組み込まれた「Bt綿」は、綿花の天敵である蛾の幼虫が近寄らないように開発されたものだったが、その実、他の新たな害虫や立ち枯れ病が発生して、結果、大量の農薬を撒かなければならない。モンサント社が販売する除草剤「ラウンドアップ」を飲んで、畑で自殺する人が急増している。

映画では、アメリカ、テキサスのオーガニック・コットン農家の方がインタビューに応じて、オーガニックの必要を訴えている。うず高く積まれている衣服のゴミの山の光景は、実に凄まじく、言葉で表現のしようがないほどである。製造から販売、消費から廃棄に至るファッション・アパレル業界が排出するCO_2量は石油産業に次いで、第2位の規模だという。

このようなファッション業界はどう変わっていくべきなのだ

ろうか。

もし、仮にドロシー・シェーバーが、タイムスリップして、2013 年 4 月 25 日に、ニューヨーク・タイムズの「ラナ・プラザ」崩落事故の記事を読まれていたとしたら、どのように対応したであろうか。本書では、現代のファスト・ファッションの問題にまで、手を伸ばし、また広げるつもりはない。だが、地球規模の環境問題が深刻化し、『ファッションデザイナー』(文春文庫、2000 年) の著者 T・エイギンスが言うように、パリのオートクチュールやプレタ・ポルテの世界での華やかな「ファッションショー」の価値が問われている現在、今後のアパレル業界の行方に対する堅実な打開策、ビジョンが打ち出されることを願って、本書の筆を置く。

【注】

(1) Sandra Lee Braun, *ibid.*, pp.141~151. Tiffany Webber-Hanchett, *op.cit.*, pp.85~87.

(2) 参考サイトと文献
http://oneness555.com/the-true-cost
長田華子『990 円のジーンズがつくられるのはなぜ?－ファストファッションの工場で起こっていること－』合同出版 (2016 年 1 月 15 日)。

あとがき

拙著『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009）出版から、10 年後に、念願の『パリ・モードからアメリカン・ルックへ―アメリカ服飾社会史　近現代篇』の出版に至った。

本書の第一部第２章にドレス・リフォーム運動のパイオニアとして登場したロバート・オーウェンは、社会教育者として、多くの研究者の先達の方々の著作や翻訳書に登場している。本書執筆に当たって、これらのご研究の一部を拝読させていただいたが、先達の方々が身を粉にして取り組まれたご研究は、研究者の方が生きておられた、あるいは生きておられる時代の教育に役立てることができるのではないかとの、切々たる思いを込めて、日夜、取り組まれたとのことである。

そこで、あとがきでは、誠におこがましくはあるが、本書が、現代社会において持つ意味について述べる。

バブル崩壊後の日本人の衣生活は、大幅に変化した。一時は庶民の衣生活において、大きなシェアーを占めたファスト・ファッションも、近年、アップ・エンド・ダウンの傾向にある。国内生産の回復、IT 企業とのコラボ（ユニクロのグーグルのクラウドとのコラボ）など、未来に向けての方向性、有効な施作が模索されている。自然災害、気温の上昇など地球環境も大幅に変化し、環境に適したファッションの新たなビジネスモデルが求められている。

ちなみに、あとがき執筆に当たって、今秋のファッショントレンドをネットやファッション雑誌でチェックしてみると、何と「新アメリカン・スーツ・ルック」がトレンドで、チェック柄のセットアップのスーツ・スタイル（ジャケットにスカート、ジャケットにパンツ）が女性たちのファッションに復活するであろうと予測されている。コンサバとはいえ、このかっちりとした、フォーマルなスタイルは、郷愁

を感じさせるのであろうか。

バブルの頃ほど高価格ではなく、家で洗える機能的で、かっこいいオフィス・カジュアル、卒園式、入学式の若いママさんのファッション、セレブの女性向きの高級なスーツと棲み分けされている。

ドレス・リフォーム運動が掲げたショート・ドレスにズボンというスタイルは、確かに、動きやすく、合理的で、健康にやさしいスタイルである。現代の我々の目からみても、とても現代的で、考案者の先見性は、目を瞠るものがある。社会教育者もこう言っている。ロバート・オーウェンの思想は現代的である、と。だが、本書において、ドレス・リフォーム運動を3期に分けて考察した結果、興っては、衰退し、興っては衰退するという興亡の周期が繰り返されてきた。

今日のファスト・ファッションにおいても現代女性は、チュニックにパンツというこの楽なファッションの虜になってきた。だが､近年、このイージーなスタイルもマンネリ化し、もっとおしゃれな、かっちりとした、かっこいいファッションが求められている。フォーマルウェアーにするには、このイージーなスタイルは物足りなくて、バブル崩壊以前のもっと審美的なスタイルが復活しつつある。それには、とりもなおさず「アメリカン・ルック」がぴったりのようである。活動的で、機能的で、おしゃれで、価格もリーズナブルで、格好いいスタイルは、現代女性の様々な生活スタイルに最適なスタイルであるようだ。

ドロシー・シェーバーさんは、ニューヨークの老舗の百貨店であるロード・アンド・テーラーのウィンドーに、アメリカン・ルックを掲げた。地球環境の大きな異変が予測される21世紀の今後のウィンドーには、どのようなファションが登場するのであろうか。ドロシー・シェーバーさんが、タイムスリップして、GINZA SIX の CEO になってくれると、はたまた成功されること間違いなしではなかろうか。1930年代、1940年代のアメリカ人デザイナーの作品をデザインソースにして、

今日的にアレンジしてみるのも賢いデザイン手法であろう。21世紀ファッションのデザイン・ソースは「アメリカン・ルック」であるようだ。本書は服飾研究者、ファッションを学ばれている学生の皆様、ファッション・デザイナー、アパレル産業のマーチャンダイザーの皆様の必読書と言っても過言ではあるまい。混迷するファッション業界に、本書に紹介した先達の知恵が、一石を投じてくれれば、それほど素晴らしいことはなかろう。本書は、そのような思いをこめて取り組んだ作品である。

ところで、第1章で翻訳紹介した Joan Severa, *Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashions, 1840-1900,* Kent State University Press, 1995, p.592.の翻訳書、濱田雅子訳『写真が語るアメリカ庶民のファッション—1840－1900—』（仮題）は悠書館から出版準備中である。本書はアメリカの服飾研究者のジョーン・セヴラ女史が30年と言う歳月をかけて取り組まれた世界に類を見ない大作である。上流階級を対象とした服飾研究書は、欧米において多数見られるが、このような「アメリカの庶民」の衣服研究を行った研究書は皆無である。掲載された写真は何と277枚。服飾の専門家の視点から、目を見張るような克明な解説が付けられている。今回の著作と本翻訳書を合わせることにより単独の著作や翻訳書として欠落していた19世紀アメリカ服飾史の分野の間隙を埋めることが叶うものと確信する次第である。

本書の出版の夢が現実となったのは、ひとえに応援して下さったアメリカ服飾社会史研究会の仲間の皆さんのお陰と、感謝の念でいっぱいである。また、原稿の下書きをお読みくださり、忌憚のないコメントをして下さった児嶋きよみ氏、フランス語の表記をご教示下さった吉川佳英子氏、資料をご提供下さった鴇田章氏、神戸ファッション美術館、アメリカの Accessible Archives に厚く御礼申し上げる。出版に際してお世話になった mogicu の杉浦隆氏に深謝申し上げる。

2018年11月　　　　濱田雅子

事項索引

A

H

L

M

N

R

S

W

あ

い

け

こ

さ

し

す

せ

そ

た

ち

と

な

に

は

ひ

も

ゆ

よ

ら

れ

ろ

わ

人名索引

生没年は調べきれた範囲で記載したことをお断りしておく。

A

B

C

D

E

F

G

H

I

V

W

【著者】

濱田雅子（はまだ・まさこ）
神戸大学文学部史学科（西洋史学専攻）卒業。武庫川女子大学大学院家政学研究科修士課程（被服学専攻）修了。元武庫川女子大学教授。博士（家政学）。西洋服飾文化史専攻。アメリカ服飾社会史研究者。アメリカ服飾社会史研究会会長。大学退職後は京都と神戸で服飾講座を開催、今日に至る。

著書に、『アメリカ植民地時代の服飾』（せせらぎ出版、1996 年）、『黒人奴隷の着装の研究』（東京堂出版、2002 年）、『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009 年）、丹野郁編『西洋服飾史　増訂版』（共著、東京堂出版 、1999 年）、丹野郁監修『世界の民族衣装の事典』（共著、東京堂出版、2006 年）、『衣装が語るアメリカ文学』（共著、金星堂、2017 年）（濱田 雅子担当、初期アメリカの奴隷の職種と仕事着— トマス・ジェファソンのプランテーションの場合）。

翻訳書に、P. F. コープランド著『アメリカ史にみる職業着』せせらぎ出版、1998 年）、J・ギロウ＆B・センテンス著『世界織物文化図鑑』（共訳、東洋書林 、2001 年）、アルベール・ラシネ原著『世界服飾文化史図鑑』（共訳、原書房、1992）、P.F. コープランド著『図説　初期アメリカの職業と仕事着—植民地時代～独立革命期』（悠書館、2016）、J・ジョーン・セヴラ著『写真が語るアメリカ庶民のファッション—1840-1900—』（仮題）（悠書館、近刊）など。他に論文、研究報告、講演など多数。

****

パリ・モードからアメリカン・ルックへ
—アメリカ服飾社会史　近現代篇—

2019 年 1月 10 日　初版発行
濱田雅子（はまだまさこ） 著
https://www.american-mode.com
alamode7@american-mode.com

株式会社インプレス R&D
POD 出版サービス
https://nextpublishing.jp/author/

ISBN　978-4-8020-9531-0
****

DTP/装丁　濱田雅子
表紙デザイン（濱田雅子）
表の写真提供
クレア・マッカーデル作ドレス（1940 年代アメリカ）
神戸ファッション美術館収蔵
表の図版提供
クリノリン衣装イラスト
Godey’s Lady’s Book, May, 1850, Philadelphia, Pennsylvania 掲載
Accessible Archives 収蔵
裏の図版提供
ブルーマー・コスチュームイラスト
Alison Gaines, Mary Edwards Walker, The Only Female Medal of Honor Recipient, Cavendish Square, Publishing, LLC, New York, 2018, p.81. 掲載
Transcendental Graphics/Archives Photos/Getty Images 収蔵